総務省
Ministry of Internal Affairs and Communications

創造的人材の定住・交流の促進に向けた事例調査

～定住自立圏の形成を目指して～

平成24年3月

総務省地域力創造グループ
地域自立応援課

《目次》

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・1

第１章　本調査の目的、概要
　１-１　本調査の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・3
　１-２　検討体制 ・・・・・・・・・・・・・・・3
　１-３　事例調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・4

第２章　創造的人材を惹きつける地域の要素
　2-1　創造的人材を惹きつけるポイント ・・・・・・・・・・・・・・・8

第３章　地方圏における創造的な取組の事例紹介
　3-1　現地調査実施事例 ・・・・・・・・・・・・・・・11
　　富良野市 ・・・・・・・・・・・12
　　八戸市 ・・・・・・・・・・・21
　　仙北市 ・・・・・・・・・・・33
　　越後妻有（十日町市、津南町） ・・・・・・・・・・・42
　　金沢市 ・・・・・・・・・・・53
　　洲本市など ・・・・・・・・・・・62
　　鳥取市 ・・・・・・・・・・・75
　　高松市、島嶼地域など ・・・・・・・・・・・85
　　別府市 ・・・・・・・・・・・94
　　霧島市 ・・・・・・・・・・・107
　3-2　文献調査実施事例 ・・・・・・・・・・・・・・・117
　　夕張市 ・・・・・・・・118
　　東川町（北海道） ・・・119
　　仙台市 ・・・・・・・・120
　　大館市 ・・・・・・・・121
　　山形市 ・・・・・・・・122
　　鶴岡市 ・・・・・・・・123
　　いわき市 ・・・・・・・・124
　　水戸市 ・・・・・・・・125
　　取手市 ・・・・・・・・126
　　守谷市 ・・・・・・・・127
　　甲府市 ・・・・・・・・128
　　高崎市 ・・・・・・・・129
　　中之条町（群馬県）・・・130
　　南砺市 ・・・・・・・・131
　　氷見市 ・・・・・・・・132
　　輪島市 ・・・・・・・・133
　　あわら市 ・・・・・・・・134
　　越前市 ・・・・・・・・135
　　松本市 ・・・・・・・・136
　　飯田市 ・・・・・・・・137
　　小布施町（長野県）・・・・138
　　美濃市 ・・・・・・・・・139
　　西尾市 ・・・・・・・・・140
　　長浜市 ・・・・・・・・・141
　　高島市 ・・・・・・・・・142
　　近江八幡市・・・・・・・143
　　舞鶴市 ・・・・・・・・・144
　　豊岡市 ・・・・・・・・・145
　　丹波市、篠山市 ・・・・146
　　倉吉市 ・・・・・・・・・147
　　三次市、庄原市 ・・・・148
　　尾道市 ・・・・・・・・・149
　　美祢市 ・・・・・・・・・150
　　神山町（徳島県） ・・・・151
　　佐賀市 ・・・・・・・・・152
　　熊本市 ・・・・・・・・・153
　　由布市 ・・・・・・・・・154
　　鹿屋市 ・・・・・・・・・155
　　那覇市 ・・・・・・・・・156
　　沖縄市 ・・・・・・・・・157
　3-3　創造的人材が存在する地域の傾向 ・・・・・・・・・・・・・・・158

参考資料
　参考１　創造的人材を惹きつける地域の要素に係るチェック項目 ・・・・・・・・・・163
　参考２　創造的人材を惹きつける地域の要素に係るチェック項目の有する意味合い・・・・166

はじめに

我が国が前例のない少子高齢化を伴う人口減少社会を迎える中で、活力ある定住自立圏を構築していくためには、定住人口のみならず、交流人口の増加に着目するとともに、一人ひとりが生み出す知的付加価値の向上を図る必要がある。

かつて 18 世紀から 20 世紀にかけて起こった工業化の時代とは、労働者による工場での大量生産が多くの経済的な付加価値を産出した時代であった。これに対して、米国の未来学者アルビン・トフラー（Alvin Toffler）は、主著『第三の波』（1980 年）の中で、農耕革命、産業革命に続く第三の変革を「脱工業化社会」と命名した。この「脱工業化社会」においては、人間の知恵と工夫が生み出す知的付加価値や創造性がより重要になってくる。そして、トフラーの予言に導かれるように、1990 年代中葉から 21 世紀初頭にかけて、“創造性（Creativity)”をキーワードとする概念や政策が次々と提案され始めた。

たとえば、「創造都市（Creative City)」とは、英国の都市計画家チャールズ・ランドリー（Charles Landry）が 1995 年に公表した同名の小冊子及び 2000 年に発行した著書『創造的都市―都市再生のための道具箱』において提唱した、都市再生に関する新しい概念である。

ランドリーは同書において「なぜいくつかの都市は成功しているのか」という問いかけから出発して、産業の衰退や人口減少等の深刻な都市的課題を克服して再生できた都市の事例を紹介しており、それらの事例研究から「創造都市」という概念を導出している。

具体的には、芸術文化に代表される“創造性”が、脱工業化時代における新しい産業を創造し、市民社会のシステムを変革し、グローバリゼーションの中でアイデンティティを涵養することを通じて、都市の活力及び再生の基盤となる、という幅広い概念である。

“創造性”に関連するもう一つの流れとして、米国の都市社会学者リチャード・フロリダ（Richard Florida）が『クリエイティブ資本論―新たな経済階級の台頭』（2002 年）において、「クリエイティブ・クラス（Creative Class)」という新しい社会階層を提唱しており、その後も実証的研究を続けている。

この「クリエイティブ・クラス」とは、新しい価値観、ワークスタイル、ライフスタイルを有した創造性の供給者と位置づけられており、具体的な職業としては、科学者、技術者、芸術家、クリエーター、マネジャー、専門家、技師等を含んでいる。

“創造性”に関連する 3 つ目の動向は、「創造産業（Creative Industries)」である。

20 世紀末から世界で最初の「創造産業」政策を展開している英国の文化・メディア・スポーツ省（Department for Culture Media and Sport）によると、同産業は「個々人の創造性、技能、および才能に基づくものであり、知的財産の展開及び利用によって富と雇用を創出する可能性がある産業」と定義されている。

また、国際機関の UNCTAD（United Nations Conference on Trade and Development；国連貿易開発会議）の報告書（2008 年）によると、「創造産業」とは、「芸術、文化、ビジネス、技術の交わるところ」であり、「創造性や知的資本を第一の材料として利用する製品やサービスの創造、生産、流通のサイクル」と定義することができる、と記述されている。加えて「画像や音、文字列、記号に支配されている現代社会において、創造性、文化、経済、技術の橋渡し役をする新しい概念」である、とされている。そして、同報告書では創造産業を「今日において世界経済で最も活力に満ちた部門であり、発展途上国に対し、世界経済における新興・高成長領域に飛躍する新たな機会を提供している」と高く評価している。

以上のような、“創造性”を巡る近年の動向を踏まえると、定住自立圏構想の推進にあたっても、知的付加価値や創造性を生み出す「創造的人材」を惹きつけ、彼らが行きたい・住みたいと思うような地域づくりが必須の条件であると言えよう。

そして特に、人々の心に豊かさをもたらす文化芸術は、そうした創造性の発揮の中でも最も純化された象徴的な分野と捉えることができる。文化芸術分野の創造的人材が活躍する地域は、知的付加価値を生み出す、その他の幅広い創造的人材にとっても活躍しやすい地域であり、将来的にも発展可能性の高い地域と想定される。

そこで本調査研究は、文化人、芸術家などの創造的人材が定住・交流する全国の事例の中から、地域力創造に向けた条件を探ることを主たる目的として実施した。

なお、定住自立圏構想に取り組む各自治体において、自らの地域が創造的人材を惹きつける地域力を有しているかどうか、地域づくりのヒントとなるよう巻末にチェックリストを添付したので、参考にしていただければ幸いである。

第1章　本調査の目的、概要

１-１　本調査の目的

三大都市圏以外の地方圏においても、芸術家や音楽家などの創造的人材が定住・交流を行い、知的付加価値を創造することによって、知の拠点とも言うべき人材交流のノード（結節点）が形成されるとともに、地域住民の地域に対する愛着や誇りが育まれ、創造性に富んだ地域の土壌の形成につながっている例がある。

そこで、本調査では創造的人材の定住・交流が図られている特徴的な事例を調査し、創造的人材が行ってみたい・住んでみたいと思う要素について分析を行うことによって、今後、定住自立圏域で同旨の取組を促進していくうえでの課題や求められる施策等について整理を行った。

１-２　検討体制

本調査報告書は、以下の有識者の協力を得て現地調査を実施し、2012 年１月から３月にかけて開催された「定住自立圏形成に向けた創造的人材の定住・交流促進に係る検討会議」での議論を通じて取りまとめられた。

有識者委員の構成及び、検討会議のスケジュールは、以下に示すとおりである。

1）有識者委員名簿

氏　名	役　職　等
太下 義之	三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング株式会社 芸術・文化政策センター長
加藤 種男	アサヒビール芸術文化財団事務局長
熊倉 純子	東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科教授
佐々木 雅幸	大阪市立大学大学院創造都市研究科教授
野田 邦弘	鳥取大学地域学部地域文化学科教授

（五十音順，敬称略）

2）検討会議スケジュール

第１回：１月 18 日　10：00～12：00
第２回：２月 22 日　10：00～12：00
第３回：３月 22 日　14：00～16：00

１-３　事例調査の概要

本調査では、有識者の助言のもと創造的人材の定住・交流によって地域力の向上が図られている代表的な１０事例を選定し、有識者の同行のもとでヒアリングを含む現地調査を実施した。またあわせて、映画、音楽、美術、演劇、デジタルコンテンツ、意匠・デザイン等の分野における４０事例を選定し、文献等による調査を実施した。各地域における創造的取組のきっかけ・現状・成果等を調査、分析することにより、地方における創造的人材の定住・交流の条件について検証を行った。

以下に、本調査における調査対象地域を示す。

現地調査対象事例

地域	取組の名称	有識者委員（敬称略）	調査スケジュール	定住自立圏
北海道　富良野市	富良野演劇工場、富良野塾	太下	2月20日	
青森県　八戸市	八戸ポータルミュージアム「はっち」 南郷サマージャズフェスティバル	加藤	2月24日	○
秋田県　仙北市	たざわこ芸術村	佐々木	2月9－10日	
新潟県　越後妻有 （十日町市、津南町）	越後妻有 大地の芸術祭の里	熊倉	2月23日	
石川県　金沢市	イート金沢	佐々木	2月7日	
兵庫県　洲本市など	淡路島アートフェスティバル	加藤	2月8日	
鳥取県　鳥取市	鳥の劇場	野田	2月8日	○
香川県　高松市など	瀬戸内国際芸術祭	太下	1月18日	○
大分県　別府市	別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」 別府アルゲリッチ音楽祭	野田	3月13日	
鹿児島県　霧島市	霧島国際音楽祭	太下	2月29日	

文献調査対象事例

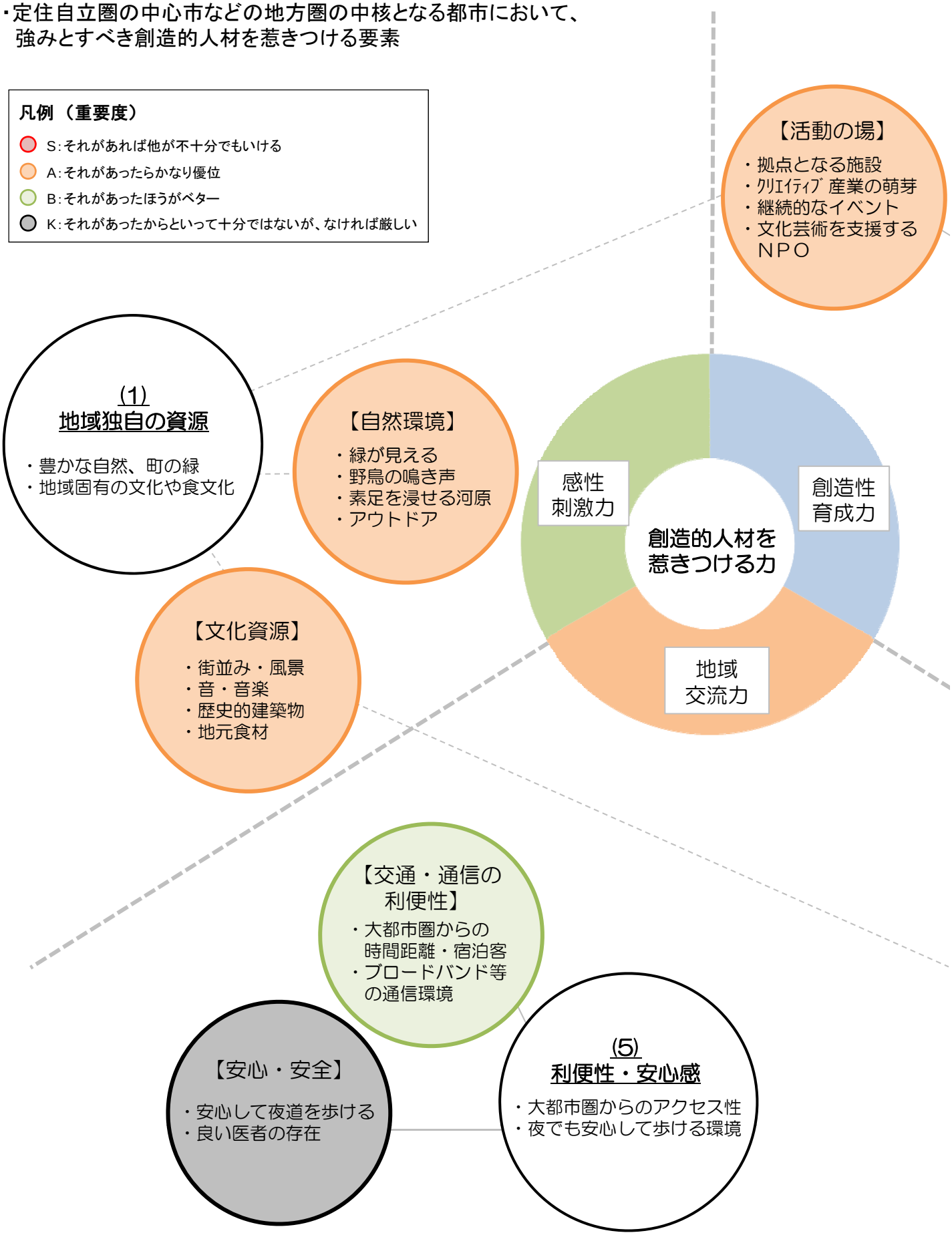
地域	取組の名称	定住自立圏
北海道　夕張市	ゆうばり国際ファンタスティック映画祭	
北海道　東川町	東川町国際写真フェスティバル	○
宮城県　仙台市	せんだいメディアテーク	
秋田県　大館市	ゼロダテ	○
山形県　山形市	山形国際ドキュメンタリー映画祭／山形カロッツェリアプロジェクト	○
山形県　鶴岡市	庄内映画村	○
福島県　いわき市	いわき芸術文化交流館アリオス	
茨城県　水戸市	水戸芸術館「カフェ・イン・水戸」	
茨城県　取手市	取手アートプロジェクト	
茨城県　守谷市	アーカスプロジェクト	
山梨県　甲府市	こうふのまちの芸術祭	
群馬県　高崎市	高崎映画祭／高崎フィルムコミッション	
群馬県　中之条町	中之条ビエンナーレ	
富山県　南砺市	利賀フェスティバル	
富山県　氷見市	アートNPOヒミング	
石川県　輪島市	NPO法人輪島土蔵文化研究会	
福井県　あわら市	金津創作の森	
福井県　越前市	武生国際音楽祭	
長野県　松本市	サイトウ・キネン・フェスティバル松本	
長野県　飯田市	オーケストラと友に音楽祭	○
長野県　小布施町	小布施流まちづくり	
岐阜県　美濃市	美濃和紙あかりアート展	
愛知県　西尾市	三河・佐久島アートプラン21	○
滋賀県　長浜市	黒壁のまちづくり	○
滋賀県　高島市	風と土の工藝	
滋賀県　近江八幡市	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA	
京都府　舞鶴市	MAIZURU　RB	
兵庫県　豊岡市	カバンストリート	○
兵庫県　丹波市、篠山市	丹波の森国際音楽祭「シューベルティアーデたんば」	
鳥取県　倉吉市	アザレアのまち音楽祭	○
広島県　三次市、庄原市	灰塚アースワークプロジェクト	
広島県　尾道市	AIR Onomichi	
山口県　美祢市	秋吉台国際芸術村	
徳島県　神山町	神山アーティスト・イン・レジデンス	○
佐賀県　佐賀市	まちの間プロジェクト	
熊本県　熊本市	熊本暮らし人祭り　みずあかり／熊本市現代美術館	
大分県　由布市	湯布院映画祭	
鹿児島県　鹿屋市	柳谷集落（やねだん）迎賓館事業	○
沖縄県　那覇市	桜坂劇場	
沖縄県　沖縄市	スタジオ解放区／コザ銀天大学	

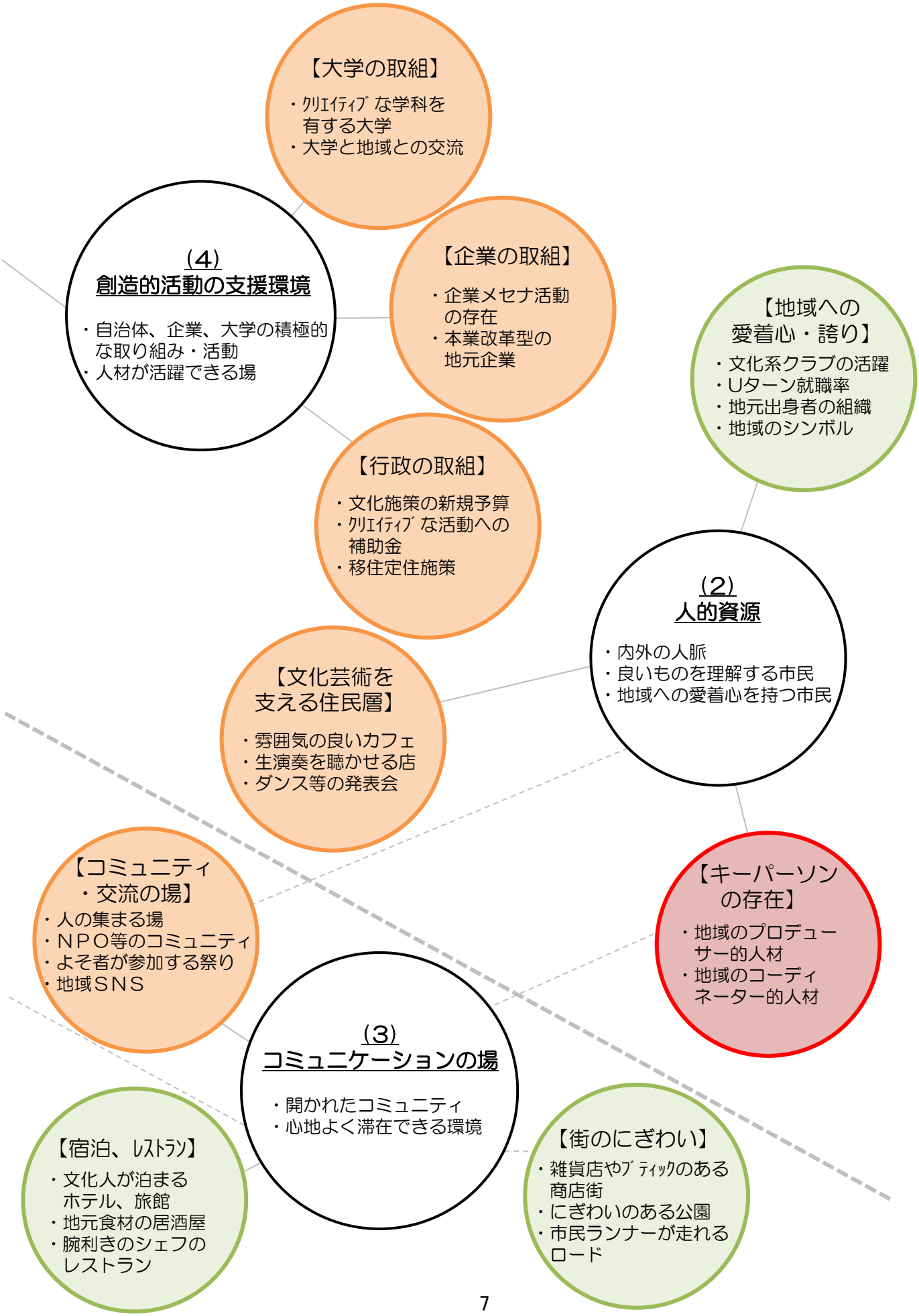
創造的人材を惹きつける力

・定住自立圏の中心市などの地方圏の中核となる都市において、
強みとすべき創造的人材を惹きつける要素

凡例（重要度）

- S:それがあれば他が不十分でもいける
- A:それがあったらかなり優位
- B:それがあったほうがベター
- K:それがあったからといって十分ではないが、なければ厳しい




【大学の取組】
・ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞな学科を有する大学
・大学と地域との交流
【企業の取組】
・企業メセナ活動の存在
・本業改革型の地元企業
【行政の取組】
・文化施策の新規予算
・ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞな活動への補助金
・移住定住施策
(4)
創造的活動の支援環境
・自治体、企業、大学の積極的な取り組み・活動
・人材が活躍できる場
【地域への愛着心・誇り】
・文化系クラブの活躍
・Uターン就職率
・地元出身者の組織
・地域のシンボル
(2)
人的資源
・内外の人脈
・良いものを理解する市民
・地域への愛着心を持つ市民
【文化芸術を支える住民層】
・雰囲気の良いカフェ
・生演奏を聴かせる店
・ダンス等の発表会
【キーパーソンの存在】
・地域のプロデューサー的人材
・地域のコーディネーター的人材
【コミュニティ・交流の場】
・人の集まる場
・ＮＰＯ等のコミュニティ
・よそ者が参加する祭り
・地域ＳＮＳ
(3)
コミュニケーションの場
・開かれたコミュニティ
・心地よく滞在できる環境
【宿泊、ﾚｽﾄﾗﾝ】
・文化人が泊まるホテル、旅館
・地元食材の居酒屋
・腕利きのシェフのレストラン
【街のにぎわい】
・雑貨店やﾌﾞﾃｨｯｸのある商店街
・にぎわいのある公園
・市民ランナーが走れるロード

第2章　創造的人材を惹きつける地域の要素

２-１　創造的人材を惹きつけるポイント

創造的人材を惹きつける地域の要素として、各地域の創造的な取り組みを調査する中で、次のような要素がポイントになっているということが分かってきた。

（１）人的資源

創造的人材を地域に惹きつける第一の要素は地域の人的資源であり、内外に幅広い人的ネットワークを持ったキーパーソンの存在が大きい。例えば、別府市における山出氏や金沢市における宮田氏のように、魅力あるキーパーソンがプロデューサーやコーディネーターとして活躍している地域では、彼ら自身がマグネットとなって、大都市圏の創造的人材を地域に惹きつけている。越後妻有や瀬戸内では、大都市圏で活躍し、幅広い人脈をもつ北川フラム氏がプロデューサーとして地域の取組に携わることによって、国内外の創造的人材を地域に呼び寄せている。

また、鳥取市の中島氏や別府市の山出氏のように、直接の出身地ではないものの、土地勘がある場所に移住して取組を行うことが、成功のきっかけになる場合もある。

さらに、小布施町における景観保全の取組のように、地域でキーパーソンが特徴的な取組を進めることで地域の魅力を高め、外部の創造的人材の関心を引いて交流につながっている事例もみられる。

良いモノの価値を理解する、活動的で寛容な住民層の存在も重要である。例えば、仙北市（旧 田沢湖町）では、地元住民が、よそ者の劇団員に対して生活必需品を差し入れし、活動場所を提供するなど全面的なバックアップを行った。また、活動当初から劇団の創作活動に対価を払うなど、良いモノの価値を理解する住民層が厚かったことも、劇団わらび座の定着につながった。

その他、愛郷心や地域の誇りも創造的人材を惹きつける要素になる。例えば金沢市のように、住民が地域に誇りをもって外部の人材と向き合う地域では、地域の住民に認められると、より奥深い町の魅力に触れられることができるため、好奇心の強い創造的人材を惹きつけている。

（２）地域資源

地域の文化資源としては、地域固有の文化、若い担い手がいる文化、豊かな食文化などが、創造的人材を惹きつけるきっかけとなる。

例えば、金沢市では、城下町としての歴史ある街並みや歴史に裏付けられた「奥の深い」文化が、宮田氏を惹きつけた。イート金沢を訪れたクリエイターは、日本海の新鮮な魚介類などの豊かな食材でもてなされ、食文化を通じて金沢の魅力を知ることによっ

て、再び金沢を訪れたいと感じるのである。

歴史ある建築物を、新たな形でまちづくりの資源として活用することも重要である。例えば、舞鶴市では、森真理子氏が中心となり、赤煉瓦倉庫群を拠点としたアート・プロジェクトを展開したことが、交流人口の増加につながった。瀬戸内では、ハンセン病療養施設のある大島が北川フラム氏の強い関心を引くなど、現状に対して問題意識をもつ創造的人材が「負の遺産」に着目し、地域資源として新たな形で甦らせている。

自然環境については、都市的機能を享受しながらも、豊かな自然や街の緑などを体感できることが、創造的人材を惹きつける魅力となる。例えば、瀬戸内では、非日常空間としての「島」と瀬戸内海の豊かな自然環境が、視覚を重視するアーティストにインスピレーションを与えた。倉本聰氏は、五感を研ぎ澄ましてくれる富良野の大自然に魅力を感じたと語っている。また、同じ北海道の東川町では、大雪山麓の美しい自然の風景を求めて、毎年全国各地から多くの写真家が集まってくる。

（３）コミュニケーションの場

創造的人材を惹きつける上では、地域コミュニティが開放的で、多様な人々が活発に交流できる場があることが重要である。例えば、金沢市には「面白輪」というゆるやかなメンバー構成による飲み会の場があり、よそから移り住んだ人も含め、地域のキーパーソンが気軽に参加・交流できるサロンとなっている。

商店街や公園などの街のにぎわいは創造的人材を惹きつける。八戸市には、横丁や朝市など、滞在中のアーティストが地域の住民と直接交流できる場があり、目の肥えた住民から作品についての生の意見を聞くことができるなど、街のにぎわいを通じて創造的人材に刺激を与えている。

さらに、外部から地域を訪れる創造的人材が心地よく滞在できる宿泊施設や、創造的人材が好む洒落たレストランもあったほうが良い。例えば、金沢市では、もてなしの心溢れる宿や地元の食材を使った飲食店が数多く存在し、ホンモノを求める創造的人材がじっくりとコミュニケーションを楽しんでいる。

（４）創造的活動の支援環境

自治体が現状停滞への危機意識を有しており、創造的活動への支援に積極的であることは、その地域に優位性をもたらす。例えば、八戸市では、アートによるまちづくりを推進するため、行政が中心市街地の活性化と一体的に施策を展開している。市長がアートイベントに積極的に参加してアーティストと交流を深めるなど、行政の文化芸術に対する積極的な姿勢がアーティストの共感を呼んでいる。

なお、行政の予算に大きく依存しすぎると、予算縮小後に取組を継続することが難しくなる場合もあるため、越後妻有のように、取組が軌道に乗るにしたがって徐々に民間主導の取組に移行することが望ましい。

その土地の文化芸術の振興に企業が貢献していることも重要な要素である。例えば、

淡路島では、大手人材派遣会社が芸術と農業をテーマにしたプロジェクトを展開し、文化芸術による地域活性化と若者の就農支援を進めている。金沢市では、職人気質の企業がクリエイターとともに新しい付加価値を持つ製品づくりを行うなど、伝統産業を活かしたイノベーティブな動きを続けている。

また大学が地域交流に熱心で、その都市におけるクリエイティブな拠点として機能している地域は、担い手となる若い人材が豊富であり、取組を進める上でのアドバンテージを有している。例えば、金沢市には金沢美術工芸大学をはじめとする多くの大学が存在し、クリエイティブな学生が地域の創造的活動に参加している。また、イート金沢のクリエイターが大学で講義を受け持つなど、大学が創造的人材の活動の場にもなっていると言える。

さらに、創作・交流を行うことができる場の存在は、創造的人材を惹きつける上で大きなアドバンテージとなる。仙北市のたざわこ芸術村、八戸市のはっち、霧島市のみやまコンセールのような施設は、クリエイティブな活動の拠点となっているだけでなく、講師や職員といった立場で創造的人材が働く場にもなっている。

（５）利便性・安心感

大都市圏から日帰り可能など交通アクセスが便利で、通信環境が充実していることは、創造的人材を惹きつける上でアドバンテージとなる。

例えば、越後妻有では、「ほくほく線」の開業により、東京や大阪からの時間距離が短縮されたことが、交流人口の増加につながった。一方で、経済波及効果の観点からは、滞在時間が長く、宿泊してもらえる魅力づくりも欠かせない。瀬戸内国際芸術祭では、多くの来場者が長期間滞在して島めぐりを楽しんでいる。金沢市では、時間距離の長さを逆手にとって、じっくり交流できる滞在型の取組が行われている。

また、徳島県の神山町では、無線ブロードバンドが整備され、自然豊かな環境でストレスなく仕事ができることが大都市圏に対する強みとなり、クリエイターやアーティストなどの創造的人材の定住が進んでいる。

最後に、一般の人々と同様に創造的人材が地域で生活する上でも、治安が良く、安心できる医療環境が整っていることが求められるだろう。

今後、定住自立圏構想の推進にあたっては、このような創造的人材を惹きつける地域力の要素も念頭におきつつ、地域における創富力の高度化に向けて、文化芸術分野も含めた幅広い創造的人材の定住・交流を促進する観点から積極的な施策展開が求められる。

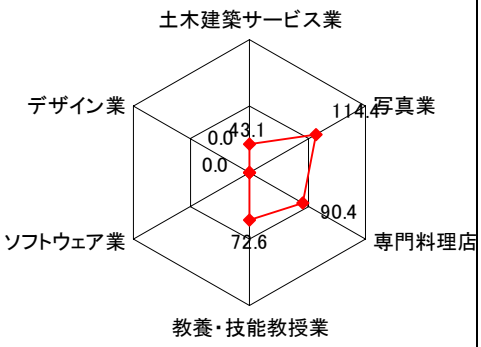
第３章　地方圏における創造的な取組の事例紹介

３－１　現地調査実施事例

地域	取組の名称	定住自立圏
北海道　富良野市	富良野演劇工場、富良野塾	
青森県　八戸市	八戸ポータルミュージアム「はっち」 南郷サマージャズフェスティバル	○
秋田県　仙北市	たざわこ芸術村	
新潟県　越後妻有 （十日町市、津南町）	越後妻有 大地の芸術祭の里	
石川県　金沢市	イート金沢	
兵庫県　洲本市など	淡路島アートフェスティバル	
鳥取県　鳥取市	鳥の劇場	○
香川県　高松市など	瀬戸内国際芸術祭	○
大分県　別府市	別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」 別府アルゲリッチ音楽祭	
鹿児島県　霧島市	霧島国際音楽祭	

北海道　富良野市

都市の基本データ※1

人口※2	24,259 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合＊6
高齢化率※2	26.8%	
合計特殊出生率※3	1.29	
人口の社会増減率※2※4	-0.28%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	6.0%	
交通	＜地域へのアクセス＞ 羽田空港から飛行機で旭川空港まで約２時間 旭川空港からバスを利用して、富良野駅まで約１時間	

気候条件※7	主な地域資源
北海道の内陸部で大雪山系と夕張山系に囲まれた地形のため、典型的な大陸性気候。気温の日較差や年較差が大きく、夏季には集中豪雨の傾向もみられるが、降雪期間は 11 月中旬から４月上旬までで、冬の寒さは非常に厳しい。	・大雪山国立公園 ・ラベンダー畑 ・風のガーデン ・フラノ・マルシェ ・麓郷の森、五郎の石の家など「北の国から」スポット多数 など

■ 地域における創造的な取組の事例

●富良野塾

●ふらの演劇工房

●富良野演劇工場

○富良野自然塾

など

※１　富良野市の値
※２　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※３　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※４　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※５　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※６　平成２１年経済センサス
※７　富良野市ＨＰ

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆ふらの演劇工房・富良野GROUP

■ 取組の概要

●取組のテーマ

地域住民と全国の富良野を愛する人々に向けて、演劇文化の創造と発信に関する事業を行っている。地域の恵まれた自然を舞台に、演劇のもつ「創る」「癒す」「育む」という可能性に着目しながら、演劇活動から生まれる感動を共有し、「演劇のまち富良野」として取り組むことで、地域文化の創造や観光客の誘致につなげている。

●取組の内容

◇演劇文化の創造と発信

・富良野ＧＲＯＵＰを中心として、倉本聰氏の指導の下、新たな演劇の創造と発信に取り組んでいる。

◇富良野演劇工場の運営

・富良野市が建設した「富良野演劇工場」の運営を受託。演劇を中心としながら、クラシックコンサート、映画上映など１か月に２演目のペースで公演を主催している。話題性の高い企画が多いことからほとんどの公演が定員に達し、受託事業としての成果を収めている。

◇演劇を通じた地域との連携

・演劇リハビリテーション事業：お年寄りや体の不自由な子どもを対象としたワークショップを開催し、演劇リハビリテーションと呼ばれる手法を用いて表現力などを高め、心と体の回復を図っている。

・学校単位で演劇に取り組む「演劇祭」、高校教員向けの指導者研修会、高校生向けの演劇ワークショップ、主に地域の子どもを対象とした「演劇アカデミー」、演劇・舞台美術・音響・照明のセミナーなどを開催し、市民が演劇に携わるきっかけを作っている。

取組のキーパーソン **富良野演劇工場** **工場長** **太田　竜介　氏** 	**◇　主な経歴** ・　岡山県出身。富良野塾 10 期生。卒塾後、富良野塾公演の音響を担当する傍ら東京で劇団に参加。 ・　2000 年に富良野に移住し、ＮＰＯ法人ふらの演劇工房の技術スタッフとして入社。2002 年より、富良野演劇工場　工場長。 **◇　取組に参加したきっかけ** ・　富良野塾卒業後、東京で劇団に参加していたが、倉本聰氏の誘いで富良野に戻り、富良野演劇工場　工場長をつとめる。
フラノ・クリエイティブ・シンジケート **久保　隆徳　氏** 	**◇　主な経歴** ・　福岡県出身の俳優、演出家。富良野塾 11 期生。 ・　現在、富良野ＧＲＯＵＰの看板役者として活躍。 **◇　取組に参加したきっかけ** ・　富良野塾 11 期生として参加し、卒業後も倉本聰氏のもとで演劇を学びたいとの思いから、富良野を中心に活動。
NPO法人　ふらの演劇工房 **副理事長** **秋田　恵　氏** 	**◇　主な経歴** ・　趣味であったスキーをきっかけに富良野に移住。 ・　演劇工房の発足当初から、ボランティアのリーダー的存在として活動。現在、演劇工房市民ボランティアの要。 **◇　取組に参加したきっかけ** ・　倉本聰氏の演劇を鑑賞したことをきっかけに、演劇ファンとなり、演劇工房の発足当初から、ボランティアとして参加。 ・　ボランティアとして、イベントの周知、チケット販売等を行うほか、劇団員のための食事の提供などもサポート。

■　きっかけ～取組の経緯

●倉本聰氏の富良野への移住と「富良野塾」の設立

・脚本家・演出家として有名な倉本聰氏が、1963 年にニッポン放送を退社後、脚本家として独立し、1977 年、富良野に移住。

・1984 年春にシナリオライターと俳優を養成することを目的に「富良野塾」を立ち上げた。毎年、約 20 名の若者が全国からオーディションを経て入塾し、北海道富良野市街から 20 キロ離れた谷あいに、2

年間の共同生活をしながら学ぶというプログラムであった。

・塾長でもある倉本聰がボランティアで講義を行い、入塾料・受講料は一切無料。塾生は夏期に近隣の農家で働くことで生活費を工面し、その収入を共同管理するなど、生活の全てを塾生が自主的に管理し生活を送っていた。住居や稽古場も全て、初期の塾生が自力で建てたものである。

●富良野演劇工場の建設とふらの演劇工房の設立

・1994 年に富良野塾を支援してきた市民から、劇場建設計画の声が上がる。既に文化会館が存在したため、その必要性が問われたり、建設場所で紆余曲折することがあったが、2000 年に富良野の森の中に「富良野演劇工場」としてオープンを果たした。建物の設計には、舞台や会場の設計のみならず、ロビーやトイレに至るまで倉本氏が関わった。「工場」と名前には、「大都市から持ってくるのではなく、地方から新たに創りだす」というメッセージが込められている。

（出典：富良野ＧＲＯＵＰ ＨＰ）

・また、富良野演劇工場の建設の動きとあわせて、倉本氏や富良野塾を活かした劇場づくりをめざそうと考えるメンバーで、1997 年に市民団体（任意団体）が発足。富良野演劇工場の建設をきっかけに、工場の運営を担う主体として財団法人化の検討を始めた。しかし、財団設立の要件は、資金面・組織面でハードルが高く、実現は容易ではなかった。そのようななか、国でＮＰＯ法（特定非営利活動促進法）が制定され、ＮＰＯ法人化をめざすこととなり、1999 年２月に日本で第１号のＮＰＯ法人となる「ふらの演劇工房」が設立された。

●富良野塾の閉塾と「富良野ＧＲＯＵＰ」

・2010 年春に富良野塾は閉塾したが、プロの世界で羽ばたき始めた塾生ＯＢをサポートし、本当の実力をつけさせたいという倉本氏の思いから、新たに「富良野ＧＲＯＵＰ」を結成。現在、創作のプロ集団として、富良野でのロングラン公演や全国ツアーなどの活動を行っている。

■ 取組の成果

●地域活動への活発な市民参加

・富良野塾や富良野ＧＲＯＵＰの演劇をきっかけに、市民の演劇への関心が高まり、市民等によるふらの演劇工房の設立、市民ボランティアの結成につながった。

・現在、市民ボランティアには約 150 名の人々が登録している。

・多くの市民が活動に参加することで、演劇に携わる貴重な人材も育ってきている。なかでも、演劇工場オープンの翌年に結成した市民劇団「へそ家族」は、仕事を終えてからの稽古に励み、「ふらの演劇祭」の市民創作劇などで精力的に活動を続けている。

●観光客の誘致

・富良野の冬の観光の目玉はスキーであるが、スキー人口は近年減少傾向にある。このようななか、観光客誘致に一役買っているのが演劇である。富良野ＧＲＯＵＰは各地で公演を行っているため、全国にファンが存在する。富良野ＧＲＯＵＰが最もその才能を発揮できるのが「富良野演劇工場」であるため、富良野での公演がある際には、全国からファンが訪れる。

・このようなポテンシャルが認められ、現在では富良野のホテル等の連携による旅行商品開発なども積極的に行われている。

●周辺の自治体との連携強化

・演劇をテーマとしたまちづくりは、周辺地域にも広がりを見せている。現在、空知管内の文化センターやホール運営者により「空知ホール連絡協議会」などが結成されている。

・同協議会主催で、空知管内の 4 劇団が作品を発表し合う「そらち演劇フェスティバル」が開催されている。

・東京等の演劇公演の誘致には、膨大な費用がかかることから、同協議会が連携しながら誘致を行っている。

●富良野塾ＯＢの移住

・太田氏、久保氏をはじめ、富良野塾の卒業後も富良野に住み続けるＯＢも多くみられる。卒業生 375 人のうち、現在、約 40 名が富良野に住み続けている。現在も演劇活動を続けているのは、そのうち約 20 名であり、農業や土産物屋、新聞記者になった人などもいる。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然環境

富良野の広大かつ美しい自然と大地

倉本聰氏が富良野に惹きつけられた理由の１つが「美しい大自然」であった。それらは倉本氏の「北の国から」、「風のガーデン」などの作品からも見てとれる。富良野塾卒業後も富良野に住み続け、演劇活動の傍ら農業も営む久保氏は、「富良野は演劇俳優としての五感を研ぎ澄ましてくれる自然が魅力」と語っている。
現在、倉本氏は「富良野自然塾」で、豊かな自然のなかで五感を鍛えながら環境について考える活動に取り組んでいる。この事業には多くの人々が参加しており、富良野での自然活動の重要さに共感した著名人（竹下恵子氏、永六輔氏、サッカーの岡田武史氏、C・W・ニコル氏等）も、ボランティアなどで活動に携わっている。

●富良野の大自然

富良野には、十勝岳、空知川、広大な農地、ラベンダー畑、冬場の雪景色などの大自然が広がっている。またそれらを舞台とした、スキー、ゴルフ、温泉、ワカサギ釣りなどのアクティビティも充実している。
富良野塾では、倉本氏が大自然のなかでの農作業をすることにより、劇団員として必要なことを塾生に学ばせた。

●富良野自然塾

作家、倉本聰氏が主宰。2006 年春から、閉鎖されたゴルフ場に植樹をして元の森に還す「自然返還事業」と、そのフィールドを使った「環境教育プログラム」を行っている。一連のプログラムは、富良野の大自然のフィールドのなかで五感を鍛えることを通じて、地球環境について考えることを目的としている。プログラムの大きな柱として「植樹」があり、参加者は、地球環境問題の原点を五感を通じて体感し、木を植えることの重要性を学ぶ。これまでに約 18,000 名が体験し、植樹本数は４万本に及んでいる。

Point **演劇俳優としての五感を研ぎ澄ましてくれる自然の魅力**

芝居をやっている間は、芝居に没頭し、視野が狭くなってしまいます。農作業をやっていると、芝居とは違う角度から物事を見ることができる。空から何かが降りてくる時がある。農業をやっていると、時々刻々と変化する自然を目のあたりにします。そこから学び、受信する情報量は非常に大きい。都会では決して得ることができない大切な経験です。私が尊敬する演出家の宇野重吉さんや滝沢修さんも、やはり畑仕事に携わっていました。畑仕事を通じて、学ぶべきことや感じることがあるのだと思います。　（久保氏ヒアリング）

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

演出家・倉本聰氏の存在

富良野が演劇のまちとして有名になった背景には、現在も活動をリードし続けている倉本聰氏の存在が非常に大きい。富良野市が文化村の整備を進めており、倉本氏を誘ったことが移住のきっかけとなった。もともと富良野は演劇とはほぼ無縁の土地であったが、倉本氏による富良野塾の立ち上げ、富良野演劇工場の建設、富良野ＧＲＯＵＰの結成等により、演劇のまちとしての全国的に知名度が向上した。また倉本氏の富良野の大自然を舞台とした大ヒットドラマ「北の国から」は、富良野の観光地としての知名度を一気に高めることとなった。

これまで倉本氏に頼る部分が大きかった富良野の演劇のまちづくりだが、現在、倉本氏が築いてきた功績をさらに発展させるべく、富良野ＧＲＯＵＰのメンバーが中心となり、自主的な活動を展開しつつある。

●倉本聰氏

1935 年、東京都出身。脚本家・劇作家・演出家。東京大学文学部美学科卒業後、1959 年ニッポン放送入社。1963 年に退社後、脚本家として独立。1977 年、富良野に移住。1984 年から役者やシナリオライターを養成する私塾「富良野塾」を主宰。代表作に「北の国から」「前略おふくろ様」「昨日、悲別で」「ライスカレー」「優しい時間」「風のガーデン」などがある。2006 年より「富良野自然塾」を主宰し、閉鎖されたゴルフ場に植樹をし、元の森に返す自然返還事業と、そのフィールドを使った教育プログラムにも力を入れている。

（出典：富良野ＧＲＯＵＰ　ＨＰ）

■ 文化芸術を支える住民層

演劇のまちづくりを支援する市民の存在

富良野の演劇のまちづくりを裏で支えているのが、市民である。ふらの演劇工房には、現在約 150 名のボランティアが登録している。ボランティアは、イベントの周知、チケット販売、駐車場整理、観客誘導、炊き出し、喫茶・売店の運営、託児、清掃等、様々な場面で演劇のまちづくりを支援している。ボランティアのリーダー的存在である秋田氏は、金銭面で決して良い暮らしを送っているとは言い難い劇団員のために、手作りの料理をふるまうなどのサポートも行っている。
また富良野のペンションや飲食店では、劇団員のサポートのために、劇団員の短期採用も行っている。劇団員が２か月練習に出て来られないケースもあるが、倉本氏はその点を十分理解しており、決して解雇することはないという。

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

「人を知り、人として暮らせる」環境

大都市とは違い、富良野では人と人が助け合いながら生活している。また、市民ボランティアや街で暮らす様々な人々と交流する機会も多い。こうした環境が、他人を演じる「劇団員」が成長するうえで、重要な要素となっている。

Point 劇団員として成長できる場

東京とは違い、人間らしい暮らしができるのが富良野の魅力です。演劇員は、やはり人口が多い東京でなければやっていけないと考えられがちです。しかし、東京で劇団員が暮らしていこうと思うと、アルバイトをしながら、演劇の練習をしなければなりません。アルバイト先と練習場と自宅の往復の繰り返しで、人間らしい暮らしができない。また東京にいると付き合いが、同じ業界の人ばかりになりがちです。
「演劇」では他人を演じる訳ですから、日常生活において他人と接し理解することが非常に重要となります。色々な人々を知らなければならない。その点、富良野では、人と人が助け合いながら生活しています。自分が一人の人間として生きていることを実感できます。農家の方、まちで働いている方など、様々な方々と接する機会があります。乾いたぞうきんを絞っても何も出てこないように、劇団員は 70%は受信に努めるべきだと考えています。　（久保氏ヒアリング）

■ 宿泊施設、レストラン

旬の食材を使った料理とホテル

富良野では、玉葱、人参、ジャガイモをはじめ、アスパラ、ほうれん草、トマト、ブロッコリー、米の栽培や酪農などが行われており、地域ならでは新鮮な素材が手に入る。地域の料理屋やホテルでは、これらの素材を使った料理が振る舞われる。くまげらの山賊鍋など地元ならではの料理も存在する。宿泊客に最高のおもてなしを提供するホテルも数多く存在する。

このような豊かな食やゆったりとくつろげる環境等を目当てに、ボランティアに近い形で仕事を引き受け、富良野を訪れる著名人も多い。

◆創造的活動の支援環境

■ 活動の場

日本随一の演劇専用施設と、もてなしの心に溢れるスタッフ

劇団員や演劇ファンにとって、富良野の演劇の大きな魅力となっているのが、「富良野演劇工場」である。近年、整備されるホールは、用途を多目的したものが多い。しかし、倉本氏は「多目的になればなるほど、無目的となる」と言う。実際、劇団が公演する場合、舞台の狭さや設備の環境から、セットや内容を大幅に変更・縮小せざるを得ないケースが多い。このような状況を背景に「富良野演劇工場」は「演劇の公演」に的を絞った施設づくりを行っている。施設の設計に倉本氏が大きく関わり、舞台・設備や観客席のみならず、トイレやエントランスホールのデザインまで細かに指示を行った。舞台裏は通常の倍の広さがある。舞台と客席の間は、役者と観客の一体感を出せるような構造上の工夫がなされている。また久保氏は「良いホールと呼ばれるところには、必ず良いスタッフがいる。富良野演劇工場も、もてなしの心あふれる良いスタッフやボランティアがいるのが大きな魅力」と語る。

■ 行政の取組

演劇工房等の建設や表現教育への行政の支援

演劇工場の建設には紆余曲折があったが、富良野市の支援により、建設に漕ぎつけることができた。近年では、コミュニケーションツールとしての「演劇」のポテンシャルが認められ、大学等の表現教育として取り入れられるようになってきている。

◆利便性・安心感

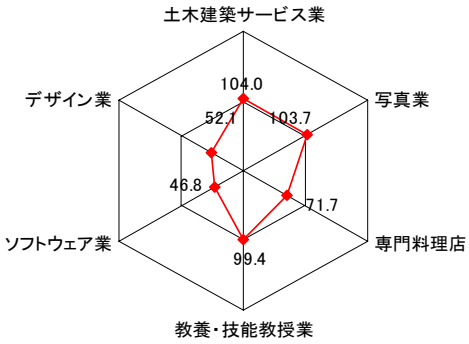
■ 交通・通信の利便性

大都市の人々にとっての「非現実世界」

東京など大都市で行われる演劇は、帰路につくと同時に現実世界に戻ってしまう。その点、富良野演劇工場は大都市圏から離れた土地にあり、演劇工場自体が森の中に建てられているため、芝居が終わっても現実に戻ることがなく、芝居の余韻を楽しむことができるという魅力がある。

青森県　八戸市

都市の基本データ※1

人口※2	237,615 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合※6
高齢化率※2	23.2%	
合計特殊出生率※3	1.43	
人口の社会増減率※2※4	-1.85%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	5.8%	
交通	＜地域へのアクセス（八戸市）＞ 東京から八戸まで、新幹線で約３時間 ＜地域へのアクセス（南郷地区）＞ 八戸市中心市街地から車で約 30 分	

気候条件※7	主な地域資源
夏は偏東風（ヤマセ）の影響を受け冷涼で、冬は晴天が多く乾燥している。また、北東北にありながら降雪量が少なく、日照時間が長いことも特徴となっている。	・蕪島ウミネコ繁殖地（国指定天然記念物） ・八戸三社大祭（国重要無形民俗文化財） ・八戸えんぶり（国重要無形民俗文化財） ・南郷サマージャズフェスティバル ・八戸ポータルミュージアム「はっち」 ・八戸の横丁文化、全国最大規模の朝市 ・八戸東高校（全国で唯一、「表現科」がある）

■ 地域における創造的な取組の事例

●南郷サマージャズフェスティバル

●八戸ポータルミュージアム「はっち」オープニング事業
（八戸レビュウ、八戸のうわさ、酔っ払いに愛を、等）

●南郷アートプロジェクト

など

※1　八戸市の値
※2　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※3　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※4　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※5　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※6　平成２１年経済センサス
※7　八戸市ＨＰ

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆南郷サマージャズフェスティバル

■ 取組の概要

●取組の内容

◇東北最大のジャズフェスティバル

- 国内外の一流ミュージシャンが多数参加する野外でのジャズフェスティバル。
- 1990 年から毎年開催し、2011 年７月には第 22 回を開催。１日に４～６のグループの演奏を聴けることが人気を呼び、毎年、八戸市内をはじめ、青森県内、東北を中心に全国から 2,500 人前後のジャズファンが南郷地区を訪れる。
- 2011 年の前夜祭では、地元の中沢中学校ジャズバンド部やアマチュアジャズグループ、本祭出演者によるスペシャルセッションなどが行われた。
- 会場内に設置される屋台村では、ご当地自慢の食べ物として「南郷ぶっかけそば」「採れたてブルーベリー」などが楽しめる。暑い日差しのなかでビールを片手に芝生に寝転んでジャズを楽しめるのが何よりの楽しみとされる。

（出典：八戸市ＨＰ）

取組のキーパーソン

南郷ジャズフェスティバル実行委員会　会長

壬生　八十博　氏（写真左）

八戸市南郷区役所次長兼企画総務課長

根岸　文隆　氏　（写真右）

◇取組との関わり

【壬生会長】

- 実行委員会会長の壬生氏の父親が、第１回のジャズフェスティバルを開催した時の村長。
- 最初は一流のジャズ演奏者が「こんな田舎に来るのか？」と半信半疑であったが、「来ることが現実となって感動した」「村民もびっくりした」とのこと。
- 毎年７月のジャズフェスティバルが終わると、息つく暇もなく、次年度の企画に向けて取り組むという。

【根岸氏】

- 八戸市職員の根岸氏は、第１回の開催からジャズフェスティバルの企画・運営に関わっている。

■ きっかけ～取組の経緯

●若者グループが開催したハンガリー青年民族舞踊団「ティサ」の公演が大盛況

・旧南郷村では過疎化が進んでおり、暗いイメージを払拭して人口流出に歯止めをかけることが急務であった。そのような折、カッコーの森エコーランドの落成にあわせ、村の10 代後半から 40 歳代までの男女約 20 名からなる団体「輪芸者（わげぇーもの）」が中心となり、ハンガリー青年民俗舞踊団「ティサ」の公演を誘致・開催したところ、２日間で５千人が来場し、大盛況となった。この取組で「あおもり活性化大賞チャレンジ賞」を受賞した。

●南郷ジャズフェスティバルを開催

・「ティサ公演のような取組を続けたい」との想いから、輪芸者のパワーと当時の壬生村長のジャズ好きとが上手く融合し、1990 年に、早稲田大学と慶應義塾大学のビッグバンドを招いて「第１回南郷ジャズフェスティバル」を体育館で開催した。

・「さらに続けたい」との想いはあったが、ジャズ界とは何のつながりもなかった。そこで、青森のジャズ喫茶を頼りに、東京のジャズ喫茶を通じて出演者を集め、「カッコーの森エコーランド」野外ステージに会場を移して、第２回を開催することができた。以後、国内外の一流ミュージシャンが多数参加する東北最大級の野外ジャズイベントとして定着している。

■ 取組の成果

●「ジャズのまち・南郷」が住民の誇りとなる

・毎年多くのジャズファンとのふれあいを通じて、住民に「おもてなしの心」が生まれた。今も約 80 名のボランティアが交通整理、会場案内、物品販売などを手伝っている。

・ジャズフェスティバルの取組が、「あおもり活性化大賞」をはじめ多くの賞を受賞した。

・村外から高く評価されたことで、かつて「南郷ってどこ？」といわれていたのが、「ジャズの南郷ですね」といわれるようになり、地域への住民の愛着･誇りが高まった。

●定住人口、交流人口の増加

・1992 年から定住促進住宅団地（なんごうグリーンタウン）を分譲したところ、200 余りの区画が全て完売した。ジャズが好きなため、南郷地区に移住してきた人もいる。

●地域活性化の取組

・「ジャズとそばの里」として地域おこしに取り組んでいる。ジャズフェスティバルの出演者が「そば名誉会員」になり、南郷そばをＰＲしている。今では、年間 7,000 食もの取り寄せ注文が入るようになった。そばに続いて、ジャズ姫（いちご）、ジャズ菜（ルッコラ）を売り出している。

◆八戸ポータルミュージアム「はっち」オープニング事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

■ 取組の概要

●八戸ポータルミュージアム「はっち」

八戸ポータルミュージアム 「はっち」は、時間や空間を超え、八戸の人・もの・文化・食などの地域資源を大事に想いながら、アートやコミュニケーションの力により、従来のジャンルを横断したまったく新しい価値を創造する場として整備された。内外アーティストが滞在する創作環境としてのレジデンス、未来を創る子どもたちに開かれた交流施設、複数のシアターやギャラリー、ライブラリー機能も備え、経済や産業、観光の視点に立った未来の文化創造の橋渡しをする。まちが時代を超えて成長する“ソウゾウ開花”が「はっち」の真価である。

●オープニング事業の内容

◇八戸レビュウ

・公募で集まった 88 人の市民が「市民ライター」となり、身近な人や話を聞いてみたい人にインタビュー。作家やクリエイティブディレクターのアドバイスを受けながら、取材した 88 人の人生の一場面を原稿用紙一枚の物語に書き上げた。それを読んだ新進気鋭の３人の写真家が 88 人の主役の写真を撮影。八戸に存在する個々の日常や生業を映し出した 88 枚の写真と市民ライターの文章は、“このまちの本質”を深く再認識させてくれた。

◇八戸のうわさ

・アーティストが中心街に長期滞在し、多くの店舗や事業所を１軒１軒取材。まちの人たちの小さな自慢や趣味や悩み、嬉しかったことなどを聞き出し、うわさ風の文体で書いたフキダシ型のシールを作成、各店舗のウィンドウ等に貼り出した。昔ながらのお隣り同士でも、お互いに知らなかった一面を知るなど、「うわさ」を通じて見えないコミュニケーションの糸が街に新しい絆を創造した。

◇酔っ払いに愛を

・ノスタルジックな空気が漂い、個性的な店が軒を連ねる「八戸の横丁」では、毎夜様々な人間模様が繰り広げられている。こんな横丁の魅力を再発見するために「酔っ払いに愛を～横丁オンリーユーシアター」を開催。横丁オーナーの協力により、空き店舗を４日間限りのミニシアターにした。観客はシアターをはしごしながら、横丁ならではの人生模様が凝縮された５つのパフォーミングアーツを堪能した。

（出典：「はっち」ＨＰ）

取組のキーパーソン コーディネーター 今川　和佳子　氏 	◇　取組に参加したきっかけ ・　今川氏は八戸市出身。父親が画家で、実家に学生が泊まりこんで勉強し、母が食事を出すレジデンスのようなことを肌で感じながら育った。食やファッション関連のコーディネーター的な仕事を東京でしていたが、八戸に戻ることになり、仕事のあてもないまま戻ってきた。 ・　「はっち」のことを市の広報紙で知り、プロジェクトに関わりたいと感じた。はっちの活用方法を考える市民ワークショップに参加したことがきっかけで、平成 20 年４月の中心市街地活性化推進室の設置と同時に、コーディネーターに就いた。 ・　「はっち」には２人のディレクターがおり、その方針のもと、今川氏を含む６名のコーディネーターが活動している。

■ きっかけ～取組の経緯

●中心市街地が衰退

・八戸市では、郊外への商業施設の進出などにより、中心市街地が衰退傾向にあった。地域活性化のため、民間主導で再開発による大型商業施設を整備する計画があったが実現には至らず、当初、「（仮称）八戸市中心市街地地域観光交流施設」として、お祭りの山車を展示する施設が計画されていた。

●施設の整備方針を変更

・現市長の就任後、施設の整備方針が変更され、「中心街の中核施設として複合機能を取り入れる」こととなった。市民参加により施設計画を検討するなかで、「はっち」のコンセプトが形づくられていった。また、施設を建設している期間を使ってプレ事業を行い、開館後のソフト事業の内容を深めていった。

■ 取組の成果

●多くの住民が集い交わる交流拠点となる

・中心市街地の中心部に誕生した「はっち」への住民の関心は高く、オープニングイベントに１万人が集まり賑わった。近隣の商店街のオープン記念セールでは２億円の売上があった。開館１年後には８８万８，８８８人目の来館者を迎え、歩行者通行量も大幅に増加した。

●レジデンスを活用してアーティストが創作活動を展開

・開館後１年の間に、長期滞在２組を含む１０組以上のアーティストがレジデンス機能を活用して、八戸で創作活動を行った。東日本大震災の復興支援活動の拠点としても活用された。レジデンスを活用したアーティストの中から、八戸に移住を決めたアーティストも生まれた。

●クリエイティブな活動をする人材に情報発信の場を提供

・「ものづくりスタジオ」では、様々なジャンルのクリエイターがショップを開き、伝統工芸等を活かした「メイドイン八戸の商品」を発信している。

◆南郷アートプロジェクト

■ 取組の概要

●南郷アートプロジェクト

南郷アートプロジェクトでは、「アート」を使って、南郷の日常の暮らしの中に、新しい視点やおもしろい考え方、変わった方法を取り込み、新しい価値観の創出や地域コミュニティの再構築など、アーティストと地域住民とが一緒に実践していく。

このアートプロジェクトを通じて、南郷が、たくさんの人が多様な方法で関わりたくなる、創造的・自律的な地域へと発展していくことを目指している。

●平成 23 年度の取組

◇「デイリリー・アート・サーカス 2011」

・トラックに作品を積み込み、全国をキャラバンするアートプロジェクトを招へい。地域の人々が現代アートに触れ、楽しさを体験できる現代アートの展示、ワークショップを開催した。

◇「南郷発信！ダンスプロモーションビデオ with ジャズ」

・南郷の世増ダムから八戸港へと流れる新井田川沿いにある河原や橋、工場、港などを舞台にしてアーティストが踊る映像を制作。音楽は、地元ジャズバンドが地元の民謡や盆踊りをジャズにアレンジして録音したものを使った。完成した映像は地元で上映会をして披露したほか、YouTube 等でも発信した。

◇「ダンスとジャズのパレード『島守の、うずうずツアーなんだこりゃ！』」

・ダンサーと地元のジャズバンドと神楽保存会が、かつて夏祭りで山車が練り歩いていた道で、観客を巻き込みながら歩く、ツアー形式のパフォーマンスを実施した。また、地元の小学生にアンケートで尋ねた南郷のいいところをもとに「南郷うずうず音頭」をアーティストが制作、パレードのなかで市民と踊って楽しんだ。

◇「南郷の音リサーチ」

・アーティストが、南郷の「音」をリサーチして採取、編集・加工して公演で使用した。

◇オドリの楽校

・南郷に滞在するアーティストと出会えるワークショッププログラム。
（お出かけダンス　島守小学校、習わないワークショップ、はっち de ダンス、ジャズ講座～ジャズの里の真髄を知る）

◇ダンス公演「ＤＡＮＣＥ×ＪＡＺＺ」

・地域資源のジャズにダンスを掛け合わせ、新たな創作に取り組んだ。

（出典：南郷アートプロジェクト　スタッフブログ）

取組のキーパーソン 芸術環境創造専門員 **大澤　苑美　氏** 	◇　取組に参加したきっかけ ・　大澤氏は、名古屋市出身。芸術系の大学でアートマネジメントを学んだ後、文化振興を行う財団法人で、コンテンポラリーダンスのアーティストの派遣など、公共ホールを支援する業務を担当していた。 ・　八戸市がアートのまちづくりについてアドバイスをしていただいていた専門家から、八戸市が「芸術環境創造専門員」を雇用する予定であることを知らされ、関心を示したところ、ダンス関連の業務をしていたことなどが評価され、平成２３年４月から、同職に就いた。 ・　市長をトップに、「アートのまちづくり」に市が本気で取り組もうとしていると感じたことが、八戸への移住を決断した大きな要素であった。 ・　予算や他の課との調整などの業務は「まちづくり文化推進室」の職員が担うため、大澤氏はコーディネーターやプロデューサー的な業務に専念できる環境となっている。

■ きっかけ～取組の経緯

●旧南郷村の過疎化・高齢化が進む

・平成 17 年に八戸市と合併した旧南郷村は、若年層が都市部へ流出するなど、過疎化・高齢化が進んでいた。基幹産業の農業についても、新規就農者の減少と高齢化により農家人口や耕作面積を減少させ、耕作放棄地が増えていた。

●合併に伴う地域協議会の設置期限が迫る

・合併に伴い地域協議会が設置され、住民主体の地域づくりに取り組んでいるが、地域自治区の設置期限である平成 27 年度には協議会が解散するため、その後の地域づくり活動の受け皿整備が必要となっている。

●「南郷アートプロジェクト」の実施へ

・コミュニティの活性化や、新たな地域の担い手育成、子どもたちの感性の向上、高齢者の活躍の場の創出、地域資源を活用したブランド化、観光客の増加など多様な効果の創出を目指して、平成２３年度から「南郷アートプロジェクト」が始動した。アーティストと地域の方との交流を重ねることで、次世代を担う人材の創造力を高めていくことや、地域のことを地域自身で組み立て、運営していけるような、地域の自律力を高めていくことが最大の狙いである。

■ 取組の成果

●市民の主体的な動きがみられるようになってきた

・南郷地域で現代アートの展覧会やダンス公演を実施したことで、自発的に連携企画を提案し、実施する市民団体も現れたほか、関係各所への根回しや仲介を自ら買ってでる地元住民も現れた。さらに、地域の若い人が、自身の活躍の場を持てることに対して期待する様子もうかがえる。

●「八戸市南郷文化ホール」の指定管理者の意識に変化

・地域の芸術文化活動を支える拠点である「八戸市南郷文化ホール」の指定管理者が、アートプロジェクトに関わったことで刺激を受け、これまで以上にホールの外に出て地域に入り込み、市民と一緒に新しい価値を生み出していく活動に対して積極的になっている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 文化資源

「えんぶり」などの郷土芸能やお祭り

八戸地方には古くから伝わる「えんぶり」や神楽、手踊りなどの郷土芸能が多く存在し、誰もが「踊る」機会があり、「踊る」素養をもっている。音楽を聴くと身体が自然に動く。南郷アートプロジェクトで「コンテンポラリーダンス」が取り上げられているのも、このような「踊る文化」を考慮したものである。

●えんぶり

えんぶりは八戸地方を代表する民俗芸能。その年の豊作を祈願するための舞で、太夫と呼ばれる舞手が馬の頭を象った華やかな烏帽子を被り、頭を大きく振る独特の舞が大きな特徴。その舞は、稲作の一連の動作である種まきや田植えなどの動作を表現したもの。国の重要無形民俗文化財に指定。青森冬の三大まつり、みちのく五大雪まつりに数えられる。

（出典：八戸市ＨＰ）

豊かな海の幸と「八戸せんべい汁」などの食文化（B級グルメ）

八戸には、豊かな海の幸（イカ、八戸沖前サバ）や「八戸せんべい汁」などの食文化がある。長期滞在（レジデンス）するアーティストにとって、食は楽しみの一つであり、横丁の居酒屋で人気者になるアーティストもいるという。

●八戸せんべい汁

鍋用の南部せんべいを、肉や野菜などで取ったおいしいだし汁に割り入れて煮込んだ、心も身体も温まる素朴な郷土料理。
厳しい気候で米がとれないため保存食が発達し、それがせんべい汁につながったという言い伝えがある。
平成 15 年に「八戸せんべい汁研究所」が設立され、せんべい汁を用いた地域おこしが始まり、2006 年に全国のＢ級グルメを集めた「B-1 グランプリ」が八戸市で初開催された。

（出典：八戸市ＨＰ）

工場×アート

八戸には、北東北随一の工業地帯があり、鉄鋼、非鉄金属、紙・パルプ、エネルギー関連を中心とした工場が立地している。八戸市では、「フィールドミュージアム八戸構想」にもとづき、これらの工場群も八戸の魅力的な地域資源ととらえ、「アート」で磨きあげて産業観光的に活用することを視野に入れており、現在検討が進められている。取りかかりとして、市民の工場に対する関心を高めるため、広報特別番組 「八戸 魅惑の工場萌えツアー」を 2012 年３月に制作・放映している。

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

アートマネジメントを行う専門家の確保

八戸市は「アートによるまちづくり」を推進していくため、「まちづくり文化推進室」を創設するとともに、アートプロジェクトに関する知識やアーティストとネットワークのある外部人材の登用が不可欠と考え、「芸術環境創造専門員」を配置し、「八戸ポータルミュージアムはっち」にディレクター（非常勤２名）と、コーディネーター（常勤６名）を配置している。また、「はっち」アドバイザリーボードには県外の専門家も多数配置している。これらの専門家が、八戸市にとって必要な企画を考え、適切なアートやアーティストを選択し、事業をコーディネートするうえで、大きな役割を果たしている。

●芸術環境創造専門員

まちづくり文化推進室に配置されている「芸術環境創造専門員」は、地域課題を「アート」の力を使って解決に導き、まちを魅力的に変えていくにあたり、①どのような「アート」が最適であるかを考え、②活用する文化的資源（アーティスト、地域資源等）を選択し、③アーティストと地域（市民）、市民と市民の間に入り込み、「つなぐ」役割を担っている。市職員が、業務の進行管理や予算措置、議会対応、関係課等との調整を行うこととし、芸術環境創造専門員が事業の企画実施に専念できる体制を確保している。

●ディレクターとコーディネーター

（八戸ポータルミュージアム「はっち」）

「はっち」で行う様々な事業のうち、特に文化芸術と観光振興事業においては、それぞれ専門のディレクターを中心に事業の方針を定め、その方針に沿って６人のコーディネーターと市職員スタッフが一体となり、実務を行っている。経験豊富なディレクターとともに働くことで、コーディネーターは多くのことを学び、八戸に適したプログラムを実践している。

（出典：「はっち」ＨＰ）

■ 文化芸術を支える住民層

自ら文化を楽しみ、アーティストを「本気にさせる」住民層

八戸市には、様々なジャンルの文化団体が多数あり、文化協会に所属している団体だけでも 161 団体もある。人口 24 万人の規模にもかかわらず、文化協会の会員は約１万人と、何らかの形で文化活動に関わっている市民が多い。旧南郷村でも、「生の音楽」を楽しむことが、以前から日常的にあった。

そのため、様々なアートイベントについて興味・関心をもつ市民が多く、アーティストやアートイベントに対して理解があり、寛容的である。アーティストと住民との様々なコラボレーションの企画も具体化させやすい。南郷アートプロジェクトのイベントにおいても参加者が多かったという。

●160 を超える文化団体

八戸市には、文芸、芸能、美術、華道、茶道、生活文化など様々なジャンルの文化団体が存在し、文化協会に所属する団体だけでも 161 団体を数え、活発に活動している。自らも文化活動をしていることから、「本物でないと満足しない」という厳しい目線も持っており、その存在がアーティストを「本気」にさせている。

●旧南郷村では「生の音楽」を楽しむことが日常的にあった

旧南郷村では、昭和 52 年の合併 20 周年記念事業の一環として、村職員による「バンド」が結成された。当時はカラオケがなかったため、成人式や老人会などで「ナマオケ」を演奏し、青年団もバンドを作っていた。現在も中沢中学校には県内初のジャズバンド部がある。このように、「生の音楽」を楽しむことが、以前から人々の暮らしの中にあった。

Point アーティストと子どもたちの交流を通じて、世界に飛び出すミュージシャンを育てたい

プロのミュージシャンに子どもたちを指導してもらっている。プロに教えてもらえると、子どもたちに自信がつくし、良い経験になります。ミュージシャンを育てて、世界的に有名なプレイヤーを生み出したい。中沢中学校にジャズバンド部があるので、いずれは全国大会を南郷で開きたい。
（壬生氏ヒアリング）

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

アートのまちづくりを支える市民ネットワーク

「八戸ポータルミュージアム　はっち」の整備にあたっては、市民参加によるワーキンググループが、ソフト計画についてアイデアを出し、開館プレ事業の開催に至るまで大きな役割を果たした。また、ジャズの館南郷はジャズファンの拠点となっている。

●hpm（八戸ポータルミュージアム）市民ワーキング

八戸市では 2004 年から中心市街地活性化のために「都心地区再生市民ワークショップ」を開催しており、それが土台となって、市民有志による「ｈｐｍ市民ワーキング」が立ち上がり、商店街、ものづくり、食、観光、舞台芸術、デザイナー、教師、学生、子育て団体などの市民がソフト計画についてアイデアを出した。また、施設の建設期間の間、開館後を想定した開館プレ事業を企画・開催協力し、開館後の事業にもつながっている。

●ジャズの館南郷

ジャズフェスティバルの期間以外にも、年間を通じてジャズを楽しめる場をつくるため、「ジャズの館南郷」が整備された。ＬＰやＣＤを約 6,000 枚所有しており、良質の音楽でくつろげる喫茶店となっている。
音楽鑑賞のほかにも、休憩、勉強、読書など楽しみ方は人それぞれ。演奏練習、ライブ開催などでも利用できる。

（出典：八戸市ＨＰ）

■ 街のにぎわい

横丁や朝市のにぎわいと観客とのふれあい

八戸には、横丁や朝市など、住民間でのコミュニケーションが生まれる空間がたくさんある。人口に対しての居酒屋の数が多く、まちの賑わいを形成する大きな要素となっている。滞在中のアーティストが横丁に繰り出すと、「面白い」「面白くない」といった生の意見がダイレクトに返ってくる。「えんぶり」「三社大祭」「神楽」などの文化に親しんでいる市民は目が肥えていて、都会では難しい「観客との真剣勝負」ができるという。

●中心街にある８つの横丁

八戸は昔から横丁文化が根付いた街で、隣に座った客と気軽に話せてしまう雰囲気があり、市民や観光客に親しまれている。中心街には８つの横丁が残っており、八戸の郷土料理や新鮮な魚介類などの八戸の食を満喫できる。

（出典：八戸横丁連合協議会ＨＰ）

●朝市

市内９か所で朝市が開催されており、多くの人々が訪れている。なかでも陸奥湊駅前朝市では日の出前から「イサバのカッチャ」と呼ばれる魚商のお母さんたちの威勢のいい掛け声で、周囲が活気に満ち溢れている。また、館鼻日曜朝市は、２万人以上が訪れる巨大な朝市である。

◆創作的活動の支援環境

■ 行政の取組

アートによるまちづくりに本気で取り組む行政

八戸市では、市長が「アートのまちづくりの推進」をマニフェストに掲げ、市の重要な施策に位置づけている。事業推進主体として平成 22 年４月から、市に「まちづくり文化推進室」を設置し、アートとまちづくりを関連させて推進していくための体制を構築している。
また、市の文化政策を議論する場として、市民や有識者で構成する「多文化都市八戸推進懇談会」を設置し、懇談会から市長に提出された提案書をもとに、様々な取組を具体化している。
市長もアートイベントに積極的に参加し、アーティストと交流を深めるなど、「アートによるまちづくり」に本気で取り組んでいる姿勢が、アーティストの共感を呼んでいる。

●多文化都市八戸推進懇談会

多様で特色ある市民の自主的な文化活動を「多文化」ととらえ、多文化に関する施策の総合的な推進を図ることを目的として、市民や有識者等からなる懇談会を平成 18 年度に設置。平成 19 年度に「多文化都市八戸推進フォーラム」を開催したほか、これまで、「多文化都市八戸推進のための提案書」（平成 19 年度）、「はちのへアートのまちづくり提案書」「市民練習場の整備に関する提案書」（平成 22 年度）を市長に提出している。

■ 活動の場

アーティストのレジデンス機能と、観客と一体化できる野外ステージ

八戸市では、アーティストが一定期間地域に滞在し、地域の人々と協働で創作活動をすることが、地域の活性化につながっていくと考えており、「はっち」の５階にレジデンスが整備されている。また、南郷サマージャズフェスティバルの会場の「カッコーの森エコーランド」野外ステージは、演奏者と観客との一体感を生み出す空間となっている。

●「はっち」のレジデンス機能

「はっち」の５階には、アーティストの滞在による創作活動や、地域の人が時間にとらわれずじっくりと講座や作業、打ち合わせなどに打ち込めるワークスペースとして「レジデンス」、「共同スタジオ」、「工作スタジオ」などが設置されている。
広い「共同スタジオ」は、学生やアーティストの滞在を伴ったワークスペースとして以外にも、ダンス等のリハーサル、発表、展示空間など、自由な発想で、自由な使い方ができるスペースとなっており、多様な人材、才能が交流し、刺激しあうスポットとなっている。

●「カッコーの森エコーランド」野外ステージ

すり鉢状になっているため、観客が見えて演奏しやすく、観客席の後ろに芝生が広がっていて会場の一体感が出しやすくなっている。観客もフェスティバルが行われる 14 時から 21 時までの７時間、芝生に寝転んだりしながら自由なスタイルで楽しむことができる。

（出典：八戸市ＨＰ）

◆利便性・安心感

■ 交通・通信の利便性

東北新幹線の延伸

東北新幹線が平成 14 年に盛岡から八戸まで延伸し、八戸は東京と約３時間で結ばれるようになった。

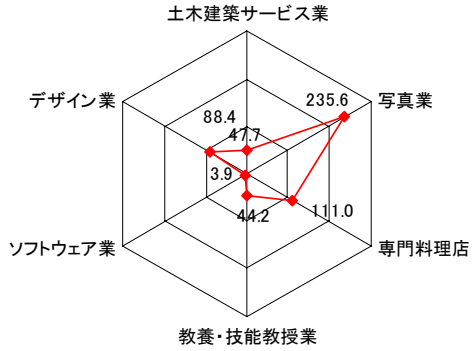
Point 東京からの所要時間や、インターネットへの接続環境は重要

アーティストの活動や、クリエイティブな仕事は東京に集中しているので、八戸に来るアーティストにとって、また、八戸在住でクリエイティブな仕事をしている人にとっても、東京への所要時間が短縮されることは良いことだと思います。
　また、インターネットへの接続環境も重要です。「ネットにつながれていますか？」とよく確認を受けます。活動のオファーを受けたり、スケジュールの調整などはネットで行われることから、ネットにつながっていれば、地域に滞在するストレスも少ないと思います。　（大澤氏ヒアリング）

秋田県　仙北市

（田沢湖地域、角館地域など）

都市の基本データ※1

人口※2	29,568 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合※6
高齢化率※2	33.6%	
合計特殊出生率※3	1.44	
人口の社会増減率※2※4	-2.09%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	4.6%	
交通	＜地域へのアクセス＞ 羽田空港から飛行機で秋田空港まで約１時間 秋田空港から特急電車を利用して、 角館まで約１時間 田沢湖まで約１時間半	

気候条件※7	主な地域資源
仙北市は、地域の約８割が森林地帯で占められており、奥羽山脈から流れる河川は、仙北地域の水源となっている。 また気候は、日本海型気候であり、冬季には全地域で平均気温が氷点下を下回る寒さが厳しい地域である。	・紙風船上げ（上桧木内地域） ・火振りかまくら（角館地区） ・武家屋敷街並み（角館地区） ・温泉（蟹場温泉、乳頭温泉、玉川温泉など） ・田沢湖（田沢湖地区） ・民謡（生保内節、秋田飴売り節） など

■ 地域における創造的な取組の事例

●劇団わらび座（たざわこ芸術村）

○想 nic Art

○角館フィルム・コミッション

など

※１　仙北市の値
※２　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※３　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※４　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※５　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※６　平成２１年経済センサス
※７　仙北市ＨＰ

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆劇団わらび座（たざわこ芸術村）

■ 取組の概要

●取組のテーマ

「伝統と現代の共生」「地域との共生」をテーマに地域資源を活かした文化による地域振興の取組を展開。

●取組の内容

◇地域資源に普遍的テーマを付加し、民族芸能を取り入れたオリジナルミュージカルの企画・制作・上演

・地域資源に普遍的なテーマを与えた作品創造が多くの観客の感動を呼んでいる。

・民族芸能で培った和のエッセンスと演劇界の第一線で活躍するスタッフの力をコラボレーションさせることで、日本のオリジナルミュージカルの制作・上演を行っている。

・地方圏に活動拠点を置く劇団であるが、地域資源に光を当てて歴史性や娯楽性のある作品に仕上げることで、教育的見地からの学校芸術鑑賞会を実現させた。また、作品・出演者双方の質を高めリピーターを確保することで、ロングラン公演を成功させ、安定した劇場運営を行っている。

◇アートビレッジ「たざわこ芸術村」の運営

・わらび座は、劇場施設「わらび劇場」を核に、1996 年より「温泉ゆぽぽ」「森林工芸館」などを擁する複合施設とした「たざわこ芸術村」の運営を行っており、たざわこ芸術村は、宿泊施設の少ない地域における滞在型観光の拠点となっている。

◇地域に密着した文化振興・地域振興

・1997 年には秋田初の地ビール「田沢湖ビール」をスタート。和賀山塊の伏流水を利用した品質の高いビールを製造・販売し、国内外の賞を多く受賞する代表ブランドとなった。2008 年には秋田県立大学と連携し、原材料の 100%を秋田県産で製造した「あきた麦酒恵」を開発・生産するなど、新たな地域ブランドの開発に取り組んでいる。

・秋田県内外で計画される一般市民参加型の舞台創造事業に対して、地域に密着したテーマや偉人を掘り起こした作品創造、脚本指導、演技指導などの舞台作品の制作支援を行い、地域の演劇界全体のレベルアップを図っている。2011 年には秋田県民ミュージカル「白瀬中尉物語」、秋田県より委託された自殺予防劇・生き生きシアター「笑顔予報は晴れのち晴れ」等の実績がある。

取組のキーパーソン 劇団わらび座　相談役 **是永　幹夫**　氏 	◇　主な経歴 ・　大学を卒業後、編集部の職員として劇団わらび座に就職、その後取締役として 2012 年３月まで活躍する。 ・　現在はわらび座の相談役をつとめる。 ◇　取組に参加したきっかけ ・　高校在学中に、地方公演を行っていたわらび座の舞台を観て、感激したのが、わらび座との関わりのきっかけ。 ・　以前から神楽や和太鼓などの伝統芸能に関心があり、大学卒業後にわらび座に就職することになった。

■ きっかけ～取組の経緯

●わらび座の前身「海つばめ」の発足

・1951 年に「海つばめ」として劇団を発足。当初は戦後間もない東京を主な活動範囲としていたが、民族芸能の豊富な東北地方に活動拠点を移しながら活動を続け、1953 年に日本有数の民謡文化を有する田沢湖町（当時）に定着した。

・田沢湖町への定着にあわせて劇団の名称を「わらび座」へ変更し、現在に至る。

●ミュージカルへの事業の多角化等への取組の発展

・当初は民謡や伝統芸能の研究・公演に専門的に取り組んでいたが、1981 年に経営危機に直面したことをきっかけに、事業の多角化へ路線を変更した。

・舞台分野では民族芸能を取り入れたオリジナルミュージカルの制作上演に取り組む一方、わらび劇場を中心に温泉旅館、ビール工場等を擁する複合施設「たざわこ芸術村」を運営したり、リゾートホテルを運営したりするなど、多角的に事業を展開している。

・昔から取り組んでいる教育旅行では、民族芸能の体験ワークショップと合わせたグリーンツーリズム事業（地域の農家と連携した都市部の修学旅行生の受け入れ）も継続しており、劇団運営の柱となっている。

■ 取組の成果

●地域の誇りの醸成

・演目に「アテルイ」「マタギ」「宮沢賢治」など、東北ならではの素材を舞台化し、普遍的テーマを付加することで、現代性を持った作品に仕上げ、普段住民も意識することが少ない地域の誇りを醸成し、再確認する場となっている。

●交流人口の拡大

・地域内外あわせて、年間約 1,200 回の公演を実現させている。また、たざわこ芸術村には、現在年間約 30 万人の観光客が訪れており、仙北市の交流人口拡大に大きく寄与している。

・角館地区で行われている祭りやイベントに関わったり、地域内外の文化事業の支援をしたりすることで、地域全体の交流人口の増加に寄与している。

●地域経済の活性化

・多角的な事業展開が成功し、人口約３万人の仙北市において、約 350 名の雇用を生み出す（社員の約 60%は地元で採用）など、地域の一大産業として地域経済の活性化に貢献している。

●地域外への情報発信、他地域との交流

・地域外での公演活動に継続的に取り組んでいるほか、わらび座の取組を積極的に地域外に発信し、仙北市及び秋田県・東北の地域発信や文化伝達等に貢献している。

・大都市圏に比べて演劇を上演するには交通条件や人口数において不利な仙北市で地域に密着した取組を成功させた経験を踏まえ、2006 年には愛媛県東温市に「坊っちゃん劇場」をオープン。西日本の地域素材を元にオリジナルミュージカルを制作上演し、常設公演を行っている。観光やふるさと教育と結びついた新しい文化事業を展開している。

・ローカルな地域社会や、グローバルな環境問題に対して創造的問題解決を行う「創造農村ネットワーク」に参加するなど、新たな農村のあり方の提言に結び付けている。

（出典：わらび座ＨＰ）

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然環境

湖、温泉をはじめとする自然環境の豊かさ

仙北市では、湖の美しい景観、美味しい水や米など、東京での生活では考えられない自然環境を日々享受することができる。
大都市とはまったく異なる自然豊かな生活環境は、地域で生活する創造的人材にとって大きな魅力になっている。
また、周辺は全国でも有数の温泉地帯であり、他地域から訪れる観光客が滞在型観光をするうえでの大きな地域資源にもなっている。

●田沢湖

瑠璃色の湖面とたつこ姫伝説に彩られる田沢湖は、周囲約 20 キロメートルのほぼ円形の湖である。水深は 423.4 メートルであり、日本一の深さを誇る。
神秘的な雰囲気をたたえた湖は、四季折々に表情豊かで、訪れる人々を楽しませてくれる。

Point 東京では持ちえない自然環境の豊かさ

田沢湖地域には、東京にないもの、東京の生活では持ちえないものがいっぱいあります。
まず、水が美味しいこと、米が美味しいこと、そして自然が見事なこと。それに温泉もたざわこ芸術村内の温泉をはじめとして、付近に多様な温泉があるのも魅力のひとつです。
わらび座は日本有数の劇団なので、他の地域から志望して入ってくる人は「仙北市に行きたい」というよりは「わらび座で舞台に立ちたい」という方がほとんどですが、就職後に仙北市で暮らすようになると地域の魅力に気付くようです。こういった地域資源は日本随一のものがあると自負しています。　（是永氏ヒアリング）

■ 文化資源

民謡文化の集積地

秋田県は、伝統的な民謡文化が数多く残る、全国有数の民謡文化の集積地である。
この地に伝わる民謡は、民族芸能に強い関心を有していた原太郎氏が、田沢湖地域に根をおろして活動するうえでの決め手のひとつとなった。
また、わらび座は全国の民謡のアーカイブ化に取り組んでおり、地域の文化がわらび座の取組の方向性にも影響を与えている。

●「秋田飴売り節」に代表される民謡

仙北市は民謡の宝庫と呼ばれており、「秋田飴売り節」に代表される数多くの民謡が地域に残されている。
「秋田飴売り節」は、昔飴売り商人が太鼓をたたきながら飴を売り歩いた際に歌っていた民謡である。仙北市に隣接する大仙市では「秋田飴売り大会」が行われるなど、単に文化が展示・保存されているだけでなく、暮らしと関わりをもちながら地域に定着している。

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

中央の演劇人が夢中になる芸術創造の場

民族芸能の土壌から生まれる表現や、自然溢れる創造環境での集中した作品制作、地域文化に視点を当てた作品作り、普遍的テーマを持つ現代性のある舞台創造に、首都圏で活躍する演劇人や文化人の賛同者が多い。ジェームス三木、妹尾河童、大関弘政、中村哮夫、朝倉摂、甲斐正人、齋藤雅文、栗山民也、内館牧子など一流の演劇人文化人が作品創造スタッフとして関わっている。また彼らとの交流により、自社スタッフの育成を行い、舞台創造のレベルアップにつながっている。

多様な人材をつなぐコーディネーター的人材

わらび座では地方における文化を中心とした地域振興への視点を持つ是永氏のような人材が、街づくりを行う人々とのネットワークを構築し、取組を行っている。
また仙北市はまちづくり活動が盛んな地域であり、角館地区の観光協会理事の安藤大輔氏が「想 nic Art」などのイベントを企画・運営に取り組んでいる。「想 nic Art」は過去に２回開催されているが、2011 年から「蔵とアートをめぐるネオ・クラシック カクノダテ」を秋田公立美術工芸短期大学と連携して開催している。
わらび座のキーパーソンと地域のキーパーソンが互いに連携し、協力しながら取組を進めることで、Win-Win の関係を構築している。

■ 文化芸術を支える住民層

よそ者に活動の場を与えた住民

原氏らの劇団員が田沢湖地域で活動を始めたとき、一部の住民が米や味噌などの生活必需品を差し入れし、生活をバックアップするとともに、よそ者の集団に対して倉庫を貸し、活動の拠点を提供した。
また地域の複数の学校が、劇団の公演活動に対して対価を支払う等、事業ベースで劇団活動を行うきっかけを与えた。
また仙北市は、写真業などの創造的職種に従事する人が極めて多く、創造的な活動を支える住民層が厚いことがうかがえる。

◆コミュニケーションの場

■ 街のにぎわい

人的交流が盛んな城下町の歴史

角館地区は城下町であり、元来、外部との人的交流が盛んな地域であった。現在でも観光客を対象に、地域のまちづくり団体がボランティアで街並みを案内するなど、来訪者をもてなすための地域発の取組が行われている。
また最近では、地域内外のアーティストが歴史的街区で作品を展示するプロジェクトが開催される等、地域外の創造的な人材と積極的に関わりをもつ、オープンな土壌が形成されている。

●角館の歴史的街並み

17 世紀初頭から続く角館の歴史的街並みは、市内随一の観光名所であると同時に、歴史的な建物に現在も住民が居住しているという点で全国的にも珍しい街並みを形成している。地理的にも、三方を山々に囲まれ、西は桧木内川、南は玉川に沿った地形の角館は、城下町を形成するのに適した場所であった。

◆創造的活動の支援環境

■ 行政の取組

■ 企業の取組

■ 大学等の取組

現状への強い危機感に基づく協力体制の構築

わらび座だけでは、あるいは地域だけでは立ち行かなくなるという強い危機意識が「運命共同体」というべき地域内外の主体の連携に結び付いている。
仙北市は、今後のまちづくりへの文化の重要度を強く認識するとともに、わらび座のキーパーソンと連携して国の補助事業に積極的に応募し、採択されている。
また、約 100 社にのぼる地域の企業が広告協賛の形でわらび座の活動を支援しており、地域ぐるみの応援体制が築かれている。

●国内外で評価の高い田沢湖ビール

田沢湖ビールは、酵母を一切ろ過せずに作った、生を越えた生きたビールである。
2008 年秋には秋田県立大学と共同開発し 100%秋田県産の「あきた麦酒恵」を製造。水や酵母はもちろん、モルトにも秋田県産のものを用いる等、地元産にこだわった製品づくりを行っている。
また、創業当時から製造している田沢湖ビール「アルト」イギリスで開催されたビールの世界大会＜ワールド・ビア・アワード 2011＞の世界選考でベスト・ビールの評価を獲得するなど、高い品質を誇っている。

（出典：わらび座ＨＰ）

Point　アシュランドをモデルにしたたざわこ芸術村の運営方針

たざわこ芸術村は、アメリカのアシュランドという小さい町の劇場をモデルにしています。アシュランドではシェイクスピア演劇を中心に、ブロードウェイ以外ではもっとも集客力のある舞台芸術フェスティバルを行っており、地域との連携に力を入れて、滞在型のリゾート隣接型の劇場を運営している点に大きな特徴があります。
人口や経済規模が小さい仙北市では、一部のコアな演劇ファンに向けた舞台づくりをやっていても絶対に立ち行かなくなるので、地域や行政、地元企業と「運命共同体」をつくりながら劇団運営、地域の文化振興にあたっています。　（是永氏ヒアリング）

■ 活動の場

活動拠点としてのたざわこ芸術村の存在

たざわこ芸術村という活動拠点の存在は、仙北市で創造的人材が活動・集積するうえでの必須条件になっており、現在では、創造的人材を中心に約 350 名の雇用を地域で創出する、仙北市の一大産業となっている。
また、たざわこ芸術村内のわらび劇場は、客席よりも広い舞台空間を擁するレベルの高い劇場であり、中央の演劇人からも評価の高い上演空間になっている。

●わらび劇場

たざわこ芸術村の中心「わらび劇場」は、1974 年に全国 800 万人の市民支援によって完成した客席数 710 席のパブリックシアターである。
ここでは、受け継がれてきた日本の伝統芸能や民謡を現代感覚で表現した、躍動感溢れるわらび座のオリジナル作品を定期的に上演している。
また、地域の劇場として、作品制作・上演、ワークショップ、貸館事業など、幅広い活動を展開している。

（出典：わらび座ＨＰ）

◆利便性・安心感

■ 交通・通信の利便性

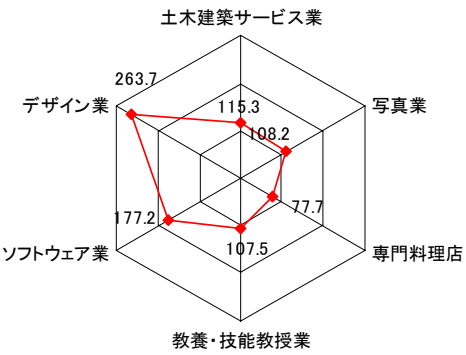
たざわこ芸術村の交通の要衝への立地

たざわこ芸術村は、秋田県内の交通上の要衝に立地しており、県内各地域から人が集まりやすい環境にある。そのため、学校関係者の会議など、秋田県全域から人が集まる会議やイベントの拠点となっている。
また、わらび座ではデジタル・アート・ファクトリー部門を持ち、「３次元デジタル舞踊符」の開発やインターネットを活用したコミュニティ創造に取り組むなど、デジタル技術を活用した新しい芸術の創造を目指しているが、地域にいち早くインターネット環境が整っていたことは、新たな活動の可能性を開くことにつながった。

新潟県　越後妻有

（十日町市・津南町）

都市の基本データ※1

人口※2	十日町市：58,911 人 津南町　：10,881 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合＊6
高齢化率※2	十日町市：32.1% 津南町　：37.3%	
合計特殊出生率※3	十日町市：1.58%※2	
人口の社会増減率※2※4	十日町市：-1.73% 津南町：-1.94%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	十日町市：5.3% 津南町：5.2%	
交通	＜地域へのアクセス（十日町市）＞ 東京から上越新幹線で越後湯沢駅、ほくほく線経由で約 1 時間 50 分 ＜地域へのアクセス（津南町）＞ 東京から上越新幹線で越後湯沢駅、越後交通バス経由で約 2 時間 30 分	

気候条件＊7	主な地域資源
日本海型気象区分に属し、四季折々に季節感あふれる様態を示している。毎年の平均積雪は 2m を超え、全国有数の豪雪地帯となっており、1 年の３分の１以上が降積雪期間となり、この気象条件が、独特の生活文化の形成や経済活動などに大きく影響している。	・松苧神社（十日町市） ・松之山街道（上杉軍道）（十日町市） ・清津峡（十日町市） ・秋山郷（津南町） ・温泉郷（十日町市、津南町） ・魚沼産コシヒカリ（十日町市、津南町） など

■ 地域における創造的な取組の事例

●大地の芸術祭～越後妻有アートトリエンナーレ～

○十日町石彫シンポジウム

○十日町雪まつり

など

※1　十日町市、津南町の値
※2　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※3　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※4　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※5　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※6　平成２１年経済センサス（十日町市の値）
※7　十日町市ＨＰ、津南町 HP

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆大地の芸術祭～越後妻有アートトリエンナーレ～

■ 取組の概要

●取組のテーマ

「人間は自然に内包される」を基本理念に、地域に内在する様々な価値を、アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め、世界に発信し、地域再生の道筋を築いていくことを目指す。活動成果の発表の場として、３年に１回、里山を舞台とする世界最大級の国際芸術祭「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が開催されている。

●取組の内容

◇里山におけるアート作品展示

・越後妻有地域の山と川、棚田と美しい集落が点在する約 760 ㎢の広大な地域に、約 200 の作品が常設されている。

・作品を一か所に集中して展示せず、200 以上の集落をベースに点在させることで、地域間の交流人口の増加を促すとともに、現代の合理化・効率化の対極として、徹底的な非効率化を試みている。

◇空家・廃校プロジェクト

・過疎化や地震によって地域に増えた空家、廃校となった校舎を美術館やギャラリー、レストラン、宿泊施設として再生し、集落の拠り所、働く場、来訪者との交流拠点として活用している。

・空家や廃校をアート作品として再生することで、地域の景観を維持し、記憶と知恵を未来に継承する試みが行われており、2009 年の第４回展では、13 の廃校と 50 を超える民家を活用。都市に住む個人や学校、文化機関、企業からオーナーを募り、会期後も作品、宿泊施設、美術館として維持・活用している。

◇地域・世代・ジャンルを超えた協働

・首都圏を中心とする地域外の人々が大地の芸術祭サポーター「こへび隊」として参画。芸術祭の運営、日々の作品メンテナンス、ツアーのガイド、除雪作業や農作業など、様々な活動をサポートしている。発足当初は美術系大学の若者が中心だったが、回を重ねるごとにネットワークを広げ、現在では、幅広い年齢層・職種で構成されている。

・アーティストやサポーターたちが中心となり、地震や豪雪からの復興支援活動や雪堀ボランティアを行う「大地の手伝い」を展開している。

取組のキーパーソン NPO法人越後妻有里山協働機構 事務局長 **関口　正洋　氏** 	◇ **主な経歴** ・ 大学卒業後、民間企業でリース、保険、証券などの営業を行う。 ・ 1999 年、アートフロントギャラリー入社。第１回大地の芸術祭のスタッフとして、大地の芸術祭サポーター「こへび隊」との地域訪問、イベントの企画運営を行う。 ・ 2003 年、まつだい「農舞台」のオープンとともに常駐スタッフとして企画展、イベント、棚田の保全、空家プロジェクトなどの企画運営に関わる。 ・ 2007 年４月より NPO 法人越後妻有里山協働機構事務局長をつとめる。 ◇ **取組に参加したきっかけ** ・ 民間企業勤務時代に大規模な金融破綻を経験。管理的で勝ち負けで判断される息苦しい社会に疑問を感じていたところ、大地の芸術祭総合ディレクター北川フラム氏と出会う。 ・ 北川氏の全く違った価値観（ものさし）で物事を考える新鮮さに触れ、「面白そう」という一心で、大地の芸術祭に関わるようになる。

■ きっかけ～取組の経緯

●平成の大合併を見据えた「ニューにいがた里創プラン」の策定

・1994 年、新潟県が「平成の大合併」を見据え、県内の広域行政圏で実施する地域活性化施策に対して支援する「ニューにいがた里創プラン」を策定。当時の十日町広域行政圏（十日町市・川西町・中里村・松代町・松之山町・津南町）が第１号の認定を受ける。

・1995 年、新潟県地域政策課が、北川フラム氏が手掛けた「ファーレ立川」におけるパブリックアートを活用した再開発事業に着目。北川氏にプラン策定に向けたワーキングチームへの参画を依頼する。

・1996 年、北川氏を中心に議論が進められ、アートを活用した地域活性化施策をまとめた「越後妻有アートネックレス整備構想」を策定。４つのプロジェクト（①写真と言葉による「越後妻有８万人のステキ発見」、②広域を花でつなぐ「花の道」、③各地域の特色を生かした拠点施設づくりを行う「ステージ整備事業」、④３年に一度の「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」）の実施が決まる。

●「越後妻有アートネックレス整備構想」の策定と地元の猛反発

・大地の芸術祭開催に向けた各地域、団体等に対する説明会が開始されたものの、アートを活用したまちづくりの具体例が少ないこと、現代美術に対する偏見などが要因となり、各地で反発が相次ぐ。議会の承認も得られず、1999 年に予定されていた大地の芸術祭の開催が延期となる。

●「批判と無視」から地域住民の誇る協働の芸術祭へ

・2000 年６月、大地の芸術祭開催の約１か月前に議会の承認を得て、同７月に「第１回大地の芸術祭」を開催。地域住民の参画は一部にとどまるが、多方面からの反発や批判にさらされながらも、予想を大きく上回る 16 万人を超える来訪者を集める。

・第１回の成功により回を重ねるごとに参加集落数が増加。2004 年の新潟県中越地震に対するアーティストやこへび隊による復興支援活動なども高く評価され、住民とアーティ

スト、サポーターとの協働による作品制作、運営が進み、来訪者に対するおもてなしの機運が高まってきている。

■ 取組の成果

●交流人口の増加

・アートを道しるべとして里山を巡る新鮮な体験は口コミを呼び、2000 年の初回開催から記録的な来訪者を集客。その後も 20 代～30 代の若者層を中心に、開催を重ねるごとに来訪者数を増やし続け、これまでに累計 109 万人が来訪し、多くのリピーターを生み出している。

・作品が約 760 ㎢にわたる越後妻有各地に分散して設置されていることから、地域内の回遊が進み、旧 6 市町間における交流人口の増加が図られている。

・地域外の幅広い年齢層から構成されるサポート組織「こへび隊」が地域住民と積極的な交流を図っており、こへび隊やその出身者が越後妻有地域に定住する例も見られる。

●地域コミュニティの活性化

・多くの作品で地域住民とアーティストによる協働作業が行われ、ワークショップや交流会などの多様なアートイベントを通して、芸術祭に関わった集落と来訪者、アーティスト、こへび隊などのサポーターとの間に、単発的ではない継続的な交流が芽生えている。

・参加集落が回を重ねるごとに増加している。地域の伝統行事の復活、神輿の共同制作など、地域の伝統文化に着目した取組もはじまり、地域住民のまちづくりに対する意識を向上させるなど、地域コミュニティ活性化の起爆剤となっている。

●越後妻有の知名度向上（情報発信）

・それまで例のなかったアートによる地域活性化の取組が大きな話題を呼び、開催期間を通じて幅広いジャンルのメディアに報じられたことにより、十日町市や津南町の知名度が一気に向上した。

・アートを通じた地域住民とアーティスト、サポーター同士の協働による取組が、新しい地域づくりのモデルとして、国内外で高く評価されている。

●経済波及効果

・作品鑑賞のために地域内を巡る仕組みが効果を発揮し、地域内に新たな交流人口が生まれ、旅館、飲食店、物産店などを中心に売上が向上。関連イベントやグッズ販売も好調であり、大地の芸術祭が地元経済に大きな波及効果を生み出すとともに雇用創出にも寄与している。

■　来訪者数・参加集落・作品数の推移

開催年	来訪者数	参加集落	会期中作品数
2000 年（平成 12 年）	162,800 人	28 集落	146 作品
2003 年（平成 15 年）	205,100 人	38 集落	224 作品
2006 年（平成 18 年）	348,997 人	67 集落	329 作品
2009 年（平成 21 年）	375,311 人	92 集落	365 作品

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然環境

四季を感じさせる美しい棚田と豪雪

越後妻有地域は、日本有数の豪雪地帯であるとともに、日本の原風景とも言える豊かな自然に包まれた美しい里山が残されている地域である。アーティストは、里山に流れるゆるやかな時間軸のなかで、美しい自然を活かした「この場所でしか成り立たない作品」を創作している。

●四季折々の姿を見せる美しい棚田

山間地のため、険しい斜面に面積の小さな棚田を展開せざるを得ない。だが、四季の移り変わりに応じて様々な美しい風景を映し出す棚田は、多くの来訪者を惹きつけている。

●特別豪雪地帯

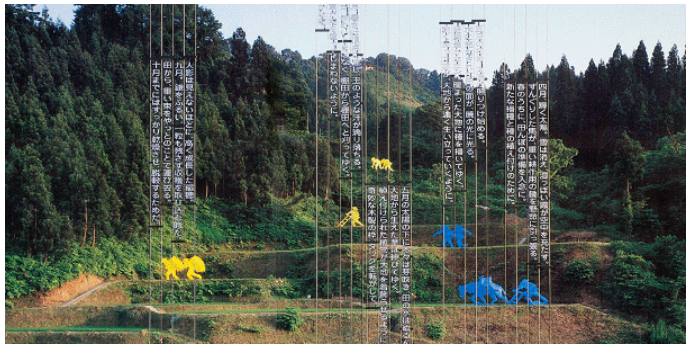
冬の気候は厳しく、多い年で 3～4m の積雪を記録する日本有数の豪雪地帯である。１年の３分の１以上が降積雪期間となり、この気象条件が、独特の生活文化の形成や経済活動などに大きく影響している。

■ 文化資源

特有の自然環境が生み出した独特の生活文化

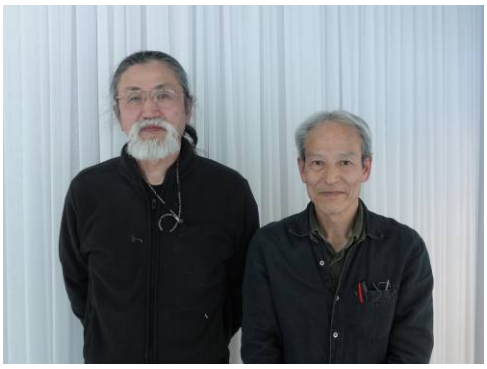
越後妻有地域は、１年の３分の１以上が降積雪期間という全国有数の豪雪地帯であり、平地の少ない奥深い山間地域である。越後妻有の住民たちは、その厳しい自然や都市文化から断絶した環境を有りのまま受け入れ、独特の生活文化を創り出すことで数々の苦境を乗り越えてきた。

棚田や瀬替え、冬の間日々繰り返される除雪作業など、特有の生活文化や人々の営みに触れたアーティストたちに、住民たちへの尊敬の念を抱かせることとなり、その心情を表出した数々のアート作品も誕生している。



「棚田」 イリヤ＆エミリア・カバコフ
Photo by: ANZAÏ

Point この場所でしか成立しない自然を活かした作品づくり



堀川紀夫氏（左）と前山忠氏（右）

前山 忠 氏
新潟県中頚城郡三和村に生まれる。
新潟大学教育学部芸能科絵画科卒業後、1967 年に新潟現代美術家集団ＧＵＮを結成。

堀川紀夫 氏
新潟県中頚城郡清里村に生まれる。
新潟大学卒業・上越教育大学大学院修了後、1967 年に新潟現代美術家集団ＧＵＮ結成に参加。

■前山 忠 氏

アトリエで作ったものをもってくるのではなく、現場で発想し、その場でしか成立しないものを作品にしています。作品の主役は風景や空気、人やつながりなど、金銭に変えられないものばかり。いかに風景や場を新鮮な出会いの場として出現させ得るかを考えるようになりました。住んでいる人たちにとっては必ずしも資源ではない、逆にやっかいものだったりする自然や廃屋などに新たな光を当て、その価値を再発見することは、文化的にも非常に大きな意味があると感じています。

■堀川 紀夫 氏

大地の芸術祭に関わるようになって発想の転換が起こりました。今までの筋書きとは違う文脈でアートのあり方を考えるようになり、作品のコンセプトも変わってきました。大地と関わる意味を自分なりに組み立て直していく作業を行うことで新しい展開で作品を構想することができ、「これで自分自身のアートの寿命もつながった」という気持ちになりました。今ではアーティストだけの自己満足ではやりたくないと思うようになっており、嫌われがちな雪を利用してそりを題材にした作品をつくり、地元の人を巻き込んだイベントを運営するなど、住民参加型のワークショップを通じて地域と芸術祭を繋いでいます。

美しい里山の風景を形成する歴史漂う廃校や空家

越後妻有には、過疎高齢化や 2004 年の中越大震災を契機に増加した空家や廃校が地域に点在している。これらの空家や廃校は、懐かしい日本の風景やそこで暮らした人々の生活を感じさせるとともに、美しい里山を形成する重要な要素となっており、越後妻有を訪れたアーティストの心を惹きつけている。
これらの空家や廃校は、大地の芸術祭を通じ、アーティストたちの手によって、人々が集う交流拠点、宿泊施設、住居として再生され、新たな地域資源として活用されている。

「絵本と木の実の美術館」 田島征三
Photo by: Takenori Miyamoto + Hiromi Seno

「夢の家」 マリーナ・アブラモヴィッチ
Photo by: ANZAÏ

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

求心力のあるキーパーソンと担当者の情熱

北川フラム氏は、2,000 回を超える地元や行政に対する説明会に出席し、根気よく大地の芸術祭の開催に理解を求め続け、また、開催決定後も、アーティストや作品展示場所の選定、地元調整などを精力的に進めるなど、その強力な求心力で、大地の芸術祭を実現させた。
その北川氏を大地の芸術祭に参画させるきっかけをつくったのが、新潟県職員の渡辺斉氏である。北川氏は著書『大地の芸術祭：ディレクターズカット』のなかで、渡辺氏を「情熱と夢のある人」と評し、「彼がいなかったら大地の芸術祭はなかった」とその功績を称えている。渡辺氏の夢のあるビジョンと情熱が、北川氏を芸術祭開催へと駆り立てたと言える。
また、外部から来たコーディネーター人材が熱心に地域住民やアーティストに働きかけた結果、彼らの創作活動の幅が広がったり、外部人材と地域をつなぐ役割を担ったりする等、地域の芸術家を取組におけるクリエイティブエンジンとして変貌させることに成功した。

■ 文化芸術を支える住民層

地域住民の深い地域愛と真摯な姿勢

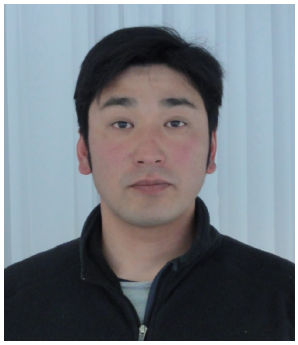
棚田や空家など、他者の土地や建物に作品を制作・展示するという画期的な手法は、その是否を巡って各集落において物議を醸し出し、大きな議論や反発を生んだ。
だが、祖先から受け継いだ伝統文化や土地を守ろうとする地域住民の真摯な対応は、アー

ティストや「こへび隊」たちの心を打ち、地域住民と向き合う姿勢を生み出すきっかけとなった。
地域住民とアーティスト、スタッフの本音での話し合い、そこから生まれた協働の取組が、越後妻有でしか見られない、多くの作品を誕生させている。

地域住民のさりげないおもてなしの心

越後妻有には、道に面した敷地に花を植える習慣がある。この習慣は、雪下ろしの際に隣地との境界に塀を建てられない、地域住民の信仰心が篤く仏壇に供える供花を切らしたくない、という越後妻有ならではの自然環境や文化から生まれたものであり、行きかう旅人を花々でもてなす意味も込められている。北川フラム氏は、これを「径庭」と名付け、越後妻有に好印象を持った理由として挙げており、大地の芸術祭の準備が難航した際にも花々を見て励まされたと語っている。

Point **真剣に怒られたことが、地域に住むきっかけに**



竹中　想 氏（ＮＰＯ越後妻有里山協働機構スタッフ）
1980 年 東京生まれ。2008 年から「こへび隊」として芸術祭スタッフとして参加。越後妻有の地域文化に惹かれ、2009 年から現地に住み始め、2010 年からは集落に住まいを移し、生活している。

「芸術関係の手伝いができる」と思い、興味本位で大地の芸術祭に「こへび隊」として参加しました。作品制作や管理の作業は、草刈りなど農作業に近い仕事も多かったのですが、それがすごく面白く、「まつだい棚田バンク」などに参加するようになりました。まさか農作業に興味を持つことになるとは、自分でも思ってもみませんでした。
そんなある日、稲刈りの作業中、地元の人にすごく怒られたのですが、それが自分にとってはすごく衝撃でした。「こんなに怒るということは、何か深い意味があるのではないか？」と感じ、もっと地域のことを知りたいと思うようになりました。
都会の当たり障りのない人付き合いとは違い、越後妻有では、怒るときは真剣に怒ってくれるし、もてなしてくれるときは、すごくもてなしてくれる。そのストレートな反応が、都会では体験できない大きな魅力となっています。

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

若者を中心としたサポーター組織

大都市圏の学生を含む若者たちが、大地の芸術祭のサポーター「こへび隊」として作品のメンテナンスや観光客のガイドなど、運営に参加している。「都会から来た、何をやっているのかわからない」若者たちは、最初は地域の住民に受け入れられるのに苦労したこともあったが、徐々に地域にとけこんでいった。
また、口コミを通じて新たなサポーター希望者を引き込んだり、「こへび隊」の出身者が後に大地の芸術祭を運営するＮＰＯに就職したりするなど、外部の創造的な人材が地域に根付くきっかけにもなっている。

●こへび隊
こへび隊は「世代・ジャンル・地域を越えた」集まりであり、規則・リーダーのない自主的なサポーター組織である。メンバーは首都圏を中心に、大学生から 80 代までの幅広い世代で構成されている。美術や建築に限らない、様々な専門分野の学生や、作家やスタッフの家族など、多様な人々が参加している。
また、取組当初は若手の芸術系の学生の参加者が多かったこともあり、現在第一線で活動している芸術家には、こへび隊のＯＢもいる。

（出典：こへび隊ＨＰ）

Point　アーティストと地域住民との橋渡し役を担った「こへび隊」

当初、芸術祭はなかなか地元住民の方の理解を得ることができませんでした。その現状を打開するため結成されたのが、首都圏の美術系学生を中心とする「こへび隊」です。
「こへび隊」は、妻有地域を全戸訪問する活動から始めましたが、地域住民の方の反応はとても冷たいものでした。「有名アーティストとまちづくりができることは、地域住民にとっても喜ばしいことに違いない」と考えていた「こへび隊」にとって、その反応は大変ショックなことでした。
しかし、それがきっかけとなり、「こへび隊」自身が「自分たちも学ばねば」という意識を持つようになり、自分たちの活動を説明するだけではなく、地元の方の事情や心情を理解しようと心掛けるようになりました。その姿勢がやがて地元の住民の方に伝わり、「話を聞いてやろう」ということになり、今では積極的に作品制作に関わっていただけるようになっています。　（関口氏ヒアリング）

■ 宿泊施設、レストラン

現代アートを利用した「ここにしかない」宿泊施設

広大な地域にアート作品が点在する大地の芸術祭の里では、じっくり作品を鑑賞するには宿泊・滞在しながら作品めぐりをする必要がある。
越後妻有は、宿泊施設の総数はそれほど多くないものの、地域の民家や廃校を活用した現代アートのなかには宿泊可能な作品も複数存在しており、来訪者はアートを体験しつつ滞在型観光を行うことができる。

●「光の館」（ジェームズ・タレル）
光のアーティスト、ジェームズ・タレルの作品世界を宿泊しながら体感できる、世界で唯一の施設。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』に着想を得て創作された光の館では、日本家屋の光に、自らが制作した光の作品が融合している。光の館の他にも「三省ハウス」「かたくりの宿」「脱皮する家」「夢の家」など、地域の建物を活用した宿泊可能なアート作品は複数存在。３年に一度の「大地の芸術祭」開催期間外も宿泊可能。

（出典：大地の芸術祭の里ＨＰ）

◆創造的活動の支援環境

■ 行政の取組

大合併時代を見据えた広域連携文化事業の予算化

平成の大合併を見据え、新潟県は県内の複数の市町村に対して支援を行う計画（ニューにいがた里創プラン）を策定し、自治体の枠を超えて広域的に連携するきっかけをつくった。
また、地域活性化の取組における文化の重要性に着眼し、北川フラム氏等のキーパーソンを大都市圏から招へいするとともに、アートを活用した地域活性化施策をまとめた「越後妻有アートネックレス整備構想」を策定し、予算化した。

■ 企業の取組

企業メセナの参画による民間主導の取組

当初は新潟県などが予算を出し、行政主導型のイベントが行われていたが、取組が軌道にのるに従って、徐々に行政の役割・予算は縮減されている。
その後は、総合プロデューサーとして瀬戸内海等で企業メセナに取り組む株式会社ベネッセコーポレーションの福武總一郎氏が関与したり、様々な企業が協賛をすることで、行政の予算縮小後も取組を継続的に開催することに成功している。
また、より多様な団体から支援を得るために、都市に住む個人や学校、文化機関、企業から空家のオーナーを募り、大地の芸術祭開催年以外も、地域の拠点として活用できる仕組みの構築等の工夫をしている。

◆利便性・安心感

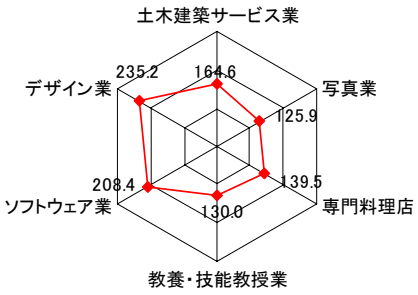
■ 交通・通信の利便性

「ほくほく線」の開通による利便性の向上

昔の越後妻有は「陸の孤島」といっても過言ではないほどの交通不便な地域であったが、1997 年に北越急行ほくほく線が開通したことにより、交通利便性が著しく向上した。
現在では、東京や大阪からでも日帰り可能になるほど時間距離が短縮されており、大都市圏からの集客力の向上に大きく寄与している。

石川県　金沢市

都市の基本データ※1

人口※2	462,361 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合＊6
高齢化率※2	20.9%	
合計特殊出生率※3	1.31	
人口の社会増減率※2※4	0.4%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	7.6%	
交通	＜地域へのアクセス＞ 羽田空港から飛行機で小松空港まで約１時間 小松空港からバス（特急）を利用して、金沢駅まで約 40 分	

気候条件※7	主な地域資源
日本海側気候で、「弁当忘れても傘忘れるな」と言われるくらい雨の多い地域。春や夏は好天の日が多い反面、冬は曇りや雨の日が多く、積雪もある。雪化粧した兼六園や長町武家屋敷跡などの風情は、金沢ならではのもの。また、高い湿度は伝統工芸である漆塗りや金箔製造に適している。	・金沢城 ・兼六園 ・長町武家屋敷跡 ・茶屋街（東山ひがし、主計町） ・金沢 21 世紀美術館 ・鈴木大拙館 など

■ 地域における創造的な取組の事例

●eAT KANAZAWA(イート金沢）

○景観のまちづくり

○芸術・アートを通じたまちづくり

○フードピア金沢

など

※１　金沢市の値
※２　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※３　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※４　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成 22 年）
※５　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※６　平成２１年経済センサス
※７　金沢市ＨＰ

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆eAT KANAZAWA(イート金沢)

■ 取組の概要

●取組のテーマ

1997 年の開催以来、国内外のクリエイターや学生、ＩＴ関連の仕事に携る人たちの相互交流の場として開かれる、金沢発エレクトロニックアートの表現者の祭典。

金沢の都市文化の魅力を活かし、

●金沢を舞台とする、アーティストの国際交流の推進・発展

●子どもの新しい創造性の開発

●都市間の空間的距離をこえた、知的生産の可能性追求

●ハンディキャップのない、ネットワークを活用した生きがい、働く場の創出

を目指している。

グラフィックデザイン、インダストリアルデザイン、マルチメディアコンテンツ、映画、ゲーム、建築、音楽、教育など幅広いジャンルから、オリジナリティあふれるテーマとプロデューサーを毎年選定し、「フォーラム」「アワード」「セミナー」「夜塾」等のプログラムが開催される。「eAT」は「electronic art talent」の略。金沢を「食わす」=「eat」の意味合いも持たせている。

●取組の内容

イベントは毎年、１月下旬に２日間、開催される。

◇ファーラム・パフォーマンス

・テーマに沿った最新アートパフォーマンスを発表

◇アワード表彰

・名人賞表彰、基調講演、アワード受賞者表彰

・エレクトロニックアートに大きな貢献をした名人賞受賞者の記念講演等

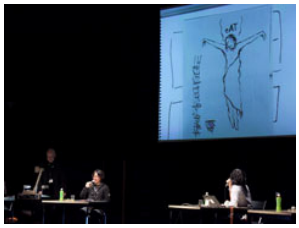
◇セミナー(有料)

・様々なサブテーマのセミナーを開催、著名講師陣がパネル形式でライブな議論を交わす

◇夜塾(有料)

・全体討論会、プレゼント抽選、グループ討論会など、ゲスト講師と膝を交え、自由に語り合う交流の場

アワード風景



セミナー風景

夜塾記念写真

（出典：eAT KANAZAWA　HP）

取組のキーパーソン **イート金沢実行委員会** **制作担当** **吉田　一彦　氏**	**◇　主な経歴** ・　金沢市出身。学生時代を京都で過ごす。 ・　その後、金沢に帰郷し、吉田一彦企画室を設立。 **◇　取組に参加したきっかけ** ・　1985 年から開催されている「フードピア金沢」への参加をきっかけに、「eAT KANAZAWA」に参画
イート金沢実行委員会 **委員** **宮田　人司　氏** 	**◇　主な経歴** ・　ミュージシャンとして活動中、マルチメディア作品制作にも携わる。後にネットワークエンタテインメントをコンセプトに起業し、ISP 事業及びコンテンツ企画制作を手掛け、ネットゲームや着メロをはじめとする数々のコンテンツを世に出す。 ・　グラフィックデザインやフォトグラフィック、CG アニメーション監督などもこなすクリエイター。 （出典：金沢 21 世紀美術館 HP） **◇　取組に参加したきっかけ** ・　2001 年からイート金沢とかかわりを持ち、第 9 回のプロデューサーをつとめる。 ・　その後、金沢へ移住し、石川県金沢市に株式会社センドを設立

■ きっかけ～取組の経緯

●冬のイベント

- **金沢は加賀友禅、金箔工芸などに代表されるようにクラフト・ものづくりの街である。**
- **金沢のものづくり産業を基盤に創造産業をつくろうと、約 15 年前に注目された分野の一つが「ＩＴ」であった。**
- **また、金沢で 1985 年から、冬の観光誘客のイベントとして、食のイベント「フードピア金沢」を開催していた。**
- **この「フードピア金沢」から、よりテーマを絞った「ＩＴ」による冬のコアイベントを立ち上げようと、企画されたのが「イート金沢」である。**
- **イベントをマンネリ化させないよう、総合プロデューサーは毎年、交代制としており、歴代プロデューサーには、中島信也氏など、大物クリエイターが名を連ねている。**

●創造都市・金沢を代表するイベントとして発展

- **イート金沢は 1997 年に第１回が開催され、今年（2012 年）で 16 年目となる。**
- **行政の継続的な支援のもと、吉田氏等の民間のキーマンがクリエイターとの人的ネットワークを形成することにより、毎回、豪華なゲスト陣が集まるイベントとして定着している。**
- **豪華なゲスト陣や密度の高い企画内容が話題を呼び、イベントのチケットは、毎年、斡旋なしで完売するなど、全国から多くのクリエイターが集まる。**
- **同時に進められてきた、金沢市民芸術村や金沢 21 世紀美術館などの取組とあわせて、現在では、創造都市・金沢を代表する取組の１つとなっている。**

■ 取組の成果

●才能ある全国のクリエイターとの『人的』ネットワーク形成

・イート金沢の取組を通じて、才能ある全国のクリエイターが金沢で『人的』ネットワークを形成している（金沢ファンを増やしている）。

・この人的ネットワークが、金沢のまちづくりやビジネスなど、様々な場面に活かされている。

●人材育成への寄与

・イート金沢の「アワード」を受賞したクリエイターがアニメーション会社を立ち上げたり、大学の講師として次世代の育成に取り組んだりするなどの動きがみられる。

・また中島氏や樋口氏など、イート金沢への参加がきっかけで、金沢の大学や専門学校で講座を持つようになったクリエイターもおり、金沢市のクリエイター人材の底上げにつながっている。

●地元産業とのコラボレーション

・加賀麩の不室屋、和菓子の柴舟小出等の地元企業とコラボレーション商品を開発する動きが生まれてきている。

●交流人口や移住者の増加

・イート金沢をきっかけに金沢の良さを知ってもらうことにより、金沢のリピーターを増やしており、イート金沢の開催期間以外にも効果を発揮している。

・また宮田氏のように、金沢に移住するクリエイターもみられるようになってきている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然環境

“素材”そのもののおいしさ

海も山も近い金沢は、その季節ならではの旬の味が豊富に揃う。春は山菜や祭り料理、夏は夏野菜を使った料理や金沢独特のどじょうのかば焼、秋は旨みを増した野菜や底引き網漁の解禁により豊富な種類が揃う魚介類、冬は日本海のブリやカニ、タラ、かぶら寿司など、素材そのものの旬の味が味わえる。
イート金沢では、招いたクリエイター達に、こうした豊かな食材でもてなすよう心がけている。食を通じて金沢の魅力を知ってもらうことで、創造的人材が「金沢ファン」となり、リピーターとなるきっかけとなっている。

●金沢の旬の食材を楽しめる「近江町市場」

近江町市場は、江戸時代に始まった歴史のある市場で、魚介、青果、精肉店、寿司屋、食堂など約 170 の店が軒を連ねる。金沢駅から徒歩 15 分程度とアクセスもよく、金沢市民の台所として親しまれている。その季節ごとの旬の食材が並び、観光客も気軽に買い物が楽しむことができる。

（C）金沢市

Point 金沢ならではの食の“素材”のうまさ

金沢にまた来たくなる理由の1つが、「食」でした。金沢では魚介類をはじめ、季節ごとの旬の料理を食べることができます。素材そのもののクオリティが高く、食の文化レベルが高いのが金沢の魅力です。　（宮田氏ヒアリング）

■ 文化資源

加賀百万石の歴史や文化が色濃く残る「奥の深い」まち

金沢は一向一揆の加賀国、のちに前田家百万石の城下として、明治以降は北陸の中枢都市として発展した。同じ北陸の富山や福井とは違い、金沢は戦災を免れており、城下町の歴史的遺構や長年継承されてきた伝統文化が今なお色濃く残っている。こうした歴史に裏づけされた金沢の「奥の深さ」が、クリエイターの宮田氏を金沢に移住させる魅力の一つとなった。

●金沢芸妓

ひがし・にし・主計町の三茶屋街では、金沢のまちの風情や細やかな心遣いを表現した芸妓の艶やかな芸が継承されており、現在も雅な金沢芸妓の「ほんものの芸」にふれることができる。

（C）金沢市

Point 金沢は奥深いまち

金沢は非常に奥が深く、掘りがいのあるまちです。探究心が旺盛なクリエイターには、非常に面白いまちだと思います。例えば、金沢の人は、「おいしい店がある」ということは教えてくれますが、店の名前や場所は教えてくれない。自分で掘って来いと言わんばかりです。しかし、自分で掘り出してこそ、そのまちの魅力が分かる。金沢の人々はまちの楽しみ方をわかっているのだと思います。また金沢では、それなりの方々に認められると、普通では知ることができない魅力に触れることができます。それを私は「奥座敷」と呼んでいますが、ここに足を踏み入れることができれば、金沢の楽しみはさらに増えるでしょう。　（宮田氏ヒアリング）

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

もてなしのこころ溢れる金沢のキーマンたちの存在

イート金沢の成功は、毎年、イベントのディレクターをつとめる著名なクリエイターもさることながら、吉田氏などの地域のキーマンによるところが大きい。キーマンが人的ネットワークを活用し、様々な著名クリエイターをイベントに招聘しているほか、彼らが中心となって、クリエイターに対するおもてなしを行っている。こうした彼らの丁寧なおもてなしやキャラクターが、参加したクリエイターを惹きつけている。また、新たな才能あるクリエイターを発掘し、ネットワークを築くのも彼らの仕事である。

Point 才能あるクリエイターと、いかに人的ネットワークをつくれるか

イート金沢で最も重要と考えているのが、才能あるクリエイターといかに人的ネットワークをつくれるかです。金を払わないと来てくれないようなネットワークでは継続しません。イベントの最初の年は、全ての人におもてなしをしようと心がけましたが、数が多すぎて無理でした。その反省から、現在では、まず本当に金沢に大切なクリエイターを重点的にもてなすようにしています。金沢の魅力を知ってもらうため、色々な店に連れて行き、もてなします。徹底的に飲んで、親交を深めます。著名なクリエイターが床で寝ているということもよくあります。こうした経験を通じて、金沢のファンになり、人的なネットワーク形成につながるのだと思います。我々が 16 年間、築いてきたクリエイターとのネットワークは、今ではものすごく広がっています。
こうしたもてなしやネットワークづくりは、行政には決してできません。また、広告代理店やイベント業者に委託してもできません。地域の有志が率先してやるからこそできるのです。
（吉田氏ヒアリング）

■ 文化芸術を支える住民層

金沢市は、専門的・技術的職業従事者の割合が 7.6%であり、地方圏の平均（6.2%）と比べて高い。なかでも、ソフトウェア業、デザイン業、土木建築サービス業などの創造的職種に従事する人が多く、創造的な活動を支える住民層が厚いことがうかがえる。

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

■ 宿泊施設、レストラン

北陸のおいしい料理ともてなしの宿

海にも山にも近い金沢には、和食はもちろん、フレンチやイタリアンの美味しい店も数多く存在し、全国から食通を集めている。また、もてなしの心溢れる宿も充実している。少し足を運ぶと温泉も存在する。「面白輪」のような地域内外の人々が交流できるコミュニケーションの場もある。こうした、じっくりとコミュニケーションを楽しめる店・宿・温泉等が、コミュニケーションを好むクリエイター等の交流を深める場となっている。
また、「大都市では基本的に同業種の交流が多いが、金沢では様々な業種の人と交流できるのが魅力」と宮田氏は語る。

●面白輪

（財）地域振興研究所の谷本亙氏が主催するサロン。1986 年６月以来、月１回のペースで開催され、異業種交流の場となっている。参加者は毎回 15～20 人で、金沢市内の飲食店で酒と料理を楽しむが、主役はあくまで「人」。初めて参加した人も場の雰囲気に馴染み、濃密なコミュニケーションの時間を過ごすことができる。

●イート金沢の「夜塾」

イート金沢の名物「夜塾」は、中心部から場所を移して、市内の有名な温泉地「湯涌温泉」の老舗旅館「かなや」で行われる。各界の著名なクリエイターの講師陣、一般参加者合わせて 150 余名が大宴会場で車座になり、夜どおしの議論を行う。遠くて帰れない（＝途中退席できない）環境が、逆に参加するクリエイターの魅力となっている。

■ 街のにぎわい

歩いて楽しめるコンパクトで美しいまち

中心部にコンパクトに都市機能が集積しているのが、金沢の魅力である。金沢では、市が「金沢市における美しい景観のまちづくりに関する条例」、「まちなか定住促進条例」、「歩けるまちづくり推進条例」、都市機能の無秩序な拡散を防止する「商業環境形成まちづくり条例」等を制定し、市民協働でコンパクトなまちづくりを積極的に進めている。また、中心部に金沢 21 世紀美術館や鈴木大拙館などを整備し、中心市街地の魅力向上を図っている。歩いて楽しめるコンパクトで美しい街が“街を楽しむ”ことを好む創造的人材の心を惹きつけている。

●金沢 21 世紀美術館

2004 年、金沢中心部に誕生した美術館。建物の斬新さは開館当初から話題を呼んだ。「まちに開かれた公園のような美術館」をコンセプトとし、誰もがいつでも立ち寄ることができる。館内は有料ゾーンと無料ゾーンに分かれており、無料ゾーンでは、建物と一体化した作品が鑑賞できる。日本のみならず、世界中から多くの人々が訪れる。

（C）金沢市

◆創造的活動の支援環境

■ 行政の取組

文化に理解の深い行政と経済界

イート金沢が 13 年間、活動を継続できた理由の一つとして行政の存在がある。山出保・前金沢市長が文化に造詣が深く、景観やクリエイティブ産業の振興を強く推し進めてきたこともあって、イート金沢の取組も途切れることなく続けることができた。また、市は、運営資金は出しながらも、企画については基本的に民間のキーマンに任せるというスタンスであったため、民間の自由な発想や幅広いネットワークを活用できた。これが、イート金沢がいわゆる行政主導になりがちな他のイベントと一線を画している点である。
また、経済界も直接ではないが、要所々々で必要な支援を行ってきた。このように、文化に理解が深い金沢の風土が、イート金沢を現在の姿にまで成長させたと言える。

■ 企業の取組

金沢は伝統的にクラフトのまちであり、現在でも職人気質のオンリーワン技術を持った企業が多い。「金沢に愛着を持つ企業が多く、金沢から本社を移す企業は少ないのでは」と吉田氏は語る。こうした地元を愛する職人気質の企業が、同様の気質を持つクリエイターの共感を呼び、コラボレーションを生み出している。

●コラボ和菓子「水晶花」

金沢の老舗の和菓子屋「柴舟小出」と著名クリエイター、明和電機・土佐信道氏とのコラボレーションによって生まれた、和菓子「水晶花」。金沢で販売されたほか、日本橋の三越本店等においても販売された。

■ 大学等の取組

金沢には、金沢大学、金沢工業大学※、金沢経済大学など、多くの大学が存在する。特にクリエイティブの分野で関連が深いのが、金沢美術工芸大学である。イート金沢が同大学の学生の良い刺激となっている。また、逆に同大学の OB がイート金沢に協力したり、参加したりするケースもある。このほか、イート金沢をきっかけにクリエイターの中島信也氏が金沢美術工芸大学の特別講義を持つなどの展開もみられる。

※金沢工業大学は正確には隣の野々市市に立地

●金沢美術工芸大学

日本でも有数の美大。人間国宝の前史雄氏（沈金）や中川衛氏（彫金）、「マリオブラザーズ」のキャラクターデザインを手掛けた宮本茂氏、スタジオジブリの「借りぐらしのアリエッティ」監督の米林宏昌氏等、多数のクリエイターを輩出している。

◆利便性・安心感

■ 交通・通信の利便性

大都市と「遠すぎず、近すぎない」、ほど良い距離感とネット環境

金沢から東京までは飛行機を使っても、乗り継ぎ時間を含めると２時間以上程度かかる。ＩＴ関係のクリエイターにとっては、インターネットを通じて仕事ができるため、時間的な距離は大きな問題にはならない。むしろ、自らが集中して仕事ができる環境を求める傾向がある。

このような中、大都市と「遠すぎず、近すぎない」、ほど良い距離感があり、ネット環境や豊かな生活環境がある金沢のような都市が、クリエイターに選択されている。

Point 大都市とのほど良い距離感とネット環境

一昔前までは、IT関係のクリエイターは東京に行かなければ仕事ができないと思っていました。それが、今ではネット環境さえあればどこでも仕事ができるようになりました。私を含め、東京を離れ、地方で仕事をするクリエイターは増えてきています。金沢に移住してきた後、1年は東京での打ち合わせが入っていましたが、2年目にはほとんどなくなりました。もちろん顔を突き合わせての打ち合わせは重要ですが、基本的なやりとりはインターネットを通じてできます。金沢では集中して作業できるのが魅力的です。

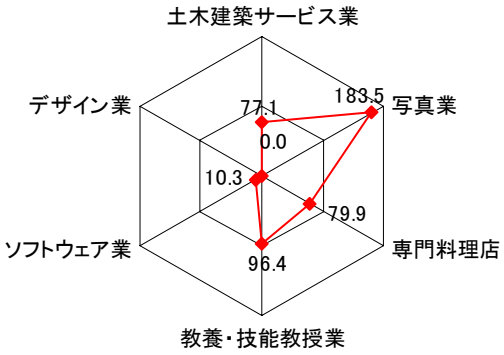
また、金沢では新鮮な情報が入ってこないと思われがちですが、東京と違い雑音となる情報がなく、整理された情報が入ってきます。情報発信に関しても、基本的にインターネットで行うので、東京と変わりません。情報の面で東京にハンディはないと考えています。物理的な距離はデメリットとしてあるかもしれませんが、北陸新幹線が開通することで、ある程度、解消すると考えています。

（宮田氏ヒアリング）

兵庫県　洲本市など

（淡路島）

都市の基本データ※1

		クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合※6
人口※2	47,254 人	
高齢化率※2	28.5%	
合計特殊出生率※3	1.56	
人口の社会増減率※2※4	-1.92%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	6.2%	
交通	＜地域へのアクセス（洲本市）＞ 神戸市から洲本市まで、高速バスで 80 分。 船では明石港ー岩屋港（淡路市内。淡路島で最も神戸市寄りにある）まで 13 分。島内の移動はバスまたはタクシー（鉄道はない）。	

気候条件※7	主な地域資源
◆淡路島 瀬戸内の温暖な気候風土を持ち、年平均気温 15.3℃、年平均降水量 1,457mm。 京阪神大都市圏に隣接しつつも、四方を穏やかな内海に囲まれ、海産物に恵まれ漁業が盛んである。また日差しが当たる時間が長く（年平均日照時間が 2,057 時間）、夏季に雨が少ないため、農耕に適した気候であり、野菜や米の栽培が盛ん。 島の真ん中は山地になっており、森林面積は島の総面積の 51.7%を占め、北東部と南部の山地急斜面は海岸まで迫る。	◆淡路島 ・農水畜産物（タマネギや鱧が有名。その他レタス、イチゴなどの果物、淡路ビーフや牛乳） ・淡路島の食資源を使った食品（牛丼、淡路島バーガーなど） ・淡路島の国生み神話（「古事記」の冒頭を飾る”国生み神話”の舞台・淡路島） ・廃校になった小学校や廃業した旅館など、条件次第で再利用可能な建築物 ◆洲本市 ・洲本温泉（宿泊施設が集積） ・洲本アルチザンスクエア（大正時代の赤レンガ倉庫を活用）

■ 地域における創造的な取組の事例

●NPO 淡路島アートセンターの取組（淡路島アートフェスティバル）

○パソナグループによる淡路島プロジェクト（ここから村プロジェクト）

○ノマド村

など

※1　洲本市の値
※2　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※3　全国平均は 1.31
　　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※4　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※5　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※6　平成２１年経済センサス
※7　兵庫県淡路県民局資料

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆NPO 淡路島アートセンターの取組（淡路島アートフェスティバル）・・・・・・・・・・

■ 取組の概要

●取組のテーマ

自分の視点を持ち、イメージを具体的にする手段こそ『アート』であると考え、アートに多くの人が触れることにより、『心の選択肢や考えの自由度を増して、淡路島での暮らしがより豊かになること』、また『淡路島の伝統を重んじながら、島民としてのアイデンティティを育むこと』を目標に、NPO 法人として身近なアートとの交流に取り組む。淡路島アートフェスティバルは、自然豊かな淡路島のフィールドを最大限に活用し、島民同士、島外からの来訪者などと交流するきっかけづくりとして、アートの祭りを毎年夏期に期間限定で行うものである。

●取組の内容

◇NPO 淡路島アートセンターの活動内容（事務局は洲本市に所在）

1. アートイベント企画・デザイン企画
2. アーティスト支援活動
   ・・・「淡路島アートフェスティバル」の運営による創作活動支援
   ・・・展覧会、交流会、アートプロジェクトの開催
3. 日の出カフェ運営（イベント時）
4. グッズ企画・制作・販売
5. 日の出亭リノベーションプロジェクト
   ・・・建物の修復支援
   ・・・上記に関する各種情報提供

◇淡路島アートフェスティバルの開催

・毎年テーマを設定し、島内外のアーティストがテーマに沿って創作活動を行う。島内全域にある協力先の店舗や事業所、神社仏閣等を会場として、アーティストの感性に任せた様々な展示、ワークショップ、パフォーマンスなどを実施する。

◆パソナグループによる淡路島プロジェクト

■ 取組の概要

●取組のテーマ

人材派遣会社大手の株式会社パソナグループは、ソーシャルソリューションカンパニーとして、様々な社会課題に新たな道筋を提案する取組を実行している。そのなかで、農業分野に着目し、後継者不足の農家と学校を卒業しても就職できない若者の現状を解決する具体的な手だてを検証している。淡路島においては、「農業」×「芸術」をテーマとしてプロジェクトを展開している。

●取組の内容

パソナグループが淡路島を活動拠点としたのは、そもそも、パソナグループの代表である南部氏が、淡路島の向かいに位置する兵庫県舞子の出身であったこと、また農業の質が高く、神戸市側との交通の利便性が良いという点があったが、そもそも半芸半農をテーマにしようと考えると農地の確保が重要となるが、一般に農地を貸与してくれるところが少ないなかで、淡路市が調整をしてくれたことが大きい。また日本全国から希望者を募る際、淡路島が南からも北からも真ん中に位置しており、集めやすいという背景もある。

◇「ここから村」プロジェクト

・音楽などの芸術活動を学校卒業後も続けていきたい若者を対象に、芸術をビジネスにするスキルを学び、農作業を行いながら自分が得意とする芸術活動によって地域活性化を目指す。淡路島（淡路市）に 2011 年４月に開設。

・「ここから村」では、ビジネス基礎を学ぶ研修や、本格的な農業研修のほか、芸術活動を通じた地域活性化や独立起業を支援するため、プロの芸術家による研修講座も実施。

・パソナグループ契約社員として採用し、１日４時間 45 分の就業で、月給 10 万円を支給。副業も認めており、１年間の契約を結ぶ。

◇その他の取組（チャレンジファーム）

・「６次産業人材」を育成する独立農業者支援プロジェクト」として、淡路市にて圃場を約 10ha 借りて展開。

・農作物の生産（多品種の大量生産）や観光農園・収穫体験などができるようにしている。飲食店や小売店等への販売のほか、WEB 販売や宅配便、パソナグループ社内販売など販路を開拓している。

・「ここから村」プロジェクトに参加しているアーティスト達は、ここの圃場で営農研修を受けている。

◆ノマド村

■ 取組の概要

●取組のテーマ

廃校になった小学校の校舎を転用し、アーティスト二人が住居兼アトリエとして活用。ノマド（遊牧民や移動民）と命名したのは、家・土地の所有や利益の蓄積を目的とせず、多様な人々がこの場を共有活用し、流動的に変化し続ける、開かれた場の創造を目指すことを意図して命名している。

●取組の内容

◇ノマド村

・写真作家として高い評価を得ている茂木綾子さんと、夫で映像作家のヴェルナー・ペンツェルさんが、日本での活動拠点として淡路島を選び、廃校となった小学校でアート活動を実践している。

・アートカフェを毎週土日に開設（冬期のみ休業）。

・国内外のアーティストによるアート作品の制作・展示の場として活用されているほか、ＮＰＯ淡路島アートセンターと連携したアートイベントなども開催されている。アートの種類は多様で、集客力の高い企画となっている。

※本事例集では、淡路島でのアートシーンをコーディネートしているＮＰＯ淡路島アートセンターの取組及び芸術家として「ノマド村」のアーティストを中心に取り上げる。

取組のキーパーソン

NPO 法人淡路島アートセンター理事長
中田　アユミ　氏（右）
と
NPO 法人淡路島アートセンター理事
やまぐち　くにこ　氏（左）

◇　主な経歴

・二人とも淡路島の出身

・やまぐちさんは島外の美術系大学に進学。大阪市内で就職したが、結婚を機に帰島。子どもの造形教室を運営しアートと暮らしについて模索しはじめ現在に至る。

・中田さんは、アーティストではないが海外留学経験があり、実務のマネジメントに優れている。

◇　取組に参加したきっかけ

・やまぐちさんは、大水害で一部が崩壊してしまった親族が所有していた空き家について、日頃関わりがあった造園職人や淡路景観園芸学校の教師、島内外の芸術家たちと話すなかで、アートの拠点として再利用することに行き着き、活動の場として提供した。

・これを契機に、翌 2005 年に NPO 淡路島アートセンターを立ち上げる。

・　中田さんはイベントの企画が大好きで、2005 年からボランティアとして活動に参加した。

■ きっかけ～取組の経緯

●2004 年の台風による大水害

・2004 年の大水害により、半壊状態の空き家が見つかる。この家がやまぐちさんの親族が所有している空き家と判明した。およそ築 80 年の木造２階建てで、戦前は「日の出亭」という料理屋であった。やまぐちさんは、撤去作業などで出会った島内外の芸術家や大工・造園の職人達と話をしているなかで、この空き家の魅力に気付き、2005 年に「日の出亭再生プロジェクト」を始動。

・また同年に、多くの人に表現や対話の機会を提供しようと、やまぐちさんと志を同じくするメンバーで特定非営利活動法人「ＮＰＯ淡路島アートセンター」を設立した。

●2005 年から淡路島アートフェスティバルを開催

・2004 年から、島内にある県立淡路景観園芸学校の竹田直樹准教授が中心となって、廃屋となっている伝統的な民家を表現活動の場として再生しようとする取組が始まっていた。日の出亭の再生にも力を貸している。

・こうして再生された空き家を舞台に、淡路島の魅力を伝えたいという思いから、現代芸術家らが作品展示やパフォーマンスを繰り広げる淡路島アートフェスティバルを開催した。

・2010 年度で６回を数える。出品作家は公募、あるいはアートセンターが交渉して選ぶ。ここでしかできないことをやりたいという思いから、淡路島の風土や文化に根差した作品であることを条件としている。

●様々なアートの企画・開催支援

・島民に日常的にアートに触れてもらいたいと、島内外のアーティストとともに、アートイベントを企画。場所の確保や広報活動、運営支援などきめ細かく対応している。

・日の出亭は、様々なアーティストに表現の場として提供し、これまでに 50 人以上のアーティストや学生、地元住民の方が関わっている。

取組のキーパーソン

芸術家

ノマド村

茂木　綾子　氏

ヴェルナー・ペンツェル　氏

◇　主な経歴

茂木綾子氏

・1969 年北海道生まれ。東京藝術大学デザイン科。

・2006 年よりスイスのラ・コルビエールに暮らし、同地にてジュパジュカンパニーを立ち上げ「Laboratoire Village Nomade」アートプロジェクトの企画、運営をつとめる。

・2009 年より淡路島の旧小学校へ移住し、アーティストコミュニティー「ノマド村」を、ヴェルナー・ペンツェル、下村美佐とともに立ち上げる。

ヴェルナー　・ペンツェル氏

・1950 年生まれ。ドイツの南部地方で誕生。

・1960 年代後半は音楽と詩作に没頭、1970 年代初頭より映像制作を始める。

・2006 年スイスのラコルビエールにて、茂木綾子らとともに、ジュパジュカンパニーを設立。

・2009 年淡路島に拠点を移し、アーティストコミュニティー「ノマド村」を、茂木綾子、下村美佐とともに立ち上げる。

◇　淡路島を選んだきっかけ

・移住先を決めるのに色々な人に話を聞いた。初めは東京で考えていたが、地価が高く、必要なスペースの確保が難しい。

・知り合いから関西を薦められ、アトリエ＆住まいとして手頃な物件を探していた。舞鶴の赤レンガ倉庫も考えたが作家活動には大きすぎ、他に候補に挙がった古民家では手狭であるなど、物件がなかなか見つからなかったときに淡路島の廃校を見つけた。

・大きさも手頃であり、自然がとても豊かであることが気に入った。また、関西国際空港や神戸市などにも直ぐ行けることなどから、淡路島を選んだ。

■ きっかけ～取組の経緯

●行政の素早い対応

・小学校の校舎の用途変更は教育委員会が関わる行政内部での調整が必要であり、一般的に転用決定まで時間を要する場合が多い。しかし、このケースについては、廃校が増えてきている事実に対する行政の問題認識と、庁内での意思疎通が日頃から円滑であったことから、受け入れに前向きな方向で調整が進み、３ヶ月で認可が下りた。

・８月に物件を見て、11 月には引っ越しができる状況であったことで、アーティスト側も他に目移りすることなく、この場所に決めることができた。

・アーティストが子どものいるファミリー世帯であったことも、地域と協調してもらえるのではという期待のもとに行政判断の際に好意的に働いた。

■ 取組の成果

＜NPO淡路島アートセンター＞

●島の魅力に島民が気付く

・島民であることにコンプレックスのような気持ちを大なり小なりもっている人が多いと思うが、島外の目から見て島には魅力がたくさんあるということに、多くの人が気付くきっかけとなった。

・高校を卒業したら島外に行くことが一般的であったが、今は島で働きたい、島で暮らしたい、という若者が増えていると感じる。

●地域をアートで結ぶ

・「アート」というと不審なものを見るような地元の目があったが、竹田准教授の紹介で財団法人アサヒビール芸術文化財団のアサヒアートフェスティバルに応募し、助成が決まったことで、大手企業が応援している事業、という形がみえた。これにより地域からも安心感をもって迎えられるようになった。

・一過性の活動ではなく、地域への説明や報告を怠らず、アート活動の場を地域から預かったものとして責任を持って扱うことにより、地域からの信頼を得られるようになった。アートへの関心を持つ人や、アートを介して知り合いになる人が増えるなど、地域を結ぶことに貢献している。

＜ノマド村＞

●地域の中に新たなつながり

・二人のアーティストは、積極的に地域の行事などに参加。またカフェを開いているので、地域の人が来店することもある。さらに子ども達が地域の学校に通うことで、より親近感を持たれた。こうした積み重ねもあって、二人はいち早く地域に溶け込むことができた。

・山深い地域に位置する集落であるが、アーティスト達が魅力的な自然の景観や散策路などがあると気付き、ノマド村を訪れた人達が地域を散策できるように散策マップを作成した。地域の人達が場所を教えるなどの協力をして出来上がったもので、これもつながりを深めるきっかけとなっている。

●国際的なアーティストの存在によるレベルの高いアートの企画

・２人のアーティストは国際的にも活躍していたため、国内外の優れたアーティストとのネットワークを豊富に有している。そのネットワークを活かして、淡路島の山の中のノマド村で、都心部で開催されるようなアートイベントが開催された。テレビや雑誌などにも数多く取り上げられている。

・ＮＰＯ法人淡路島アートセンターと茂木さんが共同で、淡路島で活躍する多ジャンルの人々を紹介する冊子を作成している。また、茂木さんとヴェルナー・ペンツェルさんが「テシゴトノオト」というプロジェクトを展開し、島に暮らす人々の日常生活の中にある芸術性を映し出して賛美する冊子や映像などを制作しており、アートを身近に感じる機会が増えていると言える。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然環境

山、海、凝縮された本物の自然環境

神戸市からそれほど遠くない距離でありながら、山あり、海ありの豊かな自然景観がアーティストの創作意欲を高める。

●アトリエの窓から外を見れば本物の自然を感じられる

島内の廃校や空き家などをアトリエや芸術活動の場として活用する人が多いが、本物の自然の中に創作の場があることが、創作活動を行うにあたっての刺激となっている。

●農業とアートの融合

淡路島は農作物の生産環境に適した土壌・気候に恵まれ、農業が盛んであるため、「芸術の原点である農作業を体験してより創造性に富んだ芸術活動をしたい」と考える若手の芸術家などに体験の場を確保しやすい。

Point　島の自然に対するアーティストの評判

スイスから日本に拠点を移すとき、日本全国でどこが良いか探した。そのなかで、関西国際空港に近く、交通機関が発達しており、なおかつ“田舎”と感じられて畑作業ができるところが希望だった。自然が豊かで山や海が身近にあり、田畑が多い淡路島は絶好のロケーションだった。“田舎”といっても中途半端な田舎は嫌だったが、ここは本物の自然（木々の緑など）が見えて、クリエイティブな刺激があった。　（茂木氏ヒアリング）

■ 文化資源

“国生みの神話”の島として古くから根付いている生活文化の存在

島民は、島を一度は出たいと考えるそうだ。しかし、島の外から見た時に、“国生みの神話”がある島として、長い歴史のある島で培われてきた、質の高い昔からの職（漁師、瓦職人、線香等）と、農業・畜産・漁業でも品質の良い産物が獲れる豊かな環境を再認識するという。国生み神話ゆかりの社寺も多く、その歴史に島民は誇りを持っている。

●赤レンガ倉庫の再生活用

洲本には近代化産業遺産として指定を受ける大正時代の赤レンガ倉庫群があり、その多くが解体されたが、残された一部の建造物がレストランなどに再生されている。また趣のある空間を活かして、ＮＰＯ淡路島アートセンターなどが芸術活動や交流の場として活用している。

●淡路牛など地元の産物を使ったレストランの連携

淡路島が生んだ「自慢の素材―淡路牛・淡路玉ねぎ・淡路米」で美味しい牛丼を作ろうと、

地元 46 店舗が立ち上がり、淡路島牛丼プロジェクトをスタートさせた（現在は 50 店舗が参加）。牛丼の味わいは店舗によって様々に工夫されていて、色々な牛丼を食べ歩く楽しみがある。

●歴史ある職人の技、社寺、伝統芸能の存在

淡路島には、国内生産の 70%を占め、天然素材、天然香料にこだわる品質の良い線香・お香や、400 年の長い歴史を持ち、耐久性に優れた淡路瓦などの伝統的な職人の技がある。また、イザナギ、イザナミの二人の神が、日本列島を生み出したという「国生み神話」の伝承を残す由緒ある伊弉諾神宮（いざなぎじんぐう）や、重要無形民族文化財である淡路人形浄瑠璃などの地域の文化資源にも恵まれている。

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

NPO淡路島アートセンターの存在

ＮＰＯ淡路島アートセンターは、淡路島の魅力を再認識し、アートの力でその魅力を引き出していこうと作られた組織である。興味を持った人が誰でも参加することができるため、様々なアーティストや新たに淡路島で展開されている活動とを結びつけるコーディネーターとしての役割を果たしている。

Point 何もない(と思っていた)島で楽しく暮らすために何が必要かを考える

活動の中心となっているメンバーの１人、やまぐちさんは、台風による大水害をきっかけに地域に目を向けることとなった。島の人間は、島をいつかは出て行きたいという思いをもつ人が多いという。しかし、仕事や家族の問題などで島を離れることが難しい人も多い。島に住まなくてはいけないなら、何もない(と思っていた)島で楽しく暮らすために何が必要かを考えているときに、日の出亭と出会った。修復を提案され、その魅力に気付いたところから活動が始まった。
（やまぐち氏ヒアリング）

■ 文化芸術を支える住民層

文化活動に関心のある住民や文化施設の存在

パソナグループが淡路島で半芸半農のプロジェクトを展開したきっかけは、グループ代表が関西出身であったこと、農業環境が充実していたこと、そして、芸術家達が練習や研修などができる場があったことなどであった。
また、洲本市は、創造的職種である写真業に従事する人が地方圏平均の 1.8 倍と極めて多く、創造的な活動を支える住民層が厚いことがうかがえる。

●本格的な文化ホール

淡路市立しづかホールは、ホール主催のイベントの他、発表会やイベント開催の場として活用するように設立されている。802 人収容できる大ホールがあり、音響設備も充実している。平日でも駐車場が満車になったり、待合い空間が混雑したりするなど市民の利用が多く、地域の文化活動が活発であることが推測される。

●ホテルなどの宿泊施設の集積

パソナグループのプロジェクトでは、アートマネジメントを学ぶ講座があるが、アーティスト達がホテル等に営業に赴いて自らの演奏の場を確保する研修も行っている。宿泊施設での宴会やイベント企画で演奏の機会があることなども、アーティストの育成に役立っている。

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

気軽に立ち寄れるアート展示の場やカフェの存在

日常生活の身近な場所にある建物をアートの舞台として使用することで、関心ある人が気軽に立ち寄れる、開かれたアート展示の仕方をしている。また地域住民との対話や日常的に使用している道具などをアートの素材としており、親近感を持つ住民も多い。

●カフェノマド

情報交換、交流の場としての機能を併せ持つアートカフェ。ノマド村のアート作品や豊富なミュージックコレクションに気軽に触れることができ、ときには生演奏やハプニングも期待される、淡路島の豊富な食材を活かし、ヨーロッパや日本の家庭料理をメインにアレンジしたお料理やスイーツ、飲物を提供する。毎週土日に期間限定でオープン。

Point 住民に対するアーティストの配慮と住民の社交性

ノマド村を開く前、初めは地域の方も遠巻きに様子を見ていた雰囲気があった。カフェノマドを開くときに、プレオープンとして地元の方を“優先”としたら、結構住民が来てくれた。お世話好きな地域の人がいて、色々な相談に乗ってくれる。淡路島の人はとても明るくて、よく笑う印象がある。一緒にいて楽しい人たちであり、“大事なもの”が分かっている、という気がする。
（茂木氏、ヴェルナー・ペンツェル氏ヒアリング）

■ 宿泊施設、レストラン

淡路温泉としての宿泊施設の集積と質の高いレストランの存在

洲本市には淡路温泉があり、古くからの温泉街として多数の宿泊施設が立地している。また、豊富な淡路の食材に惹かれて、この地で開業する腕の良いコック兼レストランオーナーもみられる。

◆創造的活動の支援環境

■ 行政の取組

迅速な行政判断

茂木氏、ヴェルナー・ペンツェル氏が淡路島の廃校になった小学校を使いたいと考えた際、転用に関する行政内部の調整が必要となったが、プロジェクトチームを立ち上げて、迅速に転用を認めた。

■ 企業の取組

パソナグループによる定住促進事業

ここから村プロジェクトでは、将来的には淡路島での定住を視野に入れ、150 名の半芸半農を希望する若者を雇用している。仕事の合間に芸術家達が自分たちの工房となる空き家を探索することに協力したり、数多くあるホテル等への営業活動を支援したりしている。

■ 大学等の取組

兵庫県立淡路景観園芸学校景観デザイン部門

ＮＰＯ淡路島アートセンター設立の端緒が日の出亭の改修であったが、その提案や支援をしたのが淡路景観園芸学校の竹田直樹准教授であった。またＮＰＯ法人淡路島アートセンターの活動を発展させる契機となったアサヒアートフェスティバルを紹介したのも竹田准教授である。

関西看護医療大学

アーティストに対して未使用教室の開放やＮＰＯ法人淡路島アートセンターの事務所提供などの支援を行っている。また 2011 年度より新たに芸術選択授業を取り入れるなど、アーティストの雇用と看護におけるアート活用について取り組み始めている。

神戸学院大学人文学部

桑島教授は、2008 年より淡路島の調査を始め調査研究書「海抜 64 メートルの楽園 アート山大石可久也美術館の魅力を探る」を発行したことを機に「淡路島アートプロジェクト」としてＮＰＯ法人淡路島アートセンターとの連携プログラムを開始し、島において様々なアート活動の調査とプロジェクト企画実習などを行っている。

京都造形芸術大学こども芸術学科

水野教授は、2003 年に洲本市民工房においてアートを地域にひらくとともに学生の実習の場とし造形ワークショップを実施した。
今後は、ＮＰＯ法人淡路島アートセンターと連携し地域の子どもに対してのプログラム開発を行っていく予定である。

■ 活動の場

ホテル等の集積・農家での就業

淡路温泉のホテルなどでは、アート活動の発表の場を提供しているほか、観光案内の際にアートイベントの情報を提供している。また、農作業の研修を受けたアーティストは、農家への就業も視野に入れて活動することができる。

◆利便性・安心感

■ 交通・通信の利便性

拠点としての神戸市の存在

淡路島には、神戸市からバスで 1 時間程度で来ることができる。神戸市内での芸術活動もあわせて展開する可能性や、神戸を拠点に活動している著名な芸術家に指導者として来島してもらえる可能性があり、芸術家を惹きつける要因となっている。

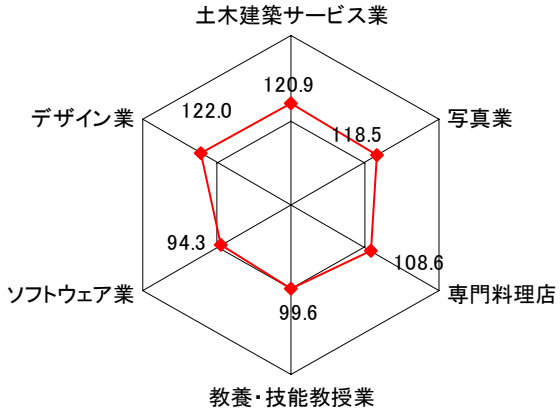
インターネット等の利用可能な環境

芸術家が人里離れた場所で活動する場合、インターネットを介した情報収集・発信や連絡・調整など、仕事のうえで通信環境の充実は必須事項である。淡路島ではこうしたインターネット環境を確保することが可能であった。

鳥取県　鳥取市

（旧鹿野町地域）

都市の基本データ※1

人口※2	197,449 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合※6
高齢化率※2	23.0%	
合計特殊出生率※3	1.54	
人口の社会増減率※2※4	-0.33%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	7.1%	
交通	＜地域へのアクセス（鳥取市）＞ 東京駅から鳥取市の中心部まで、鉄道、飛行機、バスを乗り継いで約３時間 ＜地域へのアクセス（鹿野地域）＞ 鳥取市中心部から、車で約 30 分 JR 浜村駅から、車で約 15 分	

気候条件※7	主な地域資源
年平均気温は 15 度程度、年間降水量は 1,910mm/年程度と比較的多い。季節風の影響で、冬に曇天や降雪が多く、夏には晴天が多い日本海側気候を現す。 台風、集中豪雨等の気象現象による自然災害は少ない。	・鳥取砂丘 ・山陰海岸ジオパーク ・鹿野温泉、浜村温泉等の多数の温泉 ・因幡鹿野城址 など

■ 地域における創造的な取組の事例

●鳥の劇場の活動

・演劇創作

・鳥の演劇祭の開催

・国内外の優れた舞台作品の招聘

○鹿野ふるさとミュージカル

など

※1　鳥取市の値
※2　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※3　全国平均は 1.31
（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※4　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※5　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※6　平成２１年経済センサス
※7　鳥取市ＨＰ

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆鳥の劇場

■ 取組の概要

●取組のテーマ

劇場という活動拠点を持つ劇団の演劇人として、生業として専業で演劇ができるように、社会・地域の中で必要とされる劇場・劇団となることを目指して活動している。
演劇創作を中心に国内・海外の優れた舞台作品の招聘、舞台芸術家との交流、他芸術ジャンルとの交流、教育普及活動等を行い、地域の発展に少しでも貢献したいと考えている。

●取組の内容

◇主催事業

・2010 年度は 5 本柱のプログラムを実施。

＜創るプログラム＞　鳥の劇場による演劇の公演を、年間 3～4 公演程度実施。

＜いっしょにやるプログラム＞　ワークショップやレクチャー等を通して、演劇や舞台芸術の魅力を一般の人にも体験してもらうためのプログラム。講師として、全国から演劇、舞台芸術関係者を招く。

＜招くプログラム＞　優れた作品やアーティストを国内外から招聘するプログラム。

＜試みるプログラム＞　劇場での新しい試みに取り組むプログラム。2009 年度はアートマネジメントについて考える連続公開講座や公募による招聘公演を実施。2010 年度は絵本の展示・読み聞かせ、コンサート等を開催。

＜考えるプログラム＞　2010 年度から新しく柱に加わったプログラムで、2010 年度は連続公開講座を開催。舞台芸術に限らず様々な分野から講師を迎えて実施。

◇鳥の演劇祭

・毎年 9 月の 4 週末に渡り、国内外の劇団による公演や、シンポジウム、ワークショップ、とっとり体験プログラム（鳥取の自然や文化や人の魅力を体験する企画）等を実施。

◇アウトリーチ活動

・地域の教育現場でのワークショップや小作品の上演、読み聞かせボランティア等、地域への貢献も積極的に行う。2010 年度は鳥取県教育委員会からの委託による事業も実施。

◇鳥の劇場外での活動

・国内・海外の劇場での公演活動や、演劇祭への参加、鳥の劇場メンバーによる外部出演、講演等も行っている。2010 年度はルーマニア公演、瀬戸内国際芸術祭 2010 への参加等。

◇他団体との連携による活動

・全国のアート NPO や大学等と連携し、ワークショップや講座の開催や協力を行っている。

取組のキーパーソン
演出家・鳥の劇場芸術監督
NPO 法人　鳥の劇場　代表
中島　諒人　氏

◇ **主な経歴**

- 大学在学中から演劇活動を開始。大学卒業後は、東京を拠点に劇団を主宰。
- 2004 年より 1 年半、静岡県舞台芸術センターに所属。
- 2006 年より鳥取市鹿野町に活動の拠点を移転、鳥の劇場の取組を開始。
- 現在、鳥の劇場芸術監督、鳥取大学非常勤講師、BeSeTo 演劇祭国際委員等を務める。（2012 年現在）

◇ **主な受賞暦**

- 利賀演出家コンクール 2003 最優秀演出家賞（2003 年）
- 鳥取ロータリークラブ「米原賞」（2007 年）
- 鳥取市文化賞（2008 年）
- 芸術選奨文部科学大臣新人賞（2009 年）

■ きっかけ～取組の経緯

●「田舎」に求めた、地域に必要とされる劇場

- **鳥の劇場の主宰・中島諒人氏は、学生時代から演劇活動を行っており、2004 年 10 月から 1 年半、静岡県舞台芸術センター（SPAC）に所属。そこで初めて演劇だけで生活をする経験をして、その生活を続けたいという思いを持つ。**
- **2006 年に SPAC との契約期限を迎えるのを契機に、貸館で活動する劇団ではなく、自前の劇場を拠点にして、専業の演劇人として生きることを目指し、拠点探しを始める。**
- **専業で生きるためには、演劇だけで経済的自立をする必要があるが、現在の日本における演劇を取り巻く環境の中では、まずは安定的に活動ができるほどの補助金等が得られる劇場が必要であり、劇場が公共的に支えられるためには、社会から必要とされなければならないと考えた。それが実現する可能性の高い場所はどこかを考えて、市場性だけでは立ち行かなくなってきている「田舎」に可能性を求めた。**
- **また、他の芸術分野と違って、演劇には大きな空間を要するが、都市部よりも地方の方が、広い大きな空間が確保しやすいという考えもあった。**

●土地勘のある地元での拠点探し

- **「田舎」で拠点探しをする上で、何度か仕事をしていた高知県か、出身地であり人口最少県である鳥取県を候補として考えたが、結局土地勘のある地元・鳥取県で探し始めた。**
- **鳥取県が人口最少県ということも、市場性だけでは立ち行かなくなってきている「田舎」を象徴する一面であると捉えることができ、魅力的であった。**
- **ただ、土地勘があるといっても、自治会等のしがらみの少ない、直接の出身地域とは別の地域に戻ることを考えていた。**

●廃校となった幼稚園・小学校施設の無償貸与

・鳥取市に鳥の劇場の企画書を持ち込み、劇場を作る意味や実践したいことを説明し支援を求めた。その結果、市からは劇場として利用できる施設を紹介してもらい、廃校となった旧鹿野幼稚園を無償で貸与してもらえることとなった。

・隣接している旧鹿野小学校体育館はコミュニティ施設であったため、当初は公演のたびに利用申請を行い、使用料を納め、公演が終了すると舞台も客席も含め全て撤去していたが、活動を継続していく中で実績が認められ、2007 年からは利用期間を延長することで、小学校体育館も事実上占有させてもらった。2010 年より旧鹿野小学校体育館が鳥取市の公有財産となり、鳥取市と契約し無償で貸与してもらえることとなった。

・他に、紹介された施設として、別の体育館があったが、県の施設で県警の音楽隊が利用しており、占有することができないようだったので、現在の施設を劇場として利用できるよう整備した。

●学生時代の友人の資金援助

・廃校の改装や、音響や照明、客席等の劇場としての最低限の設備の調達等に約 600 万円が必要で、その資金を自分達だけで調達することは難しかったが、当時ビジネスで成功していた学生時代の友人の資金援助があり、劇場として整備することができた。

・また、同じ友人から実績を作り補助金等の資金が獲得できるようになるまでの運営資金として、最初の 1 年間に月々200 万円の資金援助を受けた。

■ 取組の成果

●劇団員にとって生きがいを感じる生活

・鹿野地域では、コミュニティが小さいため、演劇活動を通して自分達が人や社会とつながり、必要とされているということが感じられる。それが劇団員にとって充実感に繋がり、東京よりも生きがいを感じる生活を送ることができている。

・また鹿野地域の落ち着いた環境の中で、専業で演劇をすることができるため、稽古に集中することができるようになったことも、劇団員の充実感につながっている。

●海外の劇団との交流機会の増加

・劇場という活動拠点ができたことで、海外の劇団を招聘しやすくなり、交流機会が増加した。交流機会が増えることで、劇団員の演劇の幅が広がっている。

●鳥取県外からの劇団員の移住

・鳥の劇場は、2011 年 4 月現在、団員 14 名でそのうち鳥取県出身者は 4 名である。U ターンした鳥取県出身者を含めて、鳥の劇場の活動のために鳥取県に移住したメンバーが 11 名おり、鳥取県への創造的人材の定住を促している。

●劇団と出会った地元住民等の意識の変化のきっかけづくり

・鳥の劇場にボランティアスタッフとして関わったり、観客として訪れた地元住民が、影響を受けて、他の文化活動に興味を持つようになる等、地域の住民が新しいことを始めるきっかけとなっている。鳥の劇場ができてから結成された、住民によるダンスグループ「とりっとダンス」は、結成3年目にして県外でも活動を展開するようになった。

・また、ボランティアに参加した他地域の人が、鳥の劇場のある鹿野地域のまちづくりに関わりたいと考えて移住する等、地元の魅力を伝えるきっかけにもなっている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然環境

稽古に集中して打ち込むことができる環境

時間に捉われず、邪魔されることなく稽古に集中できる環境が、演劇に取り組む俳優・女優にとって魅力と感じられている。海外のアーティストや都市部から訪れたダンサー等から、そういった環境に対する高い評価が聞かれるという。

足を運ぶモチベーションを高める温泉の存在

鳥取市内に複数ある温泉は、その土地を訪れるモチベーションを高める魅力的な資源の一つである。鳥の劇場では、国内外の劇団がしばらく滞在して公演を行ったり、遠方から演劇関係者や研究者、学生等が泊りがけで訪問したりするが、そういった人々にとっても劇場と温泉の組合せは大きな魅力となる。また鳥取に移住した鳥の劇場の劇団員も、身近に温泉があることに対して、非常に満足している様子であった。

Point 東京では得られない気づきが演技の幅を広げる

鳥取での生活では、電車にほとんど乗らない、野菜をもらう、お金の使い方が違う等、東京にいた時と生活様式ががらっと変わった。飲食店やチェーン店も少なく、外食が減り、外食するとしても、知り合った人のお店に行くようになった。東京では、お店に入って店の人の顔も見ずに注文して食べてお金を払う、と食べることに関して雑だった気がするが、鳥取では誰かが作ってくれたものを食べているということをしみじみ感じる。食べることが消費することでなく、生きることだと感じる。そのような感覚は、舞台に立つ上で大切だと思う。
（劇団員：中川氏・赤羽氏・葛岡氏へのヒアリング）

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

地元の顔役の協力

ＮＰＯ法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会の長尾理事長（当時）は、地域で広い人的ネットワークを持つ、コミュニティの中心的な人物であり、鳥の劇場を開設した当初から、劇団に協力的であった。鳥の劇場に人が来ることが地域の活性化につながると考え、演劇の演目に対するアイデアを出したり、鳥の演劇祭実行委員会の委員長を引き受け、地域の人を動かすことを手伝ったりした。
地域で活動する上で、困ったこと・わからないことがあればまずは長尾氏に相談することで、解決に協力してくれそうな人の紹介等をしてくれるため、劇団員にとっては地元との橋渡し役として非常に重要な存在である。

●NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会

2001 年に設立され、鹿野城の城下町である鹿野地域で、昔ながらの城下町の街並みの景観保全や、空き家を活用して、地域コミュニティの振興、伝統工芸品の伝承・体験、特産加工品の開発、地元食材を提供する食事処の運営、鳥取市のＵＩＪターン促進事業である『お試し定住体験事業』の宿の運営等を行ってきた。現在 33 名の会員が所属。

演劇人としての主宰・中島氏の存在

鳥の劇場の劇団員の多くは、中島氏の考えに共感し惹かれて、鳥の劇場で活動したいと思い、鳥取に移住してきた。演劇人としての中島氏自身が、創造的人材を惹きつけている。

■ 文化芸術を支える住民層

好奇心旺盛で、劇場を受け入れる地元住民の気質

鳥の劇場が、鹿野地域に開設された当初から、地元住民は劇団に興味をもち、住民が使っていた旧鹿野小学校の体育館を劇団が使うことに理解を示したり、劇団員に畑で採れた野菜を持ってくる等、演劇活動や劇団員の生活に対して、様々な協力を行っている。このような地元住民の気質は、他地域からの移住者にとっては大きな魅力であり、劇団員の葛岡氏は、この住民の良さが鳥取県への移住を決意する決め手だったという。
また鳥取市は、専門的・技術的職業従事者の割合が 7.1%であり、地方圏の平均（6.2%）と比べて高い。なかでも、デザイン業、土木建築サービス業、写真業などの創造的職種に従事する人が多く、創造的な活動を支える住民層が厚いことがうかがえる。

文化・芸術に理解のある地元住民

鹿野地域には、20 年以上前から毎年 1 回開催されている鹿野ふるさとミュージカルという地元住民によるミュージカルが根付いており、元来芸能好き・お祭り好きという気質がある。また、鹿野城の城下町での住民によるまちづくり活動が積極的に行われる等、文化や伝統を大切にする意識も醸成されている。そのため、文化や芸術活動に対する理解が住民にある地域で、鳥の劇場が開催する演劇祭の企画・運営に関わったり、鹿野ふるさとミュージカルの運営を劇団員が手伝ったりと、鳥の劇場との交流が盛んである。

●鹿野ふれあいミュージカル

1982 年に第 1 回鹿野町民音楽祭として、鹿野小学校体育館（現鳥の劇場）で始まったイベントが、1987 年には音楽劇になり、それ以降ミュージカルとして毎年開催されている。
主催している鹿野町民音楽祭実行委員会は、1997 年に地域づくり優良団体として自治大臣表彰を、2004 年には鳥取市文化賞を受賞。

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

社会とつながっていると感じられるコミュニティサイズ

地方では個人の活動でも、誰か・何かに影響を与えていることが感じられ、社会とつながっていることを実感することができる。地方のコミュニティでは都市部と異なり、コミュニティにおける自分の存在を認識することができ、それが生きがいと感じられて、充実感のある生活に繋がる。

深く触れ合える人間関係

東京で活動することと比べて、鳥取県では様々な人やその人生とより深く触れ合うことができる場が生活の中にあり、農家の人の喋り方、商売をされている方の語り等、様々な「サンプル」を見ることができて、劇団員にとって演技の幅が広がる。

地元住民や学生のボランティアスタッフとしての参加・協力

鳥の劇場は小規模の劇団で、公演中はスタッフ全員で出演したり舞台スタッフをこなさなければならないが、受付やホワイエに配置するスタッフが足らなくなるため、地元住民や学生によるボランティアスタッフに協力してもらっている。
ボランティアに参加した学生の中には、大学でアートマネジメントを専攻している学生もおり、学生の積極的なアイデアや発想が、鳥の劇場の取組に良い効果となることがある。

■ 宿泊施設、レストラン

城下町の空き家をゲストハウスとして活用

鳥の劇場が立地している城下町エリアは、地元のいんしゅう鹿野まちづくり協議会が、趣のある街並みの保存や空家の有効活用の取組を盛んに行っている。地元から空き家を借りて、国内外の劇団等を招いた場合のゲストハウスとして活用することができ、これらのインフラが地域外の劇団を招きやすくしている。

◆創造的活動の支援環境

■ 行政の取組

幼稚園施設の無償貸与

中島氏が鳥取県で劇場を開設する場所を探していた際に、鳥取市が中島氏に利用できそうな公共施設等を紹介し、廃校となった旧鹿野幼稚園の施設を無償で貸与するという、立ち上げ時の支援を行った。

鳥取市による定住支援の取組

鳥取市が行っている定住支援事業では、市外から移住してくる人のための居住場所を斡旋している。鳥の劇場の劇団員・中川氏も、支援事業による住まいの斡旋サービスを利用して移住してきたという。

Point **偶然を支援できるシステムと目利きが必要**

誰かが、どこかの場所と出会うというのは、より良い場所があって何か魅力的な要素に惹かれてやってくる、というのではなく、偶然のことだと思う。その偶然をうまく支援できるシステムを作る方が大切である。偶然の思いつきを実現するのに、その人たちが求めることを支援する体制が必要だろう。
創造的人材がその土地の何に反応してくるかは、人によって全く異なり、あらかじめわかることではない。企業誘致のように、交通条件だとか、税制だとか一般的な条件を揃えて、人が集まるとすれば、それはデザイナーやクリエイティブ産業に関わる創造的人材の場合では、あり得るかもしれない。
また、都市部をドロップアウトしてくるような人が、支援を利用して地方に入ってこないように、行政の目利きが必要である。　（主宰・中島氏へのヒアリング）

■ 大学等の取組

鳥取大学との連携・交流

大学と連携して活動することで、対外的な印象の点で鳥の劇場の取組が正当性を帯びたものとして受け取られるようにる。
また、鳥取大学芸術文化センターの大学教員との交流や共同で作品を創る取組は、劇団員にとって演技の幅を広げる経験となる。
また大学との連携や交流を通して、様々な分野で活動している人と知り合うことができ、人脈を広げることができる。

●鳥取大学芸術文化センター

2004 年、鳥取大学では学部再編によって、新しく「地域」を研究フィールドとした様々な研究・教育を行う地域学部が発足し、それに伴って、地域の芸術文化（音楽、美術、舞踊が中心）の振興に役立つための研究と教育を行う組織として同センターが設立された。鳥取県を主なフィールドとして、開かれた地域研究の一環として、地域の芸術文化の振興、その創造と発展、継承に役立つための研究と教育を行う。美学美術史、彫刻、デザイン、舞踊、作曲・指揮等の分野の教員が在籍。

■ 活動の場

鳥の劇場という自前の活動拠点

鳥の劇場は、活動の拠点となる劇場を自前で持っている。劇団が活動の拠点となる劇場を持っているということのメリットは大きい。劇団や地元住民、地域外からの観客にしてみれば、「鳥の劇場に行けば、彼らが活動をしている」と認識することができるため、問い合わせや訪問がしやすく、また活動に参加しやすくなる。

◆利便性・安心感

■ 交通・通信の利便性

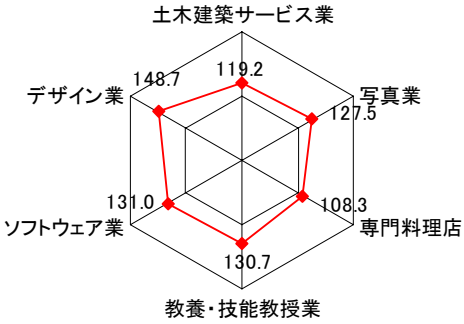
資材を入手するために必要なインフラ

演劇や劇場運営を行う上で、衣装や大道具、小道具等の備品やそれらを作るための資材、機械設備等は、欲しいときにすぐ手に入ることが重要であるが、都市部から遠い場所においては、それらのものが揃う環境かどうかが問題であった。鳥取市でもインターネットで購入し、日を待たずに資材等を配達してもらえる点は、都市部と大差なく、劇団員の活動を支えている。

香川県　高松市、島嶼地域

（直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島）

都市の基本データ※1

		クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合＊6
人口※2	419,429 人	
高齢化率※2	22.3%	
合計特殊出生率※3	1.48	
人口の社会増減率※2※4	0.46%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	7.0%	
交通	＜地域へのアクセス（高松市）＞ 東京から高松市まで、飛行機で約 1.5 時間 ＜地域へのアクセス（直島）＞ 高松市からフェリーで約 50 分 （１日５便、取組期間中は８便に増便）	

気候条件※7	主な地域資源
温暖寡雨の瀬戸内海式気候に属しており、気温も年平均 16 度前後と比較的高く、年間を通じて温暖である。 地形条件に恵まれていることもあり、台風による災害が少なく、年間降雨量は 1,200mm 程度(900mm～1,400mm/年)である。	・庵治石（高松市） ・産廃現場と産廃問題に関する資料館（豊島） ・国立療養所大島青松園（大島） ・銅精錬所跡、採石場跡などの産業遺跡（犬島） ・ヒメボタルの生息地（男木島） ・鬼ヶ島伝説（女木島） など

■ 地域における創造的な取組の事例

●瀬戸内国際芸術祭

○ベネッセホールディングスのメセナ活動

○犬島アートプロジェクト

○高松市市民文化祭アーツフェスタたかまつ

など

※１　高松市の値
※２　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※３　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※４　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※５　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※６　平成２１年経済センサス
※７　四国地質調査業協会

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆瀬戸内国際芸術祭

■ 取組の概要

●取組のテーマ

「海の復権」をコンセプトに、舞台となるそれぞれの島で育まれてきた固有の生活習慣を活かし、島々で営まれてきた生活、歴史に焦点を当て、アートが関わることによって住民、特に島のお年寄りたちの元気を再生する機会を作り出す。

●取組の内容

◇瀬戸内海の島々を舞台にした美術作品の展示

・18 の国と地域から 75 組のアーティストが参加し、瀬戸内海の７つの島（直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島）と高松港の周辺で美術作品の展示を行った。

・北川フラム氏を総合ディレクターとして迎えるなど、第一級の人材が運営に関わることで、地方のアートイベントにも関わらず、レベルの高いアーティストの参加が実現した。

◇地域の伝統芸能とアーティストが連携したイベント

・イベント期間を通じて、アーティストが関わる全 84 種類のイベントが開催された。いずれのイベントも概ね定員を満たす入場者を記録している。

・島の地域資源である農村歌舞伎にフォーカスしたり、地域住民と連携したりするなど、外から来たアーティストと地域住民が連携したイベントも開催され、好評を博した。

◇既存施設との連携による取組の広がり

・アート作品を島で展示するだけでなく、直島の地中美術館などの周辺圏域の美術館、博物館、会場以外の島々と連携し、イベントやワークショップを実施した。

①

②

③

④

⑤

①カモメの駐車場」木村 崇人、②「男木島 路地壁画プロジェクト wallalley」眞壁 陸二、③、「MEGI HOUSE」愛知県立芸術大学、④７０「やさしい美術プロジェクト」 やさしい美術プロジェクト、⑤「20 世紀の回想」禿鷹 墳上　（撮影者はすべて、中村脩）

取組のキーパーソン
NPO法人アーキペラゴ
理事長
三井　文博　氏

◇ **主な経歴**

・ 大学卒業後、香川県の造園設計の事務所に勤務
・ その後、広告業界に転じ、大学と連携して香川まちづくり研究会に参加
・ 現在はＮＰＯ法人アーキペラゴの理事長他をつとめる。

◇ **取組に参加したきっかけ**

・ 小豆島で農業法人の跡継ぎを決意した青年に共感し活動の支援を行うなど、瀬戸内海の島嶼地域の地域おこしに取り組んでいた。
・ 北川氏を講師に招いた勉強会の開催をきっかけに、瀬戸内国際芸術祭の実現に向けて深く関わることになった。
・ 三井氏は当初、広告会社と二足のわらじで活動していたが、瀬戸内国際芸術祭の構想が固まるのにあわせて、取組を運営したＮＰＯ法人（アーキペラゴ）の専従に転身した。

■ きっかけ～取組の経緯

●瀬戸内アートネットワーク構想の提唱

・取組に先だって直島でベネッセホールディングス（以下、ベネッセ）のメセナ活動が行われていた。ベネッセ会長の福武總一郎氏が、取組を瀬戸内海島嶼部に拡大し、高齢化や人口減少に悩む島のお年寄りを元気にしたいと考えたのが取組のきっかけである。

・思いの実現に向けて、直島福武美術館財団が５年ごとに瀬戸内海の複数の島々を会場とする文化芸術イベントの構想（瀬戸内アートネットワーク構想）を提唱した。

・直島で地中美術館館長代理をつとめていた福武氏が、越後妻有でのアートイベントを手掛けた実績を持つ北川フラム氏に話を持ちかけ、総合ディレクターとの位置づけで招へいした。

●ＮＰＯ主催の勉強会を通じた行政の動きとの連携

・同じ時期に香川県庁でも「現代アート王国かがわ」の確立に向け、地域の美術館と連携したアートイベントの政策提言がなされていた。

・地元のＮＰＯ法人が北川フラム氏を講師に招き、日本政策投資銀行、香川県庁、ＮＰＯが集う勉強会を開催し、様々な主体が連携した芸術祭を開催する機運が高まった。

●地域内外のボランティアスタッフ（こえび隊）との連携

・越後妻有の経験を踏まえ、瀬戸内国際芸術祭でもイベントを作り込んでいくうえで、地域内外からボランティアスタッフと連携した。ＨＰなどでの募集に応じて 39 都道府県から約 2,600 人がボランティアとして参加し、作品の制作補助や PR 活動、催しの運営に携わった。

■ 取組の成果

●交流人口の拡大

・総来場者数は 93.8 万人を記録し、事前の予想を大きく上回る観光客が訪れた。また、作品の質の高さや島の住民との交流などにより来場者の満足度も非常に高かった。特に首都圏から多くの人が訪れ、長期滞在することによって、人口減少が進む島の交流人口が大きく増加している。

・来訪者は観光客として島に来るだけでなく、「こえび隊」としてイベントの準備段階から取組に関わり、島に長期滞在する例もみられた。こえび隊の参加者は若年層の女性が多く、平均年齢は約 30 歳であった。

●地域の活性化

・イベント期間中、島民とアーティスト、来訪者の間に交流が生まれ、芸術祭が終了した後も交流を継続している例もある。

・イベント実施により地域で約 300 名の新規雇用を生み出した。また経済波及効果は約 111 億円と試算されている。

●地域ブランド開発へのつながり

・イベント期間中、多くの観光客が島を訪れたことが、地域住民が地元の地域資源を再認識するきっかけとなった。

・その結果、豊島で栽培されているイチゴのブランド化やシロップ製造など、地域ブランド開発の動きがみられている。

◆地域独自の資源

■ 自然環境

非日常空間としての「島」と豊かな自然景観

日頃居住している都市と異なる非日常空間としての島がアーティストを強く惹きつけた。
「視覚」を重視するアーティストにとって、その地ならではの特色ある景観は、特別にインスパイアする力を有している。

（出典：香川県公式観光サイト-うどん県旅ネット HP）

●非日常空間としての「島」

取組の主な舞台となった島嶼部へは、高松港等からフェリーを利用するしか行き来の手段がなく、都市と異なる非日常的な空間となっている。

●豊かな自然景観

島嶼地域では、自然海岸がよく残されており、海岸と海面が一体となり優れた景観を構成している、また晩秋から冬にかけては早朝に「海霧」が発生し、幻想的な景色が現れるなど、四季折々の自然景観を楽しむことができる。

Point 島の自然に対するアーティストの評判

東京など、遠方から来るアーティストの方にとっては、非日常的な「島」という空間で作品を展示する事自体が魅力的だったようです。
イベント開始の約1年前に招待作家の皆さんを北川フラムさんとこえび隊で何回かに分けて、島々を案内して回りましたが、やはり、皆さんが普段住んでいる所と全く違う景観やシチュエーションなので、異口同音に皆さん「素晴らしい」「面白そうだ」を連発していました。
船で島まで行くというシチュエーションや海の景観も含め、瀬戸内海の島々のそれぞれに個性があることが、アーティストを魅了する一因になったと思います。　（三井氏ヒアリング）

■ 文化資源

負の遺産の存在

ハンセン病療養施設のある大島や、産業廃棄物問題を抱える豊島など、瀬戸内海には「負の遺産」を抱える島々が多い。
地域における負の遺産の存在が、社会問題に関心の深い北川フラム氏を強く惹きつけるきっかけとなり、総合ディレクターという立場でアートイベントを通じた問題提起と地域おこしに取り組むきっかけとなった。

●産廃現場と産廃問題に関する資料館（豊島）

1975 年から 90 年にかけて、産廃業者による大量の産業廃棄物の不法投棄が行われており、住民の健康被害を引き起こしてきた。
投棄された廃棄物の処理作業は今も継続中であり、一般市民は現場に立ち入ることはできないが、予約をすれば産廃問題に関する資料館を見学可能である。

●ハンセン病療養施設（大島）

大島には、全国に 13 カ所あるハンセン病の療養施設のうちの、1 カ所が立地している。明治 42 年に「第４区療養所」として開所して以来、100 年あまりの歴史を有する。

特色ある景観、伝統芸能

小豆島には江戸時代、上方へお伊勢参りに行った島民が見よう見まねで始めた農村歌舞伎が伝わっており、270 年間続く地域の宝物になっている。
香港のアーティストが農村歌舞伎にインスパイアされて作品制作を行ったりするなど、地域の文化資源は外から来た芸術家にも影響を与えている。

●農村歌舞伎（小豆島）

中山農村歌舞伎は江戸時代後期から明治・大正の隆盛期を経て、今日に至るまで春日神社の奉納芝居として上演が続けられている。

（出典：香川県公式観光サイト-うどん県旅ネット HP）

●男木島の集落の景観

男木島では南西部斜面に階段状に集落が形成されており、独特の景観が形づくられている。
アーティストの一部は、集落の空き家を活用して、作品の展示を行った。

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

多様な主体をつないだキーパーソン

ハイレベルなアーティストを見抜き、彼らを芸術祭に招待する北川フラム氏や、地域の経済界とつながりを有している三井氏など、地域内外のキーパーソンが多様な主体をつなぐ役割を果たしており、取組の成功につながった。
招へいするアーティスト選びを妥協せず、厳選したメンバーで初めから世界を目指したことが成功につながっている。

■ 文化芸術を支える住民層

アーティストを気遣い、リスペクトする住民

創作のために数週間～数ヶ月間滞在するなかで、島民は差し入れをしたり、身の回りの世話をしたりするなど、アーティストと交流を深めた。言葉が通じない海外アーティストの様子を毎日見に来るなど、外から訪れた芸術家に対する気遣いやリスペクトの姿勢が好評であった。
また、高松市は専門的・技術的職業従事者の割合が 7.0%であり、地方圏の平均（6.2%）と比べて高い。なかでも、ソフトウェア業、デザイン業、写真業、教養・技能教授業などの創造的職種に従事する人が多く、創造的な活動を支える住民層が厚いことがうかがえる。

Point　アーティストに対する住民のもてなし

アーティストには色々なタイプの人がいましたが、短くても 2 週間位は現地に滞在して創作活動をしていたので、その間、島の方が接待したり、差し入れしてくれたり、触れ合いがありました。それはとても心地よかったと皆さんおっしゃっていただきます。海外のアーティストにも、言葉が通じないけれど、毎日様子を伺いに来て、欲しい物はないのかという話もありました。
イベント期間中ずっと滞在したわけではないですが、何度か島を訪れた後には、自分の故郷のように思っているアーティストが多かったようです。　（三井氏ヒアリング）

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

交易・交通の拠点としての島の歴史

島の人々は、瀬戸内海という行き来の盛んな海のなかで、外部と交流しながら生活の糧を得てきた。そのため、島のコミュニティは外に開かれ、新しい物の受け入れに寛容な土壌がある。瀬戸内国際芸術祭の開催にあたっても、現代美術に造詣が深い島民は少なかったが、アートによるまちづくりの取組を進めることには寛容であった。

●「交流の道」としての瀬戸内海

一般的に閉鎖的とされる島社会であるが、歴史的にも「交流の道」として行き来の盛んだった瀬戸内海の島嶼地域は、交易や交流を生活の糧にして生きてきた。また、大都市である高松市に近接していることもあり、流行に対して敏感な進取の気風を有している。

■ 街のにぎわい

高松市の丸亀商店街の存在

高松市は食事や宿泊の場所を提供するだけでなく、丸亀商店街の有志が、高松市における宿泊施設マップを作成し、来訪者に配布するなど、地域が積極的に取組に協力した。

また、商店街のまちづくり会社が、芸術祭を支援する「こがめ隊」を結成して、イベントを盛り上げた。

◆創造的活動の支援環境

■ 企業の取組

直島における企業メセナの先行事例

直島で企業メセナの活動による「ベネッセアートサイト直島」の取組が成功しており、現代アートの島としての地域イメージが芸術家や来訪者に広く浸透していた。芸術祭の開催に先立って、こうしたイメージが周辺の島民にも共有されていたことで、取組が受け入れられやすい土壌があった。また、福武總一郎氏が仕掛け人となることで、レベルの高いアーティストを島のイベントに引き込むことに成功した。

●ベネッセアートサイト直島

直島・豊島・犬島を舞台に（株）ベネッセホールディングスと、公益財団法人 直島福武美術館財団がアート活動を展開している。

各島の自然や地域固有の文化の中に、現代アートや建築を置くことによって、どこにもない特別な場所と経験を創造しようとする点に特徴があり、「自然・建築・アートの共生」をコンセプトとした「ベネッセハウス」、人々の生活の営みと歴史という時間の厚みの要素が加わった「家プロジェクト」、そして全く新しい概念の美術館「地中美術館」、「李禹煥美術館」などで構成されている。

草間彌生＂赤かぼちゃ＂
写真：渡邉修

◆利便性・安心感

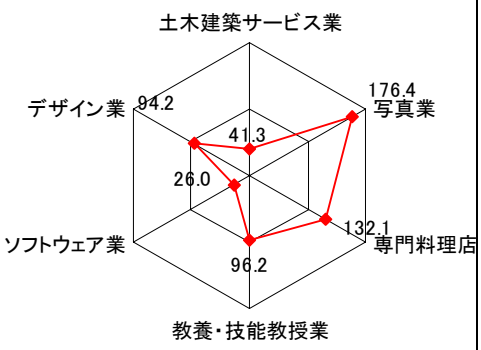
■ 交通・通信の利便性

拠点としての高松市の存在

開催期間中、数十万人の来訪者が瀬戸内地域を訪れるなかで、島嶼地域のインフラだけでは来訪者に対応しきれないため、高松市が交通、食事、宿泊の拠点となった。

大分県　別府市

都市の基本データ※1

人口※2	125,385 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合＊6
高齢化率※2	27.5%	
合計特殊出生率※3	1.25	
人口の社会増減率※2※4	3.4%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	7.3%	
交通	＜地域へのアクセス＞ 羽田空港から大分空港まで飛行機で約１時間 40 分 大分空港からバスを利用して、別府駅まで約 50 分 ＜地域へのアクセス＞ 東京駅から新幹線で小倉駅まで約３時間 50 分 小倉駅から特急を利用して、別府駅まで約１時間 30 分	

気候条件※7	主な地域資源
気候は「瀬戸内型気候区」に属し、年間を通じて降水量が少なく風も弱いことが特徴である。市街地の年平均気温は約 16℃で、年平均降水量は約 1,800mm である。	・別府八湯、地獄めぐり ・別府八湯温泉まつり ・別府市竹細工伝統産業会館 ・戦災に遭っていない市街地（珍しい） ・ビーコンプラザ ・別府八湯ウォーク（路地裏散策など） ・立命館アジア太平洋大学（留学生が多い）

■ 地域における創造的な取組の事例

●別府アルゲリッチ音楽祭

●混浴温泉世界

●ベップ・アート・マンス

など

※１　別府市の値
※２　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※３　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※４　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※５　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※６　平成２１年経済センサス
※７　別府市ＨＰ

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆別府アルゲリッチ音楽祭

■ 取組の概要

●アルゲリッチ音楽祭のコンセプト

別府アルゲリッチ音楽祭は、マルタ・アルゲリッチ総監督の企画・指揮のもと、「育む」「アジア」「創造と発信」の３つの目的を掲げ、国内外のアーティスト、地元の人が出会う「Meeting Point」となるフェスティバルを目指している。

◇育む（FOSTERING）
21 世紀を生きる子どもたちが心豊かに暮らせる社会をつくることは、大人たちみんなの願いであり、義務でもあります。子どもたちが素晴らしい音楽にふれることのできる場を、また音楽を志す若者たちが学ぶことのできる場を提供して、音楽を通じて人を育んでいくことは、この音楽祭の大きなテーマです。

◇アジア（ASIA）
アジアの音楽家とアルゲリッチとの出逢いの場“Meeting Point”をつくり、また音楽を愛するアジアの若者たちを育てることで、アジア音楽文化の中核となる音楽祭をめざします。

◇創造と発信（CREATION）
私たちは地域の人たちとともに創る、温かな「手づくりの音楽祭」をめざしています。みんなの力で、別府そして大分県の地から世界へ向けて、個性あふれる音楽文化を創造・発信していきます。

●取組の内容

◇別府アルゲリッチ音楽祭

- 別府から世界への発信を、という別府市からの依頼を受けて世界的ピアニスト マルタ・アルゲリッチとそれを支える伊藤京子が中心となり開催されている音楽祭。アルゲリッチ氏が総監督をつとめる。1998 年に第１回を開催。2011 年に開催された第 13 回音楽祭は、直前の東日本大震災により開催が危ぶまれたが、「このような時だからこそ音楽祭を開催し、支援したい」というアルゲリッチ氏の強い想い・呼びかけに、他のアーティストも賛同し、音楽祭を開催することができた。
- 音楽祭は、「ビーコンプラザ」（別府市）や「iichiko 総合文化センター」（大分市）を主な会場として、オーケストラなどによるコンサートを行う。あわせて、若手音楽家を指導する「公開マスタークラス」や「大分県出身若手音楽家コンサート」、親子を招待して行う「ピノキオコンサート」など教育的なプログラムにも重点を置いている。
- 2007 年３月から財団法人アルゲリッチ芸術振興財団となり、この音楽祭の企画・運営を行っている。開催にあたっては、200 人以上のボランティアスタッフが活躍している。

©堀田力丸

©堀田力丸

（出典：財団法人アルゲリッチ芸術振興財団ＨＰ）

取組のキーパーソン

アルゲリッチ芸術振興財団副理事長
ピアニスト

伊藤　京子　氏

©堀田力丸

◇　取組との関わり

- 伊藤氏は北九州市出身。日本音楽コンクールに入賞後、ドイツのミュンヘンに留学。アルゼンチンの音楽家の紹介により、憧れていたアルゲリッチ氏に指導を受ける機会を得た。最初の出会いはとても印象的な３日間であったという。その後も同氏の指導を受け、演奏活動に同行するとともに、演奏家の生活やオーケストラとの協演のあり方などを学んだ。
- 1987 年から 12 年間にわたり、ＮＨＫ大分放送局サロンコンサートにおいて、現在多くのコンサートでも用いられているようなトーク形式のコンサートをいち早く取り入れた。このサロンコンサートを通じてできた大分県内のクラシックファンとのつながりが、音楽祭開催にあたっての支えになった。
- 継続の重要性と啓発教育における理想実現には行政の支えが必然と感じている。また、地方の芸術文化を発展させていくうえで、マスコミによる情報発信が東京に偏り、地方からの発信が少ないことや、地方は人口が少なく広告効果も少ないことなどから、地方の芸術文化活動に対する企業協賛が少ないことなどか課題であると考えている。

■ きっかけ～取組の経緯

●行き過ぎた「音楽の商業化」に対する音楽家としての不安

・ヨーロッパへの音楽留学の間、アルゲリッチ氏から演奏家として多くのことを学んでいた伊藤京子氏は、留学を終えて日本に戻ったが、バブル経済の真っ只なかで、音楽家がタレントのようにもてはやされるなど、行き過ぎた「音楽の商業化」に違和感があった。

・アルゲリッチ氏に悩みを相談したところ、「演奏家として、したいことはしてはどうか」との助言を得た。母親の親友が教育財団を設立されたことから、「音楽家と聴衆が一緒に育てあえるような環境を整えていただけないか」とお願いしたいところ、資金提供を受けることができ、アルゲリッチ氏を招いて「マルタ・アルゲリッチ・チェンバー・ミュージック･フェスティバル」を東京・京都・山口・大分で開催した。

●「ビーコンプラザ･フィルハーモニアホール」の名誉音楽総監督にアルゲリッチ氏が就任

・ちょうどその折、伊藤氏の両親が別府市に転居した縁もあって、別府市長と面識ができ、市長から「新しく建設された「ビーコンプラザ」を活用し、世界的な発信をしたい」との相談を受け、アルゲリッチ氏を紹介。アルゲリッチ氏は伊藤氏と始めた活動を継続できるとの思いもあって音楽総監督を受諾。伊藤氏は、アルゲリッチ氏とともに「音楽家と聴衆がともに育ち、ともに楽しむ音楽祭」の４年後の別府開催を目指して動き出した。

●プレコンサートを経て、「別府アルゲリッチ音楽祭」の開催へ

・別府での音楽会開催の気運をつくるため、「地元の人たちにクラシック音楽の楽しさを理解してもらいたい、音楽祭を支援してくれる市民を増やしたい」と思いから「プレコンサート」を開催することとした。その第１弾がアルゲリッチ総監督の提案によって行われた「別府アルゲリッチ・コンサート'95」。アルゲリッチ氏の 10 年ぶりのソロ・リサイタルが大きな話題を呼んだ。その後も著名な音楽家を招いたコンサートを毎年開催した。途中、資金集めが必要となった際などには、サロンコンサートを通じて広がった大分県内のクラシックファンや別府市民の協力を得て、困難な局面を乗り越えていった。

・そうして、1998 年に第１回音楽祭を開催。今では日本を代表する音楽祭の一つとして国際的にも評価されており、世界中から多くのファンが訪れるようになっている。

■ 取組の成果

●音楽を通した心豊かな人づくり

・活動当初はアルゲリッチ氏のことを知らない人も多かったが、「プレコンサート」の頃から 15 年以上にわたって、良質なコンサートを開催し続けたことにより、クラシック音楽を愛するファンが増えてきている。アルゲリッチ氏が散歩をしていると、市民から手を振って声をかけられるという。音楽祭出演者からも、「大分や別府の聴衆はマナーがよい。他都市とは聴く姿勢が違う」との評価を得ている。

・「心のバランスを整えるのが音楽をはじめとする芸術の役割」と考え、親子を無料招待する「ピノキオコンサート」を単なるデリバリーコンサートではなく、「良心」や「ものごとの善悪」を大人とともに考える「心の教育」の機会としている。コンサートを聴いた子どもたちが、今では大人になり、音楽家になったり、運営に協力してくれるという。

・アルゲリッチ氏の思いである「音楽が社会にできること」の一つとして、病院等に将来有望な若手演奏家を派遣する「乗松記念コンサート」を開催している。

●県内外の各地域へも音楽の素晴らしさを発信

・アルゲリッチ芸術振興財団は、大分県下 16 ヵ所、福岡県北九州、韓国ソウルの計 18 か所の地域と連携して、音楽の素晴らしさや地域の芸術文化の豊かさを分かちあう場を広げている。たとえば、佐伯市では、新たに「ニューイヤーコンサート」が始まった。

・「どんなに大変でもめげずに理想を目指そう」という意味合いを込めて、行政・民間を問わず協力してくれる団体の代表者に、フランス語で「騎士」を意味する”Chevalier”（シュバリエ）になっていただき、財団と連携したコンサートなどを催している。

・音楽祭の効果だけではないが、県全体で音楽界の開催回数が増えている。また、「育てること」への意識が高まり、大分県の財団がジュニアオーケストラを立ち上げた。

●出演した若手音楽家への影響

・若手音楽家の育成に力を入れており、毎年、学生オーケストラを招いている。国内に同様の機会は少なく、学生にとって、一流の音楽家との共演は貴重な経験の場となっている。公開マスタークラスの参加者の中には、後に大きく羽ばたいた若手音楽家も多い。

・また、アルゲリッチ氏との共演に惹かれて参加していた若手音楽家が、音楽祭の理念に深く共感し、他の地域において同様の音楽祭を立ち上げた事例もある。

●「しいき アルゲリッチ ハウス」を通じた「サロン文化」の形成へ

・2013 年に第 15 回音楽祭を迎えるにあたり、アルゲリッチを顕彰する目的で「しいき アルゲリッチ ハウス」が、篤志家の寄附により、ビーコンプラザ北側の県有地に建築される予定である。サロンコンサートができるサロンを備え、音楽だけに留まらない「サロン文化」を育もうとしている。

・伊藤氏は、「ジャーナリズムや評論を含めて成立し発信できて初めて文化国家になる」、「今の日本で一番大切なのは、自分の耳と目で見極めることができる聴衆をつくること」と考えており、サロンを活用して、豊かな芸術鑑賞の機会を提供し、芸術の社会での役立ちを深め日本での芸術、教育の交流拠点を目指している。

◆混浴温泉世界

■ 取組の概要

●混浴温泉世界

2009 年、世界第２位の湯量を誇る温泉地である別府市で、別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」が開催された。鑑賞者はパスポートと地図を片手に温泉、港、商店街、神社などに点在するアート作品を巡りながら、別府という町が見せる様々な表情に出会った。

◇混浴温泉世界という考え方

大地から湯が湧き出し、窪みに溜まる。それは誰のものでもない。人はそれを慈しみ、自発的に守り維持する。
そして、ここに住む人も旅する人も、男も女も、服を脱ぎ、湯につかり、国籍も宗教も関係なく、武器も持たずに丸裸で、それぞれの人生のあるときを共有する。
しかし、つかりつづければ頭がのぼせ、誰もそのままではいられない。入れ替わり湯から上がり、三々五々、ここを去っていく。人は必ずここを立ち去り、再び訪れる。ゆるやかな循環。

●事業の内容

◇アートゲート・クルーズ（国際展）

・生まれ故郷を離れ、自分の人生そのもので多文化を生きてきた８組のアーティストが、会期前に別府を訪れ、自らの目で展示場所を決めた。明治時代のモダンなたたずまいを残す旧旅館、築 100 年の長屋、昭和初期の住宅兼迎賓館などの伝統的な別府を象徴する場所がアートゲートに変貌したが、前衛的な取組であったため、幅広い集客につなげることは難しい面もあった。

（出典：BEPPU PROJECT ＨＰ）

◇わくわく混浴アパートメント（国内展）

・別府市街地にある古い下宿アパート３棟を使って、様々なジャンルから集まった国内若手アーティストが滞在制作・展示を行った。大分県内の学校の美術部や文化サークルも参加。会期中も参加アーティストを募集し、様々な人物が日々出入りして、アパートはにぎやかに様変わりしていった。

（出典：BEPPU PROJECT ＨＰ）

◇ヘップダンス

・“INTERNATIONAL COLLABORATION”、“DANCE IN BEPPU CITY”、“DANCE×MUSIC” を３つの柱として、「混浴温泉世界」の名のように様々なダンスが BEPPU に出会い、BEPPU でしか生まれないダンスが様々な場所で展開された。国際的に活躍しているアーティストから初めて踊る人、そして通行人までもが、BEPPU のまちなかや公民館、そして温泉を劇場空間に変えた。

取組のキーパーソン NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事／アーティスト **山出 淳也氏** 	◇ **取組を始めたきっかけ** ・ 山出氏は大分市出身。1990 年代後半頃から、ベルリンやパリ、ニューヨークなど海外を中心に展覧会などを開催していた。忙しい日々であったが、欧米中心のマーケットのあり方自体に問題があり、別の違う可能性がないかと考え始めていた。 ・ 文化庁の派遣でパリにいた時に、インターネットのニュースサイトで「別府が面白くなってきている」という記事を読んだ。団体客を相手に商売をしてきた別府の地で、個人を対象とする路地裏散策をしているという内容が印象に残り、「一度会ってみたい」と 2004 年 10 月に別府を訪れ、活動のリーダーと交流。 ・ 大分市出身の山出氏は、幼少の頃に訪れた別府の賑わいの思い出が強く残っていて、中心市街地の衰退などを目の当たりにするなかで、「現代アート」で何かできないかと考えるようになっていった。

■ きっかけ～取組の経緯

●観光客の減少と中心市街地の衰退

・別府市は全国有数の温泉観光地として知名度が高いが、団体観光客が中心の旧来型の温泉観光に対応した産業構造であったことなどから、宿泊観光客の低迷が続いていた。近年は韓国や台湾などの海外に顧客を求めたが、アジア経済危機などの景気低迷により、駅前アーケード等に空き店舗が目立っていた。こうした中心市街地の衰退を目のあたりにした山出氏が、出身地に近く、幼少の頃に訪れた別府の活性化に貢献したいと考えるようになった。

●アートを行う団体「BEPPU PROJECT」を設立

・山出氏は、パリ滞在中に見たニュースをきっかけに、「現代アートを別府で」と考えるようになった。しかし、別府市の知人は１人だけであり、「別府でアートフェスティバルをしよう」と呼びかけて集まってくれた人はアートになじみがない人ばかりであった。反対する声も多かったが、「将来性がある」といってくれた方が１人いた。そこで、2005 年４月に「BEPPU PROJECT」を立ち上げた。

・現代アートを地域の人に観てもらいたい、体験してもらいたいとの想いから、アートイベントを市内の様々な場所で開催。年間総参加者数はのべ１万人を超えた。これらの活動を経て 2006 年２月に作成したマニフェストで「2008 年に国際芸術フェスティバルを開催」と宣言。

●２つの会議を経て、フェスティバルの考え方や文化交流拠点が形づくられていく

・「全国アートＮＰＯフォーラム」を別府に誘致し、2006 年 11 月に開催。山出氏は、全国のアート関係者にフェスティバルの構想を発表したが、内容はすべて「未定」。円卓会議での議論が、「混浴温泉世界」につながっていく。

・2007 年 10 月に創造都市としての別府の再生を考える国際シンポジウムを行政、地域団体と開催。山出氏は「星座型 面的アート・コンプレックス構想」を発表。有識者からの提言を受け、行政が空き店舗のリノベーション促進のための補助金制度を設けたことで、同構想は実現に向けて動き出す。

・2008 年には、別府市の中心市街地活性化協議会の一員として「platform 制作事業」を展開。中心市街地を多目的な交流の場ととらえ、空き店舗を再生・活用した「platform」を点在させることで、まちなかの回遊性を高めた。

●別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」を開催

・これらの活動の集大成として、2009 年春、65 日間に渡り「混浴温泉世界」を開催。県内外から多くの人が別府の地を訪れるともに、別府から広く情報を発信した。

・その成果と課題を踏まえ、「ベップ・アート・マンス」を 2010 年、2011 年と開催。2012 年秋には、「ベップ・アート・マンス」と「混浴温泉世界」を同時期に開催する。

■ 取組の成果

●国内外の多くのアーティストやアートＮＰＯと連携し「混浴温泉世界」を開催

・65 日間の開催期間において、国内外から約 170 組のアーティストが参加し、「混浴温泉世界」を開催した。観客動員数は県の内外から延べ９万２千人、有料来場者による直接的な経済効果は約５千万円であった。メディアでの報道が多くあり、その広告効果は約 28 億円に相当するとされる。

・作品の数点が現在も継続設置されている。そのうち１点は、平成 24 年度の中学校の美術の教科書に掲載された。

・混浴温泉世界をはじめ、これまでの現代芸術振興事業や、アルゲリッチ音楽祭、ハットウ・オンパク、まちづくり団体の活動が認められ、2009 年に別府市は、九州・沖縄地方で沖縄市に次ぎ 2 番目に文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を受けた。

●別府に滞在するアーティストが増加し、新たな交流やアートを生み出す

・「混浴温泉世界」の「わくわく混浴アパートメント」の会場として使用された「清島アパート」が、会期終了後も、地域やアーティストらの希望により、若手アーティストの居住・制作の場として存続することとなり、別府に住民票を移し、定住するアーティストが増加した。

・BEPPU PROJECT の活動としてもアーティスト・イン・レジデンス事業に取り組んでおり、これらの別府在住のアーティストのネットワークが、新たなアーティストを別府に呼び込んだり、新たなアートの展開を生み出すことにつながっている。

●ベップ・アート・マンスの開催へ

・「混浴温泉世界」を開催したことにより、「全国的な知名度や評価に比べて、地元の理解や参加者が少ないこと」や、「全国的な集客がまだまだ低いこと」が課題として浮かび上がってきた。

・そこで、2010 年、2011 年と、11 月に市民芸術祭「ベップ・アート・マンス」を開催するようになった。BEPPU PROJECT が広報協力や事務局代行などの支援を行うことで、小規模文化団体の発表機会を設け、市民の主体的な参画を促し、別府市における芸術文化の振興と活力あふれる実現をめざすものである。2010 年は 27 団体による 43 企画、2011 年は 57 団体による 87 企画が実施された。

・参加者のデータを分析すると、「混浴温泉世界」では 20 代・30 代が多く、県外客が６割で、別府市内は 14%にとどまっていたのに対して、「ベップ・アート・マンス」では 40 代・50 代・60 代の参加者も多くみられ、別府市が 49%となった。

・こうして、３年に１度大規模集客事業として開催する「混浴温泉世界」と、毎年開催する「ベップ・アート・マンス」といった枠組みが徐々に形作られ、2012 年秋に開催する２回目の「混浴温泉世界」の準備が進められている。

（出典：BEPPU PROJECT ＨＰ）

創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然資源

源泉数、湧出量、泉質数ともに国内随一の温泉郷

別府市には、別府八湯と呼ばれる８つの温泉エリアが点在する。日本一の湧出量と源泉数を誇り、全泉質 11 種類のうち 10 種類の泉質の温泉が湧いている。別府を訪れる外国人アーティストも別府滞在中に温泉を楽しんでいる。

●別府八湯

温泉は、医療、浴用などの市民生活はもとより観光、産業などにも幅広く活用され、古くから日本を代表する温泉地として賑わい、年間を通じて数多くの観光客が訪れている。

大地から立ちのぼる「湯けむり」は別府を象徴する風景として市民はもちろん観光客からも親しまれており、ＮＨＫが2001年に実施した「21世紀に残したい日本の風景」で全国第２位に選ばれている。

（出典：BEPPU PROJECT ＨＰ）

Point アーティストだけでなく、アートを目的に訪れる人にとっても自然や食は大きな魅力

海外では、大都市でも郊外にでると豊かな自然に恵まれています。そのため、海外のアーティストは、東京にいるよりも地方都市に出た方が安心しているように思われます。東京では演奏会を終えてホールを出てもビルに囲まれていますが、地方だとホールを出ると月や星が見られて、ゆっくりと余韻にひたれます。アーティストにとって、田舎は魅力的だと思います。

また、地方でコンサートを開催するにあたって、多くの聴衆を集めるためには、自然環境やおいしい食事、心地よく過ごせる旅館はとても重要な要素です。アルゲリッチ音楽祭の聴衆の中には湯布院温泉に足をのばす方もおられます。音楽に惹きつけられて別府を訪れた方が、周辺地域に関心をもつことで、大分県内や九州に波及効果が生まれればと思います。　（伊藤氏ヒアリング）

■ 文化資源

温泉保養地が生んだ独自の文化

古くから国際的な温泉保養地であった別府には、国内外の様々な著名人が保養に訪れ、様々な文化が流れ込んできた。別府市は戦災に遭わなかったことから、京都大学地球物理学研究所や別府市公会堂、別府郵便局電話事務室、富士屋旅館、竹瓦温泉など良質な近代建築が今も残っている。また別府八湯の各エリアには、鎌倉時代の一遍上人による開湯伝説をはじめ、様々ないわれのある場所がある。

●別府八湯ウォーク

別府八湯を地元住民ボランティアガイドが歩きながら案内するウォーキングツアー。
地元住民のおすすめスポットの解説を聞きながら、路地裏などを歩く。毎日ツアーが出ており、定番コースは予約不要で参加できる（10 名以上は要予約）。ガイドのディープな知識はもちろんのこと、流しの生演奏などでツアーを盛り上げる。長崎さるく博の企画のモデルとなったとされる。

（出典：別府八湯ウォークＨＰ（別府市観光協会））

●西洋音楽発祥の地

別府市の隣に位置する大分市は、1551 年に聖フランシスコ・ザビエルが、大分の地でキリスト教を布教して以来、教会、孤児院、病院、学校ができ、この地は日本最初のキリスト教文化の栄えた町となった。やがてこの町から美しい賛美歌の歌声が流れるようになり、1557 年の聖週間には日本人による聖歌隊ができ、オルガンの伴奏で賛美歌が合唱されたとされる。このことから、大分市は日本で初めて西洋音楽が演奏されたまちとされている。

（出典：大分市ＨＰ）

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

音楽や現代アートを担う民間団体

「別府アルゲリッチ音楽祭」や「混浴温泉世界」は、いずれも中心となったアーティスト自身が、アートを取り巻く環境を敏感に感じ取り、アートの役割や可能性を追求し、別府の地で国際レベルのイベントを開催することを目標に据え、他のアーティストや地域住民、行政や企業の協力を得ながら、「アーティスト主導」で動いてきたプロジェクトであり、キーパーソンが果たした役割が大きい。

●財団法人アルゲリッチ芸術振興財団

アルゲリッチ芸術振興財団は、芸術活動を人間教育のインフラとして、100 年先の未来を見据えて永続的に行う母体として 2007 年に設立された。マルタ・アルゲリッチの提唱する理念のもと、1994 年にマルタ・アルゲリッチと伊藤京子が日本で行ったマルタ・アルゲリッチ・チェンバーミュージック・フェスティバルを皮切りに、現在の別府アルゲリッチ音楽祭、ピノキオコンサート等の活動をより発展させていくことを目指している。
アルゲリッチ音楽祭の企画にあたっては、これから育ってほしいアジアの若手音楽家に刺激を与えるため、アルゲリッチ氏に協力を求め、共演を実現するようにしている。

●BEPPU PROJECT

BEPPU PROJECT は、世界有数の温泉地として知られる別府市を活動拠点とするアートＮＰＯ。「アートが持つ可能性を社会化し、多様な価値が共存する世界の実現を目指す」ことをミッションとしている。アートを「自由な物の見方や考え方を促す媒介」とし、BEPPU PROJECT を「アートと地域、市民をつなぐつなぎ手」と位置づけている。

2005 年４月に発足して以来、現代芸術の紹介や普及、人材育成に関すること（アーティスト･イン･レジデンス事業、BEPPU ART AWARD)、地域情報の発信（旅手帖 beppu の制作など)、ハード整備など様々な事業を実施している。また、アートと地域の経済活動をつなげる仕組みづくりとして、クーポン型金券「ＢＰ」を発行している。その活動の積み重ねが「別府現代芸術フェスティバル 2009『混浴温泉世界』」として結実した。その後も市民芸術祭「ベップ・アート・マンス」の毎年開催など、年間 200～250 件のアート事業を展開している。2012 年秋に「別府現代芸術フェスティバル 2012『混浴温泉世界』」を開催する。

Point　きちんと評価していくことが大切

アートが発展していくためには、たとえ相手に嫌がられたとしても「こういう作品は良くない」と言っていくことが大切だと考えています。仲間内であいまいに続けているだけではいけないと思います。BEPPU PROJECT では、バランスド･スコア･カードの手法を活用してNPOのマネジメントを工夫しようとしています。色々なデータをみると、成果が出ているところや、まだまだ改善が必要なところがみえてきます。　（山出氏ヒアリング）

●NPO法人ハットウ･オンパク

ＮＰＯ法人ハットウ・オンパクは、活動エリアである別府地域において温泉を核としたウェルネス産業を興すことで地域の活性化に寄与するために設立された。地域において様々なステークホルダーと協働しながら、地域資源の発掘や人材の育成を行う目的の取組「別府八湯温泉泊覧会」通称「オンパク」を 2001 年から実施している。いまでは地域内 200 もの事業者らと連携して幅広い活動を展開している。

BEPPU PROJECT の山出氏は、フランス滞在時に、インターネットを通じて「路地裏散策」や「オンパク」のことを知り、帰国した際に「オンパク」のスタッフなどと交流を深め、やがて別府で活動を始めることとなった。

■ 文化芸術を支える住民層

別府アルゲリッチ音楽祭の開催を支えるボランティアスタッフ

別府アルゲリッチ音楽祭の開催にあたっては、ボランティア･スタッフが大きな役割を果たしている。また、レストランや商店、町の人々のアーティストを迎え入れようとする地域の雰囲気が、アーティストに心地よさをもたらしている。

別府市は、専門的・技術的職業従事者の割合が 7.3%であり、地方圏の平均（6.2%）と比べて高い。なかでも、写真業などの創造的職種に従事する人が極めて多く、創造的な活動を支える住民層が厚いことがうかがえる。

●別府アルゲリッチ音楽祭　ボランティア・スタッフ

別府アルゲリッチ音楽祭のおもてなしは、地域に根ざした 200 人以上のボランティア・スタッフによるものである。音楽祭はたくさんの温かい心によって支えられている。ボランティアの多くは、当初は音楽には興味がなく、「地域のためになるなら」という動機で参加するが、ボランティアとして関わることで自然と音楽に親しむようになっていくとされる。日本国内の音楽祭のなかで、商業主義と一線を画す地域密着型の音楽祭の特長として、ボランティアは欠くことのできない存在、ということがここでも証明されていた。

Point　受け入れられていると感じることが大事

アーティストに限ることではありませんが、人は「受け入れられている」と感じられることがとても大事だと思います。公園を歩いていて、名前を呼ばれるとうれしいものです。直接、言葉を交わすことはなくても、受け入れられていると感じる心地よさや人との交流が大事です。音楽祭の出演者でもボランティアとの交流を楽しんでいる方がおられます。　（伊藤氏ヒアリング）

◆コミュニケーションの場

■ コミュニティ・交流の場

様々な分野で様々な団体が活動し、交流の場が豊富にある

別府市では、観光、アートなど様々な分野の団体が活発に活動しており、platform などを活動拠点として、様々な講座やワークショップ、路地裏ツアーなどが多数開催されている。平成 25 年度に整備される「しいき アルゲリッチ ハウス」には、新たな「サロン文化」を育むことも目的としてサロンが整備される予定である。

●ベップユケムリ大学

ベップユケムリ大学では、「別府を大切に思う仲間を増やし、共に、魅力ある地域づくりを行う」ことを目的に、ＮＰＯ法人 別府八湯トラスト、APU さくらまちラボ、ＮＰＯ法人 BEPPU PROJECT、ＮＰＯ法人ハットウ・オンパク、ＮＰＯ法人べっぷ未来塾、社団法人別府市観光協会、ＮＰＯ法人自立支援センターおおいたの７団体が特色を活かした様々な講座を開催している。

●しいき アルゲリッチ ハウス（2013 年 5 月完成予定）

平成 25 年に第 15 回音楽祭を迎えるにあたり、アルゲリッチを顕彰する目的で「しいき アルゲリッチ ハウス」がビーコンプラザ北側の県有地に平成 25 年に建築される。音楽祭の基本理念「育む」「アジア（出会いの場）」「創造と発信」の実現に向けて、人々が１年中、アルゲリッチの音楽やコンセプトに触れることができるようミュージアムの機能を備えた施設を建設し、併せて別府アルゲリッチ音楽祭の歴史を後世に伝えていく。

■ 街のにぎわい

温泉の中に暮らしが息づくまち

市内には 100 か所を超える公共温泉があり、地元住民も日常的に利用している。そのため、観光客と地元客との交流がある。公共温泉の２階には公民館が設けられているところもあり、公共温泉はコミュニティの拠点となっている。

●公共温泉（共同湯）

市内には 100 か所を超える公共温泉があり、ほとんどの施設は一回 100 円以下で入浴を楽しむことができる。常連客がいて、湯船のなかで入る位置が決まっているなど、様々なユニークなエピソードがある。

（出典：別府市ＨＰ）

（出典：別府八湯ポータルサイト
「別府ナビ」ＨＰ）

◆創造的活動の支援環境

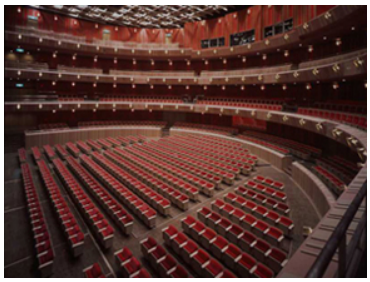
■ 活動の場

アーティストの創作意欲を掻き立てる様々な空間

フィルハーモニアホールは、アルゲリッチ氏をはじめとする一流のアーティストと若い音楽家や聴衆とが出会う場（Meeting Point）を演出している。
また、中心市街地の活性化を目的として市街地に埋め込まれた platform では様々な文化交流イベントが展開され、これまでにない人の流れを生んでいる。また、清島アパートなど、アーティストが居住・長期滞在する機能が整っている。

●フィルハーモニアホール

日本でも珍しい最大 1,200 名収容の馬蹄型のホールで、非日常的な空間となっている。ビーコンプラザ内にあり、別府アルゲリッチ音楽祭の主会場となる。
クラシックコンサートや講演会、演劇会などジャンルを問わず、多目的に利用されている。



（出典：B-CON PLAZA
別府国際コンベンションセンターＨＰ）

●platform

中心市街地の活性化を目的として、「別府市中心市街地活性化協議会」が、所有者の協力をもとに空き店舗や空き家などをリノベーションし、活用しているスペース。別府のあちこちに温泉があるように、まちなかにたくさんの platform が点在している。地域住民や観光客など、毎日様々な人が訪れて交流している。アートスペースや職人の工房、ブックカフェや地域産品を扱うセレクトショップ、３世代交流サロンなど、多様な文化の交流拠点として８ヶ所が運営されている。

（c）矢野紀行（Nacasa&Partners Inc.,）

（出典：BEPPU PROJECT ＨＰ）

●清島アパート

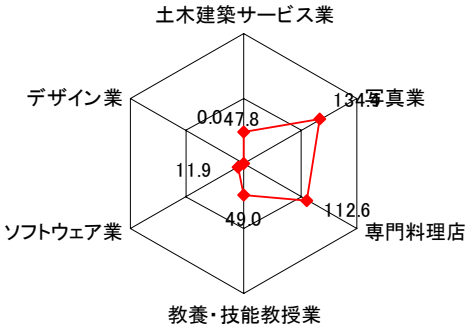
戦後すぐに建てられたアパート。別府現代芸術フェスティバル２００９「混浴温泉世界」の「わくわく混浴アパートメント」の会場として使用された。会期終了後も、地域やアーティストらの希望により、若手アーティストの居住・制作の場として存続している。１階はオープンアトリエやプレゼンテーションルームとして、２階は居住スペースとして活用されている。

（出典：BEPPU PROJECT ＨＰ）

鹿児島県　霧島市

（牧園地域、霧島地域など）

都市の基本データ※1

人口※2	127,487 人	クリエイティブな人材が携わる典型的な職種の従事者数割合＊6
高齢化率※2	22.3%	
合計特殊出生率※3	1.63	
人口の社会増減率※2※4	0.32%	
専門的・技術的職業従事者の割合※2※5	6.3%	
交通	＜地域へのアクセス＞ 羽田空港から飛行機で鹿児島空港へ約 1 時間 40 分 鹿児島空港から車で、約 25 分	

気候条件※7	主な地域資源
気候は温暖多雨であり農作物の生育に適している一方，梅雨や台風時には平野部・山間部いずれも災害が発生しやすい気候・環境である。南部の海岸沿いでは一部無霜地帯もある。	・霧島山 ・霧島屋久国立公園 ・高千穂峰 ・霧島温泉郷 など

■ 地域における創造的な取組の事例

●霧島国際音楽祭

○霧島アートな旅

○湧水“まちなか”アートフェスタ

など

※1　霧島市の値
※2　国勢調査（平成 22 年（専門的・技術的職業従事者の割合については平成 17 年））
※3　全国平均は 1.31
　（平成 15 年～平成 19 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況（人口動態統計特殊報告））
※4　三大都市圏を除く平均値は 0.04%（平成 17 年～平成２２年）
※5　三大都市圏を除く平均値は 6.2%（平成 12 年）⇒6.2%（平成 17 年）
※6　平成２１年経済センサス
※7　霧島市ＨＰ

地域における創造的な取組の代表的な事例

◆霧島国際音楽祭

■ 取組の概要

●取組のテーマ

国内外から一流の演奏家を招へいし、昼間は講習会、夜はコンサートを開き地域住民にも楽しんでもらう。

海外に留学する余裕のないプロを志す音楽学生や若手音楽家に、トップレベルの講習を行い、レベルアップにつなげるとともに、地域と音楽家の交流を深め、クラシック音楽を核にした地域づくりを行う。

●取組の内容

◇国内外のトップレベルの音楽家を招へいした講習会の開催

・プロを目指す音楽家の卵を対象に、霧島の地で約２週間のあいだレッスンを受けられる講習会「マスタークラス」を開催している。

・受講生は期間中、霧島市内のホテルや旅館に投宿し、講師や地域と交流しながら練習や発表に取り組む。

◇演奏会の開催

・約２週間の音楽祭の期間中は、霧島市の音楽ホール「みやまコンセール」をはじめとする鹿児島県内各地でほぼ毎日クラシックのコンサートが開催される（第 30 回音楽祭では 14 回）。

・音楽ホールを舞台にした大規模なコンサートだけでなく、地域の学校やホテルのロビー、市役所などに少人数の音楽家が出向く、より観客との距離の近いミニコンサートやワークショップも数多く催されている（第 30 回音楽祭では 32 回）。

◇地域との交流

・取組を支える地域の組織「友の会」が主体となって、音楽家と受講生をもてなすランチパーティや一般市民も参加するビュッフェパーティを行っており、外部の音楽家と地域住民の貴重な交流の場となっている。

・演奏会の中には、地元のオーケストラと合奏するプログラムもあり、地域内外の創造的人材同士が刺激を与えあっている。

取組のキーパーソン
牧園友の会会長
池田　政晴　氏

◇　主な経歴

・　現在では、地域で混声合唱団グリーンエコーを主宰するとともに、霧島国際音楽祭牧園友の会会長をつとめている。

◇　取組に参加したきっかけ

・　地域のユースホステルで開催された第 1 回目の音楽祭に身近で触れたのが、霧島国際音楽祭との関わった最初のきっかけ。
・　スタート以来、赤字状態が続いていた音楽祭を地域で支えるために第７回から地域の有志を集め、「友の会」を設立し、正式に音楽祭に関わっている。
・　地域で三団体ある音楽祭の「友の会」のなかでも、牧園友の会は最も音楽祭と関わりが深く、もてなしのイベントの企画・運営に関わっている。

取組のキーパーソン
みやまコンセール　舞台監督
瀬戸口　浩　氏

◇　主な経歴

・　霧島市出身。大学を卒業後、大学等で教鞭を執った後、帰郷。現在も各地でオペラ・演奏会活動を活発に行い、ＮＨＫ鹿児島児童合唱団の指導や地元コンクールの審査委員長もつとめている。
・　みやまコンセールの整備時から施設に関わり、現在では企画主幹をつとめている。

◇　取組に参加したきっかけ

・　ジェスク音楽振興会等と協力し、音楽祭のプログラムづくりやコンサート当日の運営・現場指揮に関わっている。

■ きっかけ～取組の経緯

●ゲルハルト・ボッセ氏に対する講習会の開催依頼

・1976 年に、鹿児島短大の野村三郎教授が、訪日したゲルハルト・ボッセ氏に日本の音楽学生に対するレッスンを依頼したことが、取組が始まるきっかけである。

・ボッセ氏は 1961 年に初来日して以来、訪日経験が豊富であり、日本の音楽学生やマナーの良い聴衆を高く評価していた。そのため自らが毎年霧島を訪れ、滞在型の講習会を行うことを逆提案した。

・その後 1977～78 年の鹿児島短大における２回の講習会で感触を確かめた後、1980 年より、牧園町（当時）を中心に、音楽祭・講習会を開催した。開始当時の講師はボッセ夫妻とチェリストのアダルベルト・スコチッチ氏の３名のみの小規模な取組であった。

●友の会、財団法人ジェスク等の多様な主体の参画による取組の深度化

・演奏技術だけでない全人格的な教育をコンセプトに、自然のなかで講師と音楽学生とが寝泊まり、生活を共にしながらステージマナーや練習の仕方など基礎的なことまで教える講習会、演奏会を行っていた。

・当初は民間の有志と旧霧島町、旧牧園町で行われていた取組であるが、1985 年の第 6 回音楽祭より、演奏会の企画・開催に専門的なノウハウを有する財団法人ジェスク音楽文化振興会が主催者となり，更に第８回より鹿児島県が主催者に加わるなど、取組主体が多様化し、音楽祭も大規模化した。

・取組の開始当初は経営的に苦しく、霧島国際音楽祭は赤字状態が続いていたため、一旦取組に参加したジェスクが離脱を検討するなど、継続の危機を迎えたこともあったが、行政が予算を絶やさず、また地域住民が「友の会」を組成し音楽祭を支援するなど、地域ぐるみの支援体制ができたこともあり、危機を乗り越えることができた。

●みやまコンセールのオープンによる音楽祭の黒字化

・1987 年以降、鹿児島県とジェスク音楽文化振興会が共催しているが、音楽祭の会場は地域のホテルのロビーやバンケットルームが主であり、演奏、集客のうえで課題を有していた。

・ボッセ氏ら講師陣と地域の熱意により、1994 年に鹿児島県がコンサートホール「霧島国際音楽ホール（みやまコンセール）」を整備し、活動拠点の課題を解決した。

・みやまコンセールのオープン以降、音楽祭への参加人数が拡大し、単年度黒字を達成しており、第 21 回音楽祭（2000 年）では参加者が１万人を突破している。

■ 取組の成果

●音楽祭やクラシック音楽の地域への定着

・霧島国際音楽祭は 1980 年の第１回より毎年開催されており、2011 年までに 32 回継続している。地方圏においてこれ程長期間にわたり続いている音楽祭は国内でも例がない。

・取組の継続にともない、地域における音楽祭の認知度が上昇している。また、音楽祭をきっかけに地域の小中学校に吹奏楽部が創設されるなど、クラシック音楽に親しむ土壌が醸成されている。

●取組の地域への拡大

・取組を支える「友の会」は、牧園、霧島、鹿児島の３か所に拡大し、イベントや音楽家を支援する市民も広がりをみせている。

・取組への関わりが当初薄かった地域のホテル・旅館も、講師や音楽学生、来訪する観客のために部屋を確保するなど協力関係を構築している。

●交流人口の拡大

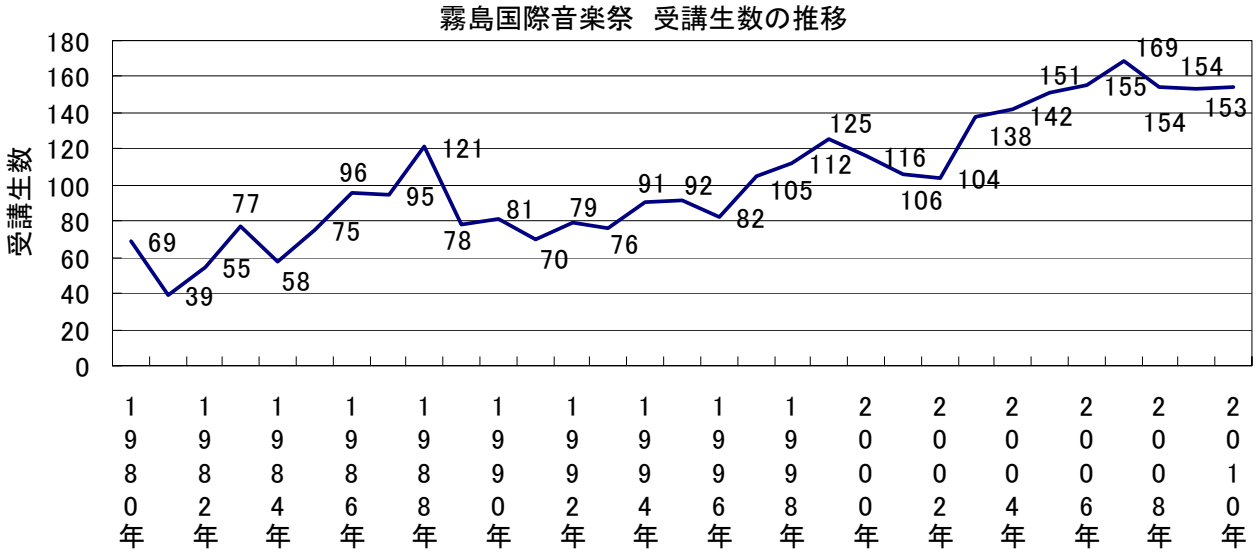
・開始初年度に 673 人であった音楽祭の参加人数は回を重ねるごとに増加傾向を示し、みやまコンセール整備後の 2000 年以降は、毎年１万人以上が参加する交流イベントに成長している。

・鹿児島県内はもとより、東京や大阪など大都市圏から毎年訪れる音楽祭ファンも多い。

●第一線の音楽家の輩出

・取組開始から 30 年以上が経過し、当初 50 人程度だった受講生は毎年約 150 人が参加するほどに拡大しており、延べ 3,300 人以上の音楽学生を受講生として受け入れている。また初期の講習会で受講生として参加した音楽学生が第一線の音楽家に成長している。

・親子２代で受講生として参加したり、口コミや紹介により霧島国際音楽祭に参加申し込みをしたりするなど、創造的人材同士のネットワークにより音楽祭の評判が高まる良い循環が形成されている。



創造的人材を惹きつける地域の魅力

◆地域独自の資源

■ 自然環境

霧島の自然の美しさと温泉の存在

大都市圏からアクセス性が高いにも関わらず、雄大な自然に包まれたなかで音楽活動に携われる霧島の自然環境は、ザルツブルク等のヨーロッパで成功しているリゾート近接型の音楽祭とよく似た地域条件とボッセ氏に絶賛されている。
また、国内有数の温泉地帯である霧島温泉は、国内外から訪れる講師、受講生ともに評判がよく、音楽祭の期間中、温泉に浸かることができる宿に滞在する者も多い。

●霧島温泉

霧島温泉は「日本初の新婚旅行」として、坂本竜馬も滞在したといい、霧島市に観光客や定住希望者を集めるうえでの大きな地域資源になっている。
近年では観光協会が主体となって「入湯霧札」を発行し、一枚のチケットで複数の温泉施設を利用できるなど、よりお得な湯めぐりを楽しめる工夫を行っている。

■ 文化資源

豊富な歴史資源の存在

霧島市は古い歴史を有しており、天上界から神が地上に降り立ったといわれる「天孫降臨」の第一歩を記した高千穂峰や、６世紀にまで創建がさかのぼる霧島神宮が立地しているなど、日本の建国神話とゆかりが深い土地柄である。
また、鹿児島県は日本で初めてキリスト教が布教された土地であり、鹿児島市内には鹿児島カテドラル・ザビエル教会など歴史のある教会も立地している。
霧島国際音楽祭では、クラシック専門の音楽ホールだけではなく、霧島神宮やザビエル教会等をコンサート会場として活用しており、特色ある歴史資源を取組に活かしている。

●霧島神宮

現在の社殿は 1715 年に建設されたもので、築 300 年を経過した朱塗りの本殿、拝殿等は国の重要文化財の指定を受けている。
霧島国際音楽祭でも「かがり火コンサート」として、神宮の境内でコンサートが開かれ、毎年約 1500 人が来場するメインイベントの一つとなっている。

◆人的資源

■ キーパーソンの存在

霧島の地で取組を始めたキーパーソンの存在

霧島という土地に、音楽祭を成功させる土壌を見てとったボッセ氏や、彼に話を持ちかけた鹿児島短大の野村三郎教授の存在と先見の明が果たした役割は大きい。
ボッセ氏の有するネットワークは、特に取組初期の段階で、国内外の一流の人材を講師として音楽祭に招へいするうえで重要な役割を果たし、ジェスク音楽振興会にうまく事務局機能を引き継ぐことができた。

■ 文化芸術を支える住民層

友の会が主体となった「おもてなし」

一流の音楽家が作り上げたものを受け身で享受するのではなく、地域の側で取組を作り上げていく体制が地域で構築された。そのため、レベルの高い音楽祭を一度や二度単発的に開催するのではなく、30 年以上継続させることができた。
現在、牧園、霧島、鹿児島の三地域で友の会組織が活動しているが、牧園友の会では音楽家たちと交流するビュッフェパーティの主催、鹿児島友の会ではバスのチャーターによる鹿児島市内からの観光客の移動手段の確保、霧島友の会では運営の全般的な人的サポート等、それぞれの立地や状況に応じた「おもてなし」を行っている。

●ビュッフェパーティ

音楽祭が霧島にしっかりと根を下ろすためには，地元住民と音楽祭の交流が大事とはじめたビュッフェパーティは多くの婦人グループが参加する。また，ランチは練習の合間にホテルの軽食などを音楽家や受講生に対して「食生活が単調になり気の毒だから」と友の会婦人グループが交互に提供している。このように現在では音楽家とコンサートの聴衆，地域の人たちが交流を深める場となっており，地域のもてなしの場は，霧島を訪れる創造的人材に最も深い感銘を与えている。

Point ビュッフェパーティにおける住民と音楽家の交流

ビュッフェパーティのはじまりは、婦人会の有志が「風の中の交流会」と銘打って、音楽家の皆さんに手作りの料理をふるまったのがきっかけでした。世界中から音楽家の先生が来てくれたのがうれしかったのが動機になっています。
評判がとてもよく、だんだん大規模になって、一時期は 1,000 人くらい参加する大パーティになったりもしましたが、あまり規模が大きすぎても主目的の「交流」がやりづらくなるので、最近はコンサート参加者を中心にした少し静かなイベントに戻すようにしています。　（池田氏ヒアリング）

音楽家とリスペクトしあう関係を築いた地域住民

多くの音楽家が「講師」という肩書で参加する霧島国際音楽祭では、東京での日常の活動では、所属事務所や音楽ジャンルの関係上、なかなかできない組合せのプログラムが実現している。

また、聴衆となる地域の住民は音楽家に対するリスペクトの念が強く、東京の観客相手では受け入れられないような実験的な曲目や、知られざる名曲を紹介できる舞台をつくることが可能になっている。特に鹿児島県は日本で初めて西洋文明に接した地域であり、西洋文明の受容と定着が国内の他地域に先んじていることも取組の成功に寄与している。

◆コミュニケーションの場

■ 街のにぎわい

■ 宿泊施設、レストラン

バックヤードとしての温泉街

霧島市は日本有数の温泉地であり、音楽祭の期間中滞在する音楽学生の多くは温泉街の宿泊施設に滞在する。

宿泊施設は数多く存在するため、彼らが滞在する施設が足りなくなることはないものの、温泉街の旅館ではシングルルームの数が少ない。そのため、他の受講生と同じ部屋に滞在するケースも多い。同室での雑魚寝は、日常のレッスンではなかなか得られない、同じ志を持つ者同士の濃い人間関係を築くきっかけとなっている。当初は温泉街のホテルや旅館は、音楽祭に対しあまり積極的に関わっていなかったものの現在では温泉旅館協会が協力して、一般よりも安い価格で音楽学生が滞在できるような体制を構築している。

また、遠方から来る聴衆が宿泊・滞在する際にも温泉街は活用されており、集客を支えるバックヤードとしての機能を果たしている。

Point　音楽祭期間中の受講生の滞在

温泉旅館協会に相談をしたら、昔は、繁忙期の夏のシーズンになかなか協力してくれるところも少なかったのですが、音楽祭が地域に定着するにつれ、ほぼすべての旅館やホテルが協力してくれるようになっています。今では、音楽学生たちに、それぞれのホテルや旅館の値段を提示して、自分達の経済力に合うところで、選ぶようにしています。

ただ、温泉街なので、シングルルームは、ほとんどない。5～6人の大部屋で滞在する受講生が多いようです。雑魚寝でも良ければ、結構安く滞在可能です。とにかく、選択肢を広くして、受講生達に自分たちで選んでもらっています。もっと利口な子たちは、来年行くと決めたら、ビジネスホテルもシングルルームがいくつかあるので、そこを１年前から押さえたりしていますが。

（瀬戸口氏ヒアリング）

◆創造的活動の支援環境

■ 行政の取組

トップが代わっても予算を確保し続ける行政の存在

鹿児島県は文化政策に熱心であり、県知事が交代しても霧島国際音楽祭に対しての予算を確保し続けていることが、取組が継続する大きな要因の一つになっている。
また、霧島市も市長の文化政策に対する関心が強く、音楽祭の開催やみやまコンセール整備に熱心に働きかけた経緯があり、現在の音楽祭のあり方に大きな影響を与えた。
また、霧島国際音楽祭だけでなく、霧島のアートにスポットを当てた観光キャンペーン「霧島アートな旅キャンペーン」（2012.3.20～6.30）を開催している。

●霧島アートな旅キャンペーン

野外現代美術館「霧島アートの森」の現代美術、「みやまコンセール」の音楽、霧島温泉郷等に展示された芸術作品を鑑賞しながらの散策や周辺施設での体験プログラム、期間限定のランチ・スイーツなどを組合せた観光キャンペーン。霧島の豊かな自然のなかで芸術を五感で体感できる貴重な機会になっている。

■ 企業の取組

地元の旅館・ホテルによる協力体制の構築

音楽祭を継続開催するだけでなく、より積極的に取組の情報を外部に発信することがテーマになっており、地元のマスコミや新聞社と連携して情報発信に努めている。

■ 活動の場

みやまコンセールの存在による活動・雇用の拠点確保

雑音が多く、音響面でも適切とはいえないホテルのバンケットルームで活動を続けていたボッセ氏らにとって、ホール整備は悲願であった。槇文彦設計によるみやまコンセールは、大ホールの残響時間が 1.6～1.8 秒とクラシック音楽の演奏に最適な環境を整えている。
霧島国際音楽祭の期間外にも、地域の楽団の演奏会の場としてはもちろんリハーサルや会議の場として活用されている。
また、施設では、オーディションで選ばれた「みやまコンセール協力演奏家（約 70 名）」等の県内演奏家に県内各地での活動の場を多く提供しており、施設の存在は、創造的人材が音楽関係の仕事をする場を確保することにもつながっている。

●みやまコンセール

大自然のさなかに立地しているみやまコンセールは、メインの音楽ホール（770 席）のほか、小ホール（200 席）、リハーサル室群を含むフレキシビリティに富んだ演奏用空間として生み出され、地域内外の音楽家から高い評価を得ている。
都会にありがちな、外部から閉じたコンサートホールではなく、施設空間そのものがまわりの風景と一体となり、自然のなかで音楽鑑賞をするのにふさわしい印象を与えることに成功している。

◆利便性・安心感

■ 交通・通信の利便性

大都市圏からのアクセス性の高さ

霧島市やみやまコンセールは鹿児島空港からのアクセスが良く、東京や大阪などの大都市圏から訪れやすい環境に立地している。そのため音楽祭はもちろん、普段から気軽にゴルフや温泉などに訪れる観光客も多い。
羽田―鹿児島空港は一日に 20 便以上の飛行機が発着しているため、特に東京からは、気軽に訪れやすい環境にあると言える。

3-2　文献調査実施事例

地域	取組の名称	定住自立圏
北海道　夕張市	ゆうばり国際ファンタスティック映画祭	
北海道　東川町	東川町国際写真フェスティバル	○
宮城県　仙台市	せんだいメディアテーク	
秋田県　大館市	ゼロダテ	○
山形県　山形市	山形国際ドキュメンタリー映画祭／山形カロッツェリアプロジェクト	○
山形県　鶴岡市	庄内映画村	○
福島県　いわき市	いわき芸術文化交流館アリオス	
茨城県　水戸市	水戸芸術館「カフェ・イン・水戸」	
茨城県　取手市	取手アートプロジェクト	
茨城県　守谷市	アーカスプロジェクト	
山梨県　甲府市	こうふのまちの芸術祭	
群馬県　高崎市	高崎映画祭／高崎フィルムコミッション	
群馬県　中之条町	中之条ビエンナーレ	
富山県　南砺市	利賀フェスティバル	
富山県　氷見市	アートNPOヒミング	
石川県　輪島市	NPO法人輪島土蔵文化研究会	
福井県　あわら市	金津創作の森	
福井県　越前市	武生国際音楽祭	
長野県　松本市	サイトウ・キネン・フェスティバル松本	
長野県　飯田市	オーケストラと友に音楽祭	○
長野県　小布施町	小布施流まちづくり	
岐阜県　美濃市	美濃和紙あかりアート展	
愛知県　西尾市	三河・佐久島アートプラン21	○
滋賀県　長浜市	黒壁のまちづくり	○
滋賀県　高島市	風と土の工藝	
滋賀県　近江八幡市	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA	
京都府　舞鶴市	MAIZURU　RB	
兵庫県　豊岡市	カバンストリート	○
兵庫県　丹波市、篠山市	丹波の森国際音楽祭「シューベルティアーデたんば」	
鳥取県　倉吉市	アザレアのまち音楽祭	○
広島県　三次市、庄原市	灰塚アースワークプロジェクト	
広島県　尾道市	AIR Onomichi	
山口県　美祢市	秋吉台国際芸術村	
徳島県　神山町	神山アーティスト・イン・レジデンス	○
佐賀県　佐賀市	まちの間プロジェクト	
熊本県　熊本市	熊本暮らし人祭り　みずあかり／熊本市現代美術館	
大分県　由布市	湯布院映画祭	
鹿児島県　鹿屋市	柳谷集落（やねだん）迎賓館事業	○
沖縄県　那覇市	桜坂劇場	
沖縄県　沖縄市	スタジオ解放区／コザ銀天大学	

北海道　夕張市

人口	10,922人
高齢化率	43.8%
合計特殊出生率	1.33
社会増減率	−9.3%
専門的技術的職業従事者割合	4.1%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：市民が主体となった映画祭
名称：ゆうばり国際ファンタスティック映画祭
実績：夕張市の財政難により廃止の危機に瀕した映画祭を、ＮＰＯ、市民が引き継ぎ、新しい取組として再生した。

■きっかけ～夕張市の財政難

○炭鉱閉鎖に伴う過疎高齢化に対応するため、「炭鉱から観光へ」をスローガンに観光振興を目的に市主導で映画祭が開催されていた。
○夕張市の財政難により、2006 年を最後に映画祭が中止されたが、参加経験のある映画人を中心に継続要望、支援の申し出が相次いだ。
○市民の有志がＮＰＯ法人ゆうばりファンタを設立し、寄付、協賛金を集め、2008 年から市民主体の取組として継続開催している。

■現在～市民の映画祭として再生

○著名人を招くだけでなく、若手監督の発掘や、古い映像の発掘に力を入れるなど、予算は縮小しても質の高い映画祭となっている。
○地域住人がゲストを石炭バーベキューでもてなす「ストーブパーティ」や、集まった映画人が夜を徹して「とても他で言えない」話を繰り広げる「ディープコアナイト」など、住民と映画人が一体となり、手作り感溢れるイベントを作り上げている。
○閉館後、民間事業者からも買い手のつかなかった市民会館をＮＰＯが運営し、市民の活動の場を確保するなど、映画祭の継続以外にも地域再生の取組が進められている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■芸術分野に情熱的に取り組んだ首長

地域の主幹産業であった炭鉱の閉鎖に強い危機感を抱き、文化政策を重視した中田市長（当時）の力が大きい。上演する映画や招待する映画人を厳選し、夕張の地で「本物」を生み出し続けたことにより、映画人に「夕張ファン」が生まれ、映画祭中止の発表の際には多方面から継続要望や支援の申し出が寄せられた。

■映画を理解し、愛する住民層

炭鉱時代から映画好きの土壌があり、一部の映画人が集まる通常の映画祭とは異なり、地域の住民も映画や映画人との触れ合いを楽しんでいる。
住民との距離感の近さやもてなしの心は映画人を惹きつける要因となっている。

■地域のキーパーソンの存在

行政主導で取組が行われていた頃から、市民の有志からなる「ゆうばりシネマ・サポーターズ」が協賛企画で自主映画上映会を開催するなど、地域が主体的に映画祭に参加していた。
イベントを企画・実行する力を地域が持ち、ＮＰＯ代表の澤田直矢氏等のキーパーソンが地域で育っていたことも、市民の取組として映画祭が再生する大きな成功要素となった。

■夕張市の現状に対する危機感

予算が大幅に縮減されるなかで、夕張再生のシンボルプロジェクトを成功させなければならないという危機感が関係者間で共有されたことが、手作りのイベントを映画祭の中心に据えるなどの企画上の工夫・努力につながった。

■立地、インフラ等のハンディキャップ

都市圏からの移動距離の長さや、宿泊施設の少なさといった、夕張市がもともと有していたハンディキャップを逆手にとり、夕張駅までの特別列車を仕立てたり、著名な映画人でも相部屋で滞在させたりするなど、イベント参加者同士の絆を深める仕掛けづくりを行って、映画祭の魅力を高めている。

北海道　東川町

人口	7,859人
高齢化率	28.0%
合計特殊出生率	1.18
社会増減率	8.0%
専門的技術的職業従事者割合	5.4%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：写真をテーマにした街おこし
名称：東川町国際写真フェスティバル、全国高等学校写真選手権大会（写真甲子園）
実績：自治体としては我が国初の条例に基づく写真の町宣言を行い、以来毎年国際写真賞の授賞をはじめとする写真イベントを開催し、内外から高い評価を得ている。

■きっかけ～「写真の町宣言」

○昭和 60 年に一村一品運動の一環として、町長発案で「写真の町宣言」を条例化した。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりを目的としている。
○これと同時に国際写真賞「東川賞」を制定。国際写真フェスティバルを毎年開催している。
○平成 6 年からは、全国の高校写真部やサークル等を対象にして行われる写真大会「写真甲子園」を開催している。

■現在～写真をきっかけとした移住・交流

○約１か月の会期中、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム（ギャラリートーク）、写真家たちと出会う各種イベント、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントが多数行われる。
○国際写真フェスティバルがきっかけで東川町に移住する住民もみられ、東川町内での撮影やイベントが取り上げられる機会が年々増えているほか、町内の写真家がゲストとして写真イベントに参加する機会も増えている。
○写真甲子園は全国から 400 校以上が参加するハイレベルな競技の場となっており、高校生からプロの写真家になるための登竜門的存在となっている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■インスピレーションを刺激する自然景観

東川町は大雪山国立公園を有する大自然に恵まれた町であり、多くの写真家の被写体となってきた。写真甲子園では高校生達が数日間町に滞在し、決められたテーマに沿った写真をこの恵まれた環境の下で撮影するという、ここでしかできないイベントになっている。
また、自然景観に恵まれているだけでなく、キタキツネなどの野生動物も多数生息しており、自然の豊かさをきっかけに町に移住する研究者もいる。

■国際写真フェスティバルを支える市民の存在

当初は町主導で行われていた写真フェスティバルであるが、平成 3 年の町長選をきっかけに町民も含めたまちづくり組織「東川町〈写真の町〉実行委員会」に運営を委ねた。その結果、町の財政負担が軽減されるとともに、町内外の交流を促進する動きが生まれている。
また、写真甲子園に参加する全国の高校生達は、期間中東川町の有志の住民宅にホームステイしており、各家庭や地元の高校生と交流を行っている。

■前例のないことに取り組む役場の気風

取組に関わる東川町役場では「前例がない、他でやっていない、予算がない」の３つのないからの脱却を掲げ、新規プロジェクトに果敢に取り組む気風を有している。また、取組を進めるにあたり、国の補助金や財団の助成金を積極的に活用するなど、創意工夫をもって予算獲得に取り組んでいる。

■プロと直接触れあえる写真甲子園

写真甲子園の審査員はプロの写真家や写真専門誌の編集長がつとめており、取組の一環として、審査委員の写真家らが講師を務める作品鑑賞会やセミナー等が開かれている。日頃接することのない著名な写真家に直接教えてもらえるということが、写真甲子園に参加する高校生にとって励みになっている。

宮城県　仙台市

人口	1,045,986人
高齢化率	18.3%
合計特殊出生率	1.16
社会増減率	0.6%
専門的技術的職業従事者割合	6.5%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：様々なメディアを通じた情報の交流
名称：せんだいメディアテーク
実績：仙台市のアート活動の中心的施設。定禅寺ストリートジャズフェスティバルや光のページェントといった様々な取組を支援。

■きっかけ～芸術文化施設設置の陳情

○宮城県芸術協会が、大型ギャラリーを備えた美術館整備に関する陳情書を、政令指定都市になったばかりの仙台市に提出したこと（1989 年）が端緒となる。

○施設の基本構想が策定された後、「わいわいトーク」と題する市民懇談会や、複数回の開館前イベントを通じて市民の意見を取り入れながら、ギャラリー、図書館、映像メディアセンター等の複合的な機能を有する芸術文化施設として設計競技を開催。伊東豊雄氏が選定され、従来にない特殊な建築構造などが国際的に高い評価を得ている。

■現在～仙台市の一大クリエイティブ拠点

○市民団体や大学がセミナーや展覧会を開催するなど、市民に活発に利用されており、年間利用者は約 100 万人に達している。

○単発のイベントやセミナーに利用されるだけでなく、毎年行われる仙台短篇映画祭の開催の場として使われるなど、地域における継続的な創造的活動の取組拠点となっている。

○建物を設計した伊東豊雄氏は世界的にも評価の高い建築家である。国内はもとより海外からも建物の見学者が来訪し、交流人口の増加に寄与している。また、建築分野での高い知名度を活かし、建築学科の卒業制作の日本一を決める「せんだいデザインリーグ」が開催されるなど、地域外の創造的人材を惹きつける活動の場となっている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■地域の活発なまちづくり活動

仙台市では、日頃からまちづくり団体が活発に活動している。せんだいメディアテークの施設コンセプトを定める際にも、定禅寺通街づくり協議会の意見を取り入れて修正を加えるなど、まちづくり活動が影響を与えている。

また、市内には８つの大学があり、ＮＰＯへのインターンシップ推進モデル事業が実施されるなど、学生とまちづくり活動との結びつきを強めようとする動きも出てきている。

■質の高い建築空間の実現

初めから目的を決めた部屋等を設けるのではなく、広さや天井高が異なるギャラリーやホール、会議室など、フレキシブルに対応できる空間づくりがされている。また、柱を使わず、海草のような形の独立シャフトのみで床を支える優れたデザインの建築は、国内外の建築に関する賞を数多く受賞しており、建築を志す学生のあこがれの的になっている。

■創造的活動の支援体制の充実

施設利用者に対して制作・学習プログラムを提供し、創造的活動のソフト面の支援をしている。具体的には、作品や活動の成果物を公共財として様々なメディアで発信するためのスタジオ運営に力をいれ、地域における市民放送局、市民出版局的な役割を担おうとしている。また、開館時間は 9 時から 22 時までと一般的な公的施設と比べて長く、夜遅くまで活動する創造的人材にとって魅力となっている。

秋田県　大館市

人口	78,946人
高齢化率	31.7%
合計特殊出生率	1.48
社会増減率	−1.1%
専門的技術的職業従事者割合	6.0%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：大館と東京でのアートプロジェクト
名称：ゼロダテ／大館展、ゼロダテ／東京展
実績：大館出身の３人のアーティストがアートユニットを形成し、大館や東京で活動を展開。

■きっかけ～「ふるさと大館を表現する展示会を開けないか」との呼びかけ

○親のつながりや仕事を通じた知り合いであった大館出身の３人のクリエーター（普津沢氏・漫画家、石山氏・デザイナー、中村氏・現代美術家）が 2006 年夏に都内で集まり、ふるさとの思い出話をしていた。その時、中村氏から「ジャンルも世代も違うこの３人でふるさと大館を表現する展示会を開けないか」という話が持ち上がった。普津沢氏と石山氏も「新しいものを見つけるチャンス」「こういう機会を待っていた」と賛同。その場でアートユニット・ゼロダテが誕生した。

○ゼロダテ（0/DATE）とは、DATE（日付）を（ゼロ）にリセットし、もう一度なにかを始める、新しい大館を創造するという活動。

○2007 年１月に大館アートユニット「ゼロダテ」展を都内で開催。かつて大館にあった老舗百貨店・正札竹村を作品づくりのキーワードとした。

■現在～大館と東京でアート活動を展開

○大館市のハチ公通り商店街（旧：大町商店街）の空き店舗を活用し、2007 年から「ゼロダテ／大館展」を毎年夏に開催。

○2010 年に東京の拠点として「ゼロダテアートセンター東京（ZAC TOKYO）」を秋葉原に開設。「ゼロダテ／東京展」を毎年春に開催。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■商店街の空き店舗という空間でのアートの可能性の探求

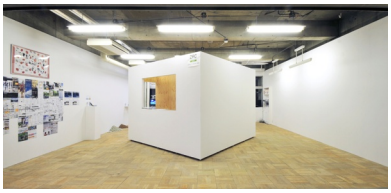
大館市中心部のハチ公通り商店街（旧：大町商店街）では、店舗の老朽化や郊外商業施設の影響などにより空き店舗が増加。ゼロダテ／大館展では、この商店街の空き店舗に、若手アーティストや地元画家、地元高校美術部などが１ヶ月間滞在してアートを創作・展示。アーティストは、商店街の空き店舗という空間に刺激を受け、新たなアートの可能性を探求できる。

■他のアーティストとの出会い・交流を通じて新しい自分を発見できる環境

ゼロダテ／大館展 2008 では、廃校となったばかりの小学校の校舎を活用したアーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）を実施。廃校活用の可能性を探るという社会実験の意味もあった。
緑に囲まれた校舎に滞在（宿泊）し、様々な地域から集まってきたアーティストとお互いの考えを話し合い、目の前の田んぼからとれるおいしいお米を食べ、ゆったり温泉につかり交流を深めることは、新しい出会いとともに、新しい自分を発見する機会となった。

■秋田を盛り上げたいという仲間とのつながり

活動当初から大館出身者とのネットワークづくりに取り組み、徐々に秋田出身の若手アーティストにネットワークを拡大。2010 年に開設した「ZAC TOKYO」は、秋田出身の若手アーティストと協働して運営している。
「ZAC TOKYO」は、東京・秋葉原で秋田の文化芸術を発信・育成するアンテナスペース。これまでチャンスがつくれなかったアーティストや秋田企業等が情報発信することにより、同郷の仲間とコラボレーションの機会を得て、チャンスを広げることができる。



人口	254,244人
高齢化率	23.9%
合計特殊出生率	1.34
社会増減率	0.8%
専門的技術的職業従事者割合	7.1%

山形県　山形市

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：アジアに着目したドキュメンタリー映画祭。デザインと地場産業の融合による創作型のものづくり事業

名称：山形国際ドキュメンタリー映画祭、山形カロッツェリアプロジェクト

実績：映画祭は 1989 年の開始以来、これまでに隔年で 12 回継続開催している。カロッツェリアプロジェクトは東京を経由せず直接国際市場を開拓し、パリの国際見本市に連続出展を果たした。

■きっかけ～他にはないものの創出にこだわる意識と本質的で高度な資源・伝統技術の存在

○二つの事業は全く別ものに見えるが、根底には他にはないものを生み出すことにこだわる地域性が表れている。映画祭は、1989 年の市制施行 100 周年記念事業公募の際、平凡な企画が多かったなかで、記録映画の映画祭はアジアで初ということ、また優れたドキュメンタリー映画監督である小川紳介氏が県内の隣接市に居住していたことなどから生まれた。

○イタリアで高い評価を受けている山形出身の工業デザイナー奥山清行氏は、山形の質の高い伝統産業の匠の技に付加価値をつければ世界に通用する商品ができる、という思いから、2003 年に県や商工会議所と連携して「山形カロッツェリア研究会」を立ち上げた。

■現在～「山形ブランド」の世界への売り込み

○映画祭は、当初行政主導であったが、2007 年度より運営主体がＮＰＯ法人化され、より市民に近いイベントへ発展した。第 12 回映画祭は 23,000 人の来場者数を記録した。

○カロッツェリア研究会の独自ブランド「山形工房」がフランスの国際見本市メゾン・エ・オブジェに出展を果たし、その後も継続的に出展、商談を成立させている。

○山形の木工や鋳物といった伝統工芸、また繊維や照明など、幅広い分野の地場産業との連携を行っており、製品展開が多様化している。研究会が一定の結果を得て解散した後も、補助金に頼らない商業的活動を進めている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■市民が熱心に関わる支援体制

映画祭の構想段階から、市民団体や青年会議所などが主体となって「映画祭を成功させる会」がつくられ、市の取組を後押しする動きが発生していた。また、運営に地元のボランティアが関わるなど、イベントの企画・運営にも市民が主体的に関わる風土が存在している。

■来訪者への心からのもてなしの姿勢

開催期間中は、世界各国から訪れる映画関係者や観光客に対して、商店街の有志や市民が山形の郷土料理でもてなすウェルカムパーティ、サヨナラパーティを主催し、好評を博している。こうした場の存在は、映画関係者同士、映画人と市民との交流のきっかけにもなっており、映画祭の魅力の一つとなっている。

■職人技術に裏打ちされた地場産業の集積

山形県内には鋳物、木工などの分野で伝統技術を有する職人が多い。「カロッツェリア」とは、外部のデザイナーと地場産業の職人とがコラボレーションして、売れる商品づくりを行うというものであり、品質の良い素材や高度な加工技術と優れたデザインの融合が成功につながっている。また、山形には、伝統産業として守りに入るだけでなく、新しいことにチャレンジする進取の気風に富んだ職人がおり、取組の成功につながった。

■職人をネットワーク化するキーパーソン

地域の技術力や生産者を熟知している人が介在し、職人のネットワーク化、製品の開発に向けて高度なマネージメントを実施している。

山形県　鶴岡市

人口	136,623人
高齢化率	28.7%
合計特殊出生率	1.55
社会増減率	−0.6%
専門的技術的職業従事者割合	5.7%

地域における創造的な取組の事例

■取り組みの概要

テーマ：映画スタジオの開設
名称：庄内映画村
実績：『おくりびと』（アカデミー賞受賞）、『座頭市 THE LAST』『十三人の刺客』などの制作を支援。
管理・運営：地元企業の出資でつくられた庄内映画村株式会社が実施。観光地として一般公開もされている。

■きっかけ～地元出身作家の作品の映画化

○藤沢周平（鶴岡市出身）作『蝉しぐれ』の映画化の際、映画監督に「物語の舞台である鶴岡で映画を撮りたい」という強い思いがあった。
○資金集めを支援していた宇生雅明氏（現庄内映画村社長）が鶴岡市と個人的な縁があり、ロケ地利用の調整が短期間でできた。
○地元が採算割れ覚悟で宿泊や食事提供など協力を惜しまなかった。

■現在～映画のロケ地として観光客誘致

○『蝉しぐれ』の撮影後、オープンセットを保存・活用。『おくりびと』など様々な映画の撮影が行われている。
○オープンセットの一般公開などで、観光客も大幅に増加。地元に映画ロケで数億円の経済効果が生じている。
○鶴岡のまち中やオープンセット、映画資料館を結ぶ「庄内藩レトロバス」などの観光プランの開発を積極的に行っている。
○地域での映画制作に対する関心が高まり、「生涯に一度はエキストラをやりたい」と思う人が増えている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■人の心を惹きつける多様な自然の存在

冬は雪原、春には水を引いた田が鏡のように光り、樹齢 80 年程の桜の花が満開になる。歴史と物語性を感じさせる庄内藩時代の建物が残っているなど、誰が見ても美しいと感じ、歴史を実感できる風景がある。また、様々なテーマで撮る映画のロケ地として、それぞれの映画監督の要望に応えられる多様な風景があった。

■キーパーソンの存在・撮影への地域の支援

ロケ地の選定などは制作会社の意向が大きく影響するため、制作費を削減できる要素は誘致に大きく影響する。地元が出資して会社を設立し、制作費用を抑える便宜を図れたことが、次の映画誘致につながった。また、地域活性化を念頭に、映画制作会社との間をつなぎ、行政や地元財界に働きかけて資金を集めた宇生雅明氏の存在が大きい。

■地域の歴史を大切にする文化風土

庄内藩の末裔である住民が、藩政時代の建物維持のために、多額の費用を個人で負担している現実がある。それでも地域の誇りとして大切にしていこうという住民の強い思いが、そうした活動を支えたい、という気持ちを宇生氏に起こさせ、次の映画誘致に走らせた。

■幅広い人的ネットワークの活用

宇生氏が、知人の学識者等を通じて、地元の代議士や庄内藩主の末裔、映画制作会社である電通などとつながり、機を逃さず話をつなげたことが、『蝉しぐれ』の映画化に結びついた。

福島県　いわき市

人口	342,249人
高齢化率	25.0%
合計特殊出生率	1.55
社会増減率	−1.1%
専門的技術的職業従事者割合	5.9%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：徹底的に地域を向いた芸術活動の展開
名称：いわき芸術文化交流館アリオス
実績：巨大な施設がアートを通じた出会いや、気づきの場となるための仕組みを実践。

■きっかけ～最先端の機能を持つ施設整備

○それまで市民の文化活動の場であった平市民会館が老朽化し、建て替えが必要となった。2001 年度に策定された「新・いわき市総合計画」の中に、中心市街地における新たな文化ホールの整備が位置づけられたことを受け、施設整備が企画された。

○市民も入った検討会が組織され、ただ建て替えるのではなく、芸術文化の拠点として、また、あらゆる世代にわたる市民の交流空間として整備し、中心市街地の賑わいづくりや交流人口を拡大するという方向性が示された。

○現代の劇場技術の粋を集め、音響や機構が世界最先端である施設が完成し、国内外の建築関係の賞を多数受賞している。

■現在～巨大な施設でありつつ、市民を向いた運営

○2009 年にはアリオスの運営にともなう経済波及効果が、10 億強と試算された。施設オープンの波及効果を高めるため、運営側は地元業界との連携策を模索し、アリオスでの公演にあわせ、地元菓子店などとのタイアップ企画を行ったりしている。

○また、東日本大震災では、避難所としての備えが特段なかったにも関わらず、芸術文化活動を行う本来機能は後回しにして、施設正面の平中央公園に集まった人たちを受け入れるなど、市民を向いた運営を行っている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■大きな施設だからこそ意味ある小さな企画の重視

“アリオス・プランツ”というアリオスやまちなかを使ってアート活動をするためにアイデアを持ち寄り、話し合いながら「発芽」させていくプロジェクトがある。「大きい施設」だからこそ様々な人に情報が流れ、まちで何かを始めたいと思うアーティストの目に止まりやすく、おもしろい企画がたくさん生まれている。マーケティングマネージャーの森隆一郎氏の発案による。森氏のアリオスを見たときの第一印象は「いまどき大きな建物をつくるんだな」というものであった。ロビーや前庭のような公園を使ってまちなかにも文化活動が伝播するような事業も必要ではないかという思いから企画が始まり、今ではアリオスを代表する自主事業となっている。

■地元の芸術家の舞台としての展開

音楽家や演劇家ら本物のアートを届けようと、2007 年秋から出前公演「おでかけアリオス」を実施している。芸術家の大半が東京などに活動拠点があり、アリオスでの公演の前後の時間を使っての出前活動であった。市民からは、地元で活動する音楽家らによる活動を望む声が大きくなり、これに応えるかたちで展開している。

■経験豊かな人材を全国から集めた組織

アリオスは経験豊富な人材を全国からリクルートしている。支配人の大石時雄氏は各地でホールや劇場の設立に携わった経験があり、自らの人脈を使い、県外から専門家を各部門のチーフに招いた。「市民の中に入っていく」という大石氏の考えに共鳴して新潟県佐渡島から来た前田優子氏は和太鼓集団「鼓童」でマネージャーを務めた経験を持ち、「おでかけアリオス」を担当する。森氏は、すみだ川アーツのれん会を主宰するなど、地域資源に着目したアートプロジェクトを多数手がけている。

茨城県 水戸市

人口	268,750人
高齢化率	21.5%
合計特殊出生率	1.39
社会増減率	1.3%
専門的技術的職業従事者割合	7.2%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：現代美術作品をギャラリーだけでなく、屋外の様々な場所に設置する交流型展示。
名称：カフェ・イン・水戸
実績：水戸芸術館の取組として、街なかを舞台にした現代アートの展示を 2002 年以来継続している。

「カフェ・イン・水戸 2008」水戸市街地での展示風景
撮影：金田幸三　　写真提供：水戸芸術館現代美術センター

■きっかけ～アートの裾野を広げるための取組

○音楽、演劇、美術の各分野の専用空間を持つ水戸芸術館が 1990 年にオープンした。しかし、開館当時、「訳の分からないものができた」というのが市民の反応だったという。
○一人でも多くの市民に芸術の素晴らしさを伝えていくという公立美術館の役割を果たす上では、美術に関心のない大多数の市民を振り向かせるプログラムが必要であり、芸術監督（当時）であった逢坂恵理子氏らの発案で商店街や道路など市内 10 か所以上で現代アートを展示するイベントを開催した。

■現在～地域と連携した取組の広がり

○カフェ・イン・水戸の開催実績は 2011 年までに４回を数え、所管作品の点数が少ないという芸術館のハンディをカバーする看板企画として定着している。
○取組を実現させるための作品の設置交渉等を通じて、水戸芸術館スタッフと商店街や地域の人的ネットワークが醸成された。これにより芸術館の新しい企画が生まれる等の波及効果が生まれている。
○取組をきっかけにして、市内の空き店舗がギャラリーとして活用されるようになるなど、アートの普及に留まらない効果が出てきている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■文化による中心市街地活性化を企図する市の覚悟

水戸芸術館オープンにあたっては、中心市街地の活性化も視野に入れ、市総予算の１％を管理運営に充てるという、画期的な取組で臨んだ。昨今、自治体の文化予算が激減する中にあって、一貫した運営方針のもと、音楽・演劇・美術各分野で事業を丁寧に継続している。水戸市の取組は、平成 22 年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）で表彰された。

■取組を企画･運営する地域の若手芸術家組織

水戸芸術館と一般市民や中心市街地をつなぐ組織として、水戸市で活躍するアーティストや学生からなる「MeToo 推進室」が結成されている。

MeToo 推進室は、地元作家による街なか展示で、展示場所の選定から作家と場所とのマッチング、搬入出、監視までを行うなど、取組の運営に関わっている。水戸芸術館の近くにある個人が経営する「キワマリ荘」にはギャラリースペースがあるが、そこに作品を展示したことにより、逆に水戸芸術館の学芸員の目にとまって企画展につながったアーティストもいる。こうした取組は、芸術監督制の導入をはじめとする民間専門家の積極的な登用とあわせて、質の高い取組として国内外から高く評価され、創造的人材の関心を惹きつけている。

■地域のまちづくり団体の取り組み

水戸市では商工会議所やＮＰＯ法人が主体となり、中心市街地活性化協議会を組成するなど、地域の発意によるまちづくりの取組が盛んに行われている。例えば、ホームページ上で「水戸街中空き店舗ガイド」を立ち上げ、商店街で起業を志す人を支援するなどの取組を行っている。こうした地域発のまちづくり団体が活発に活動していることで、芸術館やアーティストと効果的に連携できる土壌が形成された。

茨城県 取手市

人口	109,651人
高齢化率	24.5%
合計特殊出生率	1.12
社会増減率	-0.04%
専門的技術的職業従事者割合	6.8%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：若手芸術家の創作活動支援と市民への文化活動機会の提供
名称：取手アートプロジェクト
実績：街全体を舞台にして、日本中から集まったアーティストの作品の展示を 1999 年から継続開催している。

■きっかけ～東京芸大取手キャンパスの開校

○1991 年、東京芸術大学が取手市に取手キャンパスを開設。これをきっかけに取手市が「アートのまちづくり」に着手し、「芸術文化交流を通じて取手地域の芸術向上を図る覚書」を東京芸大と締結。
○1999 年、先端芸術表現科が取手キャンパスに新設。同時期に区画整備事業の一環として整備された「ストリートアートステージ」での展示作品を先端芸術表現科に依頼。
○先端芸術表現科の渡辺好明氏は、大学と地域が一体となったまちぐるみのアートイベント「取手アートプロジェクト（TAP)」を取手市に逆提案。作品制作の代わりに放置自転車をリサイクル自転車として市民に貸し出して作品を見て回るプロジェクト等を発案。

■現在～取組の継続と地域への浸透

○東京芸大は、アートマネジメント授業の一環として TAP の取組を活用。学生が継続的に企画・運営に関わる取組へ発展している。
○TAP は 2011 年時点で 13 回を数え、会期限定でアート作品の展示を中心にする「フェスティバル型」のイベントから、住民に対してより日常的なアプローチを行う「プロジェクト型」の取組へと徐々に変化している。
○郊外団地である取手井野団地の住民と連携し「アートのある団地」の取組を展開。
○閉鎖された駅前学習塾を改修し、TAP 実施拠点を置くなど、アートに留まらないまちづくりの活動へと変貌している。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■東京芸大の参加による人材･アイデアの確保

TAP の実現及び長期継続には、東京芸術大学が取組の初期から関わったことが大きい。取手市にはもともと芸術家が比較的多く居住し、創作活動を行っていたものの、一般の市民からは縁遠い存在であった。ともすれば地域社会から孤立して自身の創作活動にのみ目を向けがちな芸術家の目を地域に向ける重要性を当初から認識し、地域との仲立ちをした。また、TAP 実施本部に同学教員が属することにより、組織的、継続的な関与が可能になった。常に新しい担い手が循環する大学という組織が関わることで、新しいアイデアが生まれ続ける土壌が形成されている。

■新たな表現の場としての「郊外都市」

TAP では毎年異なるテーマが設定されるが、郊外住宅や団地、あるいは商店街の空き店舗などがメインテーマに据えられることが多い。特に、現在取組の中核になっている「半農半芸（農と芸術の融合による循環型社会システムの構築)」や「アートのある団地（団地住民の生活に入り込んで行われるプロジェクト)」は、いずれも郊外ならではのライフスタイルの提案をテーマにしている。一見特徴がないようにみえる郊外都市で、若い芸術家が新たな表現の可能性を感じ取っていることがうかがえる。

■取組を支える地域の支援

当初は大学からの逆提案により発足した TAP であるが、実働部には市民も多く関わっている。運営に携わる核となる部分を市民が担うほか、地域住民を中心としたサポーター組織や「エンジェル」と名付けられた個人・企業の支援組織が形成されることで、一部の芸術家の活動ではなく、地域の取組となっている。

茨城県　守谷市

人口	62,482人
高齢化率	14.3%
合計特殊出生率	1.37
社会増減率	11.9%
専門的技術的職業従事者割合	7.9%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：芸術を通した魅力ある地域づくり
名称：アーカスプロジェクト
実績：日本初のアーティスト･イン･レジデンスとして、1994 年の取組開始以来、80 人以上のアーティストが滞在し、作品の制作に取り組んでいる。また、創作等を通じて身近に芸術に親しむワークショップを開催している。

■きっかけ～「芸術の発信地」に向けた構想

○1991 年に「新しい芸術の発信地」として県民が誇りに思う茨城づくりを目指す「アーカス構想」が策定され、県内外の芸術家の創作・研究活動を支援するプログラムが施策として位置づけられた。茨城県、守谷市、財団法人茨城県国際交流協会などで構成されているアーカスプロジェクト実行委員会が運営を担当している。

○小学校の統合にともない廃校となった大井沢小学校校舎を社会教育施設「もりや学びの里」として整備。ここを拠点としてアーティスト･イン･レジデンスが開始された。

■現在～取組の広がりに伴う交流の発展

○国内で最も歴史のあるアーティスト･イン･レジデンスのひとつとして、強く支持されている。

○アーティストが地域に滞在し、作品づくりを行うだけでなく、交流プログラムやワークショップの開催などを通じ、地域住民が芸術に関心を持ったり、アーティストと関わったりできるソフト面の取組も行われている。

○スタッフとボランティアがアーティストの日常生活などをきめ細やかにサポートし、創作活動を支援するとともに情報発信・交流促進機能を担っている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■のびのびと作品づくりに没頭できる環境

滞在期間中アーティストの活動の拠点となる「もりや学びの里」では、制作活動に没頭できる環境が確保されており、訪れた芸術家達に好評を博している。また、「もりや学びの里」には専門スタッフ３名が期間中常駐したり、「かたつむりさん」と命名されたボランティアスタッフがサポートするなど、受け入れ体制も充実しており、滞在する上での支えになっている。芸術家には招聘ビザを発行し、渡航費や制作費用のほか、スタジオやアパートを無償支給するなど支援は手厚い。
また、芸術家のオープンスタジオと同時に、学びの里で行われているサークルの活動を一般公開するイベント「もりや学びの里フェスティバル（まなＦＥＳ）」を開催するなど、芸術家と地域をつなぐ企画を生み出している。

■大学との連携による取組の運営

近接する取手市には東京芸術大学のキャンパスがあるため、取組を進める上での連携体制が構築できている。東京芸術大学の日比野克彦氏をプロジェクトに招聘するなど、市民向けの講演会やワークショップ等の地域向けプログラムを充実させている。

■メセナ活動等の官民の支援体制

イベントを運営する上では、財団や企業のメセナ活動による援助がうまく活用されている。財団だけではなく、地元企業も協賛メンバーとして多く名を連ねており、地域に広く認知された取組であることも成功の要因となっている。

■都心部からの時間距離の近さ

守谷市はつくばエクスプレスを利用して、東京都心からわずか 30 分程度の時間距離にあるにも関わらず、まちの三方向を河川に囲まれた水と緑が豊かな郊外都市である。滞在期間中、都会の便利さと自然の豊かさを両方享受できることが、取組に参加するアーティストにとって魅力のひとつとなっている。

山梨県　甲府市

人口	198,992人
高齢化率	24.6%
合計特殊出生率	1.38
社会増減率	1.7%
専門的技術的職業従事者割合	7.2%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：アートによりまちなかに賑わいを生み出す

名称：こうふのまちの芸術祭

実績：2010 年から街角や空き店舗を舞台に、若手芸術家が作品を展示、地域住民との交流が進んでいる。

■きっかけ～商店街の空き店舗増加への危機感

○甲府市出身のアーティストである五味文子氏が、故郷の中心市街地で商店街の空き店舗が増加している現状を見て、地元の若手アーティスト達と「楽しみながら町を活性化させたい」と話し合ったことがきっかけで取組が始まった。

○問題意識を共有したメンバーで「やまなしアートツリー」を結成し、甲府商店街の空き店舗オーナーに掛け合い、約１年間かけてまちなかでの芸術祭の開催が実現した。

■現在～芸術を通じた新たな人のつながり

○取組初年度の 2010 年には、全国から趣旨に賛同する 130 組のアーティストが集まり、街角で作品を展示した。地域の住民の協力を得ることで空き店舗だけでなく、まちの空き家・ギャラリー・カフェなどの多様な展示空間が確保できている。

○アーティストは、商店街で作品を展示するだけではなく、ワークショップを実施したり、甲府市内の限界集落で音楽イベントを開催したりするなど、住民との幅広い交流を行っている。

○規模を縮小しつつも、イベントは継続しており、地域の認知度も高まりをみせている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■商店街でのまちづくりの取組

甲府市には中心市街地に複数の商店街があるが、商工会議所が主体となって、商店街を核にしたまちづくり会社を立ち上げて運営している。まちづくり会社では商店街で営業している店や空き店舗についての情報発信を行うなど、日頃から商店街での活性化に取り組んでいる。また、商店街や地域のＮＰＯ法人が主体となってまちづくりフォーラムを行ったり、空き店舗対策事業に取り組んだりするなど、多様な主体を巻き込んだ幅広いまちづくり活動を行う土壌がある。

■創造的活動の拠点となるコミュニケーションの場の存在

戦前の甲府市には、中心部に芝居小屋「櫻座」が立地しており、市民のための娯楽・交流拠点となっていた。その後廃業した櫻座の機能を復活させようと、2005 年に地域のＮＰＯ法人と商工会議所が主体となり、商店街の空き店舗を活用した舞台・ライブハウス・カフェ「桜座」として復活させた。

また、甲府市には桜座のほかにも、五味醤油株式会社や富雪ギャラリーなど、活動の拠点となる場が複数存在しており、“こうふのまちの芸術祭”においてもワークショップの場となるなど、取組を進める上で重要な役割を果たした。

人口	371,302人
高齢化率	22.6%
合計特殊出生率	1.44
社会増減率	1.4%
専門的技術的職業従事者割合	5.3%

群馬県　高崎市

創造的人材を惹きつける地域の取組

■取組の概要

テーマ：映画の街としてのまちづくり
名称：高崎映画祭、高崎フィルムコミッション（以下、高崎 FC）
実績：1987 年より毎年、市民ボランティア団体が映画祭を開催。近年は毎年約 50 本以上の映画が上映され、約１万人が鑑賞。作品の表彰式が行われ、著名監督や俳優が訪問。高崎 FC は 2002 年に市が設立。年平均 60 本以上の映画やテレビ番組の撮影を支援。

■きっかけ～地元での映画鑑賞

○映画好きのいちサラリーマンだった茂木正男氏（故人）が、わざわざ都会（東京）に行かなければ見たい映画が見られない地元の映画環境に不満を感じ、地元で映画を見たい・見せたいと思い、映画祭を立ち上げた。
○事業費は茂木氏をはじめとするスタッフが地元企業からの協賛金を集めて回ったり、市のイベント募集に企画提案し市の補助を受けたりして獲得。現在も企業の協賛金とチケット販売、市等の補助が資金源となっている。
○映画祭の実績による映画の街としてのイメージを活かし、2002 年に市が高崎 FC を設立。市内の観光資源の PR 活動や撮影に関る経済効果などの期待から、映画等のロケーション撮影を支援・誘致する体制を整備。

■現在～映画の街としての位置づけを確立

○映画祭は現在も市民ボランティア団体による運営が行われており、2012 年には第 26 回目を迎え、上映機会の少ない映画の紹介や若手監督の発掘等の役割を担っている。
○2004 年には茂木氏や映画祭を運営するボランティア団体のスタッフが中心となり、映画館「シネマテークたかさき」を設立。映画上映に限らず映画監督による映画塾等の取組を展開。他にも「高崎まちあるき 映画ロケ地めぐりツアー」等が開催されている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■豊かな自然や人々の暮らしを感じる街並み

三度の合併を経た高崎市には、近代的な高崎駅周辺や昭和の風情が残る商店街等の街並みや、豊富な自然、歴史・文化遺産など、映画の舞台となるような様々な風景がある。

■首都圏からの交通利便性の良さ

首都圏から 100km 圏内。古くから交通の要所であったことから交通網が発達しており、首都圏からのアクセスが容易である。

■市民の文化活動への理解

日本の地方管弦楽団の草分け的存在「高崎市民オーケストラ」誕生の地であるなど、市民に芸術・文化を受け入れる土壌があり、映画祭の運営ボランティアへの参加、高崎 FC が募集するエキストラや、撮影スタッフを支援するボランティアへの参加等、市民が積極的に協力している。

■地元ブランドの魅力的な食品の存在

高崎を冠したブランドで最も有名な商品の一つ「高崎ハム」は、高崎映画祭の受賞者に副賞として与えられるが、それを楽しみにしている俳優や映画監督がいるなど、高崎ハムの存在は、高崎市に訪れる魅力の一つとなっている。

■地元企業による協力

高崎映画祭の事業費のおよそ３分の１程度（2011 年）は、地元企業からの協賛金が占めており、映画祭の維持には地元企業による貢献が大きい。

群馬県　中之条町

人口	18,216人
高齢化率	32.9%
合計特殊出生率	1.43
社会増減率	0.1%
専門的技術的職業従事者割合	6.6%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：創造的人材の移住を促すまちづくり
名称：中之条ビエンナーレ
実績：2007 年から２年毎に中之条町全域の施設や公園等の空間を会場として、約１ヶ月間開催されるアートイベント。2007 年当初には約 60 人の作家が参加。目標来場者数１万人としていたところ、延べ約５万人が来場。2011 年には、３回目にして国内外から 125 組の個人やグループの作家が参加。来場者数は述べ約 35 万人以上となった。

■きっかけ～廃校を拠点とした映画制作

○群馬県の人口が 200 万人に達した記念として制作された映画「眠る男」を撮影する際、豊かな自然を群馬の個性と考える群馬県出身の小栗康平監督は、中之条町の廃校になった中学校を撮影拠点「伊参（いさま）スタジオ」として使用し、約７か月間スタッフらを滞在させ映画を制作。

○日本画家・平松礼二氏が映画制作を手伝ったことがきっかけとなり、主に多摩美術大学の卒業生へ作品制作に没頭できる閑静な場を提供するため、２年間を１期とする「吾妻美学校」が設立。第５期目に伊参スタジオに移転した。

○美学校では修了時に東京で共同展を開催していたが、５期生の６名は町への恩返しのために、町内での作品発表を希望。町民に向けて発表するには６名では作品が足りないと考え、アートフェスティバルの開催を町に提案。

○当時の入内島町長、町職員、５期生４名が国内事例として「越後妻有トリエンナーレ」を視察。町の協力のもと、５期生６名が中心となり、町職員を含む実行委員会（総合ディレクター・山重徹夫氏）を設立し、2007 年に第１回目が開催となった。

■現在～創造的人材の定住のきっかけに

○2010 年、町のアート事業の拠点としてふるさと交流センター「つむじ」を設置。実行委員会のメンバーが町の嘱託職員として運営に携わり、アーティストや町民が製作した雑貨、伝統工芸品、地場産品の販売等を行っている。

○「つむじ」の運営で生業ができたことやビエンナーレへの出品を契機に、アーティスト等の創造的人材が町内に移住してきている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■町の美しい景色・歴史の面影等の地域資源

町には、中心商店街や里山の美しい景色、養蚕文化などの文化資源が残る地区があり、温泉地等の地域のアイデンティティも色濃く残っている。実行委員会ではアーティストに町の魅力に触れてもらえるよう、それらの地区を作品展示の候補地に選んでいる。

■アーティストの滞在制作への支援

町は宿泊施設の無料開放を行っており、アーティストに滞在制作を勧めている。アーティストは、町の自然や歴史といった地域資源と向き合いながら、住民との交流を深めて土地に溶け込み、制作にあたることができる。

■作品PR等の支援によるアーティスト育成

ビエンナーレは個展を開く場合に比べ、安価に作品を展示できる。また、ビエンナーレを訪れたギャラリー関係者やキュレーターに、作品の案内をする等、若手アーティストが世に出る支援を行っている。

富山県　南砺市

人口	54,724人
高齢化率	31.1%
合計特殊出生率	1.37
社会増減率	−1.5%
専門的技術的職業従事者割合	6.2%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：世界の演劇の聖地となる拠点の形成
名称：富山県利賀芸術公園「利賀フェスティバル」
実績：1982 年に日本初の世界演劇祭「利賀フェスティバル」を開催。第１回目は６カ国 12 団体が公演し、国内外から 13,000 人の観客が集まる。以後毎年、演劇祭やコンクール等を開催し、2011 年までに 10 数万人が訪れた。

■きっかけ～地方の古い日本家屋の魅力

○急激な過疎化に直面していた旧利賀村（現南砺市）は 1973 年、人口減少を食い止める対策の一つとして、人が住まない合掌造りの民家を５棟買い上げて百瀬川流域に移築し「利賀村合掌文化村」を設立。

○同時期に鈴木忠志氏率いる劇団「早稲田小劇場」（現劇団 SCOT）は、活動拠点であった東京の劇場との契約が解消し、新しい拠点を探していた。旧利賀村で合掌造り民家を貸し出していることを知人から聞いた鈴木氏が、現地を訪問。日本家屋の持つ魅力に感動し、村から家屋を借り、稽古場兼劇場に改造。

■現在～活発な公演活動や人材育成

○1982 年に日本で初めての世界演劇祭「利賀フェスティバル」が開催され、以後毎年、国内外の劇団が参加するイベントを開催。施設も大小６つの劇場や憩いの場、宿泊施設等を備えた利賀芸術公園となり、劇団 SCOT の活動拠点となっている。

○演出、俳優、美術・装置、照明、音響、衣裳など舞台創造の各分野を対象とした「利賀演劇人コンクール」や、演劇の専門家を育成する「利賀演劇塾」を開催するなど、人材育成に取り組んでいる。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■東京から離れた納得のいく演劇活動環境

鈴木氏は、東京で活動をしていた頃から、文化をはじめ全てが中央に集中していることに批判的であった。都会の劇場はすべてヨーロッパを模倣した多目的ホールであり、演者と観客が真に肌を触れ合い感動し合うことができないため、もはや都会での演劇活動は限界に来ていると考えていた。かつて、鳥も通わぬ深山幽谷の秘境の地と言われた旧利賀村は「俗化した東京を離れ、納得のいく演劇活動の拠点を地方に作りたい」という鈴木氏の思いを実現させる場であった。

■合掌造り民家という独特の地域資源

合掌造り民家を見たとき、鈴木氏は「平地の家屋の柱とは全く違い、太く高く、自然のままの曲線が活かされている。荒っぽいが力強い」と合掌造り独特の魅力に感動。劇場として作られた建物でなく、住空間をそのまま劇場にできないかと考えていた鈴木氏は、合掌造りの民家を舞台とすることに躊躇はなかったという。

■自治体・村民あげての演劇活動の支援

旧利賀村に拠点を移した鈴木氏率いる早稲田小劇場の初公演の日、村役場の職員の６割がボランティアとして参加。７台の村営バスも全て観客を駅から劇場まで運ぶために運行する等、全面的な協力態勢を敷いた。また、旧利賀村は、劇団との５年間の契約が終了する際、活動を終えようとしていた劇団を地域活性化のために引き止め、鈴木氏らの活動を継続・拡大してもらうため、演劇活動に必要な環境整備を実施。1980 年に合掌造りの民家を劇団員の宿舎として改造。世界的に著名な建築家・磯崎新の設計で新たな合掌造り劇場やホール棟を建設するなど、舞台芸術空間を整備。その熱意に感動した鈴木氏は村に留まり、国際的に活動を展開した。

人口	51,726人
高齢化率	30.7%
合計特殊出生率	1.4
社会増減率	−1.8%
専門的技術的職業従事者割合	5.5%

富山県　氷見市

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：地域での創造的な暮らしをつくる文化芸術活動
名称：アートＮＰＯヒミング
実績：土地や環境、地域そのものの力を感じるイベントを、氷見市内の各所で連続的に開催していくアートプロジェクトを実施。

■きっかけ～地域の若者による番屋の活用

○2003 年、氷見市のまちの駅「La ぶり一茶屋」（2001 年に県・市の補助金で地域活性化を目的に商工会議所と商店街連盟が設置）の運営委員である建築士・堀江剛氏が、漁師蔵と番屋（漁師の休憩所）を人が集える歴史的建造物として保存するために、シンポジウム会場として利用する計画を発案。建築士や高岡短大の教員等 12 名で実行委員会を組織し、同年７月にイベントを開催。

○その流れで 2004 年には氷見市新観光資源開発プロジェクト「氷見クリック」を企画し、アサヒ飲料㈱の助成を獲得。旅館を経営する美術家・平田哲朗氏（後のヒミング理事）の大学時代の友人・中村政人氏（東京芸大准教授）が主宰する芸術活動団体「Command N」に属する若手映像作家や地元の学生らが加わり、ビデオやデジタルカメラで氷見の「見過ごされている価値」を撮影。漁師蔵や番屋で編集、番屋の壁を使って野外上映会を行った。

○2004～2005 年に氷見クリックに取り組んだ中で発見した地域の魅力を活かすイベントとして、2006 年より氷見クリックを内包した「ヒミング」を開催。氷見クリックのほか、市内の様々な魅力的な場・建物で展覧会、コンサート等の活動を展開した。

■現在～アーティストや市民が集まる拠点形成

○毎年、活動の場と視点を広げながら、2008 年には築 100 年以上の石蔵をアートセンターとして改修し、カフェを併設した通年運営のできる拠点として整備。市民や観光客も楽しめる空間となっている。

○レジデンス・プログラムとして、アートセンターに県外からのアーティストが短期間滞在する取組も実施している。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■消えゆく漁師町の情緒ある街並みや建築物

阿尾漁港に残る漁師蔵と番屋は昭和初期のもので、本来の目的通りに使われなくなって久しく、漁具倉庫となっていた。これらは港町らしいデザインがあり、失われつつある蔵を再生するというテーマは面白いとアーティストはいう。漁師蔵を漁具倉庫として利用している灘浦定置漁業組合は、こうした利用を許可するなどの協力をしている。

■港町ならではの新鮮な食材と豊かな食文化

港町ならではの新鮮な魚介類や、そこで育まれてきた豊かな食文化は、訪れるアーティストにとって大きな魅力となっている。

■地元の漁師、商店街・民宿関係者等、地元市民の取組への支援と市民との交流

イベントの度に会場となる場所・建物を提供したり、参加者に振舞う大漁鍋を提供するなど、地域の住民が積極的に支援を行っている。また、アートセンターには地元漁師等の住民が気軽に訪れ、アーティストとの交流が生まれている。

人口	29,858人
高齢化率	38.0%
合計特殊出生率	1.71
社会増減率	−2.4%
専門的技術的職業従事者割合	4.6%

石川県　輪島市

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：土蔵修復に合わせた文化交流拠点形成
名称：ＮＰＯ法人輪島土蔵文化研究会
実績：2007 年３月の能登半島地震で被害を受けた輪島市内の土蔵を調査し、修復可能なものの再生活動を実施。修復に合わせ、左官技術の研修やアーティスト・イン・レジデンス、市外から招聘した芸術家・料理人と地元の職人・料理人の技術交流会など、新たな取組を実施。

■きっかけ～被災した土蔵の保存・活用

○2007 年３月に発生した能登半島地震によって、輪島市内に多数残る土蔵が大きな被害を受けた。半壊以上のものは、解体に補助金が出ることもあり、修復の支援をしなければ家主の判断で取り壊される可能性があった。地元の建築家・萩野紀一郎氏は、「輪島市の街の個性を失うことになる」と思い、県内外の建築士や大工職人とともに、損壊した木造住宅の家主から土蔵等の復旧に関する相談を受ける支援活動を展開。

○萩野氏は同年 10 月に土蔵の修復活用事業、土蔵修復のための技術者の研修事業、土蔵を利用した交流事業、情報発信事業等を行い、輪島の歴史的な街並みを維持しつつ、地域文化と建築文化の継承発展に寄与することを目的としたＮＰＯ法人輪島土蔵文化研究会を設立。

■現在～芸術家や職人等が集まる場へ

○ＮＰＯ法人輪島土蔵文化研究会は土蔵修復とあわせて、住民が芸術に触れる機会を作ろうと、伝統的な街並みのシンボルであり２棟の土蔵を持つ老舗漆器店・船木千舟堂の旧船木邸（輪島市所有）で、2009 年より県内外から美術作家、劇団等４組の芸術家が入れ替わり滞在する活動を実施。現在は、土蔵修復を中心に、全国から職人や学生が集まる活動が続いている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■土蔵修復に必要な技術の習得機会の提供

土蔵を扱った経験のある左官職人が減っていることから、左官職人の研修をする必要があった。土蔵の修復活動は、ワークショップとして年に数回、全国から左官職人や学生等のボランティアが集まって集中的に実施されており、本物の土蔵修復の実践ができる場として、全国の左官職人の貴重な研修機会となっている。

■温かく迎え入れてくれる地元住民と長く落ち着ける広々とした田舎

能登には仁行和紙と呼ばれる紙漉きの伝統工芸があり、杉皮、海草などを原料として漉き込んだ野趣あふれる紙をつくっている。東京出身で長くアメリカに留学していた萩野氏は、アメリカで紙漉きを学んだ妻が「日本でも紙漉きを体験したい」という希望を持っていたことから、紹介する人がいる能登を訪れ滞在した。その折に地元住民から極めて温かく迎え入れられたことに魅力を感じ、その後、毎年能登に通った。40 歳を超えた時に、本当に自分がやりたいことを考え、日本の広々とした田舎に長く落ち着ける場所を自力で作り、子供には自然溢れる環境の中で日本の教育を受けさせて、日本人の感覚を身に付けさせたいと思い能登に移住した。

■風景がとても美しいロマンチックな町

アーティスト・イン・レジデンスの一環として、旧船木邸の土蔵で風景画の制作に取り組んだ外国人画家は、輪島のことを「風景がとても美しく、アーティストにインスピレーションを与えてくれるロマンチックなまち」と評価しているという。

福井県　あわら市

人口	29,989人
高齢化率	26.5%
合計特殊出生率	1.38
社会増減率	−0.3%
専門的技術的職業従事者割合	6.2%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：　里山の魅力を利用したアーティスト・イン・レジデンス
名称：金津創作の森
実績：1988 年の「ふるさと創生事業」の１億円交付を機に旧金津町（現あわら市）が構想し、1998 年に施設開設。約 21ha の里山の中に、展示・研修施設、芸術家の住居・アトリエ、各種工房などを備えている。年間 10 万人以上の施設利用者がある。

■きっかけ～地元に魅力を感じる作家の助言

○旧金津町は越前瓦発祥の地で、良質の粘土がとれたため、明治時代には 30 以上の瓦製造業者があったが、粘土の減少等により衰退し、関係者からは瓦資料館建設の要望があった。
○また、ふるさと創生基金の使い道について町民アンケートを行ったところ、文化施設整備の要望があった。
○川瀬宏町長（当時）は、旧金津町の自然の豊かさに魅力を感じて移住し、陶芸教室等で人気を集めていた静岡出身の陶芸家・大森正人氏と話をして、地域住民と芸術家が気軽に触れ合える場を作るという構想を持った。
○施設を地域住民に創作環境を提供する場と位置付けるとともに、多方面のプロの創作家が入居できる施設として整備した。

■現在～芸術家が住まい、活動する複合施設

○実力のある陶芸、ガラス工芸、絵画、竹細工などの芸術家７名が入居し活動をしている。
○入居者は制作のほかに、教室を開いたり、アトリエを公開するなど、特徴のある活動を展開。
○施設では現代アート、クラフト・生活工芸、地元作家、親子でも楽しめるようなものをテーマに、年間４回程度、企画展示を開催。現代アート分野では一目置かれる施設となっている。

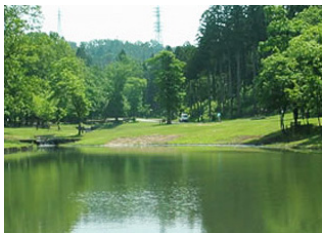
創造的人材を惹きつける地域の魅力

■素晴らしい自然環境

金津創作の森が整備される前から移住していた大森氏は「金津インターを降りた時の景色が忘れられずにここに移ってきました」と、自然が見せる景観に惹かれたという。全国各地にはアートや作品のために、森を切ったり、自然を変えている例が多いが、金津創作の森はむしろ里山を残し、丘陵林、丘が生み出す気持ちのよいアンジュレーション（起伏）を活かしている。入居者の一人、陶芸家・松井勝彦氏は「自然に溢れ、開放感を体感できるこの恵まれた環境は、作品創りはもちろん、生活の場としても最高」と、豊かな自然のある環境について創作だけでなく、生活空間としても評価している。

■創作活動に打ち込める環境

それまでに利用していたアトリエが手狭になり、適地を探してここにたどり着く例もある。広々とした場と自然、静かな環境が決め手となる。入居時は、市から借りた土地の上に自力で自宅と工房を建て、生計は自らの作品づくりで得ている。決して特別な待遇があるわけではないが、創作環境が高く評価され、多くの芸術家を惹きつけている。プロのガラス工芸作家を育てる工房もあり、充実した設備に惹かれて県外からの研修生が過半数を占める。



福井県　越前市

人口	85,614人
高齢化率	24.2%
合計特殊出生率	1.5
社会増減率	−0.1%
専門的技術的職業従事者割合	5.9%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：音楽祭を通じた地域活性化
名称：武生国際音楽祭
実績：1990 年に「フィンランド音楽祭イン武生」として開始。３年目から「武生国際音楽祭」と名称変更。毎年１週間程度開催。国内外から一流の演奏家を含む 50 名～150 名程度が参加、滞在し、聴衆も１万人程度の参加。佐治敬三賞（2006 年度、サントリー音楽財団）などの受賞も多数。

■きっかけ～地元に縁のある音楽家の紹介

○1989 年に東京で行われたフィンランド音楽祭の後、次年実施に向けて小都市での拡張開催を希望しているという情報が、同音楽祭企画者である舘野泉氏側から、武生で何度か演奏会を行ったことのあるピアニスト村上弦一郎氏を通して伝わる。

○村上氏と関わりの深かった武生音楽研究会から武生市（現越前市）に音楽祭企画が持ち込まれ、市、教育委員会、市文化協議会、武生商工会議所等約 30 団体の関係者や市民による実行委員会を設立。その後の国際音楽祭のメイン会場となる武生市文化センター（現越前市文化センター）の 10 周年記念事業とあわせて、滞在型音楽祭「フィンランド音楽祭イン武生」として第１回目を開催。舘野氏が音楽監督に就任した。

○２年目までは単年度毎に実行委員会を市民ボランティアで組成する形式で開催されたが、３年目からは名称の変更とともに、年間を通じて活動し、財政的にも責任を持つ組織として、市民や個人ボランティアをメンバーとする推進会議を立ち上げて開催している。

■現在～市内全体が音楽祭の舞台に

○福井県越前市の越前市文化センターをメイン会場として、その他周辺市町村の会場、市内外の小中高校、寺社、レストラン、街頭などでコンサートを行っている。

○世界的に著名な作曲家・細川俊夫氏を音楽監督に迎え、現代の音楽を含む意欲的なプログラムで開催。演奏に加え、作曲ワークショップ、アカデミーなどの若手育成も行っている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■重要な史跡、寺院等、豊富な歴史資源を活用した舞台

旧武生市は、越国（えつのくに）の国府が置かれたところで、深く長い歴史を持つ街である。重要な史跡が数多く存在し、特に寺院は 200 ほどあり、宗派も様々である。プログラムの中には寺院の本堂を会場にした小さなコンサートも組み込まれているが、お堂のような空間で、一流の演奏家の良質な生演奏を聞くという独特の催しを楽しみにしている音楽家も多い。

■地元の理解と協力

音楽祭の運営は、ポスター・チケット作成や配布、会場設定等、全て市民ボランティアの手によって行われている。国内外の音楽家が市民の家にホームステイをする場合や、アカデミー受講生の宿泊費を安価に抑えるため、市内の寺院の協力を得る場合もある。また、市民の理解を得ることで、ホールでの演奏だけではなく、学校、寺社、街頭などの様々な空間で演奏を行うことができる。事業資金の一部は、地元企業からの協賛金により賄われており、地元市民、企業の協力のもと開催されている。

人口	243,037人
高齢化率	23.6%
合計特殊出生率	1.44
社会増減率	1.4%
専門的技術的職業従事者割合	7.4%

長野県　松本市

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：一流の音楽家が定期的に集う音楽祭
名称：サイトウ・キネン・フェスティバル松本
実績：1992 年より毎年開催している小澤征爾氏が総監督をつとめる音楽祭。毎年多くの観客を地域内外から集めている。

(C)大窪道治

■きっかけ～松本市の受け入れ態勢と環境

○チェロ奏者であり、偉大な音楽教育者あった齋藤秀雄氏を偲んで、彼の弟子である指揮者の小澤征爾氏と秋山和慶氏の呼びかけにより、サイトウ・キネン・オーケストラを設立。
○ヨーロッパのフェスティバルに招かれ、絶賛を博したことを受け、小澤氏のなかで日本でも継続開催したいという思いが強まった。
○当初、関西の都市での開催を検討していたが、地元の支援態勢や環境等を考慮し、松本市で開催することを決めた。

■現在～音楽文化の裾野拡大に貢献

○毎年世界各国から一流の音楽家が集い、８月上旬からの約１か月間で 10 数回もの公演を行っている。チケットがなかなか手に入らないなど、地域内外から多くの観客を集めている。また、音楽のまちとして、地域のイメージアップに大きな役割を果たしている。
○アマチュアやジュニア合唱団との大合唱の開催、学校や福祉施設への出前コンサート、長野県内の小中学生を対象としたオーケストラやオペラの無料鑑賞会など、地域の住民が一流の芸術に触れる機会を提供することで、圏域に創造性豊かな土壌を形成している。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■音楽祭を歓迎する地元の受け入れ態勢

松本市は音楽が盛んな土地柄で行政や市民に、音楽祭歓迎の姿勢があった。こうした姿勢が小澤氏の関心を惹きつけた。現在、地域で SKF（注：サイトウ・キネン・フェスティバル）松本ボランティア協会が結成され、サイトウ・キネン・フェスティバルの運営を支えている。

■フェスティバルにふさわしい音楽ホール

当時、オーケストラ、オペラの公演ができる松本文化会館が建設されており、室内楽の公演に適しているザ・ハーモニーホールがあった。2004 年には、オペラに適するまつもと市民芸術館（建築家・伊東豊雄氏設計）も完成し、音楽祭の会場として利用されている。

■北アルプスをはじめたとした自然環境

松本市の視察に行く際、小澤氏は新宿から特急に乗って松本を訪れたという。その車中、目にした北アルプスの雄大な姿を目にし、「自然を好んだ齋藤先生にぴったりだ」と思った。こうした自然環境が、オーケストラのメンバーやフェスティバルに訪れる観客の心や体を解き放ち、音楽を心から楽しめる環境につながっている。

■宿泊施設・交通利便性

サイトウ・キネン・オーケストラのメンバーの多くが海外在住である。また、フェスティバル開催中は、遠方から来る観客も多い。そのため、都心からあまり遠すぎず、宿泊施設が充実していることが、こうした大規模な音楽祭の開催を可能にしている。

長野県　飯田市

人口	105,335人
高齢化率	28.0%
合計特殊出生率	1.69
社会増減率	−1.8%
専門的技術的職業従事者割合	6.0%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：音楽を通じた地域活性化
名称：「アフィニス夏の音楽祭」（1989 年～2008 年）、「オーケストラと友に音楽祭」（2009 年～）
実績：1989 年から続けている音楽祭で、音楽に対する多くの市民の関心を深めるとともに、「音楽のまち」としての地域イメージの向上につなげている。

■きっかけ～「アフィニス夏の音楽祭」の開催

○1989 年８月、飯田市とアフィニス文化財団により、国内外の一流演奏家と日本のプロオーケストラ楽団員が合宿して学ぶ「アフィニス夏の音楽祭」（第１回）が開催された。
○その後、飯田市民が物心両面から応援し、2008 年までの 20 年間開催され、累計 750 名を超える楽団員が参加した。
○2007 年に主催のアフィニス文化財団が「開催地をプロオーケストラのある地方都市へ移し、新たな方法で行う」と決定し、飯田市での同音楽祭の開催は幕を閉じた。

■現在～新たな音楽祭「オーケストラと友に」へ発展

○「アフィニス夏の音楽祭」を応援してきた有志市民の間で「新しい音楽祭を創り出そう」という機運が生まれ、音楽祭実行委員会を設立。2009 年５月に新たな音楽祭「オーケストラと友に」の第１回目が開催された。
○飯田市では、地域の音楽への関心が高まるとともに、国内外の演奏家からも注目を浴びるようになるなど、音楽をテーマとした取組が地域活性化に大きく結びついている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■音楽を心から愛する人々の存在

「アフィニス夏の音楽祭」は、多くのボランティアに支えられて開催されてきた。また、本音楽祭をきっかけとし、音楽に関心を持つ市民が増え、1993 年には「ぜひ開催地の飯田市にもオーケストラを」という声が高まり、「飯田交響楽団」が結成された。本音楽祭が幕を閉じた後は、市民が考え市民が支え、オーケストラとともに創り上げる音楽祭へと発展させた。
このような音楽を心から愛する地域に対し、アフィニス夏の音楽祭に参加した演奏家たちは、異口同音に「まちの人々が深く関わり、心から音楽を楽しむ環境を醸し出してくれた飯田市は、音楽のまちだ」という賛辞を送った。

■飯田市に根づく「ムトス」の精神

飯田市では「ムトス」という言葉が、地域づくりの合言葉となっている。「ムトス」には「…しようとする」という意味が込められており、「愛する地域を想い、自分ができることからやってみよう」とする一人ひとりの自発的な意志や意欲、具体的な行動による地域づくりを目指している。実際に、1979 年から開催されてきた人形劇カーニバルが、市民主体の「いいだ人形劇フェスタ」に生まれ変わったように、飯田市民の「ムトス」の精神が地域づくりの取組を成功させている。

■音楽をテーマとした地域活性化に対する行政の一貫した姿勢

1989 年以来、「アフィニスの夏の音楽祭」、「オーケストラと友に」といった音楽祭が 20 年以上、継続開催できた要素の１つに、音楽によるまちづくりに対する行政の一貫した姿勢がある。行政は資金等での支援のほかに、市民との協働を重視し、取組を成功させてきた。

長野県　小布施町

人口	11,072人
高齢化率	28.0%
合計特殊出生率	1.42
社会増減率	−1.1%
専門的技術的職業従事者割合	6.1%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：住民主体で文化を活かしたまちづくり
名称：小布施流まちづくり
実績：住民主体でまちづくりという一貫した理念のもと、修景事業や特産の栗加工品等の商品開発、生け垣設置や花いっぱい運動など様々な事業が展開され、来訪者や移住者が惹かれる文化的資源の多いまちづくりに成功している。

■きっかけ～修景事業をきっかけとした参加型まちづくり

○葛飾北斎が晩年に小布施に滞在して描いた肉筆画の散逸を防ぐため、1976 年に北斎館が建設された。これをきっかけに、地域の文化資源を中核にしたまちづくりが進み、まちなみ修景事業などに町が取り組んだ。この取組の中心の一人が市村良三氏（現小布施町長）であった。

○市村氏のモットーである「住民が楽しく生き生きと暮らしている町にこそ魅力がある」という意識が町全体に広がり、住民自らが花を育ててまちを飾り、自宅の庭を開放し、来訪者との交流を図るという動きにつながった。

■現在～住民が主体となる文化を大事にするまちづくりが外部の関心を惹きつける

○住民が主体となり、文化を大事にするまちづくりが多くの来訪者や移住者を惹きつけている。アメリカ人で小布施に移住してきたセーラ・マリ・カミングス氏（株式会社桝一市村酒造場取締役）が有名である。

○惹きつけられて来た外部の人材やアイデアをうまく取り入れることで、「小布施ッション」、木桶仕込みによる日本酒作りの復活など、小布施文化の発信している。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■まちづくりをリードしてきたキーマンの存在

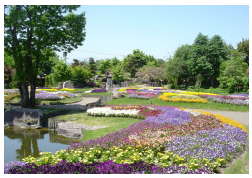
小布施流のまちづくりをリードしてきた一人が市村良三氏である。1980 年代の修景事業「暮らす人にとって楽しい町」を理念に掲げ、市民参加のまちづくりを進めるとともに、自らが主体となり民間の町づくり会社「ア・ラ小布施」を立ち上げ、栗どっこ市や小布施映画祭、国際音楽祭等、様々な企画イベントや事業を成功させるなど、小布施の名を全国的に広げることに大きく貢献した。

■住民が本当に楽しく住むことができる環境

一度訪れると何度でも来たくなるのが、小布施の持つ最大の魅力である。修景事業をきっかけに、住民の間では「新たなものをつくるのではなく、既存のものを変えていく」、「観光客のために何かをするのではなく、住民が本当に楽しく快適に住むことができる環境づくりが、結果的に観光客を惹きつける」といった意識が共有されるようになった。こうした意識が現在の小布施のきめ細やかなまちづくりや住民のおもてなしにつながっている。

■外部の人材とうまく交流・連携する

外部の人材とうまく交流・連携し、事業を展開しているのが小布施の特徴である。なかでも有名なものが、「小布施ッション」である。「小布施ッション」とは、毎月、各界の第一人者を招いて、講演を聞き、情報交換を行う場である。地方での刺激を増やすため、セーラ氏の発案により 2001 年から進めている取組である。セーラ氏は、外国人であるからこそ小布施の持つ伝統的な文化の良さに気付いた。講演・情報交換の後に、小布施の料理や地酒等で、心のこもったおもてなしを行うことで、その場限りではない人的ネットワークを形成している。



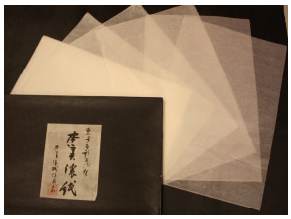
人口	22,629人
高齢化率	27.6%
合計特殊出生率	1.26
社会増減率	−1.4%
専門的技術的職業従事者割合	5.4%

岐阜県　美濃市

地域における創造的な取組の事例

■取り組みの概要

テーマ：歴史的な町並みを活かしたまちづくり
美濃和紙をテーマとしたまちづくり
名称：「うだつの上がる町並み」、「美濃和紙あかりアート展」等
実績：美濃商人の重厚な町家を残し、地域の伝統的な資源である美濃和紙を活かした「美濃和紙あかりアート展」を実施。



■きっかけ～景観を

○1985 年、当時空き家だった今井家住宅の公開が企画され、美濃青年会議所メンバーによって清掃奉仕などのボランティア活動が行われた。1988 年に、市長が町並み保存について諮問したことから、町並み保存に向けての活動が本格化した。町並みの歴史的価値を再認識した笹野玄晃氏をはじめとする住民の間で、保存に取り組む気運が高まり、1993 年頃から自主的に「美濃の町並みを愛する会」や「町並み案内ボランティア」が発足し、「うだつの町並み」を保存・活用する事業が進捗した。
○歴史ある美濃和紙と町並みをコラボレーションさせたあかりのオブジェのイベント「美濃和紙あかりアート展」が実施された。
○1997 度より海外のアーティストを招へいし、市内に滞在してもらいながら創作活動、地域との交流を行う「アーティスト・イン・レジデンス事業」を継続して実施している。

■現在～多くのアーティストが応募する取組へ

○「美濃和紙あかりアート展」は、アーティストから一般人まで 500 点を超える応募がある。
○美濃市を訪れる観光客数は大幅に増加しており、「美濃和紙あかりアート展」も毎年 10 万人程度の来場者でにぎわいを見せている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■地域によって守られる「うだつの上がる町並み」

美濃は 1300 年の歴史を持つ美濃和紙の産地として繁栄し、多くの商家が建ち並ぶ景観が形成されてきた。妻面に立ち上がった「うだつ」、多彩な格子やむしこ窓などの意匠や造形に特徴がある。「うだつ」とは、火災の類焼を防ぐために屋根の両端を一段高くして造られた防火壁で、裕福な家しかつくる（うだつを上げる）ことができなかった。現在、美濃市にはこの「うだつ」が上がる家が 19 棟残る、全国的にも珍しい地域となっている。こうした地域独自の文化資源に目を向け、市民が主体となり守ることにより形成されてきた景観がアーティストの関心を惹きつけている。

■市民のおもてなしのこころ

「美濃和紙あかりアート展」は、ボランティアで構成される実行委員会の企画運営により、400 名を超える中高生、企業・団体等による当日ボランティアが参加し、地元自治会や住民の全面的な協力のもと開催されている。まちなかに展示される作品は、ボランティアにより設置・管理されるなど、一人ひとりのおもてなしの心が、作品を応募する人々の共感を呼んでいる。なお、アーティスト・イン・レジデンスの運営に関しても、多くのボランティアが活動を支えている。

■一流の審査員

「美濃和紙あかりアート展」の応募作品は、照明デザイナーの石井幹子氏を特別顧問に、和紙アートディレクターの堀木エリ子氏、アーティストの日比野克彦氏等、各界一流の著名人が審査することで、出展者の関心を高め、審査や作品のレベルを確保している。

愛知県 西尾市（佐久島）

人口	106,823人
高齢化率	19.3%
合計特殊出生率	1.46
社会増減率	3.3%
専門的技術的職業従事者割合	5.7%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ： アートによる島おこし
名称：三河・佐久島アートプラン21
実績：島民が島の資源を守り磨き上げる様々な活動（黒壁運動等）を実施。アートを楽しみながら島を巡る「佐久島アート・ピクニック」など、アートと歴史文化を融合させる取組を展開。

■きっかけ～「外の目」による島の魅力の発掘

○旧国土庁の離島振興の資源調査の委員長の提案（「外部の目」）により、島民が島の持つ資源の素晴らしさを認識し、「アートによる島おこし」に取り組むことなった。
○「島を美しくつくる会」が活動の中心となり、島民自らが島の資源を守り、磨きをかけるとともに、アートをうまく取り入れることで、佐久島のオンリーワンの魅力づくりに成功している。

■現在～リピーターや定住者の増加

○「島を美しくつくる会」の活動には、島民のうち60名～70名が常時参加している。
○「佐久島アート・ピクニック」などの取組により、島を訪れる観光客は2004年に３万６千人だったが、2010年には６万９千人にまで伸びており、そのうちの約3割がリピーターである。
○島おこしに携わるボランティアも多く、黒壁運動には多くの島外ボランティアが参加している。
○また交流人口の増加により、移住者が生計を立てる手段（飲食店、民宿等）ができたことで、定住希望の相談件数は2005年以前の年に数件から、現在は30件弱まで増加している。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■島民により守り・磨きあげられた「島の魅力」

島民には昔から受け継ぐ「豊かな自然」「島の伝統文化・風習」を壊したくない、よい島をよい形で残したいという思いが強くある。こうした思いからつくられた「島を美しくつくる会」が中心となり、島の資源を守り・磨きあげている。こうした魅力がアーティストの創作意欲を高めている。

■地域とアーティストが相互に尊重する関係

島の伝統的な祭り「西の盆踊り」では、50年以上前に祭りのなかで使っていた祭り舟をアーティストが復活させ、昔の祭りを再現している。このように島の歴史文化とアートを融合させる一方で、両者は互いの領域には踏みこまないようにしている。アート作品については、素材に「佐久島」を加えるという依頼以外は、どのような作品をどこに作るのかということは、基本的にアーティストに任されている。また、「西の盆踊り」の祭り舟は、昔の祭り舟に関する島民の話に基づいて、アート作品として創作されている。このように、島の地域資源とアートが、互いを尊重しながら融合することで、佐久島にしかない魅力が発信されている。

■島の文化とアーティストをつなぐ役割の存在

島の文化とアートのコラボレーションの橋渡しをしているのが、現代美術を中心とした芸術・文化関連の企画会社「オフィスマッチングモウル（OMM）」である。佐久島の現状に詳しく、アートプロジェクトを手がける内藤美和氏が代表を務める。OMMは現在、西尾市より委託を受け、「島を美しくつくる会」と連携を密に図りながら、展覧会やアーティストによるワークショップ、アートと地域の交流等を手がけている。

人口	124,131人
高齢化率	23.5%
合計特殊出生率	1.59
社会増減率	0.3%
専門的技術的職業従事者割合	6.5%

滋賀県　長浜市

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：歴史・文化を活かしたまちづくり
名称：黒壁のまちづくり　等
実績：株式会社黒壁による「黒壁ガラス館」のオープンをきっかけに、様々なまちづくり事業が展開されるようになり、外部から多くの人材を惹きつけるまちへと転換。

■きっかけ～中心地の衰退とキーマンによる再生

○長浜市の中心街は、高齢化や人口減少により衰退し、住民に親しまれていた趣のある建築物の黒壁銀行が取り壊しの危機に瀕していた。
○そこで、長浜市で事業を営む笹原司朗氏（元青年会議所理事長）らが、民間・行政から出資を募り、第三セクターの「株式会社黒壁」を設立し、銀行の建物を取得。
○今後の長浜にふさわしい施設の活用方法を考えるために世界を視察し、歴史性、文化性、国際性の３つの要素を有する「ガラス工芸」に行きついた。そして 1989 年、一號館「黒壁ガラス館」としてオープンさせた。

■現在～まちづくりの全国的先進事例

○その後、「黒壁」はこの一號館の周囲の古建築を、次々と美術館、工房、ギャラリー、レストラン等へと再生。長浜のまちは活性化に向けて大きく動き出し、その手法は全国的な先進事例として注目を浴びている。
○十数年前まで閑古鳥の鳴いていた中心街には、現在、年間 200 万人の観光客が訪れる。
○アートイベント「長浜芸術版楽市楽座（アートインナガハマ）」では、長浜の魅力に惹かれた全国 250 人のアーティストが参加するなど、従来のガラス作家に加え、新たな創造的人材を惹きつけることに成功している。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■自らの歴史文化に誇りを持つ市民の存在

長浜市は、豊臣秀吉が商人を集めた楽市楽座の城下町として繁栄した街である。江戸時代になると長浜城は廃城となり、城下町の地位を失ったが、湖上交通の要衝として、また北陸と京都を結ぶ北国街道の宿場として栄え、商業の町として大いに賑わった。近年になり、中心街が衰退しつつあったが、黒壁ガラス館など黒壁の営業が始まった 1989 年以降、まちが一挙に活性化へ動き出す。長浜の人々の町に対する誇り・理念や商人としての気質が、現在の長浜の歴史・文化を活かしたまちの魅力を生み出し、外部の作家やアーティストの共感を呼んでいるといえる。

■新たな主体を育てる環境

1996 年に開催された『秀吉博』では、歴史や地理に詳しく、親切でバイタリティーのあるシルバー世代（高齢者）を起用し、空き店舗での商売を行う『プラチナプラザ』などの取組を行った。また、2011 年の『江・浅井三姉妹博覧会』でも同様に、語り部ガイドなどの取組を行った。このように、様々な人々が起業したり、まちづくりへ参加することができる風土がある。これは外部の人材に対しても同様であり、こうした風土が外部の人材を惹きつける要素となっていると考えられる。

■歩いて楽しめる職住近接のコンパクトなまち

長浜市においても郊外への大型店の立地などが進んでいる。しかし一方で、中心市街地活性化に向けて、住宅や商業等の都市機能の集約化が確実に図られており、中心街は歩いて暮らせるほどの、職住近接のコンパクトなまちとなっている。こうした環境が“町を楽しむ”ことを好む創造的人材の心を惹きつけている。

人口	52,486人
高齢化率	27.9%
合計特殊出生率	1.44
社会増減率	−0.6%
専門的技術的職業従事者割合	5.5%

滋賀県　高島市

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：地域資源を活かした定住促進
名称：結びめによる「風と土の交藝」等
実績：結びめや市等によるプロモーションと、きめ細やかな移住支援により、田舎暮らしを求めて、「移住作家」が増加している。

■きっかけ～高島市の魅力と市の移住支援の取組

○高島市はかつて「高島ちぢみ」と呼ばれる織物産業で栄えたが、近年は人口減や高齢化が課題となっていた。
○危機感を募らせた市が、空き家対策と人口の増加に向け、大学やＮＰＯ等、様々な主体の協力を得ながら、条例づくりや定住相談員の配置、情報発信など、様々な取組を始めた。
○高島独自の魅力やこうした取組により、全国から「田舎暮らし」に憧れて移り住む人たちが増加した。特に、住まいとともに仕事場も構え、創作活動を行う「移住作家」が多い。

■現在～「結びめ」による取組

○高島市の魅力をもっと知ってもらおうと、地域の有志や建設会社等により、「結びめ」という組織が立ち上がった。
○古民家を改修した宿泊施設「風結い」での田舎暮らし体験や古民家改修講座等の移住促進に向けた取組を行っている。
○2011 年 12 月に、高島の魅力発信等を目的として、「風と土の交藝」が行われた（１月の開催に続き２回目）。高島市の移住者特徴である「作家の多さ」に目をつけたこのイベントでは、ガラス造形や木工、染色、陶芸、フォトエッセイストなど、高島市内で活動するアート作家 45 人が、期間を決めて一斉に工房を公開した。
○約 5,000 人の人々が高島市を訪れ、このイベントをきっかけに新たに高島市に移住してきた人々もみられる。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■自然豊かな田舎暮らし

高島は琵琶湖をはじめとして、自然が豊かであり、四季を通じて大きく移り変わる景色が魅力的である。また田園風景や農村の生活などの「田舎暮らし」が体験できる。作品づくりに必要なきれいな水のある場所を求めて、移り住む草木染作家もいるように、アーティストや作家にとって制作活動の環境の良さが高島市の魅力となっている。

■都心へのアクセスのよさ

高島市は都市部に比べ土地や建物の価格が安い。また 1996 年には、新快速電車が近江今津駅まで乗り入れ、京阪神からのアクセスが格段に向上した。また、東海道新幹線が通る京都まで１時間弱程度であり、東京や九州など、他の都市圏へのアクセスも一定程度確保されている。田舎にいながら、都心の仕事が可能な環境が魅力の一つとなっている。

■市や地域の移住支援

田舎へ移住するためには、住宅の確保、職の確保、地域コミュニティへの参加等、多くの課題を乗り越えなければならない。高島市への移住者が増えている背景として、これらの課題に対し、市が「若者定住相談員の創設」、「空き家流通システムづくり」、「地域の教科書づくり」など、積極的に支援制度を展開してきたことが大きい。また、「結びめ」に代表されるように、地域や民間が活発に移住促進に取り組み、行政とも積極的に連携していることも、移住者が増えている大きな要因と言える。

滋賀県　近江八幡市

人口	81,738人
高齢化率	21.5%
合計特殊出生率	1.46
社会増減率	0.9%
専門的技術的職業従事者割合	6.5%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：障害のある人たちの造形作品を中心に展示をするミュージアム
名称：ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ
実績：「アール・ブリュット（生（き）の芸術）」の展覧会などを多数開催

■きっかけ～障害者のアートを展示したい

○滋賀県内の福祉施設において長年取り組まれてきた障害のある人の造形活動が発展し、「障害者の作品を常設で展示できる空間の整備」についての構想が生まれた。
○絵本作家であり後にＮＯ－ＭＡのアートディレクターとなるはたよしこ氏をはじめとするアート関係者、福祉現場スタッフ、学術研究者、行政等が集まり、構想を検討した。

■現在～全国でも貴重なアート空間に

○伝統的建造物群保存地区の永原町で空き家になっていた築 80 年の町家「野間邸」が改修され、2004 年６月に「ボーダレス・アートミュージアムＮＯ-ＭＡ」が誕生した。
○同ミュージアムを運営する滋賀県社会福祉事業団は、2010 年にパリで開催され、多くの入場者数を集めた「アール・ブリュット・ジャポネ」展の日本側の事務局を担当した。全国の 63 人の出展者と主催するパリの美術館との調整役を担うなど、「アール・ブリュット」の拠点としての役割を果たしている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■信楽焼の粘土を活用した造形活動の歴史

滋賀県には「日本の障害者福祉の父」といわれる糸賀一雄氏らが 1946 年に知的障害児入所施設「近江学園」を創設し、「この子らを世の光に」という理念をもって福祉の実践を積み重ねた歴史がある。同学園は、当時、信楽町と山伝いの大津市にあったことから、信楽焼を生んだ良質な粘土を活用した造形活動が行われていた。この造形活動は、子ども達の情操教育に大きな役割を果たしたことから、県内の他施設へ取組が広がっていった。

■歴史的町並みに佇む築70年の町家による伝統的な空気と新しいアートとが調和した空間

ＮＯ－ＭＡが位置する旧市街地は、近江商人の流れを汲む、伝統的な町屋が連続した町なみの景観が、文化庁より「伝統的建造物群保存地区」の指定を受けている。八幡堀沿いにたたずむ古民家は素晴らしい景観を作り出している。野間邸は昭和５年に建てられた数寄屋造りの町家であり、ミュージアムに改修したことで、一般的なギャラリースペースとは異なる魅力的な空間を生み出している。

■「Art　Brut(アール・ブリュット)」の先進地

「アール・ブリュット」とは、美術の専門的な教育を受けていない人が、伝統や流行、教育などに左右されず、自身の内側から沸き上がる衝動のままに表現した芸術を意味する。企画展を年４回開催するとともに、全国のアール・ブリュット作家の作品調査を行う。これらの取組もあって、滋賀県は、「アール・ブリュット」を支援するための拠点を全国に先駆けて整備する方針を 2012 年に表明。作家の著作権の保護など、障害のある人の造形活動をサポートすることとしている。

人口	88,669人
高齢化率	26.1%
合計特殊出生率	1.72
社会増減率	−0.8%
専門的技術的職業従事者割合	5.5%

京都府　舞鶴市

地域における創造的な取組の事例

■取り組みの概要

テーマ：アートを通じたまち創造
名称：「MAIZURU RB」
実績：「MAIZURU RB」が企画・立案の中心となり、赤煉瓦倉庫群を拠点としたアート・プロジェクトを展開。プロジェクトの一例に、美術家・小山田徹氏監修の「浮遊博物館」、日比野克彦氏監修「種は船 in 舞鶴」などがある。

■きっかけ～優れたアートディレクターの起用

○舞鶴では、1991 年に「赤煉瓦倶楽部舞鶴」が発足するなど、赤煉瓦倉庫群を積極的に保存・活用する動きがあった。
○「赤煉瓦を舞鶴の芸術活動の拠点として充実させたい」という地域の長年にわたる強い思いと舞鶴市にある数々の地域資源が、現在「MAIZURU RB」のアートディレクターをつとめる森真理子氏の心を惹きつけ、これまでの経験を活かした活動ができるのではないかという可能性を感じさせた。森氏は愛知県出身であるが、現在は舞鶴市に居住している。
○2007 年に、森氏をディレクターとして「MAIZURU RB」が始動。森氏の外部の人間としての視点を活かし、アートを通じた舞鶴の新たな価値の創造・発信が行われている。

■現在～赤煉瓦倉庫からまちづくりへの発展

○アート活動により市民の「赤煉瓦倉庫は近寄りがたい」というイメージが払拭された。
○商店街活性化、老人ホームでの認知症のケア、子どもの教育など、様々な場面で、アートが取り入れられるようになり、まちの人々の新たな関わりを生み出している。
○アーティストによる活動が、舞鶴の隠れていた価値を引き出したことで、外部の関心を呼び、観光客の誘致につながっている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■戦争の歴史と赤れんが倉庫

軍港を持ち、引き揚げの歴史も残る舞鶴は、戦争と切り離すことができない。その名残の一つが 12 棟にわたる赤煉瓦倉庫群である。アート・プロジェクトにおいても、こうした「舞鶴が持つ『負』の側面」にあえて着目した活動が少なくない。

■海に関するコトやモノ

京都府北部の日本海に面した舞鶴市には、漁師たちの船屋や豊かな食材、貝殻を使って艶やかな糸を作る職人技術、かつて海に木材を係留していた杭跡、高い造船技術など、「海」にまつわる地域資源が溢れている。日比野氏の「種は船 in 舞鶴」にみられるように、土地に眠っている「海に関するコトやモノ」がアーティストの関心を惹きつける要素となっている。

■外部の視点を持ったディレクター

地域を中心に進めてきた赤煉瓦の保存・活用の活動が大きく発展した背景には、アートディレクターである森氏の存在が大きい。森氏が初めて舞鶴を訪れたときの印象は、「地域資源が多すぎて逆に特色が見えない」ということだったが、街になじむにつれ「舞鶴の魅力は一見マイナスと思われている点にある」と感じるようになったという。舞鶴の戦争の歴史などの「負の遺産」も地域資源として活用できる。アートに造詣が深い森氏の情報発信とネットワークが、多様なアーティストを地域に招く原動力となっている。

■様々な活動を可能とする地域の人々の存在

「MAIZURU RB」の活動は、アートの可能性を理解し、積極的に取り入れようとする地域の人々の存在により、介護福祉や教育など、様々な場面に広がっている。

兵庫県　豊岡市

人口	85,592人
高齢化率	28.2%
合計特殊出生率	1.66
社会増減率	−1.1%
専門的技術的職業従事者割合	5.7%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ:地場特産品を活用したまちおこし

名称：カバンストリート（宵田商店街）

実績：地元商店街を「カバンストリート」と位置付け、特産品である「豊岡カバン」を活かした地域活性化の取組を展開。

■きっかけ～商店街活性化と地場産業の再興～

○沈滞した宵田商店街の賑わいを取り戻すため、兼先正雄氏（同商店街理事長）をはじめとする若手商業者が中心となって活性化策を検討。豊岡の特産品であるカバンに着目した。

○2004 年、商店街を「カバンストリート」と位置付け、地元カバン産業の協力を得て商店街でのカバン委託販売を開始。

○桂きん太郎氏（落語家）をコンサルタントとして迎え、「365 バースデートート」、「カバン自動販売機」の設置など、ユニークな取組を展開。また、豊岡を代表する鞄職人である植村美千男氏を招き、長年わたる職人の技を披露する「かばん工房」を開設した。

○ハリウッドで活躍する特殊効果アーティストとのカバン共同開発なども話題となり、全国的な注目を集めている。

■現在～カバンを通じて新たな賑わいを創出

○ユニークな取組がメディア等で頻繁に取り上げられたことにより、近隣観光地から多数の観光客が商店街を訪れるようになった。

○商店主たちの熱心な取組に関心を寄せた、デザイナー・由利佳一郎氏（豊岡出身）が帰郷。商店街内で新ブランドを創設し、世界的に権威のあるデザイン賞を受賞するなど、新たな広がりを見せている。

○取組に共感したものづくりを志す若者が植村氏や由利氏のもとへ修行に訪れ、新たな店舗を開店する動きも見られる。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■職人やデザイナーを動かした商店主たちの熱意

東京でＣＧデザイナーとして活躍し、カバン産業に携わる気はなかった由利氏だったが、「カバンストリート」の取組を知り、豊岡カバンをＰＲする機運が高まったことに心を揺さぶられ、「この機会を逃すと一生帰れない」との思いから帰郷を決意した。また、カバン会社の会長であった植村氏は、カバンを通じたまちおこしに尽力する若手商店主らからの熱心な誘いに「若い人たちの力になり、自分の腕を生かせるチャンスにもなる」と出店に応じた。若手商業者の熱意とユニークな取組が、職人やデザイナーを動かす原動力となった。

■豊岡ならではの地域資源、自然風土

豊岡カバンの歴史は、国の伝統的工芸品や地域団体商標に登録されている「豊岡杞柳細工」に始まる。円山川周辺に原材料であるコリヤナギが自生していたことから、柳行李づくりがこの地に盛えた。円山川は「母なる川」とも呼ばれ、鳥や魚、植物など多くの命を育み、国の特別天然記念物・コウノトリもこの地で生活してきた。豊岡市では、「コウノトリも住める豊かな環境（自然と文化）は、人間にとっても持続可能で健康的に暮らせる環境であるに違いない」と考え、2002 年から農薬や化学肥料に頼らず、環境に配慮して様々な生きものを育む稲作技術を目指すなど、自然との共存を推進してきた。こうした価値観が豊岡独自の文化や産業の発展につながっているといえる。

兵庫県　丹波地域
（丹波市・篠山市）

	丹波市	篠山市
人口	67,757人	43,263人
高齢化率	28.8%	28.5%
合計特殊出生率	1.56	1.38
社会増減率	−0.6%	−1.0%
専門的技術的職業従事者割合	6.2%	6.0%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：地域主体の音楽祭の開催
名称：丹波の森国際音楽祭シューベルティアーデたんば
実績：国内外から著名なアーティストを招聘し、コンサートを開催。1995 年から 17 回を数える。

■きっかけ～「森の都」ウィーンとの友好親善提携

○1989 年、豊かな自然の中で培われた暮らし、人と自然と文化が調和した丹波の森づくりを目指す「丹波の森構想」を当時の丹波 10 町において策定。1993 年には丹波地域と「森の都」として名高いウィーン市 13 区との間で友好親善提携の調印が実現する。
○それを知ったシューベルト歌手の第一人者である畑儀文氏（篠山市出身）は、自身が専門とするシューベルトがウィーン出身であり、自身のふるさとが丹波地域であることに自らの使命を感じ、丹波地方の自然のイメージにマッチするシューベルトの音楽を核とした音楽祭を構想した。
○行政や音楽関係団体が共同で実行委員会を設置し、実現にこぎ着けた。

■現在～住民が手作りで行う名物音楽祭に

○田んぼや寺、酒蔵など、丹波地区全域の特徴を生かした身近で親しみやすい場所を舞台とする「街角コンサート」、丹波地域の音楽家らが小・中学校に出前演奏する「ふるさと音楽ひろば」「キン・コン・カン・コンサート」などの取組が支持され、毎年、数千人規模の来場者を集めている。
○有志による歌愛好家が集い、ファイナルコンサートを盛り上げている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■市民による自主的な音楽活動

丹波地域では、数多くのアマチュア合唱団が存在し、音楽活動が活発に行われている。音楽祭の一番の特徴である「街角コンサート」は、市民ボランティアで構成される実行委員会が、会場選定、出演交渉、設営、進行等を行っている。また、実行委員会だけでなく、自治会、施設職員などの積極的な関わりにより各地域の良さを活かしたものを創り上げている。

■郷土を愛するキーパーソンの存在

丹波地域で生まれ育った畑氏は、シューベルトがウィーンで育ち、亡くなったことから連想し、「自分の故郷である丹波でシューベルトの音楽祭を開きたい」との思いを強めた。畑氏の郷土を愛する心と行動力が、ウィーンとの友好親善提携という好機を得て、音楽祭を成功に導いた。出演者選定を担う畑氏は、丹波を愛してくれる人柄を重視しており、その情熱に押され、出演を快諾するアーティストもいるという。

■日本の原風景と家族のような地域住民

出演アーティストは日本の原風景とも言える丹波地域の田園風景や豊かな自然に惹かれ、家族のように迎え入れてくれる地域住民との交流を楽しみにしている。コンサート終了後には、花束代わりにリボンで結わえた丹波の黒豆などの地域の特産品が贈られるなど、丹波ならではのおもてなしが、アーティストに「また帰って来たい」との思いを抱かせる要素となっている。

鳥取県　倉吉市

人口	50,720人
高齢化率	28.1%
合計特殊出生率	1.58
社会増減率	0.1%
専門的技術的職業従事者割合	6.8%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：地域密着型音楽祭の開催
名称：アザレアのまち音楽祭
実績：1983 年の第 1 回以来、長期にわたって開催されており、2012 年で 30 周年（30 回目）を迎えた。

■きっかけ～音楽教師のヨーロッパ視察体験

○倉吉市在住の音楽教師だった計羽孝之氏が、教員時代のヨーロッパ視察でオーストリアの「ザルツブルク音楽祭」を体験。街中ではサロン形式のコンサートが開かれ、観客の反応を大切にしている音楽家の姿に感銘を受け、「倉吉にも音楽を身近なものとして根付かせたい」と構想する。

○1981 年、倉吉文化団体協議会が結成。82 年から同協会に参画した計羽氏が、倉吉市内の音楽団体に呼びかけ、83 年に第 1 回の音楽祭を開催。

■現在～地元密着型の親しみある音楽祭に

○当初は一日だけの市民音楽祭のスタイルだったが、「もっとたっぷり演奏を聴きたい」との要望が市民より出て、徐々に回数と期間を増やし、現在では 20～30 回、約 1 か月半というロングラン公演に発展している。

○音楽祭は「とっとり誇り１００選」に選ばれるなど、地域住民が誇る風物詩として定着し、30 年にわたって開催され続けている。

○プロ、アマ混成のオーケストラである「アザレア室内オーケストラ」など、音楽祭を活動拠点とする演奏団体が複数結成され、レベルの高い公演が行われている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■地元出身の音楽家にこだわった音楽祭

「地域在住の優れた演奏家たちを招き、中央に引けを取らない音楽家に育てていきたい」との思いから、出演者は倉吉市を中心とする鳥取県及び島根県の在住者、出身者を中心に構成されている。両県より選ばれた演奏家による「山陰の名手たちコンサート」など、地域色を前面に押し出しつつ、切磋琢磨を仕込んだプログラムを用意することによって、地元出身の演奏家の里帰り公演が実現している。

■若手音楽家が活躍できる環境

計羽氏が会長をつとめる「鳥取オペラ協会」には、毎年、鳥取県出身の音大卒業生や鳥取大の愛好者が多数加入している。都会では数年に一度出演することがやっとと言われるオペラ公演だが、同協会は若手に何度も活躍の場を与え、音楽好きの鳥取大生やＵターンした音大卒業生の受け皿となっている。このような環境が、地元出身の優秀な音楽家が輩出される要因となっている。

■音楽祭の掲げる志の高い理念

音楽祭名である「アザレア」は、倉吉の文化運動の一翼を担った俳人の河本緑石が、宮沢賢治とともに発刊した文芸同人誌にちなんでおり、音楽祭は「倉吉文化」を創造するために文芸、美術、音楽にまで幅広い活動を展開した緑石の志を継承することを理念としている。接客マナーを徹底し、ディレクターからのアンケートの回答を公表するなど、高い理念に基づきマネジメントされており、一般的な音楽祭とは一線を画した存在となっている。

広島県 三次市・庄原市

	三次市	庄原市
人口	56,605人	40,244人
高齢化率	31.4%	37.7%
合計特殊出生率	1.39	1.73
社会増減率	−0.6%	−0.8%
専門的技術的職業従事者割合	6.3%	5.8%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：アースワーク※を用いたダム周辺環境整備と地域振興
※アースワーク：山や川、大地など自然そのものを素材として展開される芸術運動

名称：灰塚アースワークプロジェクト
実績：ダム建設による自然環境や景観への影響緩和や地域との融合をアートの視点から提案。ハード整備とともに地域活性化にも貢献する。

■きっかけ～ダム建設に伴う地域再建の検討

○1965 年、灰塚ダム建設が浮上。約 20 年にわたる反対運動を経てダム建設を受け入れた旧三良坂町・旧吉舎町・旧総領町の住民たちが、旧建設省、町とともに、普段は水につからない高水敷を活用した地域活性化の方策を模索し始める。

○調査委託を受けたシンクタンクの提案を受け、地元自治体や地域住民の組織でまとめた「水源地域再建実行計画」に「アースワーク公園の整備」が盛り込まれ、相談役として岡崎乾二郎氏（現代美術家）らを起用。1994 年、関係行政機関や地域住民により灰塚アースワークプロジェクト実行委員会を結成し、活動を開始。

■現在～環境美術圏域を目指す空間に

○灰塚での取組は「灰塚方式」と呼ばれるほど、ダム建設後の地域再建のあり方に一石を投じた活動として、全国的に注目された。

○地域住民や子ども達のアイデアをもとに、護岸工事で掘削した土砂を利用した「日回り舞台」や、かつての豊かな田園風景を自然公園として復活させた「なかつくに公園」など、環境と美術の融合に向けた周辺施設が実現。

○地域住民の直接投票やインターネットを通じた市民投票により、ガードレールや高欄の色を決定しオリジナルの色で統一するなどの活動も進められた。

○地域全体をフィールドとしたワークショップ、レジデンス事業、若手作家や美大生の作品を地元住民の希望者に貸し出す「作品ホームステイ」など、地域とアーティストが一体となり、灰塚地域の交流人口増加を目的とした取組が展開された。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■広大な自然とダム予定地という特殊な環境

当初、アースワークに否定的だった岡崎氏は、灰塚地域の豊かな自然環境とダム建設により発生した広大な高水敷を目の当たりにして、「将来、巨大な芸術活動のフィールドに成長するのでは」と夢を抱くようになったという。かつての集落が水没し、自然にかえっていくという非日常的な環境は、灰塚を訪れた多くのアーティスト達の創作意欲を刺激し、ダム事業により伐採された木材を利用して全長 60 メートルの船をつくる「船をつくる話プロジェクト」(PH スタジオと地元住民）などの活動も生まれた。

■寛容で魅力的なキーパーソンの存在

岡崎氏は、数々のワークショップ活動を通じて、十数年にわたりダム整備に対する住民意見の取りまとめ役を担ってきた。そのアイデアは膨大な数に上り、自然環境保全、景観形成、文化活動、イベントなど多種多様である。また、指導者としての岡崎氏の魅力に惹かれ、多くの学生や若手アーティストが継続的に地域を訪れた。スタッフとして活動し始める学生やプログラム参加をきっかけに成長を遂げ、レジデンスアーティストとして“里帰り”する若手アーティストも見られるなど、活動に広がりを見せている。

■まちづくり

アースワークの拠点となった旧総領町は、「過疎を逆手にとる会」などの住民参加のまちづくりを 1970 年代から継続的に進めてきた地域で、これらの取組は、アースワークという実験的で耳馴れない取組をスムーズに受け入れる下地となった。

人口	145,202人
高齢化率	30.3%
合計特殊出生率	1.42
社会増減率	0.8%
専門的技術的職業従事者割合	6.3%

広島県 尾道市（山手地区）

地域における創造的な取組の事例

■取り組みの概要

テーマ：アートと連携した空き家再生事業
名称：AIR Onomichi
実績：2007 年から尾道市山手地区の特徴を活かしたアーティスト・イン・レジデンスを隔年で開催。地区に点在する作家の作品を巡回しながら見学する「AIR ツアー」などを展開。

■きっかけ～大学の開学と地域活性化

○2001 年に尾道大学美術学科で教鞭を執ることになった現代美術作家・小野環氏が、茨城県から尾道市へ転居。初めから気になっていた「山手地区」に住まいを得る。
○山手地区の古い迷路のような街並み、高齢化や過疎化にともない発生した空き家や廃墟などに芸術的な魅力を感じた小野氏、山手地区在住の三上清仁氏（美術家）らが、このまちでのアートイベントを実現するため、尾道大、市民らとともに実行委員会を組織。
○「ＮＰＯ法人尾道空き家再生プロジェクト」（代表：豊田雅子氏）の活動と連携し、2007 年より、空き家や空き地などを活動拠点とするアーティスト・イン・レジデンス事業を開始。

■現在～若者たちが集まる賑わいのある街に

○アートを活用した空き家再生の活動は、ブログなどを介して全国から賛同者が現れ、大きな動きとなり、今では官民一体となった古民家再生の取組へと発展している。
○尾道大の関係者や美術を学ぶ学生らが空き家に移り住み始めるとともに、空き家を利用した新しい店舗も開業。地域に新たな賑わいをもたらしている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■街の息遣いを感じる、味わいのある街並み

山手地区は、高齢化や不便さによって空洞化が進み空き家が増加しているが、それらのなかには建築的価値が高く、不思議で個性的な魅力を醸し出しているものもある。また、迷路のように入り組んだ古い街並みが、アーティスト達の想像力を掻き立て、創作意欲を高める要素となっている。

■古き良き尾道を愛する地域住民の存在

空き家再生プロジェクトは、青年期を過ごした尾道の街並みが失われていく光景を憂いた豊田氏が、築 70 年の古民家を自ら購入し、夫と二人で修復したことに始まる。再生された古民家は、美術や文学を学ぶ若者たちの寮やアトリエ、ギャラリー、セミナーハウスとしても提供されている。このような尾道の街並みを愛する地域住民による自発的な取組が、アーティストの活動を支え続けている。

■文人や芸術家が愛した歴史と伝統の町

尾道は林芙美子や志賀直哉などに代表されるように、多くの文人や芸術家が愛し、居住した町でもある。これまで尾道を題材として扱った文学、映画作品なども数多く発表されてきているが、このような町の歴史や伝統が、尾道を訪れたアーティストに刺激を与え続け、次なる作品を生み出す源泉となっている。

人口	28,630人
高齢化率	32.9%
合計特殊出生率	1.5
社会増減率	0.8%
専門的技術的職業従事者割合	5.6%

山口県　美祢市

地域における創造的な取組の事例

■取り組みの概要

テーマ：滞在型創作活動施設による地域魅力の発信
名称：秋吉台国際芸術村
実績：1998 年の開館以来、国内外の若手アーティストを支援するレジデンス事業、芸術家育成を目的とするセミナー等を実施。

■きっかけ～地元音楽教師たちが始めた勉強会

○1989 年、地元の音楽教師や作曲家四人が「世界最先端の音楽を学び、若い音楽家を育てたい」と企画し、国際的に活躍する作曲家・細川俊夫氏を講師に招き、「秋吉台 20 世紀音楽セミナー＆フェスティバル」を開催。

○ヨーロッパで活躍する音楽家を呼び、世界初演を含むヨーロッパの現代音楽を紹介するなど、音楽界に多大な影響を及ぼすセミナーへと成長。

○1995 年、山口県がセミナーを核とする芸術村基本構想を策定。1998 年、滞在型創作活動施設「秋吉台国際芸術村」が完成。

■現在～世界的に有名なレジデンス施設に

○芸術村のレジデンスでは、11 年間で長期 65 組、プロジェクト 38 組、交換３組、短期 35 組のアーティストを支援している。

○特に、長期は、旅費や制作費、滞在費等の支援が受けられるため、2011 年度は３名の募集に対し、59 か国 397 組の応募があるなど競争率が高く、国際的に著名なレジデンス拠点として高く評価されている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■日常の喧騒から解き放たれた芸術空間

秋吉台国際芸術村は、アーティストが日常の喧騒から解放され、創作活動に集中できる環境にある。

アーティストが泊まり込み、創作活動や講義・演奏会・展覧会を繰り広げることができる環境を、秋吉台という自然の魅力が豊かな地域の特性が創り出している。滞在アーティストの完成作品を芸術村で公開するなど、レジデンスの特性を活かした取組を進めている。

また、市民・県民との交流を広めるために、滞在アーティストが出かけて、交流会や創作を進めるなどの取組も行っており、今後住民の間へのさらなる普及が期待される。

■自然と調和した個性的な建築物

芸術村の各施設は世界的に著名な建築家・磯崎新氏が設計。自然との対比的なあり方が美しい本館棟や、現代音楽の巨匠ルイジ・ノーノのオペラの上演を念頭に設計されたホールなどは、芸術村に滞在するアーティストだけではなく、国内外の建築家や観光客にとっても魅力となっている。

■セミナー等による若手芸術家の育成

芸術村では、レジデンス事業以外にも、若手演奏家などを対象とした質の高いセミナー＆コンサートや、山口県ゆかりの若手アーティストの発表会の開催を通じて、若手芸術家の育成に取り組んでいる。
また、生徒へのオーケストラ演奏の指導や地域の文化交流の促進、音楽会の開催など、県民の文化芸術活動の振興にも取り組んでいる。

徳島県　神山町

人口	6,038人
高齢化率	46.4%
合計特殊出生率	1.33
社会増減率	−4.4%
専門的技術的職業従事者割合	3.7%

地域における創造的な取組の事例

■取り組みの概要

テーマ：アートによるまちおこし・移住促進
名称：神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）
実績：毎年９月から２か月間、国内外から３名の作家を招へい。通算 16 カ国、42 名。

■きっかけ～青い目人形の里帰り～

○1990 年、神領小学校の PTA 役員だった大南信也氏らが、戦前にアメリカから贈られた「青い目の人形アリスちゃん」の里帰り運動を始め、無事に里帰りを実現させた。この取組が契機となり国際交流活動が活性化、1992 年に「神山町国際交流協会」の設立へ発展する。

○1996 年、徳島県が「とくしま国際文化村構想」に基づき、神山町に国際文化村を創ることを計画。それを知った大南氏らは、行政主導のハード整備ではないソフトを重視した住民主体の考えを盛り込んだ「国際芸術家村づくり構想」を自発的に提案。

○1999 年、提案を実現させるための第一歩として、KAIR 実行委員会を結成し、手探りの中、アーティスト・イン・レジデンスを開催。

■現在～定住希望者が増えてきている

○大南氏が理事長をつとめる「ＮＰＯ法人グリーンバレー」が母体となり取組を継続。地域が求める働き手や起業家を家・土地付きで公募する「ワーク・イン・レジデンス」など、多様な取組を展開している。

○招へい作家の中には、神山町に惹かれ、毎年自費で訪れて創作活動に励む人、また、定住する人も現れ始めている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■「お接待文化」が息づくまち

KAIR に関する宿泊施設やアトリエの提供、画材の調達、生活に関する相談などは、全て地域住民の協力のもとに行っている。アーティストが作品制作に必要とした道具は、住民がメーリングリストやツイッターで呼びかけて家にあるものを持ち寄るなど、お遍路さんへの“お接待”さながらの手厚いサポート体制が大きな特徴である。アーティストからも「神山くらい必死でサポートしてくれる町はない」と評価されており、それが国内外に口コミとなって広がって、レジデンスへの応募や観光客の誘客などにつながっている。

■地域に根差した歴史文化

神山町には江戸時代後期から人形浄瑠璃をはじめとする民俗芸能が育まれており、町内には江戸後期から明治、大正期にかけて制作された 1,459 枚（日本最多）の舞台の背景画「襖絵（屏風絵）」が現存している。これらは招待作家として招かれた絵師たちが、庄屋や富豪の屋敷に滞在しながら、地域住民の協力のもと制作したものである。

■無線ブロードバンド環境の充実

神山では「徳島県サテライトオフィスプロジェクト」の実証実験が展開されており、無線ブロードバンド環境が充実している。美しい日本の原風景を感じながら屋外で仕事をすることが可能であり、古民家ではテレビ会議を開催することもできる。大都市圏と同じような仕事環境が整っているため、創造的人材が長期にわたって滞在することができる。

佐賀県　佐賀市

人口	237,506人
高齢化率	23.0%
合計特殊出生率	1.52
社会増減率	0.4%
専門的技術的職業従事者割合	7.8%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：まちなか居住のモデル実験
名称：まちの間プロジェクト
実績：まちなか居住の可能性を探るため、中心市街地の古い民家をモデル的に改修し、改修に携わった学生３人が実際に居住。

■きっかけ～中心市街地の再生をめざして地元大学(建築)との共同研究から

○中心市街地の再生を目指して、2009 年に、三島伸雄氏（佐賀大学准教授）を代表として、建築士、公務員、商店街関係者、市民らが、「佐賀のまちなか居住研究会」を立ち上げた。
○2009 年度にワークショップなどを通じて遊休地への住宅供給モデル提案を行ったが、中心市街地で増加している空き家の活用を進める必要性に気づき、2010 年度に「空き家に住もう実験」を行い、実際にシャッターが目立つ商店街の中にある古い民家（明治２年築）を改修し、実際に学生が居住する実験「まちの間プロジェクト」を行った。

■現在～「まちの間」が地域活性化の拠点として徐々に動く

○解体や構造補強、配管工事から壁塗りまで、大変な工事であったが、学生の人手と地元の施工業者や佐賀市等の協力もあり、３か月ほどで完成した。工事期間中は周辺の商店街からの差し入れがあり、学生も地元の水路の掃除を手伝うなど、地域との交流が生まれ、現在まで続いている。
○実験住宅「まちの間」の１階には、コミュニティスペースが設けられており、オープンハウスやワークショップなどが開かれている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■城下町としての趣のあるまち

佐賀市の中心市街地は、広大で平坦な佐賀平野にある。日照率が全国一であり、建物も低層なものが多い。まちなかは、水路が張り巡らされた城下町であり、戦災に遭っておらず、歴史と水路が身近な存在として残っている。

■学生という人材の育成に適した環境

人口の高齢化、人口減少、空き店舗の増加が進む中心市街地においては、若者が居住することにより、まちの賑わいと活気を取り戻すという期待があった。また大学が近い立地なので学生が住みやすいこと、改修作業や地域生活を営むことで学生という人材を育成できること、まちなかでの学生のシェア生活に多くの人の応援が期待出来そうだったこと、などがプロジェクトを進める動機となった。

■学生を温かく受け入れる地域コミュニティ

朝早くから夜遅くまで建物の解体や改修工事に取り組む学生の姿を見て、氷を差し入れするなど、地域住民と学生との距離が縮まっていった。昼食をとるために、毎日大学の食堂まで戻る学生の姿を見て、地域の食堂が 400 円のメニューを提供するようになった。
このような周囲の協力もあって、傷みのひどかった明治期の民家が、平成の世に実験住宅「まちの間」として生まれ変わった。

■創造的活動を支援する環境

佐賀商工会議所が中心市街地活性化のために 2005 年「TMO 佐賀」を設立し、事業を推進してきたが、2009 年に「ユマニテさが」という NPO 組織として法人格を取得。空き店舗対策やイベント企画、情報発信、まちづくりファンド事業など幅広く対応している。この組織が改修物件の斡旋などを担当。「まちの間」プロジェクトの円滑な展開を支えている。また隣接する小城市では地域の和菓子店が中心となり、羊羹資料館の設立や和菓子講座の開催を通じて、佐賀市を含めたまちの活性化に貢献するなど、本業改革型の地場産業なども立地しており、地域が内発的な創造性を有していることがうかがえる。

熊本県　熊本市

人口	734,474人
高齢化率	20.8%
合計特殊出生率	1.51
社会増減率	−0.2%
専門的技術的職業従事者割合	7.6%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：様々な取組を通じて、市民のアートへの親しみを醸成する
名称：熊本暮らし人祭り「みずあかり」、熊本市現代美術館
実績：熊本の地域資源を活かした５万４千個のろうそくを熊本城の周りに灯し、新たな景観を創り出す。現代美術館では展覧会を開くだけでなく、中心市街地に立地している強みを活かし、地域に密着しつつ、全国から注目される企画づくりを行っている。

■きっかけ～「人間の家」を目指した現代美術館／新幹線開通に危機感を抱いたまちづくり

○みずあかりは、「熊本ルネッサンス県民運動」の活動で、故郷・熊本の魅力を再発見し“ここに暮らす喜びや切なさまでも共感できる市民と地域でありたい”というコンセプトのもと、ボランティア主導の祭りとして 2004 年にスタートした。
○現代美術館は中心市街地に立地している強みを活かし、「美術館である前に人間が集う場所」を目指して、「人間の家」という基本コンセプトのもと、南嶌宏前館長を中心に施設計画づくりを行い、2002 年にオープンした。

■現在～市民のサロンとしての「まちなか美術館」

○みずあかりは、「竹」「水」「火」「ろうそく」等の熊本の地域資源を活かした灯りの祭典であり、熊本城周辺に２日間で５万４千個のろうそくが灯される。会場に飾られる竹灯籠の制作・設営・点灯・撤収などは全て延べ約 2,000 人のボランティアの手で行われている。市民の取組として、2004 年から継続開催されており、観客は約 15 万人に及んでいる。
○市民ボランティアによる運営が行われていること、地域の資源を活用していることなどが評価され、「第 16 回ふるさとイベント大賞」の大賞（総務大臣表彰）を受賞した。
○現代美術館は、待ち合わせや仕事帰りに利用できるよう、毎日 20 時まで開館しているほか、コンサートや映画上映会を継続して開催するなど、「まちなか美術館」として市民が集うサロンのような場となっている。
○「生人形」などの熊本の地域文化に着目した企画や、周辺商店街を巻き込んだプロジェクト型の企画のほかに、地元の花き生産者によるシンポジウムを開催するなど、「アートを切り口とした」地域文化の発信に努めている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■施設の計画・運営に尽力したキーパーソン

創造的な場の実現には、地域のキーパーソンが大きな役割を果たしている。みずあかりでは、実行委員長の石原靖也氏をはじめ、民間企業や行政、学生などが集まり、市民と行政がパートナーシップを持ち「自らの地域を自らの手で再生する」という考えが実現につながった。

熊本市現代美術館では、施設の計画や運営に尽力した南嶌前館長をはじめ、「美術館は市民との関係性を生み出す場」と言い切る桜井現館長、地元と美術館をつなぐ学芸員などの存在が大きい。街なかにおける気軽に楽しめる空間の必要性を訴え、市民に身近な美術館を目指す一方で、質の高い企画にこだわるなど、地方の公立美術館におけるミッションを明確にするとともに、現在に至るまでブラッシュアップし続けている。

■文化芸術を支える市民の力

みずあかりでは、竹灯籠の制作から、当日の設営、点灯、撤収までの全てを、延べ 2,000 人に及ぶ市民ボランティアが行っている。市民の手によって５万４千個ものろうそくが灯されることから、文化芸術を支える住民層が厚いことがうかがえる。
また、中心商店街を舞台に音楽や大道芸等の活動を展開するストリート・アート・プレックス熊本が現代美術館とともに生まれ、着実に実績を積み重ね、質の高いコミュニティプロジェクトとして市民に親しまれている。地域が主体となった様々なアートイベントが企画・開催される等、芸術に親しむ風土が育まれている。

大分県　由布市
（旧：湯布院町）

人口	34,702人
高齢化率	29.0%
合計特殊出生率	1.41
社会増減率	0.9%
専門的技術的職業従事者割合	6.8%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：文化的な香り漂う温泉まちの形成をめざして、旧湯布院町の町おこしグループと大分市の映画ファンが意気投合して生まれた映画祭
名称：湯布院映画祭
実績：日本で最も長い開催実績（36 回開催）

■きっかけ～欧州視察から生まれた住民主導での温泉保養地（Kurort、クオルト）づくり

○1952 年、由布院盆地全体を飲み込むダム建設構想があったが、町が二分される大激論の末、建設中止を選択。その後も大型のリゾート開発事案に反対し続け、美しい自然・景観との共存を重視する意識が、特に青年団や旅館経営者の間に根強くあった。住民は、反対の者も含めて意見交換を密に行い（明日の由布院を考える会）、次第に湯布院の将来について価値観を共有できるようになっていった。

○活動の中核にいた旅館の若手経営者（志手康二氏、溝口薫平氏、中谷健太郎氏）らが、欧州を視察した際に、大型施設に頼らない、ホスピタリティが高く文化的な温泉保養地に刺激を受け、湯布院での展開を意識した。

○映画というテーマは、東宝で助監督だった中谷氏のアイデア。1976 年に「映画館一つない町　しかし、そこに映画は在る」として、映画人が協力し「湯布院映画祭」を初めて開催。

■現在～日本で最も歴史ある映画祭となる

○湯布院映画祭は日本で最も長く続く映画祭となっている。現在は、他に「ゆふいん文化・記録映画祭」「こども映画祭」も開催され、湯布院では年 3 回映画祭が開催されている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■実行委員会メンバーの目利き力

実行委員会の中心メンバーは、大分市に在住する一般の映画ファンであるが、日本映画に対する造詣が深く、「目利き力」はプロの映画評論家からも評価を得ている。そのことが、「湯布院映画祭に招かれることは光栄」とプロの映画製作者からも言われるほどの「湯布院映画祭ブランド」を形成した。

■映画ファンと映画製作者との濃密な交流

特別試写作品の上映後に開催される「シンポジウム」では、ゲストとして招かれた監督・脚本家・プロデューサーなどのスタッフや俳優に対して、全国から集まった「映画通」（観客）が、感想や質問を直接ぶつけ、緊張感のあるやり取りが交わされる。また、毎晩開催されるパーティでも映画ファンと製作者とが直接語り合っている。このような直接交流の機会が、観客・製作者の双方にとって大きな魅力となっている。

■人脈を最大限に活用

中谷氏は東宝助監督時代の人脈を活かして映画評論家の白井佳夫氏と知り合い、白井氏が東京で映画界との折衝を担当するなど、当初から人脈を最大限に活用して取組を進めている。人脈は映画祭のゲストとしてやってくる映画人（監督、俳優、評論家）に湯布院の魅力を伝えるうえでも重要な役割を果たしている。

■文化に関心を寄せる住民層・ホスピタリティの高い温泉保養地

映画祭だけでなく、湯布院アートプロジェクトなど、様々な芸術活動が自然に展開されている。療養のために訪れたアーティストが定住しアトリエを開くと、そこに様々な文化人が集い、それが湯布院アートプロジェクトにつながっていくなど、食も宿泊も温泉もある地域であることも含め、文化との親和性がある地域となっている。

鹿児島県 鹿屋市串良町 柳谷集落

人口	105,070人
高齢化率	24.7%
合計特殊出生率	1.8
社会増減率	−0.1%
専門的技術的職業従事者割合	7.0%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：空き家を活用したアーティストの移住
名称：迎賓館事業
実績：７人のアーティストが移住。

■きっかけ～高齢化・過疎化が進んだため

○1996 年に豊重哲郎氏が 55 歳の若さで自治公民館館長に就任。小さな集落に活力を呼び起こすには「金」ではなく「人」、「人を動かす」には「感動」、補助金で行政に頼り切るだけでは集落の力を削ぐだけで集落も人も育たない、という豊重氏の強い信念のもと、柳谷集落（通称：やねだん）のまちづくりが始まった。

○住民の手で、耕作放棄地を活用したカライモの生産、自治公民館での「寺子屋教育」、オリジナル焼酎「やねだん」の商品化など、「行政に頼らない集落づくり」を次々と展開。

○そのなかで、増加している空き家対策として、アーティストの誘致を考え、空き家を改装し、「迎賓館」と銘打って、2006 年に芸術家を公募した。

■現在～7 人のアーティストが定住

○画家、陶芸家、写真家、彫刻家、ガラス工芸作家などが移住。個展や「やねだん港流（やねだん芸術祭）」などが開催され、地方にいながら本物の芸術に触れられる環境を形成している。

○やねだんの活気を知った集落出身者が県外からＵターン。2007 年には５年ぶりに赤ちゃんが生まれており、人口減少の歯止めとなるなど地域への効果は大きい。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■アーティストを積極的に受け入れるコミュニティ

豊重氏は、集落を活性化するためには“文化”が必要、生の芸術に触れれば皆が刺激を受けると考え、空き家を活用したアーティストの移住に取り組むこととした。
受け入れにあたっては、家賃３万円で家主の了解を得て、集落総出で空き家をきれいにするなどして移住環境を整えた。３ヶ月に１回は個展を開くことなど、集落づくりへの協力を条件に、全国からアーティスト限定で移住者を公募したところ、７名が移住。アートイベントや地元中学生と芸術家が交流する取組などが行われている。

■移住してきたアーティスト相互の刺激

やねだんに移住したことで、他のアーティストと仲良くなり、グループ展を開催するなどアーティスト相互にとって刺激を得る環境ができてきている。また、やねだんに興味をもったアーティストとのコラボレーションの機会があるなど、創作活動の幅が広がっている。
2010 年には、やねだん在住アーティストたち７人が、画像、映像、造、鋳造、創造、そして想像とあらゆるＺＯへチャレンジし発信していくために「ＺＯ」という集団を結成し、鹿児島市内で合同展を開催している。

■南九州の歴史・自然

移住したアーティストの１人である画家は、北海道で制作活動を続けていたが、インターネットで芸術家募集を見て応募した。創作活動のテーマが神話と縄文であり、神話を突き詰めていくと九州、そして南九州へと視点が移り、移住を決意した。また別のアーティストは、自然にも色々な表情があるが、この地域にある山のゆるやかで優しい表情が気に入ったという。

沖縄県　那覇市

人口	315,954人
高齢化率	17.6%
合計特殊出生率	1.51
社会増減率	−1.9%
専門的技術的職業従事者割合	6.2%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：閉館となった映画館の再生
名称：桜坂劇場
実績：閉館の３か月後に映画館を再生。

■きっかけ～那覇の街中から映画館が消えた

○映画監督である中江裕司氏（京都府出身）は、琉球大学在学中から映画を撮りはじめ、20 年以上にわたって沖縄を題材とする映画を撮り続けている。1999 年の「ナビィの恋」は地元沖縄で「タイタニック」を上回る 18 万人を動員。以後、「ホテル・ハイビスカス」「恋しくて」などの作品を発表している。

○昔からの映画館が廃れて、次々に廃業するなかで、老舗映画館「桜坂シネコン琉球」が 2005 年４月に閉館することになった。「那覇市の街中にある最後の映画館を残したい」と、中江氏や音楽プロデューサーの野田隆司氏など、県内のクリエイターたちが協力して、閉館からわずか３か月後に「桜坂劇場」をリニューアルオープンさせた。

■現在～沖縄文化の発信地として話題になる

○「劇場は人々の交流拠点」と考え、映画館という枠にとらわれず、音楽ライブや市民大学など多様なイベントを開催している。

○桜坂劇場のテーマは「地域と共にある、街なかの劇場」。劇場内に自社経営のカフェ「さんご座キッチン」（さんご座は桜坂劇場の建つ場所にあった戦後最初の芝居小屋の名前）や、「ふくら舎」（雑貨、古本、沖縄クラフトの発信）があり、映画を観ない人でも気軽に立ち寄れる場となっている。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■面白い人やモノに出会う確率が高いので沖縄を離れられない

中江氏は、20 年以上にわたって沖縄で映画を撮り続ける理由として、面白い人やモノに出会う確率が高いことを挙げている。「この人にはかなわないな」という人やモノに出会うことで、謙虚な気持ちになり、作品づくりに活かされるという。

■離島の強い生活感や独特の芸能が映画の題材となる

沖縄の離島ではコミュニティが見えやすく、人々の間に自然に対する畏敬の気持ちがしっかりと根付いている。
中江氏は、離島には、強い生活感や独特の芸能が生き生きとあって映画を演出してくれるという。そこで、人と人とのコミュニケーション、人と自然との関わりをテーマに映画を撮影するにあたって、沖縄の小さな離島、小さな集落を選んでいる。

■昔からの文化情報発信の場であった桜坂の象徴である桜坂劇場の復活

桜坂は、第二次世界大戦後のアメリカ統治下時代には、数百件のバー、スナック、キャバレー、映画館などが立ち並んだ沖縄最大の歓楽街であったが、1970 年頃から歓楽街の中心が若狭・辻方面に移り、衰退していった。
2000 年頃から安い賃料やモノレールの駅に近いという立地条件が見直され、若者向けのカフェやクラブ、ゲストハウスなどができ、シネコンでは味わえないオープンスタイルの桜坂劇場が復活したことにより、周辺地域も賑わいを取り戻しつつある。

沖縄県　沖縄市

人口	130,249人
高齢化率	15.5%
合計特殊出生率	1.9
社会増減率	0.3%
専門的技術的職業従事者割合	6.0%

地域における創造的な取組の事例

■取組の概要

テーマ：銀天街商店街を拠点としたアート活動
名称：スタジオ解放区、コザ銀天大学
実績：銀天街商店街に拠点を構えたアーティストがアートによる街おこし活動を展開。

■きっかけ～「帰るなら来るなー」と子どもの声

○アーティストの林僚児氏と藤森千夏氏は、東京の美大卒業後、興味があった沖縄で仲間とともにアートプロジェクトを実践し、「アートとまち育て」の研究をしている知念肇氏（琉球大学教授）と出会う。知念氏は何かやりたいと内地から沖縄にやってきた子にきっかけを与えようと、自己所有の空き店舗の2階を「アトリエに使っていいよ」と、提供した。この店舗が銀天街商店街の隣にあり、アーティスト達は銀天街に呼びかけてアート活動を実施。３ヶ月に１度のペースで通っていた。

○藤森氏は、地域の子どもから別れ際に「帰るなら来るな」と言われ、彼らと本気で何かをやってみたいとＩターンを決意。2005年に銀天街の空き店舗を改装した「スタジオ解放区」を後に夫となる林氏とともに作り、ここに居を移した。

■現在～アートによる街おこしで幅広く活動

○「スタジオ解放区」は、地域をさり気なく巻き込む手づくり感のある仕組みと関係性を取り入れたアートを実践している。

○銀天街商店街振興組合と共に「食とアートと交流の街づくり」に取り組んでおり、2007年に商店街の一角に「コザ銀天大学」を開設し、寺子屋講座など様々な活動を展開している。

創造的人材を惹きつける地域の魅力

■コザ十字路やアーケードにまつわる歴史

コザは、米軍の占領によって生まれたまちである。終戦後、コザ十字路に人が集まり、自然発生的に十字路市場が形成された。店主たちがお金を出し合ってアーケードを設置。1978年のアーケード完成とともに「銀天街」と名を変え、中部を代表する商店街となった。その後30年が経ち、買い物客が減少。空き店舗も増えアーケードのほとんどが撤去された。しかし、商店街には人の温かさやレトロな街並みが残り、商店主は旧暦で年中行事を行うなど、コザ独特の雰囲気がある。こうした商店街の歴史がアーティストを魅了する。アーケードにまつわる「銀天街360」や、アサヒアートフェスティバルに「コザクロッシング（コザ十字路）」として参加するなど、様々なアートイベントが開催されている。

■外からの知恵と刺激を受け止める地域性

コザは、外からの知恵と刺激で生き延びてきた街であり、地元の人間に外の人を受け入れる意識があるという。
飛び込みで提案してきたアーティストの思いを受け止め、アートと「若さ」と商店主達が積極的にコラボレートしたことが、商店街活性化の取組につながっている。

■自治体職員としての仕事

沖縄市は都市計画や商業活性化などの指導・助言を行うタウンマネージャーを経済文化部に配置した（2008年）。林氏は委嘱を受け、市の立場から、食とアートの交流の街づくりや、国道拡幅工事における残地空間のファサード景観美化（壁画プロジェクト）などの調整を行っている。

３-３　創造的人材が存在する地域の傾向

（１）本調査で取り扱う創造的職種

本調査では、創造的人材が存在する地域の傾向を表す指標として、以下の６職種について各都市の従事者数の割合を掲載した。

１）ソフトウェア業
２）デザイン業
３）土木建築サービス業
４）写真業
５）専門料理店
６）教養・技能教授業

土木建築サービス業については、専門的な知識を持つ建築士が、ＮＰＯ等において創造的な地域づくりに大きな役割を果たしていることが多いため取り上げた。また、食文化はユネスコの創造都市ネットワークの一分野に位置付けられており、専門料理店のシェフには創造的人材が多いと考えられる。

なお、広告制作業、映像情報制作・配給業、著述・芸術家業、学術・文化団体、新聞業・出版業等については、大都市に偏在する傾向があるため、興行業・興行団については、劇場の有無等によって特異な数値が出る可能性があるため、本調査において創造的人材が存在する地域の傾向を把握するための職種の例としては取り上げなかった。

（２）各職種の定義

総務省・経済産業省による経済センサスにおいては、本調査で取り上げた創造的職種６業種は以下のように取り扱われている※。

※：平成 21 年経済センサス - 基礎調査 産業分類一覧より作成

１）ソフトウェア業

電子計算機のプログラム，パッケージプログラムの作成，ゲームソフトウェアの作成及びその作成に関して調査，分析，助言などを行う事業所をいう。

また，情報通信機械器具，輸送用機械器具，家庭用電気製品等に組込まれ，機器の機能を実現するためのソフトウェアを作成する事業所も本分類に分類される。

○ 受託開発ソフトウェア業
　・プログラム作成業　　・情報システム開発業
　・ソフトウェア作成コンサルタント業
○ 組込みソフトウェア業
○ パッケージソフトウェア業
○ ゲームソフトウェア業
　・ゲーム用ソフトウェア作成業

２） デザイン業

工業デザイン，クラフトデザイン，インテリアデザイン，商業デザインなど，工業的，商業的デザインに関する専門的なサービスを提供する事業所をいう。

衣服，スカーフなどの服飾デザイン，服地，着物地などのテキスタイルデザイン及びパッケージデザインを行う事業所も本分類に含まれる。

○ デザイン業

・工業デザイン事務所　　・クラフトデザイン業
・インテリアデザイン事務所　　・商業デザイン事務所
・服飾デザイン業　　・テキスタイルデザイン事務所
・パッケージデザイン事務所

３） 土木建築サービス業

【建築設計業】

建築設計，設計監理などの土木・建築に関する専門的なサービスを提供する事業所をいう。国，地方公共団体などの各種建設工事の設計・監理を行う現業機関も本分類に含まれる。

○ 建築設計業

・設計監理業　　・建物設計製図業
・建設コンサルタント業　　・建築設計事務所
・国・地方公共団体工事事務所（直営工事を行わないもの）

【測量業】

基準点測量，地図を作成するための測量，土木測量，河川測量，境界測量などの専門的なサービスを提供する事業所をいう。国，地方公共団体などの測量を行う現業機関も本分類に含まれる。

【その他の土木建築サービス業】

他に分類されない土木建築サービスを提供する事業所をいう。ただし，鉱山，油田の試掘を請負う事業所は除く。

○その他の土木建築サービス業

・地質調査業　　・試すい（錐）業（鉱山用を除く）
・建築積算業

４） 写真業

主として肖像撮影を行う事業所及び広告，出版，その他の業務用写真の撮影を行う事業所をいう。

なお，写真撮影に伴うフィルム現像，焼付，引伸及びフィルム複写を行う事業所も本分類に含まれる。

ただし，次の事業所は本分類に含まれない。

(1) フィルム現像，焼付，引伸及びその取次を行う事業所並びにフィルム複写を行う事業所
(2) 映画制作を行う事業所
(3) 映画フィルムの現像を行う事業所

○ 写真業
・写真撮影業　　・写真館
・街頭写真業
○ 商業写真業
・宣伝写真業　　・出版写真業
・広告写真業　　・芸術写真業

５） 専門料理店

【日本料理店】

主として特定の日本料理（そば，うどん，すしを除く）をその場所で飲食させる事業所をいう。

【中華料理店】

主として中華料理（ラーメンを含む）をその場所で飲食させる事業所をいう。

【焼肉店】

主として焼肉（自ら網で焼くもの）をその場所で飲食させる事業所をいう。

【その他の専門料理店】

主として日本料理を提供し，客に遊興飲食させる事業所及び他に分類されない特定の料理をその場所で飲食させる事業所をいう。

６） 教養・技能教授業

【音楽教授業】

主として音楽に関する技能，技術を教授する事業所をいう。

【書道教授業】

主として書道を教授する事業所をいう。

【生花・茶道教授業】

主として生花，茶道を教授する事業所をいう。

【そろばん教授業】

主としてそろばんを教授する事業所をいう。

【外国語会話教授業】

主として外国語会話を教授する事業所をいう。

【スポーツ・健康教授業】

スポーツ技能，健康，美容などの増進のため，指導者が柔道，水泳，ヨガ，体操などを教授することを主たる目的とする事業所をいう。

ただし，教授が行われている場合でもスポーツを行うための施設を提供することを主とした事業所は除く。

【その他の教養・技能教授業】

他に分類されない教養，技能，技術などを教授する事業所をいう。

（３）調査対象都市における創造産業の指標の一覧

次頁に、本調査の調査対象都市における創造的職種６業種の指標一覧を示す。

創造的職種 従業者数の割合

		ソフトウェア業	デザイン業	土木建築サービス業	写真業	専門料理店	教養･技能教授業	合計
ヒアリング調査対象事例	富良野市	0%	0%	0.27%	0.10%	1.84%	0.29%	2.64%
	八戸市	0.32%	0.02%	0.66%	0.09%	1.46%	0.40%	3.01%
	仙北市	0.03%	0.04%	0.30%	0.21%	2.25%	0.18%	3.01%
	十日町市	1.20%	0.11%	0.73%	0.10%	1.58%	0.43%	4.14%
	金沢市	1.42%	0.09%	1.04%	0.11%	2.83%	0.52%	6.19%
	洲本市	0.07%	0%	0.49%	0.17%	1.62%	0.39%	2.74%
	鳥取市	0.64%	0.05%	0.76%	0.11%	2.20%	0.40%	4.23%
	高松市	0.89%	0.06%	0.75%	0.11%	2.20%	0.52%	4.69%
	別府市	0.18%	0.04%	0.26%	0.16%	2.68%	0.38%	3.73%
	霧島市	0.08%	0%	0.30%	0.12%	2.29%	0.20%	3.01%
文献調査対象事例	夕張市	0%	0%	0%	0%	0.42%	0.24%	0.66%
	東川町	1.18%	0.10%	0.87%	0.21%	0.55%	0.07%	3.15%
	仙台市	1.95%	0.08%	1.26%	0.09%	2.58%	0.48%	6.70%
	大館市	0.10%	0.01%	0.44%	0.07%	1.51%	0.18%	2.33%
	山形市	0.58%	0.05%	0.63%	0.12%	2.33%	0.41%	4.28%
	鶴岡市	0%	0.04%	0.57%	0.14%	1.65%	0.37%	3.04%
	いわき市	0.49%	0.02%	0.56%	0.08%	1.94%	0.35%	3.50%
	守谷市	0.18%	0.07%	0.55%	0.09%	3.95%	1.31%	6.16%
	水戸市	0.84%	0.08%	1.06%	0.11%	2.97%	0.67%	5.87%
	取手市	0.33%	0.01%	0.77%	0.10%	2.25%	0.76%	4.25%
	高崎市	0.99%	0.03%	0.87%	0.08%	2.38%	0.42%	4.96%
	中之条町	0.04%	0%	1.61%	0.20%	1.72%	0.47%	4.05%
	南砺市	1.04%	0.01%	0.32%	0.07%	0.86%	0.68%	3.27%
	氷見市	0.04%	0.01%	0.18%	0.14%	1.23%	0.46%	2.07%
	輪島市	0.02%	0.03%	0.15%	0.24%	1.29%	0.15%	1.87%
	あわら市	0.08%	0.07%	0.11%	0.03%	0.78%	0.34%	1.47%
	越前市	0.11%	0%	0.49%	0.07%	1.53%	0.33%	2.63%
	甲府市	0.75%	0.06%	0.67%	0.09%	2.65%	0.56%	4.92%
	松本市	1.73%	0.04%	0.65%	0.14%	2.32%	0.44%	5.39%
	飯田市	0.16%	0.03%	0.92%	0.10%	2.29%	0.27%	3.81%
	小布施町	0.09%	0%	0.18%	0.18%	2.57%	0.15%	3.18%
	美濃市	0%	0.01%	0.40%	0.12%	1.89%	0.22%	2.64%
	西尾市	0.01%	0.01%	0.28%	0.05%	2.10%	0.68%	3.15%
	高島市	0.01%	0.01%	0.34%	0.19%	1.25%	0.22%	2.04%
	長浜市	0.10%	0.03%	0.45%	0.11%	2.45%	0.36%	3.53%
	近江八幡市	0.15%	0%	1.15%	0.12%	4.12%	0.76%	6.34%
	舞鶴市	0.07%	0.05%	0.62%	0.05%	2.26%	0.48%	3.53%
	豊岡市	0.42%	0.07%	0.49%	0.12%	1.85%	0.45%	3.46%
	丹波市	0.04%	0.02%	0.42%	0.09%	1.47%	0.58%	2.64%
	篠山市	0.02%	0%	0.35%	0.06%	0.92%	0.50%	1.87%
	倉吉市	0.11%	0.04%	1.32%	0.06%	1.45%	0.31%	3.33%
	三次市	0.06%	0.01%	0.80%	0.11%	1.22%	0.30%	2.51%
	庄原市	0%	0%	0.55%	0.01%	0.91%	0.28%	1.75%
	尾道市	0.04%	0.01%	0.39%	0.07%	1.49%	0.28%	2.30%
	美祢市	0%	0%	0.16%	0.19%	0.72%	0.32%	1.40%
	神山町	0%	0.27%	0.16%	0.11%	0.85%	0.43%	1.81%
	佐賀市	0.70%	0.03%	0.83%	0.10%	2.70%	0.36%	4.79%
	熊本市	0.83%	0.08%	1.02%	0.10%	2.57%	0.53%	5.30%
	由布市	0.02%	0.01%	0.50%	0.10%	1.30%	0.09%	2.06%
	鹿屋市	0.07%	0.01%	0.71%	0.06%	1.98%	0.43%	3.25%
	那覇市	1.84%	0.19%	1.32%	0.14%	2.55%	0.69%	6.92%
	沖縄市	0.11%	0.01%	0.86%	0.23%	2.13%	0.80%	4.21%
	地方圏平均	0.68%	0.04%	0.63%	0.09%	2.03%	0.40%	3.96%

創造的職種 従業者数の割合（地方圏平均を100とした指標）

		ソフトウェア業	デザイン業	土木建築サービス業	写真業	専門料理店	教養・技能教授業	合計
ヒアリング調査対象事例	富良野市	0	0	43.1	114.4	90.4	72.6	66.6
	八戸市	46.8	52.1	104.0	103.7	71.7	99.4	76.1
	仙北市	3.9	88.4	47.7	235.6	111.0	44.2	76.1
	十日町市	177.2	263.7	115.3	108.2	77.7	107.5	104.5
	金沢市	208.4	235.2	164.6	125.9	139.5	130.0	156.4
	洲本市	10.3	0	77.1	183.5	79.9	96.4	69.2
	鳥取市	94.3	122.0	120.9	118.5	108.6	99.6	106.8
	高松市	131.0	148.7	119.2	127.5	108.3	130.7	118.3
	別府市	26.0	94.2	41.3	176.4	132.1	96.2	94.0
	霧島市	11.9	0	47.8	134.4	112.6	49.0	75.9
文献調査対象事例	夕張市	0	0	0	0	20.9	59.6	16.7
	東川町	173.2	259.8	137.5	230.9	27.3	17.3	79.6
	仙台市	287.2	196.8	200.7	98.2	126.9	120.8	169.1
	大館市	14.5	14.9	70.5	76.1	74.3	44.7	58.8
	山形市	85.4	123.9	99.3	129.9	114.6	102.8	108.0
	鶴岡市	25.7	99.8	91.1	153.5	81.2	93.6	76.7
	いわき市	72.6	40.2	89.4	90.9	95.7	87.7	88.3
	守谷市	25.9	171.5	87.1	98.0	194.8	327.1	155.6
	水戸市	124.3	191.7	167.6	119.7	146.2	167.1	148.0
	取手市	48.4	22.7	121.8	114.1	110.7	190.4	107.3
	高崎市	146.3	81.5	138.3	88.9	117.4	104.0	125.1
	中之条町	6.3	0.0	255.5	223.6	85.0	118.6	102.3
	南砺市	153.3	19.9	50.5	79.6	42.1	171.1	82.5
	氷見市	6.5	13.7	27.9	152.7	60.7	115.5	52.2
	輪島市	2.7	68.9	23.3	265.3	63.3	36.7	47.3
	あわら市	12.2	170.3	18.0	33.6	38.4	85.1	37.1
	越前市	16.3	0.0	77.7	77.0	75.3	83.7	66.4
	甲府市	110.5	157.7	106.4	102.0	130.4	139.4	124.3
	松本市	254.8	102.4	103.4	154.4	114.1	110.9	136.1
	飯田市	23.2	72.2	146.7	111.3	112.8	66.9	96.1
	小布施町	13.5	0.0	29.2	204.1	126.7	38.3	80.4
	美濃市	0.0	24.7	62.8	131.9	93.1	54.4	66.7
	西尾市	1.0	17.6	44.4	60.6	103.3	170.7	79.6
	高島市	2.1	24.3	53.3	216.1	61.3	54.7	51.4
	長浜市	14.3	70.6	72.1	116.9	120.8	89.2	89.2
	近江八幡市	22.6	0.0	182.9	130.1	202.8	189.4	160.0
	舞鶴市	10.7	136.4	97.7	57.3	111.3	119.0	89.2
	豊岡市	61.6	176.6	78.5	134.6	91.1	113.5	87.4
	丹波市	5.5	55.7	67.2	94.8	72.6	145.7	66.7
	篠山市	2.6	0.0	55.3	66.7	45.6	126.1	47.3
	倉吉市	15.6	112.5	209.7	68.2	71.3	76.7	83.9
	三次市	8.7	29.5	127.4	126.8	60.1	74.8	63.4
	庄原市	0.0	0.0	86.8	13.7	44.8	70.7	44.2
	尾道市	6.2	28.3	61.3	82.5	73.4	69.4	58.1
	美祢市	0.0	0.0	25.2	215.6	35.6	79.4	35.4
	神山町	0.0	665.2	25.3	118.3	41.9	106.4	45.7
	佐賀市	102.6	87.3	131.7	116.4	133.2	91.2	121.0
	熊本市	122.5	210.8	162.1	111.1	126.8	131.3	133.7
	由布市	3.0	33.4	79.6	111.4	63.9	23.4	52.0
	鹿屋市	11.0	12.9	112.1	63.0	97.6	107.0	82.1
	那覇市	270.8	466.9	209.1	156.4	125.6	173.3	174.8
	沖縄市	15.5	28.1	136.2	259.6	104.7	201.1	106.3
	地方圏平均	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

参考1　創造的人材を惹きつける地域の要素に係るチェック項目

本調査の過程で明らかになってきた、創造的人材を惹きつける地域力の要素と、それが端的に表われる指標を以下に示す。

《重要度》

S:それがあれば他が不十分でもいける
A:それがあったらかなり優位
B:それがあったほうがベター
K:それがあったからといって十分ではないが、なければ厳しい

1. 地域独自の資源			重要度
	1-1 自然環境 **都市的機能を享受しながらも豊かな自然、街の緑などを体感できるか**		**A**
		◇居住空間の窓から緑が見えるか	
		◇カラス以外の野鳥の鳴き声を聞けるか	
		◇多様な生物が棲息し、素足を浸すことのできる河原があるか	
		◇萌える新緑や花の香りのほうが車の排気ガスの臭いに優るか	
		◇四季を通してアウトドアが楽しめるか	
	1-2 文化資源 **地域固有の文化、若い担い手がいる文化、豊かな食文化はあるか**		**A**
		◇写真を撮りたいと思うような街並みや風景があるか	
		◇その土地をイメージさせる音楽、音があるか	
		◇その土地にまつわる物語はあるか	
		◇歴史ある建築物を生かした新しい活用事例はあるか	
		◇その地ならではの新鮮な地元食材を使ったメニューはあるか	

2. 人的資源			重要度
	2-1 キーパーソンの存在 **内外に幅広い人的ネットワークを持ったキーパーソンがいるか**		**S**
		◇新しい取り組みにチャレンジし、プロジェクトを進める力を持ったプロデューサー的人材はいるか	
		◇外部の文化人等と地元メンバーをつなぐホスピタリティにあふれたコーディネーター的な地元人材がいるか	
	2-2 文化芸術を支える住民層 **良いモノの価値を理解する活動的で寛容な地域住民の層は厚いか**		**A**
		◇人々が集う雰囲気の良く長居ができるカフェはあるか	
		◇生演奏を聴かせる店や夜遅くまでやっているバーがあるか	
		◇ダンス等の発表会やギャラリーでの個展はよく開かれるか	
	2-3 地域への愛着心・誇り		**B**
		◇地元中学・高校のクラブが県大会、全国大会で活躍しているか	
		◇地元高校卒業生（域外進学）のUターン就職率は高いか	
		◇東京等で地元出身者の組織が活発に活動しているか	
		◇その街を連想させるアイデンティティ・シンボルがあるか	

3. コミュニケーションの場			重要度
	3-1 コミュニティ・交流の場 **地域コミュニティは閉鎖的でなく、多様な人々が活発に交流しているか**		**A**
		◇地域に内外の創造的人材が集うサロン的な場はあるか	
		◇自治会、町内会以外のＮＰＯ等の多様なコミュニティがあるか	
		◇若者やよそ者も参加し、子供たちが憧れる祭りがあるか	
		◇市民ワークショップ等の学びやディスカッションの場が多いか	
		◇活発に活動している地域ＳＮＳや電子掲示板はあるか	
	3-2 街のにぎわい **商店街や公園など人々が集う場は活気づいているか**		**B**
		◇商店街は、消費者金融、携帯電話ショップ、パチンコ屋の目立つシャッター通りとなっておらず、雑貨店やブティックはあるか	
		◇公園は親子連れや赤ちゃんを連れた母親達でにぎわっているか	
		◇市民ランナーが安心して走れるロード、手頃な散歩道はあるか	
	3-3 宿泊施設、レストラン **外部から地域を訪れる創造的人材が心地よく滞在できる環境があるか**		**B**
		◇来訪した文化人等が泊まるのに相応しいホテル、旅館等はあるか	
		◇地元の食材を主に出す居酒屋はあるか	
		◇腕利きのシェフが料理を出すレストランが和洋ともにあるか	

4. 創造的活動の支援環境			重要度
	4-1 行政の取り組み **自治体に現状停滞への危機感があり、創造的活動の支援に積極的か**		**A**
		◇地元自治体が文化芸術の振興に新規予算をつけているか	
		◇クリエイティブな活動に提供される様々な補助金があるか	
		◇自治体が域外からの人材の移住促進策を講じているか	
	4-2 企業の取り組み **その地域の文化芸術の振興に地元企業等が貢献しているか**		**A**
		◇企業が地域で金銭的・人的なメセナ活動をしているか	
		◇本業改革型のビジネスを展開する地元企業はあるか	
	4-3 大学等の取り組み **人材や取組の受け皿となる大学等の機関があり、積極的に活動しているか**		**A**
		◇地域の大学等にクリエイティブな学科はあるか	
		◇地域の大学等は地域内外との交流に熱心に取り組んでいるか	
	4-4 活動の場 **クリエイティブな人材が活躍できる場が存在しているか**		**A**
		◇交流・創作・発信の場となる施設等が存在するか	
		◇創造的人材が働く場、クリエイティブ産業の萌芽はあるか	
		◇地域がテーマ設定した継続的なイベントが数多くあるか	
		◇地域の文化芸術を支援するＮＰＯ等が活発に活動しているか	

5. 利便性・安心感			重要度
	5-1 交通・通信の利便性 **大都市圏から日帰り可能など交通が便利で、通信環境も遜色ないか**		**B**
		◇東京など大都市圏から日帰りも可能だが宿泊客は多いか	
		◇無線、ブロードバンドなどストレスなく通信できる環境か	
	5-2 安心・安全 **安心して住める環境か、急に病気になっても大丈夫か**		**K**
		◇女性でも安心して夜道を一人で歩けるか	
		◇急に病気になっても看てもらえるいい医者はいるか	

参考２　創造的人材を惹きつける地域の要素に係るチェック項目の有する意味合い

創造的人材を惹きつける地域力の要素を端的に表わす指標について、各指標の有する意味合いの解説を加えたので、参考にしていただきたい。

1. 地域独自の資源		
	1-1 自然環境 都市的機能を享受しながらも豊かな自然、街の緑などを体感できるか	
		◇居住空間の窓から緑が見えるか 単に屋外に出れば山の緑が見えるだけではなく、家々の庭、街路樹、公園等の緑が豊かで、実際に創造的人材が生活する住居や仕事場などの身近な生活空間から目を癒やし心をリフレッシュさせる、緑が見えるかどうかをみるもの。
		◇カラス以外の野鳥の鳴き声を聞けるか 野鳥が身近に飛んで来るような街は、公園、街路樹、庭の植木等に餌となる多様で豊かな植生があることがうかがえる。一方、カラスが多い街は、生ゴミの回収方法や地域住民のゴミ出しのマナーに問題があることが想定される。
		◇多様な生物が棲息し、素足を浸すことのできる河原があるか 公共事業優先で自然環境への配慮を欠いた三面張りの河川整備が横行することなく、生態系にも優しい、地域住民の憩いの場となるような河原があるかどうかをみるもの。水辺空間の植生が貧弱で魚が遡上する魚道も確保されずに砂防ダムや堰が建設され、多様な生態系が破壊されている川では地域の魅力とならない。
		◇萌える新緑や花の香りのほうが車の排気ガスの臭いに優るか 街中の公園、街路樹、ガーデニングなど人々が歩く空間に、人間の嗅覚を通じて気持ちをリフレッシュさせてくれる新緑や花の香りが豊かな地域かどうかをみるもの。排気ガスが市街地に充満しているような渋滞の多い車依存社会では魅力に欠ける。
		◇四季を通してアウトドアが楽しめるか 創造的人材は頭脳労働が中心となるので、自ら体を動かすアウトドアを好む傾向があると想定される。創造的人材がアウトドアをエンジョイできるフィールドが近くにあることは、大きなアドバンテージになると考えられる。
	1-2 文化資源 地域固有の文化、若い担い手がいる文化、豊かな食文化はあるか	
		◇写真を撮りたいと思うような街並みや風景があるか 看板が乱立した無秩序な街づくりではなく、プロの写真家が撮りたい、映画監督が素材にしたいと思うような景観に配慮した里づくり、街づくりが行われてきたかどうかをみるもの。古くからの景観がよく残されている都市は、そのまち独自の歴史や風土を大切にしたまちづくりに取り組まれてきたことがうかがえる。

		◇その土地をイメージさせる音楽、音があるか 目をつぶってもその土地を連想させる音楽や音の存在は、地域の強い個性となり、人々を強く惹きつける力があるので、そうした地域のイメージに結びつく音楽があるかどうかをみるもの。例えば、沖縄の島唄やハワイのハワイアンミュージック、ニューオーリンズのジャズ等、創造的な人材が集まる街や観光地にはその土地をイメージさせる音楽があることが多い。
		◇その土地にまつわる物語はあるか 土地にまつわる「物語」は、その土地固有の歴史文化が反映されたものであり、それが都市イメージの形成に結びついているかどうかをみるもの。文化は継続性の上に成り立つものであり、古くからの言い伝えや偉人伝が残っているということは、地域文化が人々に代々大切にされてきたことがうかがえる。
		◇歴史ある建築物を生かした新しい活用事例はあるか 伝統をただ守るだけでなく、それを生かしながら新しいものを作り出しているか、歴史に根ざした創造的な街づくりを行っているかをみるもの。 歴史ある建築物の存在は、かつてその地域が繁栄していた証であり、「負の遺産」を含めた歴史的な建築物等をまちづくりの資源として活用できている地域は、歴史的遺産を大切に保存するだけでなく、現状に対する危機意識を抱いて常に新しい取組にチャレンジする創造性を有していることがうかがえる。 小樽、門司などのように、急激に衰退した街は歴史的建築物が多く残り、危機感をバネに再生しているが、一方で、そこそこ経済が発展したためにスクラップアンドビルドが進み、歴史的建物が残っていないような地域は、現状に対する危機感を抱くことなく衰退に向かうことが懸念される。
		◇その地ならではの新鮮な地元食材を使ったメニューはあるか 地元で採れる食材の域内流通ルートがきちんと確保されているか、地域独自の豊かな食文化があるかどうかをみるもの。 地元の飲食店が地域色豊かな食材を使ったメニューを工夫している都市は、域内流通ルートが確保されており、地元産の新鮮な食材が手に入れられる自然豊かな地域であることがうかがえる。 一方で、地元食材でも一旦中央の大規模市場を通さなければ手に入らないような地域は、人々を惹きつける個性と魅力に欠ける。

2. 人的資源		
	2-1 キーパーソンの存在 内外に幅広い人的ネットワークを持ったキーパーソンがいるか	
		◇新しい取り組みにチャレンジし、プロジェクトを進める力を持ったプロデューサー的人材はいるか ◇外部の文化人等と地元メンバーをつなぐホスピタリティにあふれたコーディネーター的な地元人材がいるか 人を惹きつける最大の吸引力は魅力あるマグネットのようなキーパーソンの存在であり、そうした創造的人材を強力に惹きつけるような人材が地域にいるかどうかをみるもの。そうした人材がいない地域では、予算があれば外から人を集めて取組を始めることはできても持続させることが難しい。逆にマグネットとなるキーパーソンが存在し、活躍できる土壌のある地域では、創造的活動の継続性が担保されやすいと考えられる。 また、力のあるプロデューサーやコーディネーターは、仕事をするうえでの居住地選択の幅が大きく、彼らがそこに住んでいるということは、その地域に他にはない何らかの魅力が存在していることがうかがえる。
	2-2 文化芸術を支える住民層 良いモノの価値を理解する活動的で寛容な地域住民の層は厚いか	
		◇人々が集う雰囲気の良く長居ができるカフェはあるか そこに行けば誰かに会ってゆっくり語り合え、また、本を読んだり、思索にふけることができるような居心地の良い空間が存在し、そうした空間を提供するカフェなどが採算的にも成り立つような地域かどうかをみるもの。 ファストフード店のように効率性重視、利益率重視の店しかないような地域では、創造的な活動をはぐくむことは難しいと考えられる。
		◇生演奏を聴かせる店や夜遅くまでやっているバーがあるか アーティストが一定の収入を得られるような土壌があるかどうか、また夜遅くでも創造的人材に癒しを与えるような場がオープンしているかどうかをみるもの。 アーティストが生演奏を聴かせる店の存在は、多少お金はかかっても生演奏の良さを理解する地域住民の層の厚さをうかがわせる。 また、創造的人材は昼夜を問わず仕事をするので、仕事が終わった後に夜遅くでもゆっくりと疲れを癒やし、気のおけないマスターや仲間と語り合える場所の存在が重要である。

		◇ダンス等の発表会やギャラリーでの個展はよく開かれるか 絵画などアート作品の個展を開けるようなギャラリー、展示会等を開く施設が多数存在し、文化活動に対する理解が地域住民に浸透しており、かつそれが地域住民によって主体的によく活用されているかどうかをみるもの。 観客、顧客などの立場となる地域住民の質が高い地域は、創造的人材に活躍の場を多様な形で提供し、ピアノ、バレエ、生け花などを教えることが職業として成り立つということは、創造的人材が収入を得る機会が多いことをうかがわせる。 また、クリエイティブな人材は、本業以外にも趣味を持っていることが多く、地域住民が主役になる発表会や個展が数多く開かれている地域には、受け身の鑑賞だけでなく、自らが主体的に創造的活動に携わる土壌が醸成されていると考えられる。
	2-3 地域への愛着心・誇り	
		◇地元中学・高校のクラブが県大会、全国大会で活躍しているか 文化・スポーツ活動に関するクリエイティブな土壌が形成されているか、愛郷心が強い地域であるかをみるもの。文化・スポーツ活動における団体活動系クラブの実力がある地域では、レベルの高い指導者がクラブを指導しており、地域においてその活動が尊敬の念をもって一目置かれていることがうかがえる。子供の頃から憧れのクラブで活躍することを目指し、習い事等（サッカー、ピアノ、バレエ、ダンス etc.）に励むことで将来を担うジュニア層が厚くなり、地域にクリエイティブな土壌が形成される。また、そうした地域では、地域住民が一丸となって地域の学校を応援することにより、愛郷心も育まれると考えられる。
		◇地元高校卒業生（域外進学）のＵターン就職率は高いか 高度な人材がUターンできるということは、クリエイティブな人材にふさわしい就職先があることの証であり、郷土愛をベースとした大都市圏との人的ネットワークがあるということも地域で創造的な活動を行ううえで強みとなる。
		◇東京等で地元出身者の組織が活発に活動しているか 郷土愛、大都市圏との人的ネットワークをみるもの。県人会や高校の同窓会のような組織が東京等の大都市圏で活発に活動している地域は、郷土愛が強く、若者が一旦地域を離れた後も、故郷への愛着を持ち続けるような地域であることをうかがわせる。
		◇その街を連想させるアイデンティティ・シンボルはあるか 人々を惹きつける地域ブランド力があるかどうかをみるもの。 都市イメージに直結するような地域資源を有する地域（例：神戸の異人館、福岡の祇園山笠等）は、人々を惹きつける地域ブランド面で強みがあり、地域出身者の愛郷心も強い地域であると考えられる。

3. コミュニケーションの場		
	3-1 コミュニティ・交流の場 地域コミュニティは閉鎖的でなく、多様な人々が活発に交流しているか	
		◇地域に内外の創造的人材が集うサロン的な場はあるか 創造的人材を惹きつけ、新しい活動を誘発するためには、多様な人々を受け入れる開放性を有し、アットホームな雰囲気の「場」の存在が重要であり、そうした知の交流拠点となる「場」があるかどうかをみるもの。知識は分かち合うことで高まっていくものであり、そうした「場」を有する地域ではメンバー間のざっくばらんなコミュニケーションから新たな知的価値を生み出す活動が創発されることが想定される。
		◇自治会、町内会以外のＮＰＯ等の多様なコミュニティがあるか 里山保全、子育て支援、街づくり、アートなどをきっかけとした多様な知縁型のコミュニティが地域に形成されているかどうかをみるもの。 旧来型の地縁・血縁による閉鎖的なしばりの強いコミュニティではなく、よそ者に対してもオープンな知縁型のコミュニティが複層的に形成されている都市は、創造的人材を惹きつけると考えられる。人間は何らかのコミュニティに属していなければ心の安定は得られない面があるが、固定化した同質的なメンバーでは創発効果はあまり期待できず、コミュニティの多様性、寛容性が重要である。
		◇若者やよそ者も参加し、子供たちが憧れる祭りがあるか 地域コミュニティが閉鎖的でなく、若い担い手もいて、将来的に持続可能な地域の絆が醸成されているかどうかをみるもの。祭りは地域コミュニティによる伝統の行事であり、そこに他地域から移り住んだメンバーも参加しているということは、多様性を認める寛容な土地柄をうかがわせる。 一方、歴史・伝統を有する祭りでも、参加者が固定化・高齢化して若い担い手がおらず、子供たちも尻込みするような祭りでは、新しいものを生み出す地域力の源泉にはならない。
		◇市民ワークショップ等の学びやディスカッションの場が多いか 地域の抱える課題について、多様な背景を持った住民同士でアットホームにディスカッションできるような場があり、学びに対して進取の気風に富んでいる地域かどうかをみるもの。学びや気づきの場のすそ野の広さは、進取の気風に富む地域住民の層の厚さをうかがわせ、行政任せでない住民主体の地域力向上が期待できる。
		◇活発に活動している地域ＳＮＳや電子掲示板はあるか 進取の気風があり、内外の人的ネットワークを生かせる地域であるかをみるもの。地域に根差した SNS や電子掲示板があり、新しいコミュニケーションツールとしてのＩＣＴをお年寄りも活用しているような地域（例：徳島県上勝町）は、進取の気風を有し、ＩＣＴは距離的な制約がないため、その地域のファンが多ければ域外も含めた人的交流の輪が広がることも期待できるなど、創造的活動を行ううえで大きなアドバンテージになる。

	3-2 街のにぎわい **商店街や公園など人々が集う場は活気づいているか**	
		◇商店街は、消費者金融、携帯電話ショップ、パチンコ屋の目立つシャッター通りとなっておらず、雑貨店やブティックはあるか。 地域内部で一定程度経済を循環させるシステムの存在する地域は、創造的人材が活躍する場を創出し、地元資本の商店が元気に経営している地域は、地域にお金が落ちる工夫がうまくいき、地域内で経済が循環する仕組みが機能していることをうかがわせる。また、若者や女性が気軽に立ち寄れる雑貨店や憧れのファッションを着こなす店員のいるブティックやカリスマ美容師のいるヘアサロンなどの経営が成り立っているかどうかも活力のメルクマールとなる。 家賃が高い商店街の中心部が、域外資本の消費者金融やパチンコ屋等に席巻されていたり、シャッターが早い時間に閉まったりする商店街は、地域全体に対する個々の商店主等の配慮が欠けており、にぎわいのない街は人々を惹きつける魅力に欠ける。
		◇公園は親子連れや赤ちゃんを連れた母親達でにぎわっているか 地域で子育てをしやすい環境が実現されているかどうかをみるもの。 人影が少ない公園の存在は、行政が住民のことを考えず、人々が利用しにくい場所、形態の公園を作ってきたか、あるいは、治安の悪さ、地域コミュニティの砂漠化をうかがわせる。
		◇市民ランナーが安心して走れるロード、手頃な散歩道はあるか 一人でも、家族や仲間と一緒でも、思い立った時に安心して気軽に屋外で体を動かせるような環境が身近にあるかどうかをみるもの。 歩くこと、走ることは人間の動作の基本であり、創造的人材が普段駆使している脳にも良い刺激となるが、交通事故が心配になるような信号だらけの道しかない環境では魅力に欠ける。
	3-3 宿泊施設、レストラン **外部から地域を訪れる創造的人材が心地よく滞在できる環境があるか**	
		◇来訪した文化人等が泊まるのに相応しいホテル、旅館等はあるか 外部から地域を訪れる創造的人材を惹きつけるには、心地よく滞在できる環境が重要である。 値段が安いだけのビジネスホテルや旅館しかない地域は、創造的人材が活躍できるような場の乏しさをうかがわせる。
		◇地元の食材を主に出す居酒屋はあるか 域外の安い食材を入れて低価格を売りにする大手チェーン店に席巻され、地元食材を出す店が成り立っていない地域は、消費が域外に流出していることをうかがわせる。日本中どこにでもある無難な店しかない地域は、創造的人材を惹きつける個性にも欠けている。

		◇腕利きのシェフが料理を出すレストランが和洋ともにあるか 　そうした店が和洋ともに成り立っている地域は、良いモノの価値を理解する内外からの多様な客層の厚さをうかがわせる。 　また、こだわりの料理を作る腕利きのシェフは創造的人材であり、仕事をするうえでの居住地選択の幅が大きく、彼らがそこに住んでいるということ自体がその地域に他にはない魅力があることをうかがわせる。

4. 創造的活動の支援環境		
	4-1 行政の取り組み **自治体に現状停滞への危機感があり、創造的活動の支援に積極的か**	
		◇地元自治体が文化芸術の振興に新規予算をつけているか 　ハコモノの維持管理や定例のイベントだけではなく、文化芸術振興に新たな予算を付け、それを外部に対して情報発信するような意欲的な姿勢が地元自治体にあるかどうかをみるもの。 　既存事業の踏襲やハコモノの維持管理にだけ取り組むのではなく、限られた予算のなかであっても、スクラップ＆ビルドで新たなアイデアをどんどん生かすようなイノベーティブな姿勢を行政が持つことも重要である。
		◇クリエイティブな活動に提供される様々な補助金があるか 　行政があらかじめ決めた内容を補助事業として実施するだけでなく、クリエイティブな活動を住民主導で実施しようとした時に、様々な政策目的のメニューから使える補助金を選択できるような多様かつ柔軟な支援環境があるかどうかをみるもの。 　クリエイティブな活動に対する補助メニューが豊富であり、自治体が積極的な幅広い支援の姿勢を出している地域では、多様な創造的人材が活躍できる土壌が育まれていると考えられる。
		◇自治体が域外からの人材の移住促進策を講じているか 　創造的人材が都市の発展にあたえるプラスの効果を自治体が自覚し、クリエイティブな人材をターゲットに他の地域から呼び込む姿勢を明確に打ち出しているかどうかをみるもの。 　また域外からの人材の移住にインセンティブを付与しているということは、地域が閉鎖的でなく、寛容性・多様性に富んでいることをうかがわせる。
	4-2 企業の取り組み **その地域の文化芸術の振興に地元企業等が貢献しているか**	
		◇企業が地域で金銭的・人的なメセナ活動をしているか 　市民と企業の距離感が近く、企業が自社の収益だけでなく文化芸術の振興による地域全体の魅力向上に関心を有しているかどうかをみるもの。 　地域内外の企業がその地域の応援団となっている地域では、文化芸術の振興活動が地域ブランドの向上とともに、企業のイメージ向上にもつながっており、WIN-WINの関係が構築できていると考えられる。

		◇本業改革型のビジネスを展開する地元企業はあるか 創造的人材が活躍する前例にとらわれない企業があり、内発的な創造性を育む土壌があるかどうかをみるもの。 伝統墨守型ではなく、進取の気風に富んだイノベーティブな地元企業が存在しているということは、企業の経営者とその従業員が創造的であると考えられ、企業の経営者は地域の経済界のリーダーとして、従業員は地域住民として、地域における創造的活動に理解が深く、地域が内発的な創造性を有していることがうかがえる。
4-3 大学等の取り組み **人材や取組の受け皿となる大学等の機関があり、積極的に活動しているか**		
		◇地域の大学等にクリエイティブな学科はあるか 大学は地域において知的付加価値を生み出すべき人材が集積する大きなセクターであり、そこにクリエイティブな人材が活躍できる場があるかどうかをみるもの。クリエイティブな学科を有する地域では、特任教授や講師といった肩書で雇用の場が生まれ、創造的人材の定着に寄与していることも想定される。また、クリエイティブな学生が地域の創造的活動に参加し、学生ボランティアとして活躍することも期待できる。
		◇地域の大学等は地域内外との交流に熱心に取り組んでいるか 地域の知の拠点である大学が学内に閉じこもることなく、外部との交流に積極的な地域は、創造的発展に向けた推進力を有していると想定される。
4-4 活動の場 **クリエイティブな人材が活躍できる場が存在しているか**		
		◇交流・創作・発信の場となる施設等が存在するか 創造的人材が活動する場やインフラが地域に存在しているかどうかをみるもの。 創造的人材は昼夜を問わず活動するものであり、市民主導の自主管理で夜も自由に出入りできるようなアットホームな雰囲気の拠点施設があれば、創造的人材を惹きつけるうえで大きなアドバンテージとなる。
		◇創造的人材が働く場、クリエイティブ産業の萌芽はあるか 創造的人材が自らの創造性を生かし、知的付加価値を生み出すことができるクリエイティブな産業や働く場が地域に存在しているかどうかをみるもの。 創造的人材が地域に根付き、継続的に活動し、生活していくためには、地域内において彼らが日々の糧を得ることができる環境が、大きなアドバンテージとなる。 また、大学の講師や習い事の先生といった形で、行政のイベント予算等に依存せずに職が得られる地域は人材の定着の観点から強みを有している。（例：半 X（X=生活するための活動）半 Y（Y＝創造的活動）といったライフスタイル）
		◇地域がテーマ設定をした継続的なイベントが数多くあるか **◇地域の文化芸術を支援するＮＰＯ等が活発に活動しているか** 行政や域外企業に依存しない民間や NPO 等の活動が活発な市民力の高い街であるかどうかをみるもの。行政や企業からのお仕着せではなく、市民自らがテーマを設定したイベントが継続的に開催されている地域は、多様なイベントを企画運営できるだけの力を持った地域人材の層の厚さをうかがわせる。

5. 利便性・安心感		
	5-1 交通・通信の利便性 大都市圏から日帰り可能など交通が便利で、通信環境も遜色ないか	
		◇東京など大都市圏から日帰りも可能だが宿泊客は多いか 東京に多く居住する創造的人材との交流や大都市圏からの集客を行う上で、時間距離は重要である。 ただ近ければいいというわけでは必ずしもなく、経済波及効果の観点からも、滞在時間が長く、宿泊してもらえる地域の魅力づくりが重要である。
		◇無線、ブロードバンドなどストレスなく通信できる環境か 創造的人材が活動する上では地方でもデメリットを感じることなく、大都市圏と同じようにストレスなく仕事ができる通信環境が重要である。 無線ブロードバンド環境が充実していれば自然豊かな環境の中でも仕事ができるのでかえって大都市圏に対する強みにもなる。
	5-2 安心・安全 安心して住める環境か、急に病気になっても大丈夫か	
		◇女性でも安心して夜道を一人で歩けるか 創造的人材は昼夜を問わず創作活動を行うため、夜遅く出歩く機会も多くなりがちであり、創造的人材が活動する上では、治安が良く、安心して住める環境が最低限実現されていることが重要である。
		◇急に病気になっても看てもらえるいい医者はいるか 信頼できる医者がいることは、その地域で安心して生活し、子供を育てるための最低条件である。 また、医者は仕事をするうえでの居住地選択の幅が大きく、良質な医者が住みたいと思う地域は、クリエイティブな人材を惹きつける要素が地域に存在していることをうかがわせる。

創造的人材の定住・交流の促進に向けた事例調査
～定住自立圏の形成を目指して～

発行　平成２４年３月
総務省地域力創造グループ地域自立応援課
〒100-8926　千代田区霞が関２-１-２
TEL ：03-5253-5391（直通） FAX：03-5253-5537
MAIL：teijyu- jiritsu@soumu.go.jp